

等我

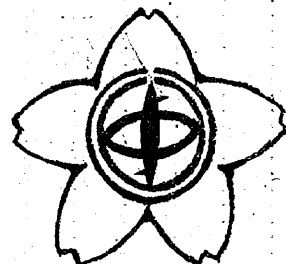
第三册



作者：徐学甲 徐学乙 徐学丙

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

L376.6
H



'87. 5. 26様

1478

我等

二三
四号

冊

熊谷中学校

金二五〇〇円

橋本書店

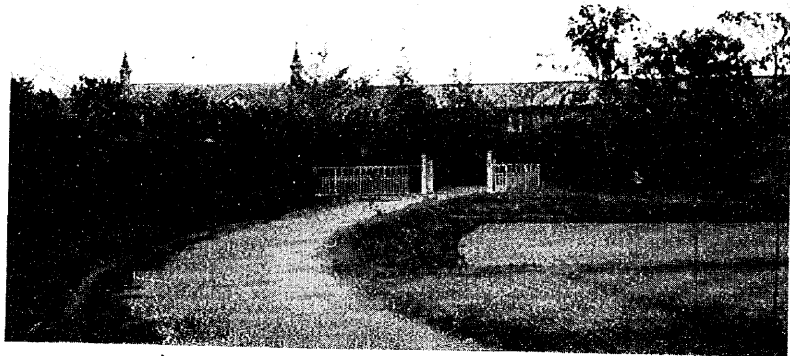
千代田区神田神保町3ノ5
電話 265 -- 3837



我等第三號目次(昭和八年度)

卷頭言	岡田嘉一	二
「明」の精神について		
説苑		四
「二九四〇年の瓦斯戦」の一節	荻野少佐	
野球雑感	小林晋助	
Boys be cheerful	大和久伊平	
講演	渡邊世祐	三
武藏武士		
通信		六
米國より	チエー・原口	
よせがき	第二十八回卒業生在京有志	
陸士を志す人々へ	酒卷益次郎	
向陵に登りて	新城之介	

濱松高工より	松村辰男	
心の動くまにまに	高田大三	
商大豫科及び入學試験について	大野禮次郎	
文藝		元
短文・短歌・俳句・川柳・詩・短篇		
行事		六
修學旅行・登山・兵營見學・野外演習・體育大會		
校報		一四
學校記事・昭和八年度上級學校入學者・職員現住所調		
部報		一六
競技部・蹴球部・圖書部・野球部・籠球部・水泳部・庭球部・劍通部・柔道部		
郷土研究		一四
評論		一六
編輯後記		一六



校歌

谷間の流れ落ち合ひて

荒川水の廣きごと

學びの道を辿りつつ

國の榮を圖らばや

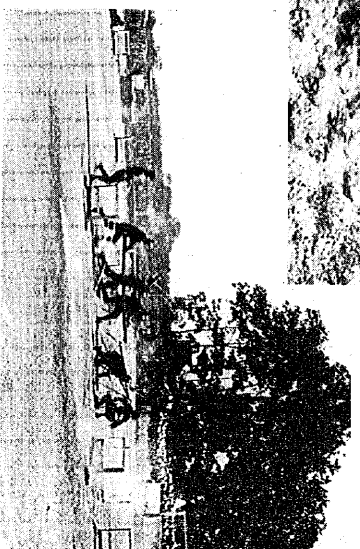
千木の若木生ひ立ちて

堤に花の匂ふごと

大和心を鍛へつつ

君の御爲に盡くさばや

軍 行



校訓

質實

剛健

我等

埼玉縣立熊谷中學校校友會

我等

第三號

言 頭 卷

「明」の精神について

校友會會長 岡 田 嘉 一

「明るく」とは本校々訓の中にある語である。私は「明るく」と云ふことを人の生活の指導精神としたい。日々明るい生活をなすには――

第一に正しい心を以て正しい行をせねばならぬ。心に暗い陰が宿せばどうしても明るい気分になれない。自ら顧みて直くば心は常に平静で玲瓏玉の如くあるべき筈である。

中庸に「誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり」とあるが、誠は天地の公道で些の邪曲隠掩無き純一無雜な正情であるが、之を誠にするには「明」が伴はねばならぬ。西郷南洲翁の所謂命もいらず富もいらず名もいらずぬ人こそ、一點の私無く尊い誠の心によつて動く人であらう。けれど物の道理が判明せず事に當つて充分の認識を缺いた時には、假令至誠から迷り出た行爲であるとしても危険な事がある。「明」は聰明とか賢明とかあるやうに事物の真相に觸るゝことである。誠は明と合致して光りを發する。我が國民道德の理念は明き淨き直き誠の心である。此の明かさ心こそ誠の根本である。

第二に身體が健康であることを要する。病弱な身體を以てはどうしても陰鬱になり勝ちである。朗らかな快活な気分にはなり得ない。身體健康の爲めには規律的生活をなし攝生に注意することが肝要である。健康な人にして始めて明るい活動的な人になり得る。

第三に理想を追求して勇往邁進することを要する。理想の無い人は退嬰的で、枯木死灰の如き感がある。常に理想を追求する人は、生氣潑刺として其の眼は希望に輝き、其の腕は高鳴して絶えず向上の意氣に燃える。世に不平を唱へ不満を唧つ人がある。自己の努力の足らざるを覺らず、徒らに世を怨み人を罵り天下に道あるを知らないものである。

現在至る所に非常時の叫びを聞く、而も此の非常時を轉換して國運の隆昌發展を來たさしむる事は我れ等國民の任務では無いか。即ち我れ等は内に堅忍不拔の精神を養ひ、飽くまでも勇敢に、あらゆる難局を打破して進むべき力と意氣とを必要とする。其の力其の意氣は理想を憧憬して倦まず、不斷に清澄なる「明るさ」を持つ強く正しき人のみの有するものである。

明るい人は禍を變じて福となす、障礙に逢ふとも挫折することがない。所謂非常時の聲は更に一大飛躍すべき天籟の靈音に響く。眼に映ずるもの身に觸るゝもの悉くを簡取して自己の内容を豊富にする。

「明」の精神は實に我れ等終生の進路を照らす光りである。

說苑

「一九〇四年の瓦斯戦」の一節

萩野 少佐

以下はウェプス氏の科學小説「一九〇四年の瓦斯戦」の一節である。我國防現狀から考へて何等かのヒントを受けるやうな感じがする。敢て諸君に紹介する所以である。

茲に新に戦争の驚異を加へたものは實に日本空軍であつた。

扱て日本は米國襲撃に太平洋を越えて米國の西海岸より迫れば遙に捷路であるに拘らず、アジア、歐洲、大西洋を越えて九千哩もある東海岸から之に向つた。是は誠に何人も了解に苦しむ所である。然し米國は久しい以前から太平洋沿岸に對する日本軍の攻撃を豫期してをさゝ其準備を怠らなかつたのだ。そして潜水艦、巡洋驅逐艦及航空船の大部は此方面に駐留してゐた。従つて米國が東海岸方面で攻防に使用し得る空中勢力は戰闘用航空船の大型五隻、小型十隻と爆撃機、戰闘機各約四十機で其武裝は航空船は十八吋砲十二門を備へ飛行機は十八吋砲六門を有してゐたに過ぎなかつた。斯く東海岸の薄弱なる防禦に對して日本軍は十分に優越なる勢力を發揮することが出来たのである。今其兵力を述べれば航空船十隻（各船は爆撃機十機を搭載す）爆撃用航空船十隻、戰闘用航空船二十隻、戰闘機百機、爆撃機二百五十機であつた。武裝としては戰

闘用航空船は四五吋砲八門を備へ戰闘機は十八吋砲十二門を有してゐた。日本空軍の速度は時速七百哩以上に上り長崎出發以來アルバニヤ號の上空を通過する迄十四時間足らずであつた。

紐育の東方約八十哩の所で米國の航空船三隻は搜索勤務に服してゐた。日本空軍の前進は忽ち此等最前線の航空船からワシントンに向つて警報された。然し其警報はアルバニヤ號が無電を發して暫時後に發せられたのである。

さて米國の航空船は時速僅か五百哩に過ぎないが上昇能力は大きいものだつた。此等搜索勤務中の航空船が若し十哩も隔てゝ退却に移つたら日本空軍からの離脱は容易であつたに違ひない。けれども意氣は壯なるも無益の血氣に燃えて相協力して日本空軍を襲ひ有效射程内に近接するや猛然射撃を開始した。是に於て日本航空船四隻は俄然隊列を離れ急速に上昇して四五吋砲を以て敵を猛射し之を墜落せしめた。斯くて僅々數秒にして此戰闘は終を告げた。

米國航空船が撃破さるゝ前に發した警報は何の用もなさなかつた。此ことは既にアルバニヤ號の無電で判つてゐたからである。而も此等航空船から發した日本空軍兵力に關する報告は唯米國航空大臣の責任に重荷を累加するばかりであつた。此報告から判斷して見ると戰闘に使ひ得る僅な米國航空船への出動命令は恰も其乗組員に向つて明確に死の宣告を言ひ渡す様なものだつた。さりとて之を措いて他に何等の手段もなかつたのだ。太平洋岸にゐた米空軍主力が移動時間五時間を要する東海岸に向ひ將に出發せんとしてゐる時一方運命窮れる此米國航空船は日本軍と遭遇を豫期して出發したのである。聽て彼我兩軍の空中戦は勃發したが此戰闘も僅か五分の短少時間で済み、此間米空軍は全く空中より掃蕩され盡したのである。海面に墜落した航空機は暫時耽いてゐたが聽て海底深く沈み行くのであつた。此戰勝に慄らなかつた日本空軍は直に紐育上空に向つて飛び糞に墨國空軍の加へた破壊を更に徹底的に實施した。

日本空軍は凡そ四時間も経つと紐育市の殺戮を止めて米空軍主力と戦ふべく出發し途中ニューヨーク、アンフイス、リチモンド、セントルイスを含む廣大な地域を飛行し冷酷にも幾百の市民を殺害し又幾多の都市を焼却し或は爆破した。

扱て米空軍主力が東方に向つて必死的急進の途上にある時米國の都會や田舎の勇敢な幾千の少女達は拳銃や小銃或は散弾銃等を手にしてスポーツ用飛行機を操縦して日本空軍に當つた。然し日本の航空船や大型飛行機に手向つた所でまるで犬の

體に宿つた水滴の様に忽ち振り落され散々に粉碎されて終つた。

米空軍主力を迎撃すべく日本空軍が編隊を漸く整へ終つた頃にはもう夜暗が押寄せてそれから夜の十時頃月が出るまでは全く盲目様の行動をするより外なかつたが、愈々月が現れ徐々に暗黒が消えて行くと日本軍は時を移さず猛烈な砲火を開いた。流石の米國軍も是に遭つては全く施す術がない様であつた。日本空軍は優勢な火砲と長大な射程と更に又優秀な策略とを以て必死的奮闘を持續した。又敵機退却の處あるときは之との接觸を怠らなかつたり或は決死的努力で上方から敵機に降下しては衝突したりした。斯くて彼我兩軍退却の氣配なく龍虎相打つ肉迫戦を演出したが、破壊されて墜落する飛行機からは恰も最後の別れを告ぐるかの様に最終の射撃が放たれた。

如斯して日本軍は殲滅的戦勝を博した、それには勿論相當の損害を蒙つたに相違ないが戦勝者の受けた損害が不明なことは言ふまでもない。拂曉までのワシントン上空に飛翔してゐた其空軍兵力から見ると餘りに莫大な損害を受けなかつた事だけは明瞭であつた。

拂曉になつて日本空軍は米國に領土割譲を要求する最後の通牒を發した、その要求と言ふのは米國は西緯九十五度以西の領土を悉く日本へ割譲せよとのことである。

此脅威は實に力強いものであつた。恐らく日本空軍は二週間の滞在を許す燃料を持つてゐたのだ。其上既に使用し盡した爆弾及砲弾も莫大ながら尙極めて豊富に此等兩種の弾丸も持つてゐたのであつた。米國空軍は事實全く破滅し盡されてゐた、さりとて他國の救援などは思ひもよらなかつた。と言ふのは未だ戦亂に關係ない諸國は何れも參戰を嫌厭するばかりでなく此禍中に投ぜぬ様萬策に腐心する状態にあつたからである。

結局大統領は自分の最良と思ふ回答拒絶の方法を採つた。日本空軍も豫て覺悟しないことではなかつたが確かに最も苦痛とする所であつた。それ故日本空軍は勢米國に向つて更に時間の猶豫を與ふべきや、或は再び戦闘を開始すべきやかの何れかに決心する如く強要された譯である。

所で日本軍は再度戦闘行動を開始する已むなき場合は第一に先づワシントンを襲撃する旨を傳へ、愈々午後八時半迄猶豫

を與へた。

大統領は躊躇逡巡暫くは決斷が附かなかつた。と言つて日本の要求を發表して市民を混亂させ都市よりの避難を促す様なことはしたくなかつたのだ。然し實際は何處からとなくワシントンに漏れ渡り八時前に全市悉く恐怖に襲はれ混亂した群衆はあらゆる方向へ潮の如く避難したのである。

此ワシントン市民の慌て入れ亂れて脱出する状態から明瞭な結論を得た日本空軍は、茲にワシントン市の殺戮を開始した。大統領並に其關係の多數も逃亡したが其處置の不適當な所から終に大統領は殺害されてしまつた。

是れより先大統領は運命窮れるワシントンから飛行機で逃亡する前に加奈太の救援を懇請した、けれども加奈太は既に自國の防戦に汲々たる状態でもとも他國の急を顧る追はなかつた。

野球雜感

小林 晋 助

道具とグラウンド

ボールの次ぎはバットだ、グローブやミットではない。キャッチボール、それは選手の基本として、また、フアンの趣味として、必要であり結構である。が、野球の野球たるところは、何と云つても投手と打者との勝負からだ。だから、選手もファンも、投げる捕るの間に打つと云ふ動作のあることを何時も忘れないように。打撃の利かない選手程つまらない者はな

い、投手は別だが。肩が悪くも、足がのろくも、強打者はメンバーから消えない。私は皮肉に思ふ、グローブやミットを大事にする者もバットは兎角手入れが悪い、感心しない。

グランドー グランドー さう聞いた丈で胸が躍る、喜びにあれ、悲しみにあれ。青空の下、陽を浴びて土をける、グランドは選手の道場である、ユニホームになつてグランドに出たら、全く別人になる、一切を忘れてボールの人にならなければうそだ。未だに踏み得ない憧れの甲子園、懐かしの神宮、それは理想的のグランドであらう。石の多いでこぼこの熊中グランド、だが、自分にとつては之程感銘深い處はない。それは何故か、知る人ぞ知る。

選手とコーチと見物人

やる人、やらせる人、見る人、——同じ一つのボールが色々に映る。

選手は藝術家だ、其の作品はプレーである。如何にルールに精通してゐても、セオリーに詳しくも、肝心の自己のプレーが貧弱では話にならぬ。眞に感激を與へるプレーは、眞に自己の腕を磨いた選手にして初めて爲し得るのである。

コーチは司會者だ、演出者だ、選手のプレーを舞臺で活躍させる人だ。選手を信服指導するに足る體験の所有者たることは望ましい事だが、何と云つても、やる人ではない。ピンチに際し、選手に代つて「俺が出ればなあ」と云ふ氣がコーチに起つたら、其の試合は大抵負けだ。私は、茲にコーチの難しさがある、のを幾度か痛感した。體験は有力なる武器の一つだがコーチは之を其のまま使へない。精神力のみに轉化しなければならぬ。人間の精力の淨化作用、こゝに近代スポーツとしての野球隆盛の一因が潜んでゐると思ふ。

見物人。應援團にせよ、一般の觀衆にせよ、結局見る域を越し得ない狀態に置かれた野球人である。聲をからした熱烈な應援、悠々たる高處の見物、いづれにせよ見る人の立場に徹すべきだ。

選手よ、磨け、汝の腕を！

コーチよ、伸せ、卿の意力を！

見物よ、養へ、君等の眼を！

腕と頭

「あれは腕は有るが頭が利かない選手だ」「下手だが抜け目のない奴だ。」こんな言葉をよく聞く。「頭は悪いが腕はいゝ」とほめる人は殆んどないらしい。なる程と思ふが、私は多年選手養成の實際問題で苦勞させられたせいか、斯うした言葉に對して甚しい不愉快を感じた事が幾度かある。それは、地味な努力に未來の得意を期待してゐる未熟な選手に對し、人間の智的優越を押しつけ過ぎるからだ。粗野な原始本能に還れと云ふのではないが、今日の人々は聰明の魅力を弄し過ぎてはゐまいか。

「畫を描かない畫家、詩を作らない詩人、などと言ふ言葉は、比喩として以外には何等の意味もない言葉だ。」斯う云つた人がある。誠に然りと思ふ。少く共、野球の場合、選手にとつては腕か頭か、などと云ふ問題で迷ふのは、既に墮落の第一歩である。ボンヘッドの後に胸のすくやうな垢抜けたプレーを見れば、誰れしも頭のベースボールに酔うだらう。併し、フアンよ、一寸考へて見給へ、腕の伴はない頭丈けのフラインプレーなんてものが果してあるか否かを。

研究に熱心なのは結構だが、一つの行動を分析したまゝで再び綜合して見られない野球家の穿鑿癖は哀しい自己満足だ。

練習と試合

「軍ノ主トスルトコロハ戰鬪ナリ故ニ百事皆戰鬪ヲ以テ基準トスヘシ」——これは歩兵操典の綱領の眞つ先きの言葉である。この三十字を見た丈で、世界に誇る日本軍の強さが髣髴せよう。

野球は戰だ。一切の練習は、歸するところは試合にあるのだ。試合を基準としない練習はいくらやつたつて駄目だ、とは野球道の綱領である。練習に身を入れない選手に、試合になつて眞のフライン・プレーの出來る筈がない。試合に負ける前にコーチは練習に失敗しなかつたか。平素の練習まで見た人でなくては、試合を見てもほんとの氣分は味へまい。グランド

の隅で附け足しのやうに見られたバントの練習が、接戦後の凱歌を齎したこともある。満塁を切り抜けた裏には、雨の日に部屋の中で何回となくボールを握り直したカーブの苦心があつたのだ。今年の帝展で神品と仰がれてゐる「玄猿」は、僅かに二三日で書き上げたのだが、作者の頭の中には五年前から用意されてゐたのだ、とは關雪畫伯の述懐である。かれは美術では野球、だが人間の歩む精進の道に異はりはない。平素の覺悟だ。

思ひ出と希望

私が野球をやり出したのは、確か大正元年頃と思ふ。十年一昔と云ふ言葉がある、が私の野球生活は正に二昔に尙二年餘る。思へば可なり長かつた。

中學でやり、大學でやり、軍隊でもやり、更に先生になつてもやつた。だが、それ等の何處にも實は結ばなかつたのだ。中學の最後は、恐らく熊中最初の全般的對抗競技の一たる光榮の對前中野球戦に、私はキャプテンであり投手としても立ち乍ら、敗れたのだ。私の早大野球生活は、前半は戸塚グラウンドの球拾ひに、後半は母校熊中の世話焼きに終つて了つた。宇都宮の六十六聯隊から星のマークの付いたユニホームを着て、栃木縣の實業大會の優勝戦で宮鐵に負けた時の投手は私だつたのだ。母校職員の間席をけがしてからの七年間、それは語るべく餘りに生まゝしい記憶のみである。「修業十年」と云はれてゐるが、二十年やつても未だに目鼻のつかない自分の野球生活に對し、私は感慨なきを得ない。私は、この夏平家物語を手にしてみた。興る者と滅びる者、勝つた源氏と、負けた平氏——彼等の中に私はあり／＼自分の姿を眺める思ひがした。私は平家だつたのだ。

平家の人々——彼等の戦ひは餘りにもロマンチックだつた、餘りにも運命のまゝであつた。彼等の戦場には、何時も、月や花や歌や笛がお供してゐた。彼等は、ただ、戦ひの爲に戦つてゐた、勝つ爲に戦つたのではなかつたのだ。ひたすらに美しき世界に憧れた彼等は、遂に壇の浦から龍宮へ案内された。が、それとともに、この世は完全に源氏のものとなつて了つた。

私は二十數年のわが野球生活を顧みて、轉たこの感が深い。
後より來る者よ、強くあれ！ 強く！！

BOYS BE CHEERFUL.

If alone, I smile it isn't worth the while

But the smiles that win

Make the other fellow grin.

by I. Owaku,

1933.

講演

武藏武士

文學博士、渡邊世祐

二

丁度今岡田さんがお話しになりましたやうに、明治三十六年七月二十四日だったと思ひますが此處を去りまして東京へ行つたのであります。

其の頃は此處に居ります諸君は生れる前で、まだ形も出来なかつた程で非常に前の話になりますが、私は明治三十三年の九月此の學校に來て、三十六年迄三年間奉職しました。當時は前原校長でありました。校長が居られない時には、此の壇上に立ちまして式辭を述べたり、または勅語を奉讀したりした事もあります。そんな關係で懐しく思はれて、東京に行つても常に此の學校とは關係をつなぐ事を思つて居ました。唯今は教室も變つて居りますが、當時は唯今校長さんのおいでになる東の室が教員室であり、その隣りが地歴準備室でありました。そこで放課後に種々の本を讀んで居りましたが、熊谷に居るので何か熊谷を中心として武藏武士に就いての論文をまとめて見たいと思ひました。そしてその時は丁度早稲田大學の講義を書かなければならなかつたので毎日放課後一時間許り書く事になつたので、そのためにこちらに居る時はその三分の一位しか出来ませんでした、どうか勉強して學界の一角を抜け出す事を考へて東京に參り、關東の研究をして發表したのです。それは大正四年に提出し、大正七年に審査を受けて公にするやうになつたのです。

其の後此處に掛けてある「克忠」「克孝」の額を書かれた澁澤さんに招かれて、お前は熊谷に居たのだから、熊谷、大里を中心とする青年の讀むべき書物をつくつてくれと頼まれましたので、當時自分の助手をしてゐた八代國治と相談して、引き受けて武藏武士」といふ本をつくりました。

それでその事については皆さんより早く調べたので、皆さんより多く心得てる積りです。けれどもそれ等の事をこま／＼と話しましても歴史的事實でありますからあまり興味はないと思ひますので、武藏武士の起つた徑路を話してみたいと思ひます。

× × × × × × ×

武藏武士の起つたのは、天然の恵みである事を忘れてはなりません、日本の何れの地方にしましても、利根川流域の如き大平原はありません、その他越後、濃尾平野、筑後とか、相當の平原はありまして、關東の平野に比較する事は出来ません。此の利根川の流域は多くの人格者を出しました。武藏武士の如きもそのたまものでありました。その特徴は、人間として務むべき最も高遠なる徳を具へてゐたのであります。即ち武勇は勿論であり、忠孝、廉恥、潔白、勤儉、博愛、禮儀に厚く、仁義、質實剛健の美徳を具へてゐたのが特に著しい點でありました。そして武藏武士の理想とも言ふべきものは人の情であり、決して理窟ではないのであります。若し理窟のみ發達すれば所謂「忠孝何ものぞ」といふやうな考へになつて了ひます。そこで人情が七、理窟が三、少くとも人情が六、理窟が四でなければなりません。人間は感情の動物といふ事があります。即ち、人は理窟的に解説する事も出来るが、多くは人の情、即ち感情に生存する事が多いのであります。世の進むにつれて實際人情がだん／＼薄くなる傾きがあります。併し理窟でないことも理窟らしく思はれるやうになるのが多いのであります。假令如何に科學が進みましても或る區域を超える場合はないのであります。學術的に説明してもまことにさうであります。世間で唱へられてゐる事は時代が過ぎるにつれて感情に隨つて行くべき事が多いのであります。故に昔からの感情の美徳を守つて行けば人間の本質に違ふものではありません、そして其の美徳は日本の武士のみが有つてゐたのではなく、立派な人と思はれる者はこの美徳を具へてゐたのであります。西洋歴史の中世のナイトの性質も、これと同様であり支那に於てはそれが君子や士となつて現はれてゐるのであります。我が國に於ては武家時代が非常に永く、六百六十年の間幕府があつたので、其の美徳が武士道となつて現はれたのであります。これを歌に言へばものゝふの道、それは何かといへば命を捨てゝかゝる程に重んじられてゐたものであつて、昔、大伴家持が詠

んだ歌にも武士道を説いたものがあります。また昔から日本には仇討といふものが盛んに行はれたものであります。そして敵は必ず討つべきであつて若し敵をとらないならば武士の最大の恥辱であり、さういふ者は武士の資格はないといふ事を甲斐の國の武士は一家の教訓としてゐたといふ例もあります。

元來武藏は天然の影響を受け、それに依り幾多の名高い武士を産出したのであります。そして武士が成人する場合は祖先より傳へられたる武士としての守るべき道、即ち大伴家持の詠つた歌の精神に依り教養せられたのであります。かくして關東武士は大君の爲には斃れる事を辭せず、たとへば額に矢はたつとも背に立てないことを願つてゐたのです。そしてこの事が武藏武士を一層勇壯にしたのであります。

昔から國々に軍團があり二十歳に達した人民の三分の一だけを軍人にしたのであります。その頃九州では支那より來る夷を防禦する武士を必要とし、この任務は武藏武士が選ばれてやつたのであります。そこで親子の情を打ち切つて遙々九州へ向ふ時詠じた悲壯な歌も澤山あります。奈良朝のおほりから平安朝にかけての歌の中に

大君のみことかしこみ磯にふり

海原渡るちははをおきて

といふのがあり、また

今日よりはかへりみなくて

大君のしこのみたてと出立つ我は

といふのがあります。

これは秩父の人が詠んだので今吉田神社に在る碑に書いてあると思ひます。これ等の歌にもよく表はれてゐるやうに悲壯なる考へを以て國のため君のために盡すのが武士の特質であつたのです。

次にこの事がよく現はれた實例を申し上げます。これには武藏武士の行動が實にかけはなれたうるはしいものであります。忠孝、潔白、勤儉、博愛、仁義、禮儀、質實剛健、廉恥などといふ感情を表はした一つの適當な例であると思ひますからそれを申し上げます。これには鎌倉時代のお話しが最もふさはしいと思ひますからそれをいくつかお話しいたしませう。

源頼朝が、石橋山に旗上げして平氏と戦端を開きし時、畠山重忠は事により和田義盛などの仕打を憤り一族河越重頼及び金子村山、山口、兒玉、丹黨の輩三千餘騎を率ゐて三浦の一族を攻め其の居城笠城を圍んだのであります。笠城は小さいのに澤山の兵が攻めたので何の苦もなく陥落してしまつた。この戦ひがまさに始まらんとした時に、城中の敵將は、はる／＼と行軍をして、攻め登つて來た勞苦をねぎらふために酒をたまはつたのです。すると攻手の方ではこれに感謝し、三度禮をのべて頂戴し、然る後、弓矢をとつて正々堂々と鎧を削つて戦つたのです。これは禮は禮として守り戦は戦として勇ましく行ふといふ事を如實にあらはしてゐます。敵に對してその勞をねぎらふために酒を出すといふ心、その好意を無にせず快く頂く心、これこそ實に潔白なる心の現はれです。この兩者のやうな心を現今有するやうな者は幾人あるだらうか、かういふ事は現今では到底出來ないが、この心を持つ事は極めて必要な事であり、まさに滅亡せんとする城中の敵が出す酒、それは毒を出すのではないかと思ふのが一般の人の心持であらう。然るに、そんなことは少くも思はず、却つて禮を以て受ける事は、鎌倉武士でなくては出來ぬ事であり、來ぬ事です。

次は畠山重忠の廉恥潔白であつた事を申し上げます。重忠が戦功の賞與として伊勢の國員辨郡沼田の大神宮神領地を頂戴したのです。大神宮の御領地を頂戴するといふのはその小作をまとめて大神宮に奉り後官吏よりその分配を貰つてをゐるのです。重忠は大神宮の所領地の一部を預ることになつたのだが自分が行つてゐる事が出來ないので、家來をやり、代官をして世話させたのであります。ところがその代官はいつかその所領の大部分を横領してしまつた。員辨郡大領家綱がこれを頼朝に訴へたので頼朝は怒つて、重忠を呼んで頼朝自身が仲裁し、その事實が明かになりその罪罰として所領地を取られて、千葉胤正の第に拘留せられたのです。重忠は自分が代官の見方を過つたために大神宮の年貢を横領したので、神に對してまことに申譯ないと思ひ、その日より斷食をして、罪を悔ゆる事が一週間でありました。さうして身を責めてゐるのを、胤正が見て耐へかね、武士が部下の過ちを悔ゆるために斯くの如くである事を頼朝に申し上げたのです。そこで頼朝は、重忠を御前に呼び出し、あまりにも瘦せ衰へたる重忠を見てその真心に感激し、罪をゆるし、久しく謹慎するやうに命じたのであります。この時重忠は、所領地を頂戴する時は、代官のよいのがあればよし、適當なものが無い時は、斷乎としてそれを斷るべきである。さうしない時はこのやうな事になる。武士は何事も斷るべき時には斷るべきだ。これが自分を欺かずまた他人をも欺かざるのだと言つたといふ事であり、

この重忠の行ひこそ武士の本領を發揮した貴ぶべき事であります。諸君の日常の事でもこれに類した事が多々あると思ひますが、その時はこの重忠の如き心掛けでやる事が何より大事なことであると思ひます。重忠が謹慎して菅谷にゐた時別當の梶原平三景時が重忠を斯うも勳功のある重忠が罪を受けても、靜にしてゐるのは謀叛を企てゐるのだと申上げたのです。そこで頼朝もこの事を疑ひはじめ、重忠の幼友の下河邊行平にこの事を告げると行平は彼に限つてそんな事はありません。私が行つて連れ参りませう。彼は武士の模範ともなるべき人です、私が使となりませうと申上げて行平は菅谷へ來たのです。すると重忠は行平を見て、自分は塾居してゐるのに何故に來たのだと訊ねると、行平はお前が謀叛を企ててゐるのだと言はれてゐるので、迎ひに來たのだと事情を話した。これを聞いた重忠は大いに憤慨して、そのやうな事ならば自分は自殺してお詫びしようと思ひました。そこで梶原の所へ行つて挨拶をすると、景時はお前は君に疑はれてゐるのだから、その疑ひを晴らすために『誓ひの文』を書けとすすめた、重忠はそれを書くのは武士としてこの上なき恥辱である。自分は何としても書く事は出来ぬ。そのやうな心は毛頭もない。それに應ずる事は斷じてならぬと、何と言つても書かなかつた。それを聞いてゐた頼朝は、重忠を呼び出して、重忠と四方山の話をし、謀叛の話は少しもせず。以前通りに、用ひたのであります。このやうなことは武藏武士の他に見る事は出来ぬことなのであります。

次に武藏武士の標本としては立派なものである直實のはなしをして見たいと思ひます。直實は常陸の金華山城を攻めた時に日本一の剛のものと呼ばれた程であつたが頼朝は、鎌倉で流鏑馬をやる時に彼に役を命じました。的役といふものは低い役であつたので直實が不平を言ふと領地を削つた事がありました。また直實が熊谷に住んでゐた時、彼の領地と、一族であつた久下直光の領地との堺に川があつたのです。それは荒川だと思ふのです。鎌倉時代の荒川は押切りから北へ流れ、幡羅郡と大里郡との堺を流れてゐたのであります。私が實測した所に依れば、此の邊は荒川の川底であつた時であつたのです。それが變化して今のやうになつたので、押切も押切つて流れたとの意味であります、そしてまた荒川の支流が熊谷と久下との堺を流れてゐたのであります。荒川は毎年洪水がありそのたび毎に、直實と直光との間に争ひがあり、つひに久下氏が訴へたのであります。

そこで頼朝はその領主を呼んで、自ら裁判をしました。その時頼朝は、熊谷の方にばかり訊くのでした。直實は、元來吃りで辯解が出来なかつたので、一々の辯解に困つてゐたので、これは久下氏から手が廻つてゐて、自分を悪く言つてゐるのだらう。ここで何やかやと言ふのは無益だ。一その事西方淨土へ行かう、西方の世界に行くなら、争ひも怒りもおこらずよと思ひ、一切の證據書類を捨てて、傍の者の止めるのもふりすて立ち出で、正門から出て髪を切り西に向つて行つたのであります。頼朝は途中で喰ひ止めるやうに命じたがきかず箱根權見の僧が止めたので熊谷に塾居するやうになつたのです。そしてこの邊に説教をし、法を説いて歩いたのですが、後、法念上人に教を受け、つひに京都で身をおはつたのであります。この出家した事と、一の谷の戦の事とを連結して脚本が編み出されたのであります。此の來世だ、また自分の精神は淨いのだから淨いあの世へ行かうといふ、何處までも潔白な心を以て立たれたのであります。なほこの他中條家長、岡部六彌太、猪俣小平六等澤山の人々の事跡が残つてゐて、その中には、學ぶべきことが澤山あります。それを一々申し上げればよいのですが、長くもなり單調になりますから、關東武士の話はこの位にして自分の話をまとめます。

武藏は天然のめぐみに依り幾多の武士を出した。そしてなほ、武士の精神を養成するにあづかつたものは萬葉集の大伴氏の歌にあらはれてゐるのであります。

以上衣笠城攻撃の事や、重忠や直實の行跡のことなどの例話により武士の傲ふべき點を説明してみたのであります。これで丁度一時間になりましたのでありますから、あまり長い間まとまりのない話をしましたにもかかはらず、暑い時に靜肅にお聞きして下さいました事を厚く感謝いたします。

(六月六日講演部委員筆記)

Perhaps, as you see, all Japanese leaders realize that dangerous things are to depend on major silk industry for which main customers are the people of America; and think as industrial nation like Great Britain. While British empire can obtain most of necessary things from own colonies, but Japan is poor on many ways.

For practical philosophy, as you see, there are two great organizations under the sun and on the earth, namely: Churches and States or Nations. Church is trying to rule people by the love and sin (representing Gospel of John ever having no sin), States or Nations want to rule by the law for crime, and disregard commonsense and ethices . . . &c.

J. Haraguchi.

昭 朝 比 丹
 石川 飯 下 總 好 日 河 野
 利 三 郎 雄 常 橋
 三 郎
 昭和八年十二月十一日
 外 必 留 宇 士 屋
 昭 和 八 年 十 二 月 十 一 日

米 國 よ り ヂ 一 原 口

My dear Dr.;

You are a perfect educator, know good intention, an object and an aim; when and how to apply your children's passion and natural temper as to fit for present as well as for future purpose of patriotic and welfare of own people.

I appreciate very much and surely do not know how to express hearty thanks to you with all my soul, but I trust that your justification of aim will effect great to present generation and also future, more than, to say, satisfaction.

Hoping success for inflation in Japan. If U. S. A. going to do same inflation in some way, seems help to bring success. But if U. S. A. stays in gold, base and meantime, makes loan or sells gold to Britain and brings back gold standard for Great Britain on exchange of the war debt (I don't think they would do until Ottawa Agreement over)..... then, as you see, the general situation need great consideration the about inflation. We hope Great Britain keeps their words as English man's words in deed.

Americans always bring up some air about Manchurian question to pass veteran relief bill, and encourage army and navy and air-force bills at both Houses of the Congress. You might see some troubles in

陸士を志す人々へ

酒巻益次郎

將來士官學校を志す者もあるから、學校の様子を書けと言はれるまゝ少し述べて見たい。

御承知の如く、士官學校は豫科本科（學生部及中華民國學生部を除く）に大別され、本科は豫科二年間に修めた學問の力により軍事學を修める所である。皇軍將校の中堅を成す大部分の將校は、皆此の道程を辿るのである。將來の志望を決定する前こんな事でも參考になつたら幸です。

私が若き血に燃えて、青雲の志を抱き、郷關を出たのは本年の三月だ。新しいカーキ色の軍服に、星二つ輝かして我が過去を振り返つた時、唯感激に充ちたのであつた。受験時代も今は夢だ。陸士!! 陸士!! 私は唯其れのみを心に銘して進んだのが良かったのか? 「何養!! 岩をも通す桑の弓だ」といふ眞理に私はなれなかつたが、諸君が若し此の通りに實行したなら榮光は望んで可なりである。何事も努力だ。受験生としての苦しみは平氣で受け入れたら、それで良いのである。戰友の言に敢て母校の惡しきを曝すのではないが、まだ〱反省すべきことが

あるのではないかと思はれる。自己の惡しきはさて置き、諸君に私はそれを告げたい。

四月初旬憲と學科が始る。午前中は文官教授に就き、高等學校程度のもを研究する。午後は、術科、隨意運動、隨意自習正規自習等に別れる。朝五時半の起床から、夜九時半の消燈迄、何事もラツパに依つて行はれる。束縛の中の自由、吾等は其處に眞の自由を發見し得るのだ。一日の課業を終へて、靜かに寢に就いて考へる時、未來の希望に胸は躍り、言ひ知れぬ或るものを感ずるのである。術科としては教練馬術體操劍柔道等、毎日一時から四時迄の時間に教習される。教練と言つても一週間に三度だ。（兵科別教育時間を除く）

銃を手にとつて土にまみれるのも束の間、拍車の音に肥馬驅れば、集ひ來る戰友は思はず快哉を叫ぶ、誠に若人の仙境の如しである。

入校の喜びも忘れられぬ七月初旬、本科の卒業式が行はれる。若き士官の卵は、車駕の行幸に感激しつゝ、一死報國の意氣に燃えて卒業して行く。廣い校庭が一杯、カーキに埋れて、陛下に對し奉り、閱兵、分列式が行はれるのを拜觀すれば、其の志氣の旺盛なる事深く心をうつ。

かくて喜びと、光榮との中に日は流れ、七月下旬豫科は游泳

演習に出張する。太平洋の怒濤に躍り、櫓を操り、或はクロールの泳法に波を消す。男子浩然の氣の發する所、千尋の大海も何の其の、愉快なる二週間は靜浦の海岸に過されるのである。演習から歸ると夏休だ。約一ヶ月の休暇を戴いて各人は夫々歸省する。が併し休暇は夢の中の夢の様に早い。九月五日午後六時迄に全員歸校するのである。修養の途に就いて幾何もなく今度は演習だ。九月下旬那須野の高原に出張して盛に武を練る。どの兵科にも未だ屬してゐない吾々は、本演習間猛烈に歩兵演習を行ふのである。

高原の清い空氣に浸りつゝ、なだらかな曲線を描く山の上で武を練る時、我々は身體の疲れをも忘れて、武の國日本吾祖國の先鋒となつて斃るとも恨みはないと、深遠な誓を捧げる。

大體前の様にして我々は一年を送るのである。武の外に何物もなく過すと思つたら併し誤りである。楽しい時間も又時にはある。夕食後夕闇せまる校庭を歩武堂々軍歌を歌ひつゝ行進するのは軍隊獨特の味を感ずる。又聲に任せて詩を吟ずる事や、大きな酒保で、胃の腑を肥すのも一興あることだ。日曜などに縣人集會所に集つて上下の階級を忘れて相語るのも面白い。

母校出身者としては本科第三中隊第二區隊藤井喜平様、及豫科第一中隊第五區隊の飯塚さんと私だけである。どうか後輩諸

君よ、志を決して志願して下さい。志願者の數の多いのは恐るるに足らない。

大分變なことを述べたが、委員諸君の命により少し書いた次第である。（敬稱略）

追伸 何か聞き度いことがあれば私が豫科五の一に當分あるし、藤井さんも本科に在られる。但し飯塚さんは九年三月迄は豫科、——隊付——而して九年九月本科に入學されることであります。

向陵に登りて

朶寮二番 新城之介

苦節一年、遂に報いられて憧れの向ヶ岡に登りました。自分にとつて此程の喜びはなかつた。唯歡喜の念で一ぱいだつた。現在、其を書き表はす事が出来ないのは甚だ残念な事です。

今諸君に此の寮生活紹介をするに當り、一言、記して置きたい事は、一高の寮は他と異つてゐる事です。少くとも其の設立の精神、其の傳統、其の内容に於いて既に異つてゐる。スワン星座を指してそゝり立つ今は亡き時計臺の下に於いて、木下校長に自治を誓つて以來四十餘年、時に盛衰はあり「星霜移り人

は去る」とも自治の標榜は依然として撤回される事はなかつた。此様な歴史をもつ寮の生活には色々の楽しい事がある。

寮は古い上にストームに傷き、小刀に刻まれ寮雨で汚くなつてゐる。寮は南北中東和東明西の八寮から成つて居り、階下は自習室で机と椅子と埃、二階は寢室で万年床と蠟燭と埃で埋まつてゐる。これに本郷通りを加へたものが吾々生活の總てである。吾々は此に臨むに自治の精神を以てし、その目的は「寮の四綱領」として示されてゐる。又寮の特色は其の皆寄宿制度であるから、年中行事は一切寮を中心として行はれる。三高戦、行軍、記念祭は寮の三大行事であり、茶話會、晚餐會なども毎學期行はれる。入學後先づ出會すのは懇巴だ。新室生と舊室生との新舊コンパ、隣室との隣室コンパ等色々ある。寮庭に揺るゝ蟲の音、寮燈に深む夜霧、吾々は友情を慕つてコンパを開く。餅菓子や煎餅を食つて互に打ち解ける。話はつきず歌ふ聲は暖れさうだ。友の憂に我は泣き、我が喜に友は舞ふ。人生意氣に感じては……強い感激と深い想出に胸ををどらすのだ。續いて組選が行はれる。文科五組理科五組あつて、春秋の二回に十組が優勝旗を奪ひあふ。ポルト野球ランニング、柔剣道の中でポルトは何と言つても組選の華です。選手は一年生で上級生がコーチをやる。此組選を中心にもコンパが行はれ、優勝す

ると大祝勝會をあげてストームをやる。ストームは凱旋に心をどつて酔うた一團が正門以外より出入すべからずとの規則を守つて一時過ぎて門をのりこえて襲つてくる。蠟燭を先にし、手には棒を持ち下駄をはいて、「あな嬉し喜ばし戦勝ちぬ」と放歌しながら寢室の中で亂舞しながら通つて行く。西寮前庭で玉杯を唱つて解散する頃は、上野の鐘が三時を打つ頃である。茶話會晚餐會は鳴鳴食堂で夫々行はれる。茶話會では寮生芝居も行はれる。夏休が近づく三高戦の應援の練習をやる。選手及び應援團幹部の推戴式が行はれ、皆死んでも勝つと誓ふ、闘はあくまで技より意氣である。熱と意氣の戦ひだ、それだけに應援も猛烈だ。秋の行軍は日光方面で行はれた。紅白二軍に分れて生徒の中より聯隊長、參謀長等が組織される。呑氣な行軍ではあるが一高と言ふ奴からは脱けてゐない。日常寮雨をし、落書したり、或時は宵ふけて寮歌を高唱しながら本郷通りを散歩したり、又或時は夜遅くまで蠟燭の光の下に書をひもといたりして寮の一日一日は過ごされて行くのだ。

吾々の生活から寮を引き去つてどれだけ魅力があらうか、この寮生活の中に青年の純情・友情と言ふものが見出れて、吾々の人が育くまれて行くのだ。實際憧れの向陵だ、併し時勢と共に一高生の内容も氣質も變つたと言ふ。「向陵衰へたり」と言ふ

人もある。併しそれも時勢によるものだらうし又見方によるものであらう。駒場移轉も間近くなつた。さて、今自分が此の岡に登つて感じてゐる事は、吾々の仲間が秀才ばかりではない。皆努力家だつたと言ふ事です、誰でも努力した者が秀才になれるのです。吾々一高生のほとんど總ての者がさうだ。と自分は信じてゐる。志ある者は進んで此の岡に登り一生の想出とされん事を希望します。終りにのぞんで、自分のために會報の數頁を分つて下さつた事を感謝致します。八、十一、八

濱松高工より

松村辰男

受験を間近かに控へて諸君は、さだめし準備に没頭してゐられる事と思ふ。特に背水の陣を張つたかの如き感ある――

五年生諸君!!

自信はつきましたか。あせらず恐れず、悠々たる態度で勉強してくれ給へ。健實なる勉強に依る實力養成者の前には、入試も何程の事があるか! 熊中健兒の意氣を以つて大に努力して、くれ給へ。

四年生諸君!! 「高校受験を度胸試し」と思つてゐる方は有りませんか? 「慣れる爲の受験」と考へて居られる人は居ませんか? そんな考へを持つてゐては今年は愚か來年になつても成功は覺束ないですぞ!! 受験する以上確固たる決心と努力を忘れ給ふな。一寸のすきも心に置きなざるな。來年有りと思ふなどは、もつての外、そんな心なら一そ受験せん方が宜しい。兎に角、受験生諸君、油斷は禁物です。

五年生諸君にして、若し吾が濱松高工を受験せんと望む者がゐたなら、特に健康には注意して、身體に何等の缺點なきやうにしてくれ給へ。他校に比して當校は身體検査は甚だ嚴重ですから。

併し南に海を控へ、東北の雲間に富士の嶺を仰ぎ、自由啓發を主義とする濱松高工は、自然を相手とし自由、開放的に學ばんとする徒には最適の場所だと感ずる。我と思はん者は來給へ。熊中健兒の如き氣質、又適する所、多々有るであらう。

受験生活中に經驗的に得た僕の當時の心境を、一寸書く事にする。こてくした具體的な説明めいた文は省く。

受験勉強の態度

先づ第一に「心の落著き」が大切である。先の見えた運命的な事件の前には、人間はとかく冷静を失する虞れがある。之はその事件を致命的なものにする第一のものである。冷静を得るには如何すれば良いか。それはその人の「膽」の大小に依るもので、膽の大小は修養の如何に依る。

次は規則的な勉強である。煩雑な規則は、寧ろ避けた方が良いが、勉強すべき學科の時間割、勉強すべき時間、起床、就床の時間、之等は判然たる計畫の下に實行する必要はある。

健康——之は、今更言を俟たない。病弱者は受験生としての價值はないと云つては取て過言でもあるまい。又、勉強と云つても、無闇に詰込まうとするのは愚人の方法である。最も要領を得た勉強でなければならぬ。講堂に掲げてある「精力善用」は伊達にあるのではない。受験生諸君は大いに之を活用していただき度い。

現今の入試問題は一般に難解なるものは避けられてゐる傾向がある。併し平易だからと云つて勉強を怠つて貰つては困る。自分がやさしいと思へば人も亦やさしいと考へてゐるのである。諸君!! 諸君は、人並以上に、出来なければならぬ義務があるのを忘れてはなりませんぞ!!

X

X

精神を統一し、志望校を選定し、定められたるプランに依つて著々と準備を進め、實力養成に従事して行つたなら、必ずや諸君は成功する事と察する。

僕は諸君が熊中健兒の意氣と熱と粘氣とを以て進んで行かれん事を祈つて拙い筆を擱く。一九三三、十一、一

心の動くまにまに

高田大三

小春の陽暖かに銀杏の葉音もなく滑る一日、母校々友會々報部委員の方から送られた原稿用紙を手にした私は限らない懐しさと親しみの情とを禁ずることが出来ませんでした。あの古色蒼然たる中にどこかしらがつしりした校舎や、礫のごろ／＼した運動場や、おい失敬と言つた調子で、ぐつと背伸びした赤城男體の山々が何だか眼前にちたつてくれば、譯もない感傷の俘となつて暫くの間ぼんやりと秋空に見入つてゐました。綿のやうな浮雲のたゞすまひ、つい／＼と掠めてゆく赤蜻蛉の群までが妙に親しまれてならないのです。一昨年の丁度今頃でした。やはり委員の方から何か投稿してほしいとの御便りを戴いたのですが、偶々祖父永眠の悲電に接した私は、世の中が一時に闇に

なつた様な悲みに襲はれペンを執る元氣もなく、つひ失禮してしまひました。その時の御詫言々、平素御無音の償ひにもと存じて僭越にもペンを執らせて戴くことにしました。幾ら智慧袋を捻つて見た所で、平凡な者には平凡なことしか書けぬ、又書ける筈もないことは十二分に承知の上、敢てペンを執るのは一には母校に對する根強い愛着からであり、一には自己満足——これを書くことによつて悲しい嬉しい追憶の花園に逍遙して見たいといふ——の爲でありまして、筆は走り次第、偕何處に落つくことやら、我乍ら甚だ心許ない次第です。

私が高師に入らうといふ志望を起したのは多分中學四年の始頃だつたと思ひます。當時高師の入學率は相當に高いといふことを聞いてゐましたので、少しは勉強しなければといふことも覺悟してゐました。その頃私が耳にしたのは受験勉強といふ言葉です。一體どういふのが受験勉強なのだらう。私も受験するからには一つ受験勉強をして見ようと思ひました。學期の切變り毎に今度こそは受験勉強を始めようと思ひつゝも、白駒の隙を過ぐとはこのことでせう、月日は容赦なく無情に流れ去るのです。教書科をしつかりやるといふその方へ手が伸びない。心に焦燥を感じつゝ四年も過ぎ、五年の一學期も済んでしまつた様に思ひます。ろく／＼受験勉強もせずに高師を受験するなど一寸無謀ではあるまいかなどと考へて、小さい自己をちつと見

つめる時、可なり淋しいものでした。併し教科書の勉強だけは毎日缺かさずこつ／＼とやつてゐた爲、これは確實な自分の知識となつてゐました。國漢文の名文などは大抵暗記してゐて、疲れた時などすら／＼と口誦むのが私の得意でした。級友達は盛んに受験勉強々々々々と言ひます。参考書を讀むことが受験勉強であると考へてゐた當時の私は、参考書を讀むことが受檢かつたことが、どんなに覺束ない心を誘つたでせう。暑中休暇には學校の講習會にも出ず、朝から晩まで養蠶の手傳ひで閑暇としては殆んどありませんでした。大自然を友とし、土の香に親しみつゝも、眼前に試験は迫つてゐる、學校の宿題は山程あるといふ風で、時には先生の無情を怨みつゝ農事の小閑を竊んで少し宛勉強を續けてゐました。二學期になりました。色々の事務はあるし、兵營宿泊、體育大會、その他の行事が重なり續いて心の安まる暇とは殆んどなく、従つて所謂受験勉強の方へはほんの僅かしか手が届きませんでした。實にあの頃の忙しさと言つたら今でもぞつとします。併し人間つて横着なもので決心次第ではどうにでもなる、如何に忙しかればとて閑暇を自ら作り出して勉強すれば案外出来るものだといふことをあの頃しみ／＼感じました。

試験前二ヶ月間位は新知識の注入詰込は斷念して三年頃からの教科書に一通り眼を通し、頭の整理をして置き、十二月末上

京受験しましたが結果は僥倖でした。

右の如くなる故私は所謂受験勉強と名のついた勉強らしい勉強をして居りません。で『受験勉強の體驗を』と聞かれると一寸困るのです。とはいへ私の勉めてきたことはそれがその儘受験勉強となつてゐたのではないかと思ひます。受験勉強とは何ぞや。抑々この受験勉強なる概念は如何なる内容を意味するか。これこそ私達が往々にして誤り易い問題です。一般には受験勉強なる語は教科書の勉強と相對立するものゝ如く考へられてはゐないでせうか。教科書の勉強はともすればこれから除外されてはゐないでせうか。教科書の勉強を何故に輕視するか。私には分かります。思ふに教科書にあることをすべての根柢となるもので、絶対に知つて置かねばならぬものと考へます。柱なき家は傾き、舵なき舟は動もすれば覆ります。基礎の堅くない者が徒らに萬卷の参考書を獵るとて雲煙過眼と何ぞ擇ばんやです。斯く言ふも私は決して絶対に参考書を排斥するものではありません。教科書を中心としその補助的意味に於て讀むなら勿論大賛成です。とはいへ教科書を眞に我物として更に参考書を縦横に讀破し得る人は果して幾人ありませうか。私達が四年の時でした。數人の人が某校受験の爲、三學期の大部分を缺席して自宅で勉強しましたが、果して見事に揃つて落第しました。この事實は私達に何を教へるでせうか。

要するに私は從來の所謂受験勉強の意味に補訂を加へ、教科書を眞面目に眞剣に勉強することが、即ち受験勉強であり、猶餘力ある者は補助的に参考書を讀むべしと唱道したいのです。決して参考書のみに頼つてはならぬと存じます。そして試験前になりましたら新しい知識を無理やりに疲勞した頭に詰込むよりは、寧ろ既習の知識を整理して眞に我がものとして置くことが、遙かに効果的だと思ひます。新知識を詰込むには可成りの努力を要しますが、既習の知識を整理するのは單に記憶を呼戻すだけで事足りません。

以上は固より私一個人の主觀的な意見でありまして、決して客觀的なものでないことは勿論です。私は私の主觀を人に強制しようとは致しません。が、少くとも本校受験者はこの心得で進まれたなら或はよくはないかと思ひます。平易な基本的な問題の提出されるのが、本校の特色です。本校で要求するものは中學卒業程度の學力であつて、決してそれ以上のものは要求致しません。

どうやら筆が滑つて變な雲行になつて來ましたが、惡しからず御許下さい。自分勝手なことばかり言つて失禮致しました。回想の世界は楽しい。思慕の國はそゞろに幼な心をそゝる。薄の穂と共に水郷廣陵の秋も漸く闊けて參りました。紙數の都合上學校の様子等は省略致しました。唯本校受験上最も注

意すべきは志望學部の決定といふことです。聞く所によりますと先づ第一に専門學科の成績のみにて採用人員の約五倍を選び、その中から更に他の學科成績その他によつて選抜するのだとか。尙何か御不審な點がありましたら、遠慮なく私宛御手紙下されば喜んで出來るだけの御便宜は計る決心です。諸先生方並びに生徒諸君の御健康を祈りつゝ。(二五九三、一〇、二九)

商大豫科及び入學試

驗に就いて

一橋熊中會 大野禮次郎

校友會の役員諸君から、何か商大豫科に關する記事をとの御求めに應じ、乏しき知識の一端を御紹介致します。

本商科大學の組織は、御承知の如く、本科、豫科、専門部、附屬教員養成所の四部に分れて居ります。その中、私の通學致します豫科は、高等學校高等科と同じわけでありまして、入學資格は同様であります。

本學豫科が一般高等學校と相違して居ります點は、課目に於ても勿論であります。寧ろそのアトモスフェアに於て大なる

ものがあります。即ち、一般に溫順である事が學校の氣風であります。所謂、ビジネスマン型とでも申しますか。その様な氣分が、學内にみなぎつて居ります。それ故に、どうかすると元氣のないと云ふ風評も受けますが、かの東洋豪傑ばりの蠻風は決してありませんから、眞に學問を好み、將來大いに、爲すところあらんと望まるゝ諸君、堅實なる學徒たらんとする人は、どし／＼御出で下さい。もし單に、若人の血を發散せんが爲に御入りになるには、つまらぬ學校であると愚察致します。然し之は主觀の問題ですから、これ以上申し上げられません。

次に入學試験に就て一言申し上げます。

何れの學校にせよ入學試験は受かるべき筈のものです。然しながら落ちる人の多い學校ですと、その筈が筈でなくなりまして。これを筈にするのは、諸君の御勉強一つで定まります。私としても、勉強すれば必ず受かるとは申し上げられません。然しながら、勉強せぬ人は決して受からないと言ふことを申し上げても過言ではないと思ひます。今年、僕等と同時に卒業した人の中には随分勉強せられ方たもありませうが、私の見た處、本當に勉強せられた方の數は、甚だ少なかつたと思ひます。今年の不成績は、それに原因して居ると思ひます。そこで諸君に、先づ第一に御奨め致したい事は、諸君が、本當の意味の勉強をなさることです。本當の意味の勉強とは、諸君の信頼せらるゝ諸

先生に、御聞き致せばわかりませう。

次に諸君に最も重大であると思はるゝ、参考書の事に就て申し上げます。私は参考書は絶対に必要であると思ひます。然しこれは、坊間の所謂解説法の類でなくて、一つのまとまつた本、勿論註釋附の本、例へばエッセックス講義等の比較的容易なものを、徹底的に讀むことです。然しこれも僕の主観より割り出したもので、私から、私の考へでは、諸君が善いと思つた方法が、最上の方法であると思ひます。

以上とく大きく拙文を弄しましたが、之を要約すれば、商大は決して諸君の想像する程、善い處でも、悪い處でもありません。諸君が、眞面目に勉強するつもりなら、決して不満足は與へぬでせう。又入學試験は勉強すれば必ず入れるものです。要は諸君の心掛一つです。猶本稿及び本學に關し御質問の方は左に御申し出で下さい。

府下國立大學町富士見通小野金物店方
歸省地 熊谷市石原三丁目一七八六

藝文

短文・短歌・俳句
川柳・詩・短篇

短文

満足

五甲 瀧澤 三郎

人々が最も熱望する物何かと問へば、唯満足にあると云へる。正に我等の理想たるや、萬事に満足を得る事にある。然しながら我等が總ての満足を持する事は、勿論、幻想に過ぎない。故に之を現實的に見て、十の満足を目標とし、幾何なりとも、十の満足に近き満足を持する事は我等の平常に於て、心置く所である。然しながら唯満足にも物質満足

と良心的満足とに大別し得る。されば前者と後者何れを可とすべきか？ 勿論後者を是とし前者を非とすべきである。前者に於ては只々心にふと浮びたる欲望を満たせる場合が殊に多くして、往々にして前後を顧みせず、一途に如何なる除物も、其れを排する爲、例へその行爲が内部即ち良心の責を免れぬとも、目的を得る爲に決行する事が度々ある。故にかくの如くして其の欲望が適ひしも内部の苦しみにより逃れる事は不可能であらう。果して之を満足と云へる事が出来得るか。内部の良心の忠言に振り向かず、又反つて壓倒すればする程、精神的苦痛の大なる事を感じずには居られまい。

此處に於て物質的満足は時々外部的に満足し得れども内部的方面には零なる事がある。故に必ずしも物質的満足を可とし得ないのである。以上の事柄に依りて内部方面の重大さが判る事により自然良心を本體とし、終始良心の叱りを受けぬ様に努め以下内部の満足を満たす良心的満足を保持する事が必要であると判るのである。我等が常に良心の囁きに心を配り以て心の氣安さを求むる事が我等の理想に近づく道である、故に常に良心を本體とする爲め、常に反省すべきである。その反省こそ全果なるものである。

秋の寂寞

五甲 平野 英一

白い雲は眞赤に、黒い雲は紫に、美しく西の空が焼けて、その下に秩父の山がはつきりと見える。愈々今日で、中學時代の行事は終つてしまつた。だが自分の心には、何處か今日の興奮が残つてゐて、美しい自然を嘆美する力があつたそれは宛ら、その美しい自然が何時迄も續き決して、其の後に暗い重い夜といふものが來ないやうに思はれた。しかしそれも暫時、暮れやすき秋の夕闇が次第にそれらをぼかし初めた。秩父の山を消し、美しく夕焼を取去つて、わづかに中天に明るい空を名残に残してゐる。それと共に自分の興奮も次第に消えてゆき、自分といふ人間は、五年間を何もする事なく、楽しい行事のみを追つて過して來たものゝやうに思はれた。それは過去の全部が悔いるべき事のやうにさへ思は

れた。今の自分には、秋が恐ろしくなつて來た。遠慮無く、過去の自分を苦しめ、更に現在の生活・思想・怠惰・失敗・全てに警告する秋が恐ろしかつた。それ等警告を受けなければならぬ過失がなくとも、自分は焦慮と煩悶を續けた。

ふと氣が付くと空は全く暮れて、星さへ見え初めた。其處には、淋しいながら、夕焼の空に似ぬ落着があつた。自分の心にも何處からか落着が這入つて、初めて、秋の寂寞に捉へられて居た自分を見出した。

夏休の眞義

五甲 島田 哲夫

冬を以て最も陰鬱なる時候とせば、夏は最も陽氣なる時節なり。烈日の赫々たる、樹葉の濃艶なる、眸に寫る光景、これに陽氣にして一點の暗影もなし。餘りにも濃艶なりし爲か、多感なる詩人達には兎角嫌はれ勝ちではあるが、何しろ活動

的明瞭の休暇

ぞや。明々白白とせよ。原の如く、逗子の如く、嬌奢を競ひ、避暑の何たるかさへあやしくなる。これは實に多大なる誤謬である。然らば何か、酷暑これも全然關係のない事でもないが、一週に一日の日曜があるが如く、年にも一期の休暇が無くてはならぬ。其の休暇を孰れの時節にするかは最も倦み易く、能率の向上しない、烈暑期を選みたるものならん。平素職務に追はれ自己の自由の時間に乏しかりし人、平常の足らざるを補足せんとする者の爲めのものならん。世によく新聞社等に於て一日の休暇なくしても立派にやれると言ふので夏季休暇に疑惑の白眼を向ける者もある。それは休暇は烈暑の爲めではなくして、前述の事柄に因ると理解したならば直ちに氷解するものである。又一方休暇の眞意を

理解せざりし者の惰眠に其の日を暮して長き休暇を醉生夢死を文字通り實行する者も少くない。シドニー・スミスは言つた。青年は時の價を考へず。若し汝七十二歳まで生きなば汝の生活の内容左の如し、一晝夜の一時間は三ヶ年に償ひ、而して二十七ヶ年間眠り、九ヶ年間化粧し、九ヶ年間飲食し、九ヶ年間戯れ遊び、九ヶ年間散策應接し、六ヶ年間商賣し、三ヶ年間喧嘩す」と。世間の一人々々皆等しいとは言ひ兼ねれど、大同小異なりと言ふべし。年々歳々同じ休暇を繰返せども、年々其の用法を理解し行く人の少きを憾とす。而して一年に二ヶ月の休暇は七十年で約十二年に相當する。其の長き時間は中學より大學を終へ未だ餘りある長さである。かくの如き長期間を徒に遊び暮す、寧ろ空費する者の多きは否定する事甚だ難い。遊びと言つても「よく遊びよく遊ぶ」の遊ぶとは根柢的に異なる者と思ふ。所謂「のらくら」は遊びの本當の意で

はなからう。避暑して泉に浸り、海水を浴び、オゾンを吸ふ。誠に結構な事ではあるが、避暑地に行きて如何に暮すか、中に勉勵おこさるゝあれど、大方光陰の早きに驚きて歸るのみにあらずや。

惡癖拔難く、良習破れ易しといはれ、日來鍊磨し來りし、良習慣も一朝にして陥り、怠惰に化し、事務澁滞し爲すべき事を爲さざるに至る。かくて休暇を終へても敏活に働くを得ず。敏活なるには成可く惰眠せざるを要す。惰眠これ決して晝寝を指すのではない。晝寝、適度な晝寝は現今の醫學上非常に効果のある事を證明された。故に大いに奨勵してもよからう。要するに惰眠を避けて暑中休暇の眞意義を體得して、年々歳々の休暇を最もよく利用すればよいのである。

秋の夕暮

五甲 田中 敏雄

黄昏つるべ落しの秋の陽が沈まんとす

る時、怒濤のやうに見える秩父連峯は崩黄色にほの暗く染められてゐる。私はこの空の錦を見つめながらあてもなく河原を歩んだ。枯尾花にそよ／＼と微風が吹いてゐる。静かな私の夕暮、唯この沈黙を妨げるものは滔々たる水の流あるのみ、蜻蛉が矢のやうにすい／＼と往來する、陽はすっかり落ちて夕闇が次第に迫つて來る。

夕の帳はもうすつかり自分を包み去つて暮れのこつた河原へと垂れ下つて來た。私はこの自然の懷に抱かれてすべてのならみ、受験、欲望等を忘れた。暮色は益々その濃度をまして來る。私はこのまゝちつと自然の懷に抱かれてゐたい。永久にこの美しい淋しさを含んだ秋の夕暮の中に。

暮れ行く天地黒すんだ森滔々として果知らぬ荒川の流、夜の帳はおりた。私は再び軽く夕闇の中に歩を運んだ。

五十年前

五甲 小島 貞男

「昔を考へるとまるで夢さ」老人はかう云ふと煙草盆をボンとたいてきせるをシュウ／＼二三回吹いた。秋とは云つても日向では春が汗ばむと云つた暖かさ、風は時に今にも落ちさうな枯葉をゆすつてカサ／＼乾いた音を立てる。老人の眼には何だか往時の追想に堪へられない様子が浮んでゐる。

「一體それは何時頃の事なんです。」何さ、わしがおぼえてからでは木出しの盛んに来る、止場として榮えた頃だらうな」「その止場つて？」「うん止場と云つてもわからんぢやろが先づ秩父の山奥で木を切るぢやろ。」それを水に浮くまで雨ざらしでほして置くのさ」「それから水の増した所を見はからつて川に流してむんだねそれが丁度夏頃ださうだがね。」「それからその木はどうするんです。」

それはそれは熟練に熟練をつんだ人達が流木に乗つたまゝ流してくるのさ。つまりばら／＼のまゝでね。まあ木のやつかいをしながら自分も一所に流れてくると云ふわけさ：：：實にうまいものだよ、丸い木の上をあちらこちらへボン／＼飛び渡りながらトビを使つて木をのこらず一所に流して行くのだからね」老人は相手の感心した様子にやゝ氣がのつて來た様子で、又「その時遠くから歌つてくる歌が今でも聞える様だ」と云つて何か聞える様に耳をそばだてた何時の間にかつめてあつたきせるに火をつけるとつづけざまにブカ／＼すつて又ボンとたいてシュウ／＼と軽く吹いた。「これがつまり木出しと云ふので止場と云ふのはその材木を陸揚げする場所です。：：：と云つても秩父から江戸までにたつたこゝ一ヶ所だつたから、その賑はしきは考へてもわかるだらう。」陸揚げした材木はこゝで手を入れていかだに組み此所から江戸へ下つた

のさ。：：：それが丁度秋今頃から冬にかけてだつたな。何しろ材木が一里も二里も山の様につみ上げられたのだから今では見たくも見られないよ」：：：そして此所を止場と云つたのさ。」

私の村は全く交通によつて、：：：殊に荒川の交通によつて：：：發達したに違ひない。そして今は荒川の北岸にあるが昔は南岸だつたらしい。今の川とは全く反對の桑原の中に川に關係ある名がついてゐるのを見てもわかるし又現在の荒川を陸地を掘割つて作つたと云ふ書類もあるさうだ。何れにしても河の附近に發達した村である、そして此の止場時代に到つて最盛期に達したのだらう。

「で此所は秩父の人達には最終の地であり江戸へ下る人達には起點のわけさ。」「そしてその人達は？」「今こそないがその頃はどこの家でも秋から冬にかけて宿屋とも云へまいが、まあ宿屋になつたのを、そしてどこの家でも一杯だつたから

な、その賑はしきはまだ見える様だよ。」

：：：「併し今はかうなつたわけさ鐵道も自動車も此の村にはかたきと云つたわけさ」と云つて微笑をうかべた。肌寒い秋風が日光にほてつた顔をなでて行つた。

我が校

五甲 野口 隆 次

惟ふに學校の生命は悠久なるべきである。我が熊中は創立以來實に三十八回の開校記念日を迎へた。その生命は今後幾百萬年の「永久性」を持つことは論を俟たない。今日二千の卒業生を生んだ我が校は、更に百千萬の後進を容れて之を教化し、「國の護り」として帝國に寄與する重大なる責任を持つ。であるから、一個人の私すべきものでなくて我等の熊中、天下の熊中である。故に我等は永遠に繼續せらるべき學校精神の流れ盡きない生命が含まれてゐることを自覺しなくてはならない。自覺缺乏すれば紛擾が起る。之

は自然である。

此の永遠の生命を擁する熊中魂の象徴は校旗である。軍隊に於ける軍旗は陛下の御下賜であつて、軍隊精神の中心として尊重される。校旗を之に倣つて取扱ふのは、當然この精神の發露である。

又この精神が和と禮とに表れて我が校を結びつけてゐるのである。古人が禮は和を以て尊しとなすといひ、聖徳太子も憲法十七箇條の第一に特に之を仰せられた。而も先賢が和の中に禮を以つて之を節すべきを教へたのは愛のみにては流れ易いからである。「一體和」といふ字の中には敬と愛とが含まれてゐると見るべきである。師弟の間も敬愛が無くては眞の和は得られない。之はあたかも音楽に節があつて和が得られるやうに整然とした秩序があつて始めて和が得られるものである。

此の和あつて犧牲的精神・協同精神が生れるのである。學校教練もこの徳操を

練り得る可能性が多分にあると信ずる。

今まで随分苦しいこともさせられたが、その體驗は何時か役立つであらう。今年の八月、大宮まで野球の應援に全校生が烈日を浴びて行つたのは選手と苦樂を共にする觀念。即ち校旗の象徴する校風。

換言すれば熊中全體の者が一致團結して互に激勵しあひ、助け合ふ美風の表れで無くて何であらう。この意氣で以て校旗を中心として敬愛し合ひ、以つて天下に雄飛し、永遠に榮ゆる熊中を祝す。

運 命

五甲 大澤 良平

運命は佛教の所謂「因果應報」立ち所に到るべし。なんて説く者には易者の判斷で、満足せしめたらよからう。天命の定むる所だと云つて獨り定めで、その運命に屈從してはならない。吾等は宜しく自己の最善を盡して之を開拓して行くべきである。

運は廻りものとか、運の神は屋根の上
に宿る。とかはつまらぬ格言で將來の我
國人にはさつぱり通用し得ぬ言葉であ
る。運命を開拓せよといふ事は、近時に
於いて、すべての人に必要になつてきた。
自分は論理學者ではないから、運命それ
自身の定義を知らぬけれども、吾々は運
命は廻りものだなんて癡言にだまされる必
要はないのである。

病氣になつて、床中に呻吟する者は、
運命の荒波に、溺れた者で、努力、注意
によつて、かゝる運命に支配せられない
やうにし得られるのである。風邪を惹起
するもの、試験の通路を塞がれて通門か
らしめ出しを食ふのも、さつぱり運命を
發展せしむる事の不得手な者にのみ多
い。古昔平重盛が進退こゝに谷れり、右
せむか左せむか。運命は定つた。自分は
死なう。と願掛けをした事を、自己の運
命を荒磯に打上げられて屍古たれてしま
つたものゝ言である。

さはあれ、重盛はあの忠孝兩全、吾等
の崇拜措く能はざる彼の重盛が、たゞ徒
らに、むざ／＼運命の波になすがまゝに
乗せられてゐたわけではない。

では、どうしてか。——といふ事にな
ると、やはり結局運命のしからしむる所
以であると云へる。されば前に述べた如
く運命を開拓せむといふ鞏固なる意志を
有してゐてもやはり、自然の命には人力
で及び得ない、運命は吾等の支配者であ
つて、吾々いくら努力してもいくら進路
を切り拓いても、運命が、いふことをき
かぬから駄目なので、結局運は天に任す
といふ終結に、當てはまつてくる。あゝ
然らば吾々は、吾々の運命を自由に操縦
し得るやうな人物になれば、可である。
それを至上の目的として我々人間は進ん
で行くのだ。

追 懷

五 乙 濱 良 一

晩秋の日の暮れかゝつた或日、輝く電
燈の光を遠く見て町外れをあてもなく
歩いて見た。

稲はもう刈り取られ、霜枯の畦草にあ
と僅に残る秋の氣配を感じる。

西の空はあかね色に照りはえてその平
和の光に萬物は美しくして輝いて居た。

私は楽しい思ひ出に耽りつゝ歩いた。
其の思ひ出は楽しく懐かしいものである
が又悲しい夢の様でもあつた。

中學五年間の生活は私にとつて現實の
夢であり又はかない夢であつた。

卒業も間近くなつた今始めて其の夢か
らさめて過去をたどつて行つた。

熊中の五年間は如何にも忘れ難い美く
しい夢だつた。汚れない清い淨い青春
の夢であつた。

思ひ出せばどれもこれも清い結晶だ。
この美しい熊中の生活から離れる事
もどうしても夢としか思はれない。

思へば五年前此の學舎に先生につれら

れて受験に來、あの柔道場の側で先生に
算術の答をあはせてもらつたのも、合格
の報に雀躍りしたのも、楽しい思ひ出
だ。

若草の上に寝ころんで、頭上をすぎて
行く雲を無心にながめて居たのもあの頃
だ。

二年、三年となるに従つて、私はだん
だんセンチメンタルな人間になつてしま
つた様な氣がする。

あの頃獨りで眺めて居た星も月も今と
かはらぬあの美しい星や月であつたの
だ。

眞暗な道を前方の一點を見つめながら
一心に口笛を吹いて通りすぎた事もあつ
た。

激しい風の日に森の木はひゆう／＼と
凄い音を立てゝ居た事もあつた。そんな
事には魔物が枯枝をゆするとさへ思はれ
た。

早春の月光が室にさし入ると私は堪へ

られなくなつたのだ。その頃覺えた歌を
習ひながら何時の間にか眼に涙を宿して
居た。

私はその頃を思ひ出すと變な氣がする
そんなにも簡単に涙が出るものかと。

然し矢張り私の心はその當時より汚れ
て居るのであらう。其の頃の心はほんと
に清らかであつた。

おゝ限りなき美しくも又楽しき追懷
過去は實在せる夢だつたのだ。だから私
は心の奥に諦め去らねばならぬ。

私はふと我にかへつた。振り返つて見
ると何時の間にか大變遠くへ來てしまつ
た。

邊りは夜の幕が殆んど降りて居た。私
は其處で歩みをかへし始めた。

「凡て過去は美しくしく見える。美點のみ
が目につく」と、どこかで見たのを思ひ出
した。

其れは私にとつても同様である。

今の生活、受験の爲に自分の生活でな

い様な苦しい生活も懐かしく思ひ出され
る時もあらう。

こんな事を考へて歩いて居る中にふと
町の内面が眼前にちらついた。

私はもう町へ入りかゝつて居たのだ。

初夏の印象

五 乙 坂 上 辰 夫

端的に言ふ事は難しいが、私は過ぎ行
く初夏の日の白い雲を視、或はほのかな
土の匂と新鮮な若葉の香とが立ちこめて
ゐる森の中を歩いて行く時、何かしら或
る種のなつかしい感情が蘇つて來るかの
やうに感ぜずには居られない。

初夏の印象——おそろくその大部分は
私の主觀の折にふれては動いて行つた跡
に他ならぬかも知れぬ。生きる事の悦び
否生活する事の歡喜を判然と思はせるそ
の主觀、その背景を成すものは美しい
自然の景觀であり明朗な自然の香氣であ
り、明暗の稜の餘りにも明かな拙い自分

の生活だったのだ。

三年生の初夏の頃であつた。私は一度行田の町から一里程東の方にある小針沼を訪れた事があつた。可成大きな用水の橋を渡つて未だ見ぬ沼を目指しつゝ右にまがり左に折れして静かに歩いて行くと、眩しい位明かるい雲間から、少しづつ洩れ始めた陽の光に、植附を終つた苗代の間から草いきれがかすかに感じられ始めて来るのだつた。次第にぬるみながら田の畦をめぐり、廢屋の陰を裏つたひ或は圓い大きな塚の下にバツと白い光を反射して流れて行く水の底には、丸い大きな葉をつけた水草が、ふわりふわりと漂つて居た。其所彼所の水溜りから飛立つ白い水鳥を見ては、もうすぐ到着出来るのかとばかり思遠をして居た小針沼にいよいよ近づいて来たのか、かなたこなたの青い森や林からゆるやかに聞えて来る蟬の聲と、留守居しながら歌ふ子守歌の他は、全く一途に静まり歸つて居る所

に出た。そしてすぐ手前に、長い大きな堤の影がくつきりと現れて来た。併し未だ沼の水は見えず、否果してその向ふに廣々と展開して行く水面があるのかどうか、すべての物がだまりこくつて居る其所では疑はしい位だつた。

折から薄雲が破れてクワツと暑い陽光が照りつけ始めた。私は一緒に来た他の二人とともに急いで堤を上つた。一寸水面が眼に入り始めた瞬間には、水面は日の光を反射して居る白い鏡のやうであつた。そしてその次には足元に静まりかへつてゐる青い青い水がスツと眼に入つて来た。

併し沼の上空の空氣はボーツと全體一様に明かるかつた。唯沼の真中の邊にのみ黒い枯草の影が空しく見えるばかりだつた。

やがて三人は思ひ思ひに堤の草の上に腰を下した。一旦照りつけ始めた太陽が雲にかくれると、忽ち水面が狭ばまつた

やうに見えて、對岸の堤が判然と眼に映じて来た。そして其の時私の頭の中には昨日までの自分の姿がまざ／＼と想起されて来るのだつた。——無理も無い——随分滅茶苦茶な生活をして居た當時だつたのだから——私はそれまで或る一定の時間を思考や自分の感情をまとめるために費すやうな機會は、殆んど全く與へられて居なかつたのだ。唯急がしく安定の悪い圓盤の上を走りまはつて居たに過ぎなかつたのだ。……

漸くにしてうつろな私の眼は對岸の水邊に影を倒に映してゐる美しい木々の、萌黄色に氣がついた。あの森は何處の邊だつたか、さうだ昨日の午後私はあの森の下を通つて此方の方にやつて来たのだ。まるで爪先で跣足をするやうであつた生活から漸次逃れて……。そして此方へやつて来た動機は必ずしも幸福な意味のものでは無かつたにせよ、あの町を通りぬけて出て来た時、そして會ふ人毎

に道を尋ねつゝ、廣い平原の中を靜かに

歩いて来た時、私は一種言ひやうの無い嚴肅な心持と少しく子供じみた位他愛の無いうれしさと、たよりない一個の自分に對するかすかな戰慄とによつて、或る壓迫をひし／＼と感じて居た筈だつた。

斯く考へ續けて行く間に日が再び照りつけはじめ、その光りの夥しい白さの中に私の聯想は次第に溶けてみはじめた。未來への聯想と入れかはつて……

初夏の印象について思ふ度に、私は常にこの小針沼に於ける印象を判然と思ひ起す。そしてあの時かもめが白いつぶてのやうにバツと眼の前に落ちて来て、パシヤンと水中にとび込んだ時の音までもなつかしく思ひ起す。

欺かざるの記

五乙 赤田 隆之助

青年の歡びが青年をして將來を輝かしきものと想はせるならば、青年の悲哀も

亦青年を失望に導くのである。

× × × × ×

自分は往々にして母と口論をする。親

に對して敵する様な事があれば惡の極みである。自分は何時も悪いとは知りながら母と口論する、悪いと知りつゝ何故口論するかと思議する人もあらう。事實自分は自暴自棄に陥つてゐたのだ。故に母と口論をする。そして結局自ら其の宿命的な自分の今日を救かねばならなかつたのだ。宿命的な自分——自分が尋常五年生の時天にも地にも代へ難い父を失つてしまつた。その時子供心にも泣いた泣いた、そして世をはかなんだ。それから自分は妙に人世がつまらなく想はれ出した。そして中學一二三四年と進むにつれて益々その心が激しくなつて来た。遂に現在の如き競争心の失はれた、安逸的な自分となつてしまつた。——成功して

も心からこれを喜ぶ人、そして自分もその人の爲に一生懸命勉めて来たが、次第

に張合が抜けてつまらなくなつて来た。

總べてに希望を失つてしまつたのだ。宿命的な自分であるとして。然し斯くあきらめて寝につくと、夢の中に亡き父の姿が幻の如く吾が身邊に迫り現在の自分に諄々として説くのだつた。自分は煩悶するのだつた。運動に依つてこの宿命的自己を忘れんとする現在の自分である。だが此の父の淋しき姿を見て奮起せざる子があらうか。自分は起つた、だが再び止むだ。そして煩悶するのだつた。

伸び行く己が心の罪よ。自分は斯く夢けども如何にも自己を統制する術を知らなかつた。學校に於ける諸先生に對する不敬な態度も此の半狂亂的な自分であつたればこそ爲し得た行爲である。決して普通人の爲し得べき行爲ではなかつたのだ。先生に對する言語、禮儀を忘れて傍若無人の行爲を敢てし罪なき下級生を叱つたのもそれである。然し斯うした自分にも悔悟の日は来た。自分の今日を知る

兄は自分の爲すがまゝにさせて、唯沈黙の裡に更生の日を待つて呉れた。母の手前を今日迄忍んだ兄の心中を察し、亡父に對して済まないと思つた。そして悔悟に泣いたのだつた。母との口論は自分が忍べば善いのだ。「忍ぶべきを忍べ」兄の云ふ通りである。自分は斯くして更生に向つた。

十一月八日第一限漢文修了後、自分の心中を打ち明けて、級友の一人と固く今後の奮闘を誓つた。第二時限里見先生が「文化の創造」の講義中最後に云はれた王陽明の「山中の賊を破るは易く心中の賊を破るは難し」の一言こそ今日の自分には實に千金にも代へ難いものであつた。來るべき上級學校入學試験迄に全力を盡して勉め尙落ちたならば、更に勉學すればよいのだ。過去の氣持を以て人生を暮すならば、一度の試験には落ちて何でもない。更生せず一生を棒に振つたと

思へば善い。然し餘りにも大きな悩みだつた。

自分は今微笑みたい氣持です。明朗なる氣分を以て更生しつつあります。

法隆寺雜感

五乙 原口 清一

法隆寺驛は見るからに、古く見すばらしい驛であつて、近所には人家らしい建物と言へば、驛前の纔か二三軒の茶店を除いたら、殆んど見當りさうにもない淋しい所です。今迄の大阪京都の繁華にひきかへて、餘りにもひっそりと静まり返つて、一入物のあはれが増して目まぐるしい旅行の忙しさから解放されたやうに走馬燈的變化に急に何とも言ひ知れぬ旅愁がひし／＼と胸に迫つて、此處で此儘、何時迄も、かうした淡い陶然たる氣分の中に浸つてゐたいやうな、感傷的な

情緒が身體の何處からともなく湧き出て來るのを覺えます。

秩父連山を少し近づけた時の熊谷の郊外と殆んど變らない、平坦な田圃路をうね／＼と半里近く歩くと、目的の法隆寺に出ます。

田圃路は、法隆寺行の何年型だか分らない舊式なフォードが、がた／＼と揺れながら通れば、一杯になる路で兩側に二三軒農家が、かたまつてゐる位で、全く静まり返つた平和郷です。でも流石に法隆寺の正門の通りは、比較的大きく、兩側に松が植ゑてあり、ぐつと伸びた松の枝の間から舊家らしい白壁の家が覗いてゐるのが、一層あたりの空氣の古めかしさを増します。

多年憧れてゐた法隆寺。其の法隆寺を今目のあたり眺めたとき、再び言ひ知れぬ交々の感じに捉はれました。歴史的にも、藝術的にも、世界に誇るべき最古の木造建築として有名な法隆寺は、寫眞に

懷古

五乙 吉田 重治

水々しい若葉に取り圍まれた新緑の林の中、柔かい日光はさん／＼として若葉を透して降り瀧いでゐた。氣持の良い若芽の香が何處からともなく漂つてくる。長閑な極楽へでも行く様な悠長な鶯の聲が林間に木魂する。若草はチラ／＼萌してゐた。

十有餘年前自分は何時も一人此の仙境にて晝寝をするのが常だつた。移轉した許りで友達は未だ居ない。本當に淋しかつた。そして心の憂を晴らしに此處に來るのだ。

昨年の夏當地に行つた時自分の足は何時しかガソリンの香多き巷を離れ思ひ出多い此の丘に登つてゐた。青い樹々を透して氷川神社の參道の松の古木が目に残る。普通つた幾つもの赤い鳥居をくぐつて少年時代横臥したコバルト色の高い

高い大空を眺め得る所に來た。

懷は廻る十年前に、噫あの時の地蔵様も赤い頭巾も少しも變らず雨に晒された儘だ。あゝあの石もこの草も、自分は何時か深い深い感慨に耽つてゐた。あゝあの草の上だ。自分は靜かに坐つて見た。然し自分の形見としては何一つ残つて居なかつた。當時の一人姿がまざ／＼と髣髴する。

夕鳥の聲にハツと我に歸つた。四邊を見渡せば漸く暮色は迫つた。遙か氷川神社の淡い街燈が目に入つた。噫懷しき第二の故郷自分は靜かに一禮して夕闇の中をトボ／＼と立ち去つた。

競争心

五乙 藤間 弘行

宇宙の森羅萬象は皆競争心を有してゐる。競争心とは他より少しでも立派であらうとする本能的なものでなければならぬ。他よりも一歩でも進んで居れば、必

較べて意外に古びてゐるのには驚きました。建築には疎い我々ですら、其の巧みな造り方には歎聲をもらさずには居られません。

其の當時、佛教燦然と輝いてゐた頃、善男善女の群が、聖德太子の偉徳を慕つて口々に經文を誦しつゝ新裝成つた法隆寺の前に雲集する光景は空想ながらも目の前にあり／＼と浮び、一千三百年の昔を今に見る心地がします。最も有名な五重塔や、金堂、經藏、東室から、或は一番古びた夢殿など、七堂伽藍から一木一草に至るまで、總べてが古への追懷の種ならぬものは無く、又あたりは一面に古風な雰圍氣で充滿してゐます。

かうして一種の哀愁と懷古の念で一杯になつて法隆寺に名残を惜みつゝ立去り、青丹良しと詠ぜられた舊都、奈良へと急ぎました。

ずや快感を得るに相違ない。然し我々否萬物がかく競争心を持つて居るからこそ良いのであらうと信ずる。或一定した地位に安んじて何等の競争心がなかつたならば、此の世界は何等野心も希望もない、進歩もない、沈滞した失望の世界となるに違ひない。或不遇な地位に生れても、何等競争心がなく永久に其の地位にあるものとしたならば、此の世程生甲斐のないつまらぬ物が他に有らうか。然し實際そんな矛盾が有らうか。斯くあればこそ此の世は本當に無常なものとなつてしまふのであらう。他と競争して、一步でも

先に出門とするのが、森羅萬象の本能ではないか。競争心の存する限り此の世は野心もない、希望もない、失望の世たることはない。世界の列國が他國と比肩して、一步でも劣るまいと、野心汲々として一日も止まないのが、現在否あらゆる時代の状態ではなからうか。他國に比して劣等であることを誇つて居るが如き愚

な、無競争心な國が世界に存するであらうか。又他國の情勢に鑑み自國の優越して居るとき、快感を覚え、誇を感じぬ國が何處にあらうか。此等は皆競争心の發露である。

明治天皇の御製にも

陸ましく枝をかはして咲く梅も

盛争ふ色は見えけり

と申されて居る。列國が世界協調、世界平和などを唱へて居るが、何處迄彼等が其等を唱へて行けるか。一度彼等の利害に關係せる事が起つた時、安閑としてそれを眺めて居られるだらうか。若しかかる國が存するとするならば、其の國こそ希望もない、沈滞した、無力な何等の競争心の無い國である。一人の人が或發明をすれば、更に良きものをと競争するのは人情の常ではあるまいか。世には無競争心の人も存するかも知れぬが、彼等が多ければ多いだけ、其の國の進歩は後れ、文明國たるは望めぬのである。

斯く考へて來るならば畢竟競争心なるものは、森羅萬象を進歩發展させる素因であり、我々文明生活を爲す者の須臾も離るまじきものでなければならぬ。

晩 秋

五丙 神田 晴雄

自分はいつものやうに荒川堤の上を西に向つて無意識に足を運んでゐた。左は廣い見渡すかぎりの砂原に半ば青味を失つた雑草が一面にはびこつてゐる。右は桑畑の向ふに競馬場が見え、馬丁が嫌がる馬に無理に鞭をあてゐる。馬は時々跳上る。又其の向ふは立木と家が群つてゐる。今自分がぬけ出て來た熊谷の町だ自分は心が命令したのでもなく、又規則が有るのでもない。唯自然に何時からともなく、氣がクサ／＼する時とか、机に向つて種々な事を考へ初めて解らなくなると河原の長い堤が思出されて夢遊病者のやうに何時の間にか此所を歩いて居る

のだ。

空は曇つてゐて一寸太陽が覗いたが何時の間にか所在も解らなくなつて了つた。前方に公園の青黒い林が見えて自分は堤に斜に付いた道を足を踏みしめて危い高下駄で下つて行つた。

公園の中はブランコを振り落される程漕いでゐるのや、丸太を鎖で釣り下げたのをグラン／＼揺動かして振り落ちさうになつてゐるのを圍んで騒いで居る天下太平の青年達もゐた。自分は河原に面して少し坂になつてゐる地面に足を投げ出して坐るべく半ば黄色く枯れた草の上に腰を落さうとしたが、ふと前に美しく白、紅に咲きみだれてゐるコスモスの花に思はず近寄つて行つた。自分の胸程もあつて糸の様な葉の上に白いのや、薄桃色の八つ花瓣の真中に黄色の心を圍んでなよ／＼と身を靜かに風に委ねてゐた。一面に咲きみだれてゐるコスモスの花が目映じた時、ふと三年前の事が思

出された。朝晩乗降した寄居の驛の構内

には今頃はコスモスの花が線路に沿うて一面に咲きにほふて電車がすべり出すと花の海を行く舟のやうに思はれた。然し此の花の散る頃自分は幼年の頃より住み馴れたなつかしい我が搖籃に別れを告げ、數々の思出を懷いて寄居の町を去つたのである。コスモスの花咲く頃には樂しかりし其の頃が思出されて、はかなさなつかしさに一人時の過ぐるのを忘れるのである。そして此の花のもつ清楚な、上品な感覺、しかも秋に咲く花のもつ一種言ひ知れない淋しさは、時に我が心を捉へた。ちつと見つめてゐると、首をかしげて感情を咬る秋を語るかのやうである。

僕は河原に向つて靜かに歩き出した。その道の端の花の白、紅、薄桃色を一枝づつちぎり取つたが傷ましくも頭を取られたコスモスを見た時、悔恨の情が胸を打つた。野に咲く一莖の花だにも生命は

あるものを、花を右手に持つた儘黙々と

歩を進めて、もう一つの林を抜けると枯れ掛つた雑草は自分の身をも隠す程繁つてゐた。尙も進んで行くと草はやう／＼膝程になつて所々十五夜を過ぎたすゝきが僅かに生残つて、風にサラ／＼身を震はしてゐた。河は一滴の水も見えず渺茫たる雑草の原、西の空は曇つて秩父連峰が黒い姿を地平線上に横たへてゐる。然し日は未だ全く没してはゐないのであらう、中天が夕映の爲かかすかに明るい。突然凄まじい音に心臓がちぎまる程驚いて、ぎよつと目を据ゑると河原の草の中から黒い鳥が四五羽白い腹を見せてバタバタと飛立つた。

心なき身にも哀れは知られけり

鳴立つ澤の秋のゆふぐれ

(西行法師)

蜿蜒長蛇の如く荒川堤防が左手から東南に向つて走つて、その終る所に大橋が此れと直角を爲して河原を横ぎつてゐる

とりどもなく吠えた。

見わたせば花も紅葉もなかりけり

浦の苦屋の秋の夕ぐれ

(藤原定家)

自分はそつと右手に持った花を顔近くもつて来た。少し生氣を失つた花は秋風に小さく身を震はせて我が胸に頬を寄するやうに思はれて可憐の情、追慕の念、一しほ湧き出でぬ。

晩 秋

五丙 島田 諦信

放課後の用事も済んだので、大部分の者が歸つて了ひ、静かになつた校門を出て、ぼつ／＼と一人歸途についた。今日一日の事を思ひ、更にそれより考へを及ぼして自己の將來、複雑極まる社會、寂寞、秋、それからそれへと思考を轉換した。何時の間にか田圃中の道を辿つてゐた。折しも四時であつたらう。ものうくあたりの静寂を破つて響き渡るサイレ

ながら見入つてゐた。
冬が過ぎ、やがて春來れり、若草緑に萌え雲雀囀る時僕は身を横たへ草花を摘み取りながら目は緑につままれて無心に遊ぶ子供達を見、身の内より湧出づる健康さを知覺し、自分の若さをたゞへ限り無き幸福を感じた。炎熱鐵をも熔かさん夏の日も、自分は目に入る汗を拭ひながら公園に辿り著き、冷い水に喉を潤して蘇生の思ひ、蟬の聲しげき木蔭に涼を求めた事もあつた。

はつと、自分の苞齒の音に我に返ると最早夜の帳は下りて心の底にまで染み込むやうな秋の蟲の聲が、コロ／＼、ニイニイと足元の枯草の中から訴へるかのやうに又何物かを惜しむかの様にもれて来る。今頃まだ蟲が居たのか、然しこの生残つた者も草蔭に消えなければならぬのだらう。

かすかに大橋の上を渡るらしい自動車の警笛が闇の中に消え、町の方では犬が

ンに今までの考へはとぎられた。

ふと氣がつくと、夏の白熱の下にピンピン勢よく飛び跳ねてゐた蝗が、黄色い日光を斜に受けて、ピン／＼と枯れかゝつた稻の葉の上を渡り歩いてゐる。一匹僕の腕にとまる。手を出しても逃げようもしない。捉へて見ると全身痩せ衰へてゐる。翅も枯死せる草の葉の様である。ふと足下に二尺餘りの紐が動いてゐる、と見たのは蛇である。殊更に二足、三足前に進み軽く尾を踏む。然し夏の蛇とは違ひ、敢て逃げんとする様はうかがはれない。する／＼する／＼と堀の淵を滑つて行き、とある鼯鼠の穴の中に吸ひ込まれて了ふ。堀の傍の柳に鎌切が居るあの三角頭の悪戯ものである。面白半分に摘んだが一向にかゝらうとはしない。裏切られた思ひで再び葉の上に置くと、ノソ／＼と這つて行く。やがて田圃路も通り過ぎると、一軒家の取り残された二つ三つの柿は木の天邊に西日を受

けて眞紅に輝いてゐる。その下の散りかけたコスモスはグツタリと最後の花を咲かせ、下葉の枯れたグリヤ、黄色を帯びた芝生皆夕日にくつきりと輪廓づけられてゐる。鮮かである。美しい。然し一種いふべからざる寂しさに被はれてゐる様であり、悲しさがうかゞはれる。

かくして自然は老いて行く、死んで行く、人も亦老いて行く、一刻々々と老いて行く。而して自然は再び新緑に燃えて甦へる時、即ち新春の時節が来る。人は……？ 再び新青の時が来るか？ 二度と花が咲くか？ こゝに人が自然を愛し無常の人世を離れ永劫に變らざる自然に憧憬し近づかんとする理由が在するのではなからうか。こんな事を考へて、僕は大きな溜息をつき、さうして大空を眺めた。

清く澄んだ空、高く魚の鱗状をなした白雲が一西に被ふてゐる秋の空、そこには無数の蜻蛉が音もなく、すう／＼と飛

びまはつてゐる。

僕は歩幅を廣めた。釣瓶落としとかいふ秋の日は間もなく暮れた。

ノートの端から

五丙 木 島 丁

天才と凡人

凡人と天才との相異は、臺所の食鹽と、實驗室の鹽化ナトリウムのやうなものである。

必然と偶然

必然と偶然とは、世界地圖に於けるイギリスとアメリカのやうなものである。大變に離れてゐるやうに見えるが、實際は近いものである。

智慧の輪

なか／＼解けない智慧の輪は、遂には投げ出されてしまふだらう。

また、一たび解かれた智慧の輪も、やはり投げ出されてしまふだらう。

後悔

後悔は無意識の反省である。

飛ぶ

空を飛ぶことが、我々の先祖にとつて如何に困難に、或は不可能に考へられたかは、『飛んでもない』といふ形容語の存在することによつても知る事が出来る。

湯

湯が凍ると主張する人は、一見、利口さうに思はれるが、實際は馬鹿である。

矛盾

もし矛盾がなかつたなら、世の中は退屈するだらう。

寒 蛩

四甲 清水 重治

秋の暮色が邊を繞る頃竹藪に沿うた徑を過ぎたりすると、よく銀鈴を轉ばすやうな寒蛩の聲が心の底に沁込んで來たりする。自然の力とは言へ、毎年の事とは言へ、其の巧にして妙なる音には其の度毎に深く感じ入らされる。

四四

うてゐる。あゝ静から寂へとばかり進む彼等の世界は秋の聲そのものだ。

雨中の雀

四甲 高柳 輝雄

毎日降る、實にいやな雨だ。此の二三日明けても暮れても天は灰色、地は泥ぬかり。二三日前のあの新秋の爽やかな氣もなければ、透通つた日光の快さも無い。あるものは唯鬱々とした心のふさぎと、どうにもならないじとじとした濕り氣だけだ。

部屋で見ると家の軒やあちこちにづねけて高くつゝ立つてゐる電柱も日が照つてゐる時は金色に光るのだが、今は鈍い重い色をしてゐる。そして破れた蜘蛛の網のやうにぼろが垂れてゐる、電線に多分雀だらう檻穽切をくつゝけたやうに數羽止まつてゐる。その何れもがまるで死んだやうにいつまでたつても動かない。見てゐると如何にも物寂しくつれない。

音はまだもつゝいてゐる、悲しげに、しかも牙えて。

梟

四甲 吉田 四郎

庭のどの葉もまるで褐色か又は濁りを帯びた青だ。同じ色の變り方でも何故紅葉のやうに美しく變らないのだらうと考へながらふと最前の雀に目を遣ると、ちつとしてまだ動かない、どうしていつまでもあんな所にあゝしてゐるのだらうと思ふと何だか不氣味にさへ思はれる。

雨はさうした雀へも電信柱へも、木の葉へもなにもかもへ冷たくしつきりなしに降りそゞぐ。見てゐる自分の體內迄もじとじと濡れしよばたれてゆくやうだ。

晩秋の虫の音

四甲 原 口 通

時計が十一時を報じた。家の中では家人のかすかな寢息と、時々鼠の走る音がするだけだ。讀書につかれた目を上げて見ると、植込みの方をさぐるやうに、電燈の光がガラス越しにそつと植込みを照らしてゐる。雨は止んでゐるが、空は星一つなく、墨汁を流したやうである。た

ゞ木の葉の先の露だけが電燈に照らされて、小さなガラス玉のやうにキラ／＼と光つてゐる。机の前の障子を一尺ばかり開いた。すると秋の夜氣がすう／＼と流れ込んで來て、室内の空氣を冷めたく清くした。思はず襟を強く合はした。

と今まで氣づかず居つたが、植込みの中から、悲しい晩秋を思はせる、かすかな蟲の音が聞える。かすかではあるが澄んだしかも牙えた音だ。それは何の蟲か知らない。僕は目をつむり、ちつと聞き入つた。蟲は時々何かにおびえたやうになく音をやめ、しばらくして又おそるおそるなき出す。その音は何に似てゐるか僕には言ひ當てられない。しかし、そのなく音は秋の月よりも、氷よりも、何よりも冷たく、鋭く、それでゐてちよつとでも刺戟されると、すぐにもつぶれさうな音だ。

落葉の音にも打消されさうな蟲の音。晩秋の氣を深く深く心に思はして。蟲の

月が嚴かな姿を山の上に現し出すと又何時もの梟が前の杉の森の中で、如何にも寂びしくそれでゐて又懐しく思はす聲で鳴き出したので、庭先に出て耳を澄まして聞いてみた。すると僕は何時しか其の聲に懐しい幼い頃の思ひ出を辿つて行つた。あの幼い頃も毎晩今日のやうに梟が鳴いたものだ。泣蟲の僕はあの聲を聞く度に恐ろしくて泣いた。「坊や梟が、泣く者を貰ふぞ、と鳴いてゐるよ。」とよく祖母に言はれると、急に泣き止んだ。泣き止むと前よりは恐ろしくもなくなる。そして祖母の膝にもたれて「お祖母さんあれは何んで鳴くの」と尋ねると祖母は其の度に何時も教へたものだ。「明日も天氣だ糊つけほうせと言ふのだ」と。

そんな會話の後には祖母は優しく子守唄を歌った。僕は祖母に抱かれて歌の聲と梟の聲を兩方聞きながら、何時の間にか深い睡りに落ちて行くのだった。

さうした幼い頃も、今は遠いたゞ尊い懐しいものとなつてしまつた。そして僕を可愛いがつてくれた祖母もとうに逝つてしまつた。其れ故梟の聲を聞く度に祖母や僕の幼い頃を思ひ出しては獨り涙ぐむのだ。

今日もあの時頃と同じ聲で「ホウ、ホウ」と、相變らず淋しい聲で秋の月夜を淋しく唄つてゐる。

秋の夕

四丙 小田島 養一

空氣もつめたくなつた。秋が深くなつたのだ。僕はつめたい空氣を呼吸しながら夕暮の道を我家にいそぐ。白くかはききつた道には木の葉がいつぱい散つてゐる。だがそれ等の木葉のどれを見ても夏

のやうな青々とした葉をみつける事が出来ない。野も山も一樣にさびれた物さびしいものとなつてしまつた。彼處の森の家にもこなたの村にも淡い電燈がちらついて來た。夏の間榮えた木々の葉も夏の蟲も死んで行く、すべての最後のものかなしき、次第に暮れて行く秋の夕、それまたとへる事の出来ないさびしさだ。しかし人生の終りはそれ以上に寂寥たるものではなからうか。時々そよ／＼と吹く秋風に胸の中は一しほ深く感じる。こんなとりとめない事を思つてゐる間に一刻一刻秋は深く夕暮は迫る。

微風になびく尾花の葉末がざわ／＼と音をたてゐる。あたりの野に働いてゐた農夫達は沈みかけた太陽を名残りをしさに見やりながら馬を引いて歸つてゆく。

つかれきつた馬も人も一日の仕事で満足にし終へた喜びに體をやすめてゐる事であらう。

秋はさびしいけれども其のなかにうく馬と人の姿。何といふあたゝかい美しい幸福にみちたものだらう。それにくらべて都會の荷物車を引く馬。其の馬を引く労働者。それにくらべて何と幸福な事だらう。

やがて落ち行く秋の日の最後の反射を田の面に投げた。あゝもう日が暮れた。雲は五彩を捨て、盡く蒼白色となつた。いつしか夕もやの群が地をはつて向うに見ゆる電柱も家も暮色に包まれた空に明星が一つ夕日の跡に輝いてゐる。夕暮の冷氣をしみ／＼と肌に感じながら家に向つて足のはこびをつづける。

運動

四丙 原口 治郎

運動は萬物の生活基調である。

草木が滋養を根や葉にて攝り動物が食物を求めて生を得る。之皆運動に依らざるなし。

吾等人間に於ても然り、而れども吾々人世に於ては運動と知識と相俟て有意義なのである。

人生の運動とは普通にスポーツに就てである。此れには二つの重大な條件がある。第一、精神修養の爲にして即ちスポーツマンシップと云はれ、第二には身體を強健に爲す事である。此の二つの條件が兩立して始めて眞のスポーツが得られるのである。此れが偏すれば全く價値無きもの又は單なる遊戯として見過されてしまふに違ひない。

スポーツなるものはかの希臘時代に起りて又最もその時代盛んになりて此所に黄金時代をば現出したのである。希臘人はオリンピックのゼウス祀神前に於て全國民が文武を闘はして勝利を無上の光榮とした。勝利者の出生せし土地の人はそれを又自分の光榮とし勝利者をば貴人と同等に倣し租税迄も自辨には非ずと云ふ。此の時代は全くスポーツ全能時代であつた。

た、かるが故に此等の國民は國は有餘の小國に分據して居たにも拘らず大敵波斯を敵として闘ひ得た所以であるのではなからうか。即ち第一の正義の爲に闘ひ且つ第二運動に依り身體の強健であつた爲に理由するのではあるまいか。

よく世間にて云ふ「運動家は男らしい」とは即ち希臘人の如く運動好きな人種なるが故に何處となく優美で男性的であるのと變る事はない。希臘の民族の模範とせらるゝは之有る哉である。

又一面から之を見れば「スポーツは人生の興奮劑」である、此の劑あるが爲、吾々には青春を喜び且つ發奮するのである。青春に發奮せざるは生ある死骸だ。それ故吾等は此れを應用して吾が大いなる天地間に翼を擴げて居る理想の元に生きて行かん、かくするこそ吾が日頃の念願である。

かるが故に運動は吾等に大切なものなり、然りと雖も運動と勉強は宛も車の

兩輪の如きものなり。

運動は吾等が人生の目的の爲に生きんとする手段として尊し。故に運動を努めて後吾々には始めて大いなる覺悟の元に榮達を望み成功を望む。

神詣

四丙 石田 昇平

月、未だ煌々として下界を照しつゝある夜半、余自轉車を走らせて學校へ向ふ時は二月十一日にして我が大日本帝國の建國の日なり。空に一點の雲だに見えず。林を通り、秩父街道に出づ。目、瞬に慣れずして平坦なる所、石多き所を知らず。意にまかせ進む。次第に寒さ加はる。前に黒き影有り、追ひつれば友なり、共に共に進む。側に沿ふ家々、寂として人籟無きが如し。寒さ益々加はりて、我身たる事を知らず。進む事容易ならず。則ち、「残月西に傾けば」と、軍歌を歌ひつゝ、勇を鼓して進む。時折吹き来る赤城嵐、

いと身に感ず。時に稍々寒氣激しく、四邊前より薄暗くなる。蓋し夜の明くる故なるべし。大麻生に至るの頃は東天、一面に白みて、日、將に出でんとす。寒さ身に餘る許りなり。田畑、一面に霜に覆はれて、稍々白く、あはれ深し。漸く學校に著す。高城神社に向ひ、熊中を出ず。時に日輪出でたるが光を發せず、高城神社に至りし頃、陽氣、八紘に漲る、直ちに高城神社に參詣す。嗚呼、偉なるかな熊谷中學生、紀元建國の日に、神に誓ふとは。

大島の旅

三乙 芹澤長次郎

百花や、衰へ庭にみづ／＼しい若葉の香のする季節となると、早や田園固有の自然の風物にあき大渡津海に乗り出したき心となる。書齋に掛けてある畫も若き日を惜む者は清き感情の湧き出づる海に浮べ、まして汝等の如き小詩人は絶海の

孤島に身を秘めてうるほひ豊かなる自然を唄へ、味ひこまやかなる人生を語れとよびかけ、又海も空も見渡す青色の中に點々と飛ぶかもめ浪風を吸つた白帆單調なりズムの中に無限の情愛をもつ船唄等が僕の目前にちら／＼して僕の心を誘惑した。

併し此の様な憧憬の世界を離れて金波銀波がひそ／＼何をか語る大海のまつただなかを進む菊丸の甲板の上に僕を見出したのは丁度三日月の照る宵だつた。夜氣に濡れる菊丸の前甲板は暗々たる灣内のやみを分けて行く船中の夢いくばくならざるに起き出でて甲板を逍遙する。眺やみの風は南國の世界といへども肌をつんざくまばらなる空の銀砂の中を風も少いの帆を上げた銀の舟が通つてゐる。

意外！ 月下に黒々と展開せる大島の形、右にこぶしの如く飛び出して居るのは乳ヶ崎の鼻、閃々と廣い光帯を海面に放射する風早の燈臺、詩的情緒たつぷり

な三原山はもう曙光がさしそめ初めた。たえず機關の音の凄かつた船は黒潮にのつて音も無く波止場に進みよる、やがて曉空の明星に向つて大きく太くサイレンが鳴つて元村著を知らせる。

此處が童話の國の大島だ、娘は青娥の如き黒髪をおりからの三原嵐に靡かして左手でおさへる水汲みおけは無限の愛情で満たされて居る。言葉ふるまひすべてが何處に浮世の浪風が吹くといふ様なたしどをしてゐるが純真と可憐とで形成されてゐる。彼女等は時にはさながら嘆きの天使の如き感をひき起こさせる事もある。僕は思はず、女イブよ、天國を追はれたるエンゼルよ、幸福は汝に訪づれるだらうと叫んだ。

をりから何處からともなく風にのつて哀韻切々たるアンコゝの唄聲が、

「私しや大島御神火育ち

胸に煙はたえはせぬ」と響いて来る。

やがて幾多秘話哀話を知る太陽は雲の層の中にかくれ、浮世に付きものゝ雨が

南の空から訪づれて大島は勿論あの時代の敗北者唐人お吉のロマンスの地、情うすき下田の港をけむらせる。

しばし軒やいらかを打つた雨はおさまり、小島の鳴く聲に勇み立ちて火口訪問の途につく、見上ぐれば日光に映えた三原山は煙を南に靡かして人は死ねども悠久の姿をもつて聳え立つ。

見晴し、つばき、歌の茶屋を過ぎて無名草の道をつまさき上に登ると日章旗が竿頭高く翻翻とひるがへるを見る。此處より廣漠たる沙漠がくりひろげられる。ラクダの脊に身を投げて靜かに目をつむればモロッコの兵士の姿が浮び出て大陸的な感情のひし／＼せまり来るを覺える。

このつれない三原嵐と砂塵の吹く沙漠を横切ると火口茶屋を見る。

このあたりより數町の下に白煙濛々た

る光景が見渡たされる。

さて僕は腫物にさわる様な心をいだきながら熔岩の道を通つて火口の門内に入る。

時々ザザーガサガサーといふ氣味の悪い音がしてドーと一度に煙が上る、煙のなくなつた瞬間熔岩の海底の眞赤な波が右に左に煮えくりかへるのがちらつと目を刺戟する。おゝ偉大なる自然の咆哮、怒れる天使の如き猛烈な自然のさけびこそ、この中に幾多青春に富める若き肉體を投ぜし人々に默禱の中に彼等の心理を考へる。

僕は追はれるが如く火口を出る。

仰げば伊豆半島、天城の山は夕暮の日にくつきりと浮き出て中空にはローズ色した雲がぼつかり浮んで居る。

おゝ平和なる島よ！ 黒髪長き美人島よ！ 自然の溫容と脅威とを備へしこの島よ。

さらば又島で此の空を見上ぐる事あ

らむと思へばやたらに大島情緒がせまり来てしばし涙流しぬ。

春の自轉車通學

二甲 内田健之助

私は春が一番好きだ。春は暑くもなく寒くもないよい時候だ。毎朝、春の朝露をふんで自轉車が勢よく走る。氣持がよい、心がさつぱりしてくるのも皆春のおかげだ。

自轉車で土手を乗り切つて妻沼熊谷間の街道に出ると、各學校の生徒が、前も後も春の空氣のさつぱりした中を、競走の様にベタルを早くふんで来る生徒もあれば、ゆつくり／＼友達と話をしながら来るものもある。

私は、ゆつくり来る友達等に追ひ越されぬ様に、急いで来る。上級生がそれらの人を追ひ越して私のそばを早く通りぬける、大いそぎで帽子を取つて敬禮する、ともう三米も前を走つてゐる。

氣にむく時は同級生や土級生とも話をしながら来るが、いやだと思へば敬禮して通りぬける。

學校に著いて校庭へ出ると草に朝露がかゝつて居るのが太陽の光に照らされて光つてゐる。

野 球

二甲 小此木 英信

「勝たう！ 勝つんだ！」といふ意氣で萬人の覇を夢見つゝ堅く誓つて旅立つた、あの野球團が、もろくも川中に、敗れた。

我等は泣いた。併し、勝ち氣な自分は、一層くやしかつた。最後迄選手の身となつて心から應援してやつた甲斐もなく敗れた。

たつた、一時餘に、敗者として、捨てられた。

覇業の夢、破れ、悲しみの底に投げ込まれ、そのむごたらしさを、味つた。

あの焼けつく日中血にまみれ、土に喰附て、苦しい練習を續けた、熊中が！何處迄練習したら榮冠が、握れるのだろうか？

今度こそは、と思つて毎日應援したのに、毎朝鎮守の森までお願いに行つたのに、何うして神は？

今年は思ひ切つた。又來年だ。

又來年だ！

そして最後の勝利者として、残るのだ。

愛國と空軍

二甲 根岸 文雄

あの日、あの冬のからりと晴れて眞青に澄みわたつた青天井をかすめて、日に照らされてきらりと銀翼を光らせ、くつきりと胴にゑがいた日の丸を輝やかせながら人々の感激のうめきの上を、轟々とプロペラの音勇ましく天空馳せた報國號の勇姿。見よ！！我が國民の燃ゆるが如き愛國の念の結晶、報國號を。

僕は未だにあの報國號の勇姿を目前にはつきりと思ひ浮べることが出来る。そしてその勇姿を思ふ時、國民の熱烈なる愛國の念に自ら感激せざるを得ない。

今日、此の機械力の進んだ科學の時代に於ては、空軍の弱小な國は萬一他國と戦争した場合に決してその國難を切り抜けることが出来ないばかりか、將來その國の發展といふものは不可能であるとも云へる。然し昔後に國民の愛國心といふものがあれば少くとも國家を守るには空軍が必要であるといふ心掛け位は持つてゐるはずである。況や我が國のやうな島國で防空に困難なことが多々有る國では餘程國民がしつかりして、眞の愛國心をもつて、軍部空軍の後押しをやらなければそれこそ國防の充實といふことは思ひもよらない所であらう。

幸に我が國は世界に比類なき大和魂を持つて、祖先より傳る之れ又優れた愛國心を持つ國民に依つて、著々と國防充實

と、何故か僕は非常に愉快な氣持になつた。

春が來た。若葉は暖い太陽の光を吸つて大分伸びた。絹ぶるひに掛けた様な春風に潤されて緑も増した。今野原は一面に青い。若い麥の芽よ！早く成長せよ、雲雀が巢を作らうと待つてゐるぞ。

開校記念日

二乙 篠崎 覺

玄關に十字に組まれた旗も古びて、三十有餘年過ぎ來たつた幾多の歴史を無言に語つてゐる。

緑濃き庭の植込は、今日、開校記念日を如何に考へおよぶ事ぞ、玄關前にそゝり立つ大きな松よ、汝は、汝の頂に止まれる百舌鳥に何をかたるか——道場より起り來れる勇ましきかけ聲をか、はたまた、優勝に血の燃えて發する應援歌の聲を語るか。

おゝ、秋風に和してそよぐ庭の木々よ

今日を祝してそよぐか、又昔をしのぶさやきの聲か。

おゝ、永遠に緑したる庭の木々よ！我等をはぐむ緑の木立よ！

開校以來、幾多の人々は、入り、そして學び、そして出た。

おゝ、若木は此處にそだち、そして世に出た。

我等の母熊中よ、緑深き熊中よ、永遠に盛んなれ、永遠に榮えあれ。

手 紙

二乙 中村 一男

拜啓、久しい間お顔を拜せられぬ先生への便りを認めて居りますと、自然に、私の一年の時より二年の一學期までのことが今更に思ひ出され、懷しさに限りがありません。

今、秋漸く深く、朝晩には少しく寒さをも感ずるやうな氣候となりました折から、先生には益々御元氣にあらせられる

麥の芽

二乙 中田 文雄

へと歩を進めて來た。今や我が空軍は世界の王座を目掛けて躍進、又躍進せんとしてゐるのである。後に全國民九千萬の愛國心をひかへ、且その上にすぐれた獨特の我が造機技術によつて發展飛躍する我が空軍が愈々堅實に國防の實を全うして世界の王者として東洋の空を縦横に疾馳する時、その曉もはや近き將來であらう。そして其の近き將來とは我々第二の國民の槍舞臺であらんことを切に希ふのである。

寒い冬の半ば頃第一に僕を元氣付けて呉れるは麥の芽である。總べての草木がまだ凍えた地下に眠つてゐる中に早くも萌えて、寒風凛烈も物とせず、雄々しく活動し始めるのは麥の芽である。あの淡い緑色の針の様に細い麥の芽が一樣に虚空に向つて、突き立つてゐるのを見る

事と存じます。

赤城の山も日増に濃くなり、又あの關東名物の大風も、近いうちに吹きはじめやうとしてゐます。

その風も、先生の思ひ出の一つであります。あの砂ぼこりの中から、元氣な先生の號令が掛けられると、多勢の生徒がいなごのやうにかけ出したり、止つたりした光景はなほ新しく私の頭に殘つて居ります。今後益々この感が深くなる事と存じます。これからは十一月十二月と、益々寒くなる一方であります。先生には御ゆつくりと御静養せられん事を祈る次第であります。最後に、吾々生徒一同みな元氣で通學しております事をお知らせ致します。(御郷里に居らるゝ柳田先生へ)

僕の好きな偉人

二乙 福田 千尋

僕の好きな偉人は秀吉だ。豊臣秀吉と

を幸福に思ふ、えらくなりたいたいと思ふ。秀吉は日本一の英雄だ、僕も今に秀吉みたいな人になりたいと思ふ。

春

二丙 飯塚 満

野や山にも春が訪れた。

僕等の住んで居る。此の土地にも春が訪れて、僕の周囲の景色は皆ば一つとして、のんびりとしてゐる。

山の雪が溶けて、薄くぼんやりとして、牛等がゆつたりと草を食べながら歩く様は、冬の非常に寒くてびゆーと、風の吹きすさぶつらい時から見ると、夢の國へでも行つたのかな、それとも狐にでもだまされたかなと、疑はすには居られない。

だが、それは夢の國へ行つたのでもない、狐にだまされたのでもないのだ、春が來たのだ。

春、何と言ふやさしさうな、又のんびり

りとした様な名前だらう。

花が咲き、鳥がさへづり、草の芽が出て、麥の葉が青々と茂つて、暖かくのんびりとした春になつた。

それと共に、二年生になつた僕は野に山に、春を迎へて楽しく元氣に遊ぶ。

又春の清々とした空氣を、腹一つぱいに吸つて勉強しよう。

堤でころがる子供

二丙 栗原 定助

僕が堤の上を、歩いてゐると子供が三人ゐました。じつと見てゐると、一番大きい兄さんらしい子が堤の上に寝轉んでころ／＼どころ／＼ところ／＼ところ／＼と行くと「どつこいしよ」といつて起きてまたその坂を、上りはじめた。次に中ぐらいの子が、坂の上から寝轉んでころ／＼ところ／＼ところ／＼と坂の下まで行く／＼とむつくり起きあがつてゐる間に一番小さい子が又寝轉んでころ／＼ところ／＼ところ／＼と

今までの子とおなじやうに起き上つて行きます。

其の内に又一番目の子がころ／＼と行きます。このやうに何回も／＼と同じ事を繰り返してゐます。「いつまでつゞくんだらう」と思つて見てゐると一番小さい子が上つてきて途中ですべつてころんでしまひました。「泣くかな」と思つて見てゐると泣きませんでした。すぐに起きて着物をたいて又上つて來ました。そして又ころ／＼とつてゆきます。「よく飽きなものだな」と思つて見てゐたら、すこしたつてみな堤の下に集まつて何か話をしてゐるやうでした。あそこはころ／＼ないで向ふの方へ行つてしまひました。僕は又自分にかへつて歩きだしました。

冬

二丙 松崎 健一

僕は四季の中で冬が一番好きだ。ひゅう／＼とからつ風のしきりに戸外でうな

つてゐる、月の光の消えてゐる、なんとなく恐ろしい感じのする夜、そしてカラ／＼とさびしく高下駄をならしながら往來を往く人が、硝子戸／＼に見える陰氣な感じのする時にボカ／＼した炬燵の中で復習してゐるの／＼により、の樂しみである。學校から歸るとぶ／＼と破裂しさうにふくれてゐる餅、僕の早く歸るのを待つてゐるかのやうに白い煙りの出てゐる餅、その餅のあぢは言葉につくせないほどうまい。凍つた石ころを蹴りながら、まだくらくらの中に、こ／＼の道路を鎮守様へ急ぐ眞暗な朝、手が赤くなつてちぎれてゐる時が、一番好きだ。日の短かい夕方、子供達が手にふ／＼いきをかけながら家の中へとびこんで來ると、やがてちらりほらりと綿のやうな雪が降つて來て、いつかは遠く山や廣い野原等を綺麗に覆ひかぶしてしまつて朝になるとあたり一面眞白に化してしまつた時がなつかしい。早く冬が來ればいゝな

あー。冬、淋し冬よ早く来い」と、いつも秋の夜の蟋蟀などが鳴く時思つてゐる。

春

二丁 石丸 昌一

あの寒い冬も過ぎて、我等にとつて最も楽しい春が来た。毎日々々吹いてゐた西風は、何處に姿をかくしたのであらう、あのつめたい雪は何處へ消え去つたのだろうか。

今は岡には若芽が萌えて、たんぽぽ、やすみれも咲き出した。西風に毎日惱まされてゐた小さな木もすく／＼伸びて今は元氣な顔を出してゐる。青空には雲雀がさへびり、雀も愉快さうにあちこちと飛びまはつてゐる。櫻の蕾もふくらんで十六七日頃には堤も花で埋められるだらう。太陽もにこ／＼して我等を見下してゐる。總ての物は生氣又歡喜に充ち／＼てゐる。

春は愉快で又勉強するによい時である

この暖く又愉快な時に我々も一心にはげんで、春の木の様に素直にすく／＼伸びたいものである。

遠 足

二丁 宮崎 利秀

荒川の大橋を過ぎてからは、あたりの景色に氣を取られ、身も心も軽く動いた。花曇りの空は、時々日を隠した。遠くには青くかすんだ小高い山が見え、何となく春の氣分にふさわしい。目ざす上岡の大雷神社は、まはりの青垣山の何所であらうか。道ばたには黄色な可愛らしいタンポポが花を開き、限りなく澄んだ大氣を呼吸してゐる。道のりはあまりにも遠過ぎた。中途でかなり疲れた時には、休みの時が待ち遠しかつた。前の大塚君等は何やら話しながら、大氣に向つて爆笑してゐた。然し僕には笑ふ氣にはなれなかつた。思ひ出深き、兄貴に教はつた忍術の歩き方をして、あまり下ばかり見つ

めてゐたので、前の大塚君、五十嵐君、小川君等の物凄い連中に、「地面に砂金は無いぞー」と、ほえるやうにどなられたらしい。

道はだん／＼登り坂になつたが、右手に近く見える山に、十町あまり歩いてはまだ道を東に取らない。いら／＼してゐると、先頭の一年生が、ばら／＼になつたので、見てゐると、其れは、休みであつた。「あゝ、よかつた。」僕はのどにつかえたこぼりが、すつ／＼と胃に下る様な氣持がした。大塚君も疲れたらしい。僕が草の上に尻もちをつき、休んでゐると、「オイ、休ませろいなー」と、ぶつきたらうに僕の膝の上に、腰をかけた。大塚君の足許を見たら、可愛らしい黄色なタンポポの花が、大塚君の足に、踏みこまれてゐた。

本校入學當時を顧みて

二丁 萩野 榮

昨日一年生が入學式を挙げ僕等は二年生に成つた。思へば年月の経つのは早いものである。六年生の時居残り勉強で電燈のつく頃迄學校に居て忍沼を渡つてくる寒い川風に、寒いと駈けてかへつた事もあるし、いつだつたか歸る時沼の上に月影がうすくだけて居た事もあつた。

そして入學検査を受けに來てあの口答試験の時校長先生の前へ立つた時の心持。今でも覚えて居る足がふる／＼顫へて居た事を。三日間の検査も終り忘れもせぬ三月二十六日發表の日、自分の名が出て居た時は今までにあんなに感激した事はない、自分の一ケ年の苦しみを清算すべき時が來たのだ。今迄の努力も無駄ではなかつたのだ。

そして毎日二里の道を往復した夏の炎天の日も寒風肌を刺す大雪の日も、そしてもう二年生に成る。今思ふと長い一年がいつ過去つたのだらうと思ふ位である。諺に言ふ『光陰は矢の如し』僕は今に

なつて初めて此の語を體驗した。

永徳屋稻荷の傳説

一甲 木村 茂

中仙道深谷稻荷町に永徳屋と言ふ魚問屋、間口も廣く商賣も大變繁昌して居ります。此の家の大旦那と言ふ人は若い時分に大層苦勞して、遂に今日の様な立派な身代をきづき上げたと言ふ立派な人物、もつとも今日では息子の方の代になつて居ります。

此の人が、或る日大金を携へて用足しに出掛ける事になりました。其の前の晩の事、店の番頭が、「旦那明日は早いのですから、もう寝たらどうで御座います。」と申しました。「ウムそれもさうだな、では今夜は早く寝る事にしよう。」と言ふので、床を敷き簾を置いて寝込んで仕舞ひました。ところが明け方頃に頻りに揺り起すものがありますので、これは寝過ぎたかなと思つて目をさますと、枕元に大

様なものが立つて居て、こちらを見つめて居りますからギョツとしまして、「何だ、貴様は一體何處から來たのだ。」と聲をかけると、其の怪物おもむろに口を開いて、「わしは稻荷様のお使番なる狐であるぞ。」「へエこれは／＼お稻荷様の狐殿でありましたか、これはとんだ事を。して御用は……。」「お前は今日早く用足しに出掛けるであらうが。どうぢや。」「ハ、イ、いかにも左様で御座います。」「其の時に此の町外れにある長い並木を通るであらう。」「ハ、イ、その通りで御座います。よく御存じで……。」「驚くなよ。よいか實は今朝並木に追刺が出てお前の金を取らうとするぞ。」「ギエツそれは大變だ！はてどうしたら良いので御座りませうか。」「心配致すな、わしが良い方法を教へてやらう。」「ど、どうぞお願い致します。」「よく聞け、金を一まとめにし、なるとけ小さく包んで、それを草鞋と足の間へ入れて行け。さうすれば追刺におそ

はれても大丈夫であるぞ。」「アツ成程、どうも有難う御座います。」「モシお父さん、何を言つて居るのだよ。」「氣が付いて見ると傍に女房が居ります。」「お父さん、大變にウナされて一體どうしたんだよ。」「エエツア、さては今は夢であつたか。ウーム」

旦那は夢を信じて、早速言はれた通り草鞋と足の間へ金を入れ、懷は空にしてさて身仕度も整つたので皆に送られて、家を出ました。急ぎ足でさしかゝつた彼の並木、中頃迄来た折、天地もくだけるばかりの大聲で、「町人待ちやがれ。」言はずと知れた追刺で御座います。右と左から出て来て、行手をさへぎりました。頭には黒い頭巾をかぶつて居ります。目のギロツとした凄顔の男二人、「ヤイ、町人有金残らず置いて行きやがれ。」「ハイ。おほせでは御座いますが、私は無一文なので。」「何だ、無一文だと。ヤイしやらくせえ事をぬかすない。てめえはた

しかに大金を持つて居る筈だ。」「イエ、決して左様な事は。」「八釜しいやい。おい兄弟手を貸してくんな。」「よし心得た」と言ふので二人の追刺、あちらこちらさぐりましたが、金らしいものは一つも出て来ません。」「おい兄貴之は人が違つたのかも知れねえ。」「二人共、がっかりして、其の儘何處かへ逃げ去つて仕舞ひました。その爲金も取られず。用を済ませて無事に家へ歸る事が出来ました。之と言ふのも皆お稻荷様の御蔭だと言ふので、自分の家の裏へ新しく稻荷様のお社を作した。お社は鳥居もお社も朱塗で御座います。世間では此の稻荷様の事を、今尚ほ永徳屋稻荷と呼んで居ります。」「毎年四月二十一日にお祭りがあつて何時も餘興がもよほされます。』

小學校の思ひ出

一甲 里見 明

懐かしい母校と別れて、今中學生としての新しい第一歩をふみ出した僕等は、六年間といふ長い間のことを振り返つて見ると、いろいろなことが頭に浮んでくる。僕が鹿兒島からこちらへ来たのは丁度尋常三年生の二學期だつた。初めの中は友達がなく非常に淋しかつたが、四年生頃になると友達も出来て、學校にもなれて来た。が、鹿兒島のことを思ふと何となく淋しくなる。鹿兒島第一師範學校附屬小學校の大きな校舎、廣い庭、親友、などが走馬燈のやうに目の前を通つて行く。けれども月日が経つにしたがつてその思ひ出もだんだんと薄くなつてゆく。それと一緒にこちらの方が面白くなつて来る。又先生や友達の有難さが心の底からひしひしとわいてくる。

中學校へ入學した僕は通學の途中、母校を見ると高いボブラ、六年の教室、舊師、何ともいへぬ懐しさで心が一杯にな

つて、あゝ、母校よと心から叫びたくなるほどである。

防空演習

一甲 大室 一孝

サイレンの響き、花火の音、八月九日午前七時四十分頃、敵機空襲の報に、關東全地區には警報が發せられた。數分の後、横濱方面から敵海軍機が一機現れた。ずつとひくいたれた密雲をやぶつて、しかし勇敢なる防護團員の必死の働きによつて撃退された。續いて常盤線に沿ひ南下して居た敵機を同じく撃退した。

十日は朝から防護團員の奮闘の様や防空司令部からの情報がスピーカーからも響いてくる。今日は東京市中に飛行機が爆弾でこはす家が方々に立つて居たお晝頃敵の海軍機が飛んで来たが、すぐに南方の洋上に姿を消した。これを初めとして敵の海軍機がどん／＼と帝都にせまつてくる。

攻撃機、戦闘機、海から東から西から北から、東京の空は飛行機でいっぱいと言つてよい位である。これに對する防禦軍は所々に待機した陸軍機、すぐさま出動、要所々に煙幕を張り敵機を目をくらまし、敵味方入亂れての大空中戦逃ぐる者、逐ふ者秘術を互につくし合ひ、しばし帝都の上空修羅場と化した。爆音ごうごととなり砲聲いん／＼としてひびき、空をおほふ煙幕に太陽は見えない程、やがて味方の勝利敵機の退却。

夜になつた。完全な燈火管制のしかれた帝都は眞の闇、雲間をもれてくる月光をたよりに、敵は折々夜襲を企てるが一回だに果さず、照空燈のために照され撃退されて行く。十日夜半より十一日未明に到る空中戦で、關ヶ原と許り、大いに兩軍主力は活動やがて休戦ラッパがなり三日間の演習を終つて、東京市民は再び喜びの朝を迎へた。あらゆる文化兵器をつかつて行つた演習も無事に終り將來

のため大變に役立つたと思つた。来るべき戦は何時あるかわからないがその時こそ防護團の實力を發揮すべきだ。

友達の傍

一甲 佐藤 一夫

僕のクラスに金子初太郎君といふ友達が生れた。

彼は實に可愛想な身上であつた。母はなく父は此の世に居ても會へない。だから今は遠い親類で小僧をしてゐるのだ。朝はいつも雑巾がけをし、庭を掃き、朝飯もろくに食はず登校するのだ。冬は凍傷にはれた手で短い鉛筆を握つて算術の問題を解いてゐる。そのいた／＼しい姿が目前に浮ぶ。旅行にも行けず、茶話會の十五錢の會費も出せないで、しくしく泣いて櫛の木の下のしょんぼりゐたこともあつた。

先生からの會費で卒業の茶話會の時、

喜びに満ちた顔で菓子を食つてゐた姿は僕の最も印象に深い場面だ。

僕はいつも彼に同情してゐた。彼は二年の時、この學校に轉校して來た。その時、彼は十一歳だったので皆からからはれた。僕は彼のみすぼらしい姿を見た時、同情心が小さい胸の中に湧かすには居られなかつた。

彼は今どうして居るのだらうか。高等小學へ行かないで、床屋へ小僧に行き、將來大きな理髪屋になるのが、彼の希望だつた。卒業以來僕は彼と會つたことはない。哀れな金子君よ、どこに居るのか幸福であれ。

鶴龜松

一乙 小川 忠

私の町。上尾町の下外れ、大宮方面へ向つての仲仙道に沿つた地點に、二本の大きな老松がありました。鶴龜松と呼ばれてゐました。それが昨年のことだつた

でせうか。大暴風雨があつた秋の末一本の鶴と呼ばれる松の方がとう／＼根本から倒れてしまひました。暴風雨のためばかりではありません。もう何百年といふ古い／＼時代をへてすつかり弱り切つてたためです。今は残りの龜と呼ばれる松が一本麥畑の中に、その大龜に似た見事な形の枝葉をみせて立つてゐます。この鶴龜松に傳へられてゐる話。

それは、あの名高い、源の頼朝が、ある年、京都から鎌倉へ向ふ折、この仲仙道のこの場所へ休息し、その時、記念にこの二本の松を手づから植ゑたといはれてをります。傳説として、何年といふことなく、老人から若者へ、順々に言ひ傳はつて來た、この上尾町唯一のものです。この二本の松は東京行きの列車の窓からもよく見えました。

線路に近い方の松、鶴の方が亡くなつて、眺めは寂しくなりました。私達はすつと小さい頃、よく春になると、このあ

たりへ友人と遊びに來ては、花を摘んだりかくれん坊をしたりして遊びました。ことに鬼ごつこには、この大きな松が、實に面白い大切な役目をして呉れました。鬼に追ひつめられて、この松のまはりや、その又祖父さんといふやうに、その人達の子供の頃にも、この二本の松、鶴と龜とを私達と同じやうに、楽しい、遊び仲間にしたこととせう。昔ながらの仲仙道に面した、この二本の大松は、さまざまな歴史や、事柄を知つてゐることとせう。こゝを上下した、澤山のお殿様の行列や、澤山の旅人達のこと、又この町の人々の物語りなど、私達が知らない話を知つてゐるに違ひありません。今、残された。一本の松、龜と呼ばれる方が數百年昔に生ひ茂つて來た仲間が、ぼつくり倒れて泣くが如く訴へるが如くに響

き渡る松風は、人の世の、あまたの物語りを、物語つてゐるのではないでせうか。私は時々散歩がてら、このなつかしい一本の松を眺めに出かけます。傳説は傳説として、私の小さな頃の楽しい遊び仲間の友として、馬鹿に行つて見たくなることがあるからです。

村の傳説

一乙 島田 秀雄

或る夕方の事である。

さつきから降つてゐた雨は益々ひどくなり時々雷もなりだした。家中がかやの中へはいつて雷が落ちないやうに祈つてゐる。いつの間に出たのか父は縁側へ出て線香をつけてゐる。間くと雷の落ちないまじなひだと言ふ。僕は「遠くの桑原遠くの桑原」と言つてかやの中へもぐつてゐた。その内にだん／＼と雨もやんで雷も遠くへ行つたやうである。もう大丈

夫と言ふのでかやの外へ出た。そして家中火鉢をかこんで色々の話が交された。その一が大雷神社の事である。

大雷神社は雷様を祀つてある神社で、だれ言ふともなく此の様な事がいはれてゐる。「この大雷神社の氏子の家には絶対に雷が落ちない」と。たしかにさうである。僕がしつてゐるので氏子の人家に落ちた事がない。もう一つは大雷神社の西に池がある。それが長塚の琵琶之湖と言ふ所へ地下をくゞつて通じてゐるとのこと。いま一つその琵琶之湖から忍沼へこれと地下をくゞつて通じてゐるさうで、それが不思議な事には、神主が大雷神社の西にある池の中へ杓子を三本入れるとその一本は入れた所にのこり一本は琵琶之湖一本は忍沼へ行つてゐるのださうです。その琵琶之湖には昔大蛇がゐてそれが三つの池を地下をくゞつて往來してゐたこととす。或る日神主が琵琶之湖の畔をあるいてゐると湖の中からぼ

つかり黒い馬の背のやうなのが浮いて來たので神主はとつさに着物をぬいで湖の中へ飛びこんでその黒い背のやうな物を生捕つてあがつてきて見るとそれは今の山椒魚の大きいのだつたと言ふ。今でも時々その黒い馬の背のやうな物をだすさうです。然しその湖も年と共にだん／＼くづれていつて今は見るかげもなくなつて居りますが、どこか不氣味なかんじを抱かせます。(熊谷市大字上之)

仁王尊にまつはる傳説

一乙 島田 忠三

此所は鴻巣町勝頼寺の境内である。秋の日は、はや暮れ様としてゐる。今一人のおばあさんが赤ん坊をおぶつて、境内へはいつて來た。ねかしつけに來たのらしい。夕暮の事なのでお墓参りの人影も無く、只廣い境内におばあさんの下駄の音と、子守歌きり聞えて來ない。

やがてねついたのか、おばあさんは「お

「お良い子良い子」と、ひとりごちながら、
 歸りかけた。と運悪くおばあさんの下駄
 のはなをがブツツリ切れてしまった。お
 ばあさんがたて様として大儀さうにし
 やがまうとすると、赤ん坊が火のついた
 様に泣き出した。おばあさんはしやがれ
 聲で子守歌をうたひ出したが、どうした
 ものか泣き止まない。おばあさんは困つ
 た様子だったが「そんなに泣くと仁王様
 に食べさせちゃうよ」と云つてなだめた。
 すると今の言葉が終わるか終らない内に、
 今までどうでもなかつた空に、黒雲がわ
 いたかと思ふと、それが忽ち擴がり、生
 ぬるい風にまじつて大つぶの雨までふり
 だした。おばあさんはびつくりして、仁
 王門の屋根の下で雨やどりをする事にし
 た。丁度其の時だつた、ゴーツとふいて
 來た一陣の強風とともに、自分の體がグ
 イと引つぱられた様な氣がした。すると
 不思議にも、今までおばあさんのせなか
 で「オギヤー／＼」泣いてゐた赤ん坊が

見當らない。それから大さわぎになつて
 「大變だ／＼」と町の人や寺の人達でさが
 して歩いた。

すると或人が「セイ／＼」息を切らせな
 がら、かけて來て「皆さん／＼大變です
 よ、私がね、仁王門の下をくぐらうとし
 てひよいと仁王様を見たらね、仁王様の
 口から血がねえボタ／＼たれてゐてだら
 りとつけひももたれてゐましたよ。もう
 私はびつくりして／＼それこそ腰がね、
 ぬけさうになつたのをやう／＼此所まで
 來たのですよ」とさも／＼おどろいた様
 に皆の人々につげた。それから町の人々
 や寺の人達で、行つて見ると、仁王様は
 いつもと變りなく仁王門から、みんなを
 見下して立つてゐられたと云ふ事です。
 なほ今も其の仁王様だといはれてゐる
 のが、残つてゐます。

マラソン競走

一乙 松本 悦治

一直線にスタートに並ぶ。五千何米か
 のマラソン競争も愈々始まる。どうか今
 日のコースも無事に駈けてゴールイン出
 來る様にと神に祈りながら、桑畑の續く
 通りを見通してゐると、走り出さぬ内に
 もう心臓の鼓動が激しい。青い空に眞黒
 い銃口。

「ズドーン。」と一發。皆一かたまりに門
 を出た。

友達がぐん／＼抜いて行つた。僕は「自
 分は體が弱い。どうしても早く走ること
 は出來ないのだから、せめて不正な行爲
 をしたり、休んだりすることはしないで
 やらう。」と走りながら思つた。砂利がご
 ち／＼靴に當つて足はくたびれてしま
 ふ。こんな所でへたばつてはいけない。
 と思ひながら、齒をくひしばつた。僕の
 前の者ははや四ツ角を過ぎた。第一關門
 では上級生が僕達に道を教へてゐた。何
 だか知らない、大きな建物を過ぎた。土

ばかり見て走つてゐるのでどんな建物だ
 かそんな事は考へなかつた。もう胸が苦
 しくて「はあ／＼はあ／＼」いつてゐる。その
 中隣の者は「くたびれた」といひながら歩
 いて行かうとするので、僕は歩いて行か
 うとしたが、こんなことではいけない、
 日本男兒だ、頑張れ頑張れ。自分で自分
 を勵しながら又走つた。僕は何時も同じ
 スピードに出てゐた。疲れに疲れた時曲
 角で、指導員が赤のインクを付けてくれ
 た。それで元氣を増して又力走した。や
 うやく北に曲つた時には今にも倒れさう
 になつて自轉車へつゝかゝりさうになつ
 た。「はつ／＼」と思つてもまだよろ／＼して
 ゐる。小川にころげこみさうになつて、
 目が覺めた。危かつた。腰に腕をおし付
 けて走つた。腹もすいてきた。暫く行く
 と神社が見えた。此處まで來れば學校は
 直ぐなのだ。これは肥塚の鎮守様。こゝ
 で始めて注意して見た。長く／＼垣が続
 いてゐる。學校をやうやく見た。すぐだ

すぐだと元氣を出して走る。併し近いと
 思つても中々遠かつた。皆は、ラストヘ
 ビーを出して僕を抜いて行く、僕も抜か
 れてはならぬ、と競争した。學校の門が
 近いので安心したせゐか、急に倒れさう
 になつた。「最後の三分間」だ。僕は思ふ
 存分力走して、門をくぐつた。

柳田先生に名札を渡された。皆並んで
 休んでゐる。僕は足を引すりながらそち
 らへ向いた。あゝ、僕は、五月二十七日
 に五千米を走破した。意義ある海軍記念
 日にだ。

男だ、元氣だ、やつ／＼けよう。これか
 らも。

降り來る難關を。

泳ぎ

一乙 岩田 秀夫

手を頭の上で拜む様にした友の體がさ
 つとおどる。「どぶん」と鈍い音がして深

く澄んだ水に大きな波紋の輪を描くと思
 ふ間もなく日にやけた顔が目をつぶつて
 頭で左右に水を切りながら浮ぶ。見事な
 拔手、まるで水面を手で交互に押へてゐ
 る様だ。大きく肩から廻す手に午後の強
 烈な光りがきら／＼水面に反射する。水
 の子つて言ふのはこんなのかなと感心し
 て見る。

「おい秀夫さん見てべーねえで泳
 げよー。熱い岩の上にお尻を据ゑて居る
 私にこんな聲が投げられる。「よーし、」
 と許りに岩から飛びおる。こちらの砂
 地から勢ひを付けてかけて行き思ひ切つ
 て飛び込む。此所は随分深いと見えてず
 ん／＼中へ吸ひ込まれる。手足をしきり
 にバタ／＼と運動させるが容易に浮び上
 らない。やがて氣をしづめてちつとして
 ゐるとくうつと浮ぶ。ためて居たガスを
 一時に吐き出し空氣の入れかへを短かく
 早く盛んにする、片手で顔の水氣をぶる
 ぶる拂ひながら又中にもぐつて流され

ない岩だらけの山間の荒川でこんなに楽しく夏の間毎に泳ぐのである。

模型製作

一丙 近江 茂

「あ、今日はよい天気だなあ、だけれどもこんなに日照りばかりついでに、百姓もこまるなあ、家の井戸も出なくなつた。」とつぶやいてみると、父が「もう出来たかい」と、聲をかけた。「もうすこしで出来上がるのだよ」といひながら電気機関車の組立をはじめてゐる。

僕は、二三日前から、電気機関車をつくつてゐる。今日はもう組立て、豆電球をつけて色をつけるばかりだ。こつこつとはじめた。氣はあせるばかりだ。がしやりと音をたてると、母が「かじやさん。」とひやかす。「なんだい、あんなことばかしいつてゐる。」と言ひながらあきめもふらず真面目くさつて、やつてゐると、又母が「茂のやるのを見てゐると、

見てゐる者が氣が氣でならない。」といふ。僕もまけないでそんな見なければいいといつて、あとは聞えぬふりして作つた。やうやつと出来上つた。レールをしいて電氣を送ると、電気機関車はいきほひよくはしりだした。形は熊谷驛にある凸形である。豆電球が小さな光りをなげてゐる。「あ、はしつた。」それを見るなり機関車をもつて父の所へかけていつた。「やあ、動いた。」と言ふと、父は「走つたかい。」とうたがふやうにいつたので僕は動して見せた。父はほめてくれた。僕は得意になつて、「このくらゐなんでもない。」と父にいふた。又走りだした。弟にも見せた。弟は自分が作つた様によろこんでゐる。僕は「やあ、動いた。」やあ走つた。」とうれしくて、家中かけずりまはつた。機関車はレール上に今にも走りだしさうにある。豆電球は、すうと光りをなげてゐる。僕はあまりのうれしさに茫として、それを見てゐるばかりだつ

る、つと目を明けて見るとうす濁つた水の底によく粒の揃つた白石が仲良く重なり合つて竝んで其の面を水が洗つてゐる、ゴォーッといふ静かだけれど不氣味な川の音が耳に流れ込む。呼吸が猛烈に苦しくなつて來たので、浮きの用意をせやうと思つても、ふは／＼して著かない。やつとの事で水面上に顔が出る。「岩田呼吸が長いなあ。」人が浮べないでさんさんもがいてゐたのも知らないで感嘆の言葉を發する。「うん長いだらう。」心中で苦笑しながら苦しかつた呼吸を整へながらやつと岸に泳ぎつき、よろけながら砂の上にお尻を下す。長く水につけてしぼんだ足に熱い砂がくすぐつたい様な變てこな感じだ。潮のがう／＼いふ荒川河原「オ、」とか「ヤ、」とか言ふ仲間の聲が水にこだまして太く聞える。

廣々した海で泳ぐ者をうらやみながらも、我々山の子は潮の早い深さの一定し

た。

鬼が辻

一丙 高橋 忠衛

私の住んでゐる別府村の村外れに御荷が辻といふ三本辻がある。村人は此の辻を御荷が辻と呼ぶに鬼が辻と呼んでゐる。御荷といふ言葉が何年か経つうちに變り變つて鬼となつてしまつたのであらう。で私は小さい時分其處へ鬼が出て其處を通つた人は食べられてしまふといふことを聞いてゐたので其處を一人で通る時などはすぶん寂しく思はれてならぬ所であつた。

僕は或晩父に尋ねた。「あの東方へ行く三本辻を村の人々は鬼が辻と呼んでゐますがほんとうは御荷が辻といふのださうですね。」さうだ。「ではどうして御荷が辻といふのですか、何か理由があるでせう。」あゝ大ありさ、それは昔此の地方で幕府へ米を納めた。その米をあつた

から船へ積んだのださうだ。「ですがあそこを川は流れてゐないではありませんか。」いや今流れてゐなくも昔流れてゐたのだ。あの二里ほど北の利根川が此の附近一帯を流れてゐたのださうだ。「此の話を聞いてやうやく御荷が辻といふ名稱のいはれがわかつたが、僕は驚いたたとへ何百年経つたにもせよ二里も北へよるとは。僕は今まで此の様な大きな變化を見たこともなければ聞いたこともないが今夜はからず父の話によつて物の變化の大なることは人の力では恐らく計り得るものではないかと思つた。

さて此の主人公の御荷が辻は今どんなであらうか。今其處を誰が通つても多分此處に川が流れてゐたなどいふ事などわからないであらう。なぜならば今其處には昔の名残りを留むる者は一つもなくあたりは只雑草が蓬々と生え三角の草原が僅か残つて茶碗のかけらや色々の物が捨てられ見る影もなく荒れはてゐる。

此の間僕は此の辻に立つた時昔の面影と今の様子とを比べて見て、唯呆然としてあたりを見廻し永遠に村人から鬼が辻として恐れられ世の中に自分を名のつて出る日がないのかと思ふと無限の哀情が此の胸にこみ上げて來るのであつた。

兄の死と机

一丙 持田 春雄

僕が四年生の或一時間の出来事である。その頃名古屋へ行つてゐた兄さんが病氣でしかも大分重かつた。電報は日に五六回來る。其の日も僕は學校へ行つても唯一人校庭のすみで兄さんの事を考へるのであつた。

授業ははじまつた。先生はいつもと違つて顔色が悪かつた。先生は禮をすますと皆に自習をさせておいて僕を呼ばれた。教室のすみにある先生の机の所へ行くと、先生は僕に向つて「お前のお母さんは四月ばかり前に死なれて、又兄さんが病氣でかなしからうね。しかし、もし、

見さんが死んだと聞いても、それは運命だと思つて、決してかなしがるのではないよ」と言はれて下を向かれた、僕の胸は不審でならなかつた。先生はなぜそんなことを言はれるのだらう。此れには何か深いわけがあるのであらう。瞬間僕は先生の話の意味が悟れた。あゝもう見さんは死んでしまつたのか。先生は唯兄さんが死んだと言ふと悲しがるから悲しがらせないやうにかう言はれたのだらう。其の時は僕は先生の言葉と自分の身の上を思つて、悲しさで何時か涙がほゝをつたはつた。先生の目にも涙が光つてゐた。あゝ、もう僕には母もなく兄もなくなるのか。と考へると皆の居るのも忘れて聲を出して泣いてしまつた。先生も何も言はず唯しやがれた聲で「歸りなさい」といはれた。僕は机に向つて勉強もせず唯悲しさで胸は一ぱいになつてゐた。そしていつか鉛筆で本を黒くしてしまつた。少ししたつと鐘がなつた。その鐘の音も悲し

小學校の思ひ出

一丁 關根 福之助

それは冬の寒い朝でした。小學校一年甲組に入つた僕等は、一學期、二學期もをへて、少し生意氣になつた頃でした。教室の隅のストープは赤々ともえてゐます。あたつてゐる者の顔は赤く輝いてゐます。

丁度、先生がをられないのにつけこんで、僕等は悪戯を始めました。それは、クレヨンで赤々ともえてゐるストープにおつゝけてゐると、ぢく／＼とにびい音を立てながらとけて、つひにはかたくなたまつてしまふのです。今から考へて見ると、それは實につまらないものでしたが、其の時の僕等には實に／＼面白かつたのです。クレヨンがぢく／＼とけるのを見ては手をたゞいてよろこびました。

やがて、ストープの火もうすらいできました。みると、ストープは、赤、白、黄、緑といふやうに、二色がべた／＼とくつゝいてゐました。僕等はそろ／＼心配になりました。先生がみてしかりはしないだらうかと、皆の顔はいま／＼の面白さうに赤くほてつた顔ではなくて、だんだんつめたく青い心配さうな顔にうつゝ、てゆきます。

やがて、「どん」がなりました。

「ばた／＼」と、スリッパの音が聞えてきました。先生がこられるのです。皆の顔はますます暗くなつてゆきます。

「がら／＼」先生がはいつてこられました。僕等の心配さうな顔にひきくらべて、

先生は、それはにこ／＼してゐらつしやいました。教壇にたゝれました。僕等の胸はどき／＼します。先生はちよいと、ストープの方をこらんになりました。先生のお顔ははつと暗くなりました。なにもいはない。一言もいはずに先生は、教壇をおりて教員室の方にいかれました。「ばた／＼」。スリッパの音はだん／＼聞えなくなりました。

スリッパの音がきこえなくなると、皆は、誰が申し合せてといふではなし、一齊に硯の下にしく雑巾を持つて、ストープの方かけよりました。そして、てんでにストープをふきはじめました。つばをかけたり。棒でクレヨンをこすりおとしなどしました。

すこし経つと先生がこられました。先生はこの有様を見て喜ばれたのでせう。「席について」とおつしやつて後、靜かに、僕達をさとされました。皆はどうな氣持でいたでせう。

雪合戦の思ひ出

一丁 高島 重雄

思ひ出せば僕がまだ尋常六年の時の事である。昨日の夕方の頃から降り出した雪は、今朝早く外へ飛び出して見てもまだやんでゐなかつた「わん／＼」とほえながら四方に飛びまわる犬、それを見た僕は何となくわけのわからない嬉しさが胸にこみあがつてきた。二時間目の授業が終へるのも遅しと庭に飛び出すと、降りつもつてゐた。雪も二十センチ位つもつて止んでゐた。歩き出すと「ザツクリザツクリ」と雪の中へ長靴がめりこんでゆく、三時間目は雪合戦をやることになつたので僕等は荒川河原に向つた。やが

て河原につくと前後列は二手に別れた。後列は遙か西方の約二千米の地點に陣取つた、少しの間。彈丸などをこしらへてゐると、敵の姿が蟻の様にちら／＼と見え出した。「おーい、きたぞー」と急に緊張しながら敵の姿をにらんでゐた。五百米百米と接近してきた敵は「わあつ」と喊聲をあげながら手に／＼たまをにぎつて突進してきた。僕はもうたまりかねて穴の中からとび出した。彈丸は雨霧と飛んでくる。

激しい戦ひの眞最中、僕は夢中になつて敵を防いでゐると急に眼を堅い物で、「ガーン」となぐられた様に感じた。ばつ」と手をあて、雪の上へベタリと坐つてしまつた。するとそばで誰か「勘辨な／＼」と僕の顔をのぞき込みながらあやまつてゐた。「大丈夫だい。心配なんかしなくつたつていゝや」と無理に目をあけたが眞白な雪が太陽の光りに反射してキラ／＼と輝くのでまぶしくて／＼ぼろ

短歌

ぼる涙が出てしまつた。「チク／＼」とい
たむのを我慢しながら弾丸の飛んできな
い所まで行つてやすんでゐると、時々「ウ
ワアツ」と敵の喊聲があがる。どうやら
味方の方が敗けたらしかつた。雪合戦も
終つて机の上にうつぶしてゐたら、皆が
「おいどうした」誰がしたんだ」などい
口に僕の所へよつてきて聞いた。そこへ
大島先生が來られ僕をよばれて「いたい
かい醫者の所へ行つて見よう」と言はれ
たので「うん、この位大丈夫です」と言
つたが「いや、君はこれから試験を受け
る大切な體だからね、眼でも悪くしては
大變だ」と大變心配してをられた。その
時大久保が出てきて「先生大丈夫ですか」
と言つた。先生は「あゝ君がやつたのか
しかしあやまちは仕方ないね、よし／＼」
と言はれた。其の後先生の御厚意によつ
て、僕の眼がすつかりなほつた時、それ
は三月二十二日の中學校入學試験が間近
に迫つて來た頃であつた。

五甲 長谷川 精一
なま土の肌黒々と冷えわたりいそぐ野良
路に夕日淡し
街行けばベームメントに心地よく水撒き
てあり足どり早む
山茶花に目白來て鳴く小春日は日蔭きは
だち冷たかりける
ひたすらに母にまつはる子兔に秋の日さ
しの柔きかな
雨乞ひの度かさなれど甲斐なくて草木は
日々に萎れ行きけり
一輪の白菊のごと我が君は楚々とあれか
し永久に變らで
巫女たちの舞ふそでかるく御神樂は夢の
如くに樹々にひびきつ
五甲 野 中 衛
音もなき深山の奥のせむらぎに紅葉みだ
れて秋ぞ更けゆく

逝く秋を惜みて拾ひし紅葉ばをふみには
さみてひとり微笑む
柿の實の赤く熟れ行くきのふけふ秋のふ
かきをしみじみと知る
なつかしき友思ひつつ佇めば今しも月は
松にかかれり
みづきの跡なつかしく今は無き君の御
影の思ほゆるかな
ぬばたまの黒きとばりにおほはれぬ月影
映る猿澤の池
青丹よし奈良の都のたそがれてかすかに
ひびく東大寺の鐘
熙々として神鹿と共にたはむれしいとな
つかしき旅の一日
五甲 沼上 勝五郎
桐の葉の落ちて淋しき夕暗に一人たたず
みもの思ふわれ
よき道を歩まんものかと思へどもまよひ
の道に入るぞ悲しき
日沈みしその後に村里山にけむりたなび
く秋の夕暮

秋告ぐるつく法師の音に己が身を振りか
へり見て淋しさの増す

五乙 大崎 裕治

友と別れ石ころけりつ濠端の長き家路を
ただ一人歸る

なまぬるき秋のけはひに野の煙地を這へ
るままたぐれにけり

病床に深き眠りのふとさめて窓邊に月を
見れば淋しも

青空はあまりに青しただ一つ我に向ひて
光る星あり

春の目をひとりわびつつ窓によればまよ
へる蜂の羽音ひそやか

五乙 坂上 辰夫

はるばると去り行く雲に夕陽さして谷間
梢をつたふ鐘の音

夕雲に山脈とほくたそがれて秩父盆地の
秋はくれ行く

五乙 舞原 智徳

明日ありと思ひ過にし四とせ日の怠りあ
つめて今ぞ悲しき

何事も限りある世でありながらなせ限り
なし人の望は

心なき身にも哀はおぼえけるすすき波打
つ秋の夕暮

五乙 赤田 隆之助

ぼんぼりの影に垂れ添ふ青柳に春風匂ふ
賀茂の水上

黄枯れ行く四邊のさまや静けしや夕陽沈
まん武蔵野の果

聞え來る遠寺の鐘の悲しさよ櫻堤に秋風
ぞ吹く

五丙 島 田 諦 信

いくたびとなく振り向きて見るしみじみ
と語りつつ來し友と別れて

懐しき友にもらひしその手紙胸躍らしつ
つ封を開けり

鐘の音に風情はいとどまさりけり夕日に
はゆる山寺の花

大原に立昇る煙見ること諸行の無常身
にしみにけり

五丙 小林 正男

こけむしぬ重忠墓に参すればありし昔ぞ
偲ばるる

つくづくと過去を辿れば徒らになすこと
なしに年は流るる

西の空高く聳ゆる山蔭に殘光淡く陽は沈
み行く

どんよりと曇りし今朝の寒さかな軒の雀
もひっそりしゐる

五丙 町 田 得

時間表みんな覺えた時分には早や三學期
も終りなりけり

氣まぐれにぶらりと出でし田圃道静けき
朝の空氣身にしむ

自動車の走り去りたる夕やみのほこりの
中にガソリン匂ふ

夜の更けて月光いよいよささ渡る一人湯
風呂の室靜かなり

三甲 宮 本 藤 正

縁側に腰うちかけて弟と仲よく語るまき
水の庭

三甲 野 口 丘

引き沙に磯つたひして貝拾ふ素足に痛き
牡蠣の殻かな
我が庭の紫陽花の花今日は又うす紫に色
かはりけり

三甲 寺崎 藥

宮鳩にまじりて雀餌を拾ふ鎮守の森の朝
のしづけさ

三甲 栗原 計衛

横須賀に始めて行つた私は何もかも皆珍
しき物

三甲 根岸 仲次郎

蒸し暑き机の前に名の知れぬ蟲の聲にて
我が筆置きぬ

濡れた如その瞳をば輝かせ我を眺むる馬
のなつかし

樂しげに乗り行く馬を見ることが一度な
りとも乗りたくぞ思ふ

三甲 福永 啓介

見たことのある人なれど誰ぞとも思ひ出
さずに笑みかはしけり

ただ一人夕日さし込む窓際に古里の友に

手紙書くなり

三甲 根岸 信雄

滔々と寄せてはかへず大波の今日静かな
り秋の利根川

三乙 西田 健二

はしたなき雇ひ女たちの戯れを興がりて
見る夏の宵哉

三乙 芹澤 長次郎

旅寝して無事にあれよと祈り居る母の面
影目のあたり見ゆ

三乙 高杉 新平

ミンミンと蟬のなく音に驚けば早や夏休
み前に迫れり

生きて居れば國に報ゆるすべあるを三原
に向ふ人ぞあさまし

我々を避暑地に送る鐵道のレールを直す
工夫をぞ思ふ

三乙 小野 寺正治

裏庭に一本立てる日廻りの我が丈として
延びし嬉しさ

三乙 野中 丁一

牛追つて水田を撮げば赤々と淺間の煙夕
空に映ゆ

田植歌一節毎に青々と廣き水田は變り行
きけり

三乙 笠原 祥

我が心誠の道に進みなば神もあはれと助
け給はん

三乙 廣田 京司

むくむくと立つ煙突の煙りにて我家の風
呂の沸くを知りけり

三乙 關口 正二

夏の日の強き光にてり映えてサルビヤの
花赤く咲きけり

三乙 小川 信雄

青々とつづきし麥の穂の中に長蛇の如く
細道の見ゆ

三乙 中根 敬二

ゆあみして後の心の爽さ團扇片手に縁に
涼むも

三丙 村山 恒房

名にし負ふ三保の濱邊の松原を今日ぞそ

ぞろに我は行くなり

三丙 金子 惠一

我が希望のせ行く汽車の片隅に我は一人
でほほ笑みにけり

三丙 田中 清志

緑こき木の下かけに椅子よせて友と語れ
ば蝶々のとぶ

三丁 田村 義憲

松の音は昔も今も變らねどかはりはてた
る鉢形の城

三丁 浅井 進

炎天に金魚屋の聲かん高く晝寝の夢を破
りすぎ行く

三丁 中居 弘

若草の眠りも深き武藏野を朧に照す有明
の月

三丁 井上 宇市

本箱にふと見出し登山地圖土にまみれ
し痕ぞなつかし

三丁 田中 進二

皇居をば伏しをろがみて見透かす松の緑

は千代に變らじ

二甲 關本 照光

むくむくと出る煙突のけむを見るその行
末は雲にとどけり

二乙 齋藤 春雄

ろくすつぽ下讀せず手に手をあけてこはこ
はのぞく先生の顔

二乙 福田 千尋

安らかに眠り居る友達のお寺の前をすぎ
行く時の心は

二丁 松井 廣

煙突のけむりがよく昇る日の私の心のよ
き秋なるかな

二丁 世川 智

ガラス戸にうつる我が身のスタイルに思
はずちらりと投げる目

二丁 高橋 義雄

鼻赤く、ふところ手、道行き来す、小鳥
縮む、霜雪の頃。

俳句

五甲 野口 隆次

赤とんぼ桐の落葉と十文字
川の面に尾鰭ひらめく暑さかな

三丙 朝寒や伽藍に響く咳一つ

中空に一つ突たつ富士の峰

五甲 田中 敏雄

淋しさよ墓石にそそぐ時雨かな
あれこれと鳴く蟲數ふ夜更かな

秋の日や軒端につるつた柿の色

うづ高く病葉積つて秋深し
十三夜刈田にうつつた日の影

五甲 木島 浩

暮るる野を行く細道や足の冷
水打つてすがすがしさの植木かな

草深く蟲鳴く夜の雨さびし

庭先に積みし南風や秋日和
土の香に沈みて暮るる秋の村

五甲 長谷川 精一

水も樹もただみどりなる風山
篠しのいかだにいてふ水清し
藤波の梢美し春日山
青柳のゆらぐ加茂川長閑けかり
葉裏白く萩うなだる露の玉
雨ほどに露のしげかる萩野かな
久々に叔父の訪ひ來し炬燵かな
雪の暮ただ一すぢのわだちかな
髪刈りて頭にしみる寒さかな
ゆるゆるとベタルを踏んで春の道
雪玉の白く弧を描く川原かな
ぬくき陽や軒の福壽草を美しく

五甲 平野 英一

春立ちて野山に人のあゆみかな
春風や野山の匂ひ知らせけり
梅ヶ枝に蕾みつけり今朝の春
東方吹きて植木を外に出しにけり
橋長き人影長き臍かな
鶯やいづこに鳴くか午の刻

夏

短夜や先づわが家より明けにけり
夏の夜は話はずきぬ團扇かな
街道の白く光れる暑さかな
秋近し四疊半にも居つくかな
夕立や日傘をさせし女かな

秋

もづの聲つぶてに落つる枯葉かな
秋の野に何やらゆかし小菊かな
詩集持つ少年のみゆる堤かな
水すめる赤城もすめる寒さかな

冬

ほんのりと霞む今宵の東山
草枯れて秋風寒むし蓑の影
明月や今宵も雲の蹟一つ

五乙 赤田 隆之助

赤蜻蛉止まりて垂るる枯すすき
秋の夜やしみにみ過去を思ひけり
竹割れば蟲粉こぼるる秋深し
菊の花そぞろに開く日向かな

四丙 根岸 重雄

秋立つや猫の休める日向縁
行く秋を日向縁から寝て別れ
歸雲末は林に流れ入る
しばし待てと行秋止む根根菊
嵐して落葉は縁を走りけり
案山子迄今行きつきぬ野分かな
鳥なく聲もめづらしく秋の暮
菊の香は風にしばしば途絶えけり
枯葉焼けば煙の低く流れけり
夕焼の日は雞頭に止りけり

四丙 菅 間 壽一

はや秋もゆくか梢を舞ふ一葉
武蔵野はかりほによれる人一つ

三甲 室 田 進

夏の日や腹輝す池の鯉
夕立や青葉の薫る森の道
冬空に雲輝ける夕日かな
秋晴を見て飲む水の甘さかな
朝まだき白々見ゆる汽車の窓

三甲 宮 本 藤 正

涼しさや山の中なる一軒屋

三甲 石崎 森一 郎

風切れて炬燵の祖父に泣く子哉
みどり子の泣く聲暑し午下り
横町の怪談多き涼みかな
巡禮の木蔭をひらふ暑さかな
二百十日事なく過ぎし夕日かな

三甲 富 田 啓

五月雨や硝子向ふに銀の糸
赤とんぼ何を語るか竿の上

三甲 齋 藤 博 介

立春や又新しき喫茶店
教練の聲も勇まし春の庭
秋晴や運動を見る新聞紙

三甲 吉 田 新

夕立のからりと晴れし庭の風

三甲 村 岡 賢 二

水清しナイフの如き鮎の腹
銀色に飛行機飛ぶや秋の空

三甲 柴 武 文

晝過ぎのお寺の影や蝌蚪の水

三甲 野 口 丘

我が窓の小暗くなりし若葉哉
赤銅の身を躍らすや夏の海
今日も亦忙しさうな燕かな

三甲 青 木 三 樹

赤蜻蛉釣りの歸りの竿の先
野と山の青きをつなぐ田植哉

三甲 坂 本 政 直

秋晴や見たことのない山一つ
五月雨の汽車熊谷に著きにけり

三甲 今 井 貞 治

雨上り十里の杉の梢より
梅一つ落葉と共に掃かれけり

三甲 齋 藤 照 夫

涼臺前を夜汽車が通り行く
夏休終ると直ぐに考査かな

三甲 栗 原 計 衛

葉櫻の風吹き通す二階かな

三甲 倉 澤 茂

三甲 鈴木 賢 之

四丙 根岸 重雄

秋立つや猫の休める日向縁
行く秋を日向縁から寝て別れ
歸雲末は林に流れ入る
しばし待てと行秋止む根根菊
嵐して落葉は縁を走りけり
案山子迄今行きつきぬ野分かな
鳥なく聲もめづらしく秋の暮
菊の香は風にしばしば途絶えけり
枯葉焼けば煙の低く流れけり
夕焼の日は雞頭に止りけり

四丙 菅 間 壽一

はや秋もゆくか梢を舞ふ一葉
武蔵野はかりほによれる人一つ

三甲 室 田 進

夏の日や腹輝す池の鯉
夕立や青葉の薫る森の道
冬空に雲輝ける夕日かな
秋晴を見て飲む水の甘さかな
朝まだき白々見ゆる汽車の窓

三甲 宮 本 藤 正

カラコロと下駄の音さびし夜の町

三甲 大塚 三千 雄

ぼんぼんと蝗飛びつく夕明り
鈴蟲の聲止みにけり父來る

三甲 加 藤 隆 司

六月に入りたる今日の暑さかな
静けさや釣糸たれし水の面

三甲 小 林 六 彌

夕風に涼しき蚊帳の青さかな
ガシヤ／＼と何所で鳴くや蟬蟲

三甲 小 澤 良 助

コスモスの倒れて咲けり庭の隅
夕顔の今宵も三つ咲きにけり

三甲 塚 本 武 雄

秋晴の空にけ高し富士の山
五月雨の傘追ひ越すや歸り路

三乙 明 石 道 雄

色づきし柿を見上げる通人
田植歌流れて村は平和なり

三乙 田 村 精 一

三乙 福田 守 雄

土手上に野球姿や秋日和
初秋や水面にうつる山の色
秋の野や踏み散されし名無し草

三乙 柿 澤 富 雄

風呂焚きに一人は戻る田植哉
隣まで分けてやりけり新牛蒡
紅葉を谷間通して眺めけり

三乙 山 本 健 二

野も山も高天ヶ原の青墨
木馬から下りて蝶追ふ子供哉
文字なき石碑さぐりし彼岸哉

三乙 黒 田 義 治

客間まで飼ひひろげたる蠶哉
菊の花我家をまいて咲にけり

三乙 西 田 健 二

夕焼や鉄を負ひたる人の影
飛び込めばつめたき水や秋の川

三乙 村 越 真 雄

土手の上に淋しく咲くや月見草
目のとどく限り若葉の世界哉

三乙 芹 澤 長 次 郎

雨上り二つ三つ見るしめじ哉

三乙 野 中 丁 一

佐保姫の絹すれの音や春の雨
叱られて涙にうるむ春の月
いつばれば延び来る様な柳哉

三乙 福 島 昭

山にそひ川に添ひたる紅葉かな
八月や螢とび交ふ輕井澤
蓮池の花に見入れる住持かな

三乙 高 杉 新 平

蛙の子親とは似ない姿なり
朽尼の念佛寒し冬の月

三乙 吉 田 惠 一

山道や小鳥鳴く日のうららかさ
新らしき蚊帳に寝はぐる子供哉
秋空を思ふ存分飛ぶ蜻蛉

三乙 小 野 寺 正 治

夕空に蜻蛉の群や右左
二三羽の雀もかへる秋の暮

三乙 荒 井 敬 正

鶏頭やお墓の側の一二本
習字せる手をちくり刺す藪蚊哉

三乙 野 中 丁 一

御社の鳥居を覆ふ櫻哉
軒下に大きくゆれて金魚哉
紫陽花の大きくゆれて風涼し

三乙 鈴 木 廣 夫

うららかに日のさす里や晩秋蠶
亡き姉の好みを盆の供へかな
落葉をふみて神社に参りけり

三乙 鈴 木 廣 夫

秋晴れや工場の煙高々と
明月や竹の濡れ葉の間より
カラ／＼と菊の葉走る秋の風

三乙 鈴 木 廣 夫

秋晴の水にうつりし蜻蛉かな
杉の木のかすかに見ゆる月夜哉
眞北に見ゆる赤城の青さかな

三乙 鈴 木 廣 夫

秋の日に父の軍服干しにけり
空高く柿は黄金の秋となる
夕月や波にくだける夏の海

三乙 鈴 木 廣 夫

焼け砂に波音ききて散歩哉
長々と日向に眠る子猫かな
夕焼に一人残れる案山子かな

三乙 鈴 木 廣 夫

夕涼みちりばめたりし星の下
製絲場の煙突高し冬の空
釣り暮れて戻る川邊や月見草

三乙 鈴 木 廣 夫

霜のまき巻尺あてて大工かな
行水や石鹼箱置く下駄の上
蚊帳つりて家も小さくなりけり

三乙 鈴 木 廣 夫

日中やどこまでつづく蟻の群
炭やきの煙の中や秋の月
一生も寝て暮したい春の朝

三乙 鈴 木 廣 夫

竹の子や日毎毎にのびにけり
掃き掃除してから椿散りにけり
打水の餘りを足にそそぎけり

三乙 鈴 木 廣 夫

行水の中へ落ちたるぶどうかな

三乙 鈴 木 廣 夫

三乙 柴 崎 堆

三乙 坂 田 操

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三乙 岡 村 忠 藏

三丙 水谷 勇
日は斜めとんぼ流るる軒ひさし
三丙 越智 甲子太郎
元祿の花見姿や伊達模様
三丙 茂木 馨
枯木立中に眞赤な夕日かな
三丙 富田 健次郎
摘草やいづこ流るる水の音
三丙 江森 午太郎
長々と富士までつづく青田哉
落ちて行く静御前や笠の雪
三丙 田村 義憲
菅公の涙ふくめる梅雨かな
三丙 浅井 進
夕焼や百姓鍬を肩にして
負けられて風呂敷小さき西瓜哉
葛蒲葺く軒端に風呂の煙かな
音もせぬ雨や若葉の色に降る
三丙 黒田 健次
生栗をむきつつ歩む山路哉
我が家の櫓は高し秋の空

三丁 鈴木 正道
堤下の野火した跡の若芽かな
三丁 新井 潔
夏やせの知らずに過す豚の聲
三丁 山本 多嘉夫
川端に一輪咲きし野菊かな
三丁 杉田 忠喜
草の道僅に有りき芒原
熟れ茄子と熟れトマトの畑かな
夕立や負けじと降るかトタン屋根
三丁 島田 茂治
杉の木のみひま／＼に櫻哉
三丁 田中 進
鯉職此處にも一人男あり
母までが簡單着なる暑さかな
三丁 須田 二郎
今日も来て明日もと思ふ櫻かな
三丁 栗原 利雄
松の木に引掛りたり春の月
三丁 藤野 甲始

七四
蟋蟀の聲かまびすし一軒家
三丁 瀬山 初雄
秋日和子守の揃ふ宮の庭
三丁 新井 兼祐
湯殿から家越しに見るや春の月
二丙 青木 繁夫
秋の野に今宵一夜の良夜かな
二乙 中田 文雄
十月のメモも去りにし菊の花
體操の白きパンツに下着見る
二乙 小川 芳男
十三夜すすきの中に月があり
二乙 中村 一男
深い霧突きあたりさうな所まで
二乙 大橋 靖田
夕月がやぶをはなれた十三夜
二乙 安田 富久藏
倒されし嵐の後の菊の花
二乙 西内 良夫
水うてばしんとしづまる大地かな
二乙 西村 良之助

秋深く黄菊をゆでる臭ひかな
二乙 原 章二
菊を見る先生の顔うれしさう
二丙 西宮 誠治
遠足をチンコ出してる窓の下
二丙 齋藤 孝光
町に出るたびに玩具買ふ子煩悩
二丙 風間 健一
夕月やすこしかけてる十三夜
霜降りるやうな寒さになりけり
二丁 世川 智
寒さにて忘れかけたる十三夜
二丁 五十嵐 博
ほのぐらく淋しく照れる秋の鐵塔
黄なる田に疎に土の見え出でにけり
二丁 石丸 昌一
秋寒き空に流れる天の川

川柳

五甲 田中 敏雄
秋祭東京音頭に變りけり
十三夜いつの間にやら柿がへり
受験生 五乙 藤間 弘行
受験生バスしたやうな夢を見て
受験生誰も彼もが秀才氣
受からぬと決つた時は頭痛にし
電燈
盗電のスタンド蚊帳の中で讀み
シヤンデリヤ按摩の影の面白し
秋
秋が来て儲けるものは本屋なり
剃刀がひんやりとしてもう秋さ
學びの窓 五乙 大崎 裕治
先生は叱る子から名を覚え
鉢巻を締めて頑張る受験生
受験生讀まぬ参考書だてに持ち
五年生顎で答禮して通り

一年の服二三年迄着せる服
一等は口出来るだけあけてかけ
先生のリレィボンチ繪の様に見え
演習や足で弾ぬく村田銃
銃口より糊杖の跳り込む村田銃
（以上二句射ちし彈のぬけぬ村田銃につい
て）
内見たさにかへしてこぼす飯盒の飯
どけ／＼といはれてどけぬ飯盒のそば
あれ坊やのだと子供は欲しがる鐵兜
（子供の鐵兜を借り集めて被つた模擬戦の
際）
無理なるも威脅で通す上級生
新入生村の親爺に禮をする
（洋服を着た親爺さんに自轉車で後から追
ひこされて）
初年生母に向ひてイエースノー
受験生参考書は買へどつんどく主義

詩

農村

五甲 長谷川 精一

秋の陽は
木々の梢を、赤く照りなして
静にも、暮れなんとす。
黒き土、美しき畝——
農夫らは、
鍬を肩に、言葉交しぬ、
夕もやの中に、消え入る家路
平和にも、おゝ、農村。

秋

五甲 沼上 勝五郎

素晴しく健康さうな
鳥の鳴聲に目が覚めた
心地よい風がほゝをなでる
若人の顔を心を

おゝ感傷の秋よ哀愁の秋よ
今日輪が山の端をはなれる
斯くして秋の一日は始まる
晴れ渡る空に燕の二三羽は
何時南の國へかへるやら
可愛い子供を連れ去つて
無事に歸れ南の國へ
秋風の波にゆられて流れてくる
赤い唇ダリヤの花も
ゆら／＼ゆれて大地に
影を映して踊つてゐる

港 !!

五乙 赤田 隆之助

淋しい港は
夜の深更の銀幕に閉されてゐる
何處にて弾くのか
悲しいギターの音が
きこえる。
X X X X
波の音は

港

五乙 大崎 裕治

港
榮やかな佛蘭西船が岩壁に止まる
青い目が出ては又かくれる
秋の波止場
さびたレール
石の間から草がもえ出てゐる

沖仲士が

肥えふとつた船長をちつと見てゐる

豚、豚、

彼は船長に豚を感じる

空想のはてしないよろこびを彼は感じる

ほゝゑみが頬にうかぶ

ふと目を轉じた時

起重機の重いプロフィール

空想は波止場打つ波の様に崩れる

彼は

六人の家族を想つたのだ

苦り切つた彼の顔に

すみ切つた青い海色がうつもてゐる。

野外演習夜戦

五乙 須藤 哲次郎

野外演習の夜
腥氣を送る風白く
愴涼たりな夜の空
見よ禿山の空の色
日長在家に傾きて

古河愛の色を帯ぶ

風は蕭々漱山の上

劍を案じて眺むれば

彼方に高し北斗星

斥候

おぼろ月夜の風寒く

彼方の森の影暗し

心はするどき劍の音

森にうごめく影二つ

敵の歩哨にあるめれど

遠く桑島迂廻せば

ほろりと落つる桑の葉に

夕の星の光りあり

秋空の星

二甲 宮本 光蓮

お星さまが飛んだ
向うのお山へ
輝くみ空に消えて飛んだ
輝くみ空にお星が光れば

僕等の心も清くなる。

風と木の葉

二甲 新井 彌平

風が木の葉を飛ばした

木の葉は風に飛ばされた

「そんなに吹かないでおくれよ」

「かんにんしておくれ」

小さなさゝやき

風がやんだ。

月

二丁 塚本 一男

十五夜の月

なぜ出ない

今夜はどこでも

おごちさう

えんがはにそなへ

いつも出るのに

どうして出ない

なにをすねてる

十五夜の月。

春の登校

二丁 小林 喬

元氣よく家を出で
我が村の土手に到り
眼の前にある熊谷をのぞめば
堤の櫻はいまを盛りと咲きぬ。

足を早めて

熊谷大橋に到り

秩父より流るゝ荒川を見れば

水旭日をあびて光る。

胸すがしく

橋を出で

熊谷寺の光るを見

我が心は尙更にうれし。

秋

二丁 腰塚 忠太郎

菊の香の秋が

俺は一番好きだ。

夏の陰氣が

秋に物すごい勢ひで破裂する

それが

秋の力となるんだ。

川 邊

一甲 新井 忠次

ゆうらり／＼

流れて来た

小さな／＼

櫻草。

どんな子供が

川上で

つんであそんで

捨てたゞる。

月の影

一甲 金子 久義

小川にうつる月の影

七八

いくら追うても追いつけぬ。

薄ぼんやりと私の影も

いくら逃げて追つてくる。

すゝき さや／＼

風吹いた。

私の妹

一甲 長谷川 進哉

昨日妹をだいたら

妹が言うたよ

兄ちゃんの目に

あたいがゐるつて

無邪氣なものだよ

まだ小さいんだもの。

うけおき

一甲 鴛田 敏男

薄暗い光りをたよりに

うけおきに行く

うんとはいつた夢を見て

河にはいれば

雑魚三匹

さら／＼水がつめたいよ。

月 夜

一乙 本間 三郎

月が雲から顔出し見えた

草の露さへ光つて通した

トタンの屋根が青く光つた

どこかで猫がにや／＼と鳴いた

草の根までもしみわたる

それは静かな月夜の晩。

ひよこ

一乙 中川 均枝

朝早くとやの中で

ひよ／＼と

やかましく

なくよ

家のひよこは。

母の顔

一甲 大室 一孝

廣い河原で只一人

母の事をば考へた

白い心の無い雲が

母の顔に似てた。

作 文

一乙 大野 明

何と書いたら

良いのかと

首をまげ／＼考へた

わきの者の様子を見れば

作文用紙の片すみに

名前だけかいてある。

柿

一乙 塚田 正久

そつと見上げた柿の木に

赤い色してなつて居る

空

一丙 小島 勇

破れた！無念

くちびるをかんて

ちつと空を見上げる時

あきらめろ

あきらめろといふ

あゝ

どこまで青い空だらう。

秋 風

一丙 横田 諤

秋がゐる

洗面器の水の中に

もう秋か。

僕がのぞいたら
寒い秋風が吹いて来て
僕の顔が
のびたりちびんだりしたよ。

チンドン屋

一丙 小林 正雄

チンドン屋

家の横道

チンドン屋が通る。

前に二足後に三足

太鼓ドン／＼

鈴鉦ならし

唄をうたつて

日がくれる。

雨

一丙 須田 敏治

とん／＼と

小雨の小僧
たかばを穿いて
屋根の上を
ころばぬ中に
下りて来い
小僧が下りれば
遊べます。

熊谷の夜

一丁 關根 福之助

熊谷の秋の夜は寂し
汽車の音きこゆ。

故郷のことを偲べば

其の音はいとゞなつかし

吾をのせて行くと思へば。

故郷の我が家は良きものかな

早く父母の足下へ

彼の音にのりてゆきたし。

熊谷の秋の夜は寂し
はら／＼と
木の葉時雨や。

地藏峠から

一丁 川上 晃良

汗を流してビツケルついて
よいこら／＼登つた山は
あそこに見える大きな山よ。

雨に降られてかけ下りた
恐ろしい崖せまい道
今はどこにも見えないよ。

始めて泊つたあの小屋は
御清平のあの小屋は
屋根の石が落ちさうだつたよ。

防空演習

一丁 大嶋 哲三

我々が待ちに待つた

防空演習

暗くなつたよ子供達が
喜んでさわいであるよ。

今日は演習の真中の日だ。

サイレンが鳴つたよ、うーと鳴つたよ。

僕達が待つてゐた

演習の終日だ

飛行機が飛んで来ないよ、つまらないな
あ。

僕の兄さん

一丁 加藤 隆恵知

僕の兄さん水兵だ

此の間家に来た時は

白い帽子に、白い服

見ちがへる様になつたねと

母さんの顔は笑顔。

向うの事を兄さんは

手まねをして話したよ

陸をはなれて 波の上

軍艦生活面白い

いざ海戦の時にはと

腕をさすつて笑つたよ。

草 笛

一丁 成田 文武

神社のまはりの

よしの葉を

笛につくつて

ならさうか

神社の高い石段で

みんなそろつて

ならさうか。

紙芝居

一甲 荏塚 公平

どんどん／＼ 太鼓の音

むかうの新道の

道端に

たちまち黒い人の山
やがて始まる昨日のつゞき
どつと笑つた顔と顔。

活動がへり

一丙 青柳 芳造

活動館を出て来たら

冷たい夜風がさら／＼と

空には星が二つ三つ。

草に夜露が下りてゐて
足にひやりとしみてる
トロの線路が光つてた。

短篇

蝸

五丙 木 島 工

或る暖い春の午まへのことです。

平安の都の、西はづれのある小さなあばら家の、赤黒く汚れた畳の上に、一人の若者が仰向けに寝をべつて、さつきからうるさく飛びまはつてゐる大きな青蠅をぼんやり眺めて居ました。春の陽光は廣い帯のやうに差し込んで、せまい畳の半分をバツと明るくしてゐます。若者は丁度この明るみの中にゐるので、着てゐる紺の襦が、日光を一ぱい吸ひこんでばかりしてゐます。斯う書くとは如何にも若者がのんびりと春の陽差しをたのしんでゐるやうですが、實は全く反對に、大層空腹に苦しんでゐるのです。彼は親も兄弟も、また妻子もない本當の一人ぼつ

ちなのでした。その上生れつきの怠け者であるために、極度の貧乏におちいつてゐるのです。で、かうして京都の所々の花の噂も立ちはじめたといふ春の日を、ぼんやり寝をべつて送らなければならぬ有様なのです。

若者がさつきから考へてゐる事は、この先、如何にして食べて行くか。といふ事だけです。いや、厄介な人生を持つてしまつたことに對する軽い後悔に似た氣持も多少あつたかも知れません。

ふと、若者が詰らなさうな視線を畳の上に落すと、そこに變なものを發見しました。蟲です。大きさは人間の中指くらゐですが、馬鹿に澤山の脚を持つた。今までに見たこともない不思議な蟲です。

「おや、妙な蟲ぞ、これは」

好奇心に半身を起した若者の頭に、ふと、蝸といふ蟲の名が浮んで來ました。それは今突然思ひ出したのが不思議なく、何時、何處で、誰

から聞いたのかすっかり忘れてゐるので

「蝸といふ蟲は恐しい毒蟲で、唐、高砂島に棲み、形はゲヂ／＼の如く、これに刺されると全身が麻痺れて忽ち死ぬる」こんなことが彼の腦の一部に浮んで來たのです。そして彼は、もしやその蟲が蝸ではないかと、少しギクツとしたのです。併し直ぐに彼の腦の他の一部分がその考へを打ち消してしまひました。

「唐か高砂島でなければゐない蟲が何うしてこんな所にゐる筈があるか、ゲヂゲヂの出來損ひか何かにきまつてゐるわ」

若者は、こんな蟲に遠い記憶さへ引き出してしまつた心のわびしさを嘲りたい氣持でまたゴロリと横になつてしまひました。が、しばらくして突然ある考へが若者を跳ね起きさせました。

「誰も見たことのない蟲ぢや、しかも話にきく蝸によつて似るとる蟲ぢや、人に蝸ぢやと言つて見せたとして誰も妖しむやうな

ことはあるまいぞ。さうぢや、これは金儲けぢやわ」

彼はこの變な蟲を見世物にしようと考えたのです。蟲は春光の中に、睡つてゐるかのやうにうづくまつてゐます。若者は蝸ではないと信じてゐるものゝやうに怖いのでせう。おそろ／＼、それでも首尾よく蟲を尾籠の中に生け捕ることが出來ました。

其の日から、京都の街々に、「蝸」を携へた若者の現はれたのは言ふまでもありません。

「さあさ御覽じろ、蝸ぢや、蝸ぢや、何處へ行つたとてやすく見られるものではありませぬぞ、一生の思ひ出、語り草に見て行きなされ。蝸といふ蟲は我が國には居りませぬ、唐、高砂島や琉球に棲むのぢや、我が國に居らぬがもつての幸、居たら大變ぢや、この毒にやられて皆死に絶えませうぞ。恐しい毒蟲ぢや、大きさは僅か二寸、頭に二つの螯と十二の眼、

體に十八本の脚をもつて居りますぞ、嘘かまことかは見ればわかる、さあ、見なされ篤と見なされ、金は僅か二文ぢや、安いもんぢやろが」

蝸、といふ言葉に通行の揉鳥帽子や市女笠が皆好奇の眼をもつて集つて來ます。そして、皆二文づゝ出しては怖々尾籠の中を覗いて行くのでした。

斯うして一日々々と過ぎて行くうちに、若者が澤山のお金を儲けたことは勿論ですが、なほ彼はこの蟲の出現によつて、別な意味に於ける素晴らしい人生を見出だすことが出來たのです。と言ふのは、彼は世間相手の一つの秘密を懷くことが出來たのです。人々が蝸だと言つて珍しがりまた恐れてゐる一匹の蟲の正體が、自分の家で見つけた極くつまらないものだといふ事を知つてゐるのは自分一人だけであるといふ秘密的の優越感がこの上もなく若者を喜ばせました。なほ愉快なことには、蝸といふ言葉が京都

中に流行してしまつたのです。京都の各所で、蝸といふ發音が、恐しいものゝ代名詞となつて盛んに用ひられるやうになつたのです。一例を上げれば、子守などが脊中の赤ん坊に泣かれて途方にくれた時なんか、

「ほら／＼ お黙り、泣いてると蝸が來ますよ」

といつてあやすのです。すると今までどんなに泣き叫んでゐた赤ん坊でも蝸といふ言葉にびたりと泣き止んだといふこととです。

なにしろ、若者の日々は幸福でした。そして、この秘密をもつ悦びは、彼が人のまへで蟲について大きな法螺を吹くことによつて益々大きくなつて行きました。若者はこの蟲に關して出來るだけの大嘘を作り出して大ぜいの人のまへで滔滔と喋りました。或ひは唐人船に起つた蝸事件、或ひは琉球で一村の人々が蝸のために螯し殺されてしまつた話などまで

とらしく述べて、感心して聞いてゐる人達の様子にこの上もない快感を味つてゐたのです。それから時々、人があまり顔を尾籠の近くによせて覗いた時など、「そらあぶないッ」

と叫ぶ事を忘れませんでした。そんな場合は、殊に女などは悲鳴をあげてとび退いたものです。

さてある日のこと、春もたけ、花も大方散つてしまつて、木々の梢には次第に緑がさしてくるやうになつた夕方です。若者は京の街からのかへりに、蝸のはいつてゐる尾籠といしよに腰に吊して來た一升徳利から酒を注いで一人で呑んでゐました。をりから、山の端に上つた朧月が、彼の興をます／＼深くしました。こんな楽しい晩はこの頃の彼にとつては殆んど普通なのですが、今日は特別に嬉しい事があつたのです。

それは一人の陰陽博士の出現でした。今日例によつて若者が三條の大通りで人

を集めてゐますと、一人の陰陽博士が人を押しのけて出て來ました。そして、大きな髭を捻りながら尾籠を覗きました。が、やがて大ぜいの人たちに向つて、充分威厳を保ちながら言ひました。

「うん、まさしく蝸ぢや、おそろしき毒蟲なるぞ、海來記に書いてあるわ。」

「蝸なる蟲、唐、高砂島、琉球に産する毒蟲にて、その毒は以て數人を斃すに足る。頭に一對の螯と六對の眼を有し、胴はあまたの環節よりなりて脚はなほだ多し走るときは、劍の如き針を垂直にたて、速きこと目に止らず」とな。

まさしく蝸ぢや、このわしが言ふのぢやからたしかぢや。ハツハツハツ」

博士は大きく笑つて、悠々と街角に消えて行きました。その時、博士は、見賃の二文を拂はずに行つてしまひましたけれども、若者を非常に悦ばせたのでした。

「博士と言はれる人さへおれに欺されて

ゐるのだ。あの得意になつて蝸の説明をする髭は今おもひ出しても愉快さ、素晴らしい欺瞞だ、すばらしい俺の頭だ。」

若者は、一人ごとを言つてはお酒を呑んでたのしんでゐます——。

ふと彼の醉眼に映つたのはかの尾籠です。その中には彼の恩人である（蝸と稱する蟲）がはいつてゐるのです。若者は、もう大分酔のまはつたあぶない足どりで尾籠に近よりました。

「あゝ我が君、彼はつゝしんで蟲に話しかけました。」

「御機嫌のことのほかうるはしき君を拜し奉り、臣に、これ以上のよろこびの如何ではんべるべき」

彼は蟲に對して、一人の時はいつも斯んな風におどけるのでした。この素的な祕密を彼自身の胸にしまつておくには、此れ位のユーモアが必要だつたのです。

斯うした若者のあたまを掠めたのは、彼が今まで、人々の怖がるのにつられて、

蟲の正體を知つてゐる自分さへこれを多

少おそれてゐたといふことです。實際彼は家へかへつても、めつたに蟲の方へ手など出しませんでした。それを今氣づいたのです。と同時に、その事が非常に馬鹿々々しく思はれました。なんのこんな蟲が怖い事があるもんか、と口に出して言つてみましたが、まだ、蟲をおそれてゐたといふ事實に對する不快さは消えませんでした。そこで更に、蟲をおそれない證據を確實にするために、しづかに手を尾籠にさし入れて、蟲のあたまを、ちよつとつかみました。

その瞬間です。彼はあつと叫んで尾籠を抛り出しました。指先に麻痺れるやうな痛みを感じたからです。二三歩飛び退いた彼は痛む手を押へながら、蟲の方を見やりました。蟲は平然としてその奇異な姿を見せてゐます。

「こん畜生、蝸みたいになやうに刺しやがるわ」

彼は言ひました。特に、蝸みたいになやうに力を入れて。斯う自分の心に強く言ひ聞かせなければ居られないやうなある不安が彼を襲つたからです。併しこの「蝸みたいになやうに」といふ言葉は彼の心に何の安心もあたへませんでした。手の痛みは次第に増して、忽ち全身にひろがつてしまひました。そして脳はぼんやりとして。だん／＼意識がなくなつて行くやうに思はれました。彼の不安におの／＼心に、さま／＼のことが走馬燈のやうに浮んで來ました。はじめてこの蟲を見た時の事、京の辻々にたつて得意に人を欺したことを、今日の陰陽博士のこと、

「まさしく蝸ぢや、海來記にちゃんと書いてあるわ——」

彼は、突然大地が消えて落ちてしまつたやうな恐怖を感じました。

「自分は蝸ではないと信じて來た。しかし、それに何の證據があらう、自分は今まで勝手に蝸ではないときめこんできた

のではなからうか。さうだ自分は蝸ではないと言ひ切る何らの理由も持つてゐなかつたのだ。」

彼は大聲で泣き叫びたいやうな恐怖におそはれました。そして

「おれは死ぬんだ、蝸に刺されて——」

と、麻痺した脳髓にはつきりと覺つた時に、かの蝸が、尾籠から這ひ出して、古壘をよこぎつて柱をつたはりながら、暗い天井へ消えて行くのを、ぼんやりした眼で、おぼろげながらも見送つたのでした。

修學旅行

京都

五乙 森本 澄

愈々京都に著いた。時に午前四時少し前、歴史の都、優雅な都として聞き、長く憧れの的となつてゐた京都は、未だ黒い帳に覆はれてゐる。

暫く休んだが、未だ少し寝たらない気がした。五時半頃驛前集合。是から楽しい京都見學なのだ。

立ち籠めた薄霧にほんのりと霞んでゐる。京都は本當に美しい。自分の豫想は裏切られなかつた。

まるで詩繪の様に思はれる。東本願寺に向ふ。家々の戸はまだ鎖されてゐて何んの音もし

てゐない。鋪道の上を歩む我々の靴音のみが高く遠くに響く。本願寺の門もまだ閉ざれてゐた。青銅の金具、太い柱、此の門は特に犯す可からざる威厳がある。

待つこと數十分やうやく扉が開かれた。境内の廣大なには驚かされた。直ぐに大師堂に上る、餘り廣くてガランとしてゐた。此の寺の何處かの棟木を上げる時に大抵の物は棟木が大きくて又重過ぎてどうしても上げる事が出来なかつたと云ふ。所が之を無事に持ち上げた云ふ燃ゆるが如き信仰の賜である女の髪、毛の繩を見た。當時はどんなに美しいものだったか知れないが、今では石灰をふつた如く白いものが著いてゐる。随分太いものだ。あれだけの髪の毛を濯ぐ切らせた佛の力の偉大さに今更ながら驚いた。

まぶしい日光に顔を射られながら東方の三十三間堂に來た。實際は六十六間何尺とか有るさうだ。半分程は修理中である。何んだか全體が

八六

見られないで物足りなかつた。第一印象は極めて平凡だ、しかし、之に付屬して長さ百二十米位で高さ六米位の廊下を端から端迄、矢で射とほしたといふのは驚いた。餘程すぐれた腕の持主だつたらう。普通では上に矢がさゝるか、廊下を滑走するかしてすふ。所々に矢の創らしものがあつた。昔此所の射的は可成有名だつたと云ふ。平和な都の無聊に苦しむ所謂「京の人」は、此の行事には嘸かしあこがれたにちがひない。幾多の見物人の中には被衣をかむつた京娘も、さては主人の成功を希ふ家來、郎黨、賣残りの花を頭に戴いた大原女等も居つた事であらう、満身の力を込めて放つた矢があいにく梁にさゝり、又は廊下を滑つたりした時の射手の氣持はどんなだつたらう。見事此の六十六間の廊下を射透して、あつぱれ弓の名人として賞讃され、長く己が武名を後世に傳へ得る事を確信した時の射手はどんなに愉快だつたか。悠長な日を送り又何かの折に己が武術を表はさんとして居た當時の人にとつては、定めし喜喜哀哀の起つた所だつたに相違ない。

滴らん許りの新緑の中をあちこち引き廻され豊國神社に來た。場所は一段と高い。拜禮して

事行

から門の前で、前方の塚や家について説明を開く。

耳塚といふのがあり、石川五右衛門が住んで居たといふ屋根も見える。耳塚の名は朝鮮征伐で兵士が武功を表はす首級の代りに、敵の何萬といふ耳を木の葉でも運ぶやうに切り取つて一緒に運んで、秀吉に見せ、後にまとめて埋めたから起つたのだと云ふ。随分いはれある塚だ。上に供養塔がお粗末ながら立つてゐる。今では朝鮮人に對してはゞかり、警察から説明せぬやうにしてゐるさうである。しかし説明を禁止されてますといつて説明してゐては何んにもならないと笑ひ合つた。

少しブラ／＼歩き廻つたと思つたら方廣寺の釣鐘の所に來た。

高さ一丈四尺、徑九尺二寸、厚さ九寸の鐘は實際見では實に巨大なものである。何處かに國家安康の四字はないかと見廻したが、自分にはわからなかつた。

お、呪はしの鐘よ。よしんばあの四字はすりへつても汝と家康公とをうらまぬわけにはいかない。あの四字の爲に功績赫々として輝いた豊臣家も早く滅びて了つたのである。鐘の銘迄

になんくせつけてまでも天下を取つた、家康公を、自分は此の鐘を眼前にしなぐる非常に憎々しく思つた。

更に近くの方廣寺の跡を見る時は、榮枯盛衰の氣を強く味はふ事が出来る。秀頼公の建立したる奈良の大佛にも劣らない巨大な盧舍那佛の銅像は、四代將軍家綱に到つて背に文の字のある幾萬かの寛永通寶として御姿を消されて了つたのである。今では天保年中に作られたと云ふ木の半體像が、近くの堂内にあると云ふ。入つて見やうと云ふ氣もおこらなかつた。此所はこんな哀れな廢墟、少し南は豪華な豊國神社、其の對照は實にあはれである。なんと薄命な豊臣氏よ、我々は一様に追憶の念に浸つた。清水寺に向ふ可く此所を出た。町に入ると牛車がある

塵を取りに來たものらしい。古文に出てくる牛車を思ひ出して、なつかしいやうな氣がした。こんなに目が昇つてから悠々と歩みの遅い牛に車を引かせて、塵取をしてるのは、悠長な京都の人を表はすに良い材料だと思はれる。家は近代美を誇るビルディング以外は、太い格子戸を立て込み、朱でも昔ぬつたものであらうか赤黒い柱を立てゝゐる。此の邊から思ふと、随分古

くさい。又物凄いく程多く竹のしのび返しがある保守的な氣分が一杯に溢れてゐる。たまに飛び込んだ我々には物珍らしい氣分が一杯に出る。着物は、帯を長くダラリと結んでるし、第一話のし振がとて面白。からかつて見たい位だ。それから清水焼の本場といふ所を見學した。随分有名で焼きも良いのだと云ふが、總じて我我には瀬戸物だと思へなかつた。しかし模様等では、よくこんなに細かいのを焼いたものだと思ふやうなものもあつた。

間もなく阪道を上る。道は細く兩側には墓石が一杯に並んでゐる。谷の底迄も續いてゐる。不圖、徒然草中のあだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ、云々といふ文を思ひ出した。兼好はあの草で人生の果敢なさを云つてゐるやうだが、こんな山で夕方人を焼く煙だの、葬式に用ひた物等を焼く煙が細く立ちのぼるを見たら誰でも良い氣はすまい。實に之は鳥部山なのだ。

清水寺に著いた。幾組か他所の學生が來て休んでゐる。割に險はしかつた阪道なので急に休みたい氣がした。月照と誰だかの墓に參詣して、有名な清水の舞臺の上に立つた。ズツと下の方

法隆寺

五乙 長谷川 宏

ほこりの道をぼく／＼歩く。大きな石が頭を出してゐる長い路だ。藁屋の土壁、庭もあらはに崩潰した土塀の奥に柿の若葉が陽に透いて美しい。燕だ。大和路だ。あの青空の青さから云ひ知れぬ懐古の哀愁が霧のやうに下りてくる。麥畑を吹きまくる風に村會議員候補者の立看板が吹き倒れるまでにゆらぐ。山麓の濃い青葉の中にがっちりした構成とすっきりした律動と嚴肅な黒色を見せて、五重塔がそびえてゐる。自動車が煙を捲き立てて／＼やつてくる。

百濟式とかいふ五重塔や其他の建物の並置を一直線にする形式を改良して塔と金堂とを並べて講堂とを對立させ新しい形式を拮据へた日本人としてのよき素質を發揮するといふ法隆寺である。法隆寺へ一歩入つて先づ打たれるのはロマンチックなものではない。誰しもが造形的な美に酔ひ痴れるか、狂氣の如くこれを追求して把握せんとするか此等に必ず違ひなからう。ぐんと突き立つた強固な直線の美に快い曲線のリズムが加はつていつまで見てゐても肩がこらな

阪本龍馬の墓に來た。今はこんな樂園のやうな京都も、あの幕末には定めし物凄かつたらう。現に我々は新撰組の兇刃に外れたる残り惜しい志士の前に立つてゐる。壬生の新撰組、此の名はどんなに當時の京を騒がした事か。壬生寺から出てくる。あの死神の如き浪士の爲に朝な夕なに京洛の巷には幾多尊い勤王の志士が無残に仆された事であらう。何んだ寂しい様な氣がして我々は無言で地下に眠る志士に對して敬意を表した。

八阪神社より圓山公園を過り智恵院に著いた兼れて聞いてゐた左甚五郎の忘れ傘を探した、骨許りの傘が大切に金網をはられ梁から出てゐる。極めて小さい。ボンヤリしてゐると全く見つからない。案内人に従つて驚駭りの廊下を歩む。豫想外に良く鶯の様な音がする。案内の僧が聲を張り上げ扇子片手に何々の間、誰々の作、と云つて部屋の名と棟の繪の作者を説明する。繪は殆んど狩野家の作だつた。境内が廣く建物が豪華で数多い點はとても關東の寺院等と比ではない。徳川家が直接手を出しただけであつて美しく大きなものだ。此所で我々の團體としての見學は終つた。

から太い柱を立てて、横に四角の柱を幾本も結んで上に此の舞臺と觀音堂が一部上つてゐるのだ。良／＼こんな高く迄木をくみ合はせた物だと感心する。前面は谷で一杯楓があり。新高尾と云ひ左下の方にある小さな瀧を音羽の瀧と云ひ、ともに有名なものだ。説明したが、コセ／＼した小さな物なので馬鹿らしくなつた。此所に立つと京都の西南部が見渡さると聞いたが、露て我我には何も見えなかつた。秀吉は此所に立つて征明の志を起したと云ふ。良／＼人が清水の舞臺から飛んだ氣で物を買へといふが彼處から飛び下りた氣になつたら何んでも出來やう。西門の方からは御所等がよく見える。

全く此所は良い位置だ。清水寺、既に名前だけでも優美ではないか。歌にうたはれ詩に詠まれ來つた東山三十六峯を背に青葉の中に聳り立つ五重塔、西門等は實に美しい。繪の様である。雨に薄霧に又雪に、それ／＼美しい景色を都の人と與へる事であらう。京都の人が物靜かに落着いてゐるのは尤もだ。こんな周りの景色が大いに關係しよう。振り返つて見た美しい清水寺の景色は強く自分の心に焼きついてなんだから去るのが惜しい様な氣がした。

いのである。のんびりした土古人の魂に接するやうな氣持である。塔も金堂も裳階がなかつたらなほ一層だけ美しいことだか。

それから塔内へ入ると私には最も印象の深い素朴な塑像が澤山見られるのである。日本人らしい特質が、上代日本人の個性が大陸文化の影響とともに微笑み息ついてゐるのを感じる。素晴らしいシャルム。何百萬といふ程の金でも持つてゐて、買へるものでもあつたなら買つて歸りたいと思ふのが二三ならずある。實際、昨夜の京都で、京人形の末梢神經的なものに陶酔してた多くの友達が馬鹿々々しく感ぜられる程である。

黒い瓦に空高く九輪に、又南門の金剛力士の筋肉に永い日は次第に傾いてゆく。

鎌倉期の奥床しい黄色い土塀の間の廣い道を東院に向ふ、上にのぞく黄や赤味が／＼つた若葉がさわやかな香りを充たせてゐる。

寶形屋蓋の八角堂夢殿だ。屋蓋と軸部との直徑の比が非常にひらいてゐる。その上屋蓋の傾きの地面となす角度が甚だ小さい。そこになどやかないひ知れぬ優美さが生れて來るのではあるまいか。びんと外端へ曲つた雲へ白雲が悠々

かすれて通る。木の葉がゆるやかに風になびけば破れた障子がはたと鳴る。禮堂をめぐるその背後へ出る。廻廊の外は晩春の草木深く茂つて黒い土さへ見えぬ。陽に透くやはらかな草の緑の中に蓮華草が所々泣き出しさうに咲いてゐる。椿が一株、日の中に蔭と日向の境界を黒い固い葉にはつきり見せてその中に紅色の暗い花をのぞかせてゐる。土塀の隅に池がある。水面は午後の日を反射してあをみどろは朽ちたて、苦むした瓦の如く青いのである。池を半分覆ふ眞黒な葉蔭から何か出て來はしまいかと思はれる靜寂さである。池に若し蛙でも飛び込んだら、その音は高く大空へまで響いてゆくのだらう。

其處此處を草を踏みにじつて一本の朽木のころがつてゐるのを見つけた。勢をつけてぽんと一氣に蹴つてみる。今までこの無作法な闖入者の態度に大きな度量で許し給はれてゐた神が佛か、この飛び散つた朽木に忽然として憤怒を發したかと思はれる不氣味な一陣の青風が肌を粟だたして天からたゞきつけられる。

私一人であることに耐えきれない淋しさを恐ろしく禮堂を廻つて戻れば陽の満ち満ちた夢殿

の明るい土の上には誰もゐない。遅れたなと思つて四脚門から外へ飛び出す。

不開門といはれる南門の白い扉が淋しく閉ざれてゐるさまはさながら廢寺である。門の前にはクロイバが一ぱいはびこつてゐて、日に焼けた素朴な顔をした子供達が遊びに餘念がない。

内宮參拜

五甲 宇野 毅策

伊勢大廟を參拜したものは誰しも神々しいと言つてゐる。彼の西行法師の

何事のおはしますかは知られども

かたじけなきに涙こぼるゝの三十一文字は良く參拜者の氣持を歌つたのであらう。自分は神々しいとは如何なるものか判然とは知らなかつた。此の度參拜出來たので、始めて神々しさを味ふ事が出來た。然し口に言ひ表はすことは出來ない。只敬虔の念あるのみである。

宇治山田市があまりにも近代的の町であつたので、太閤參拜の感しは充分に起らなかつた。だが内宮前の驛を降りて、右に折れると、其所は一面に小砂利を敷きつめた道路で、彼方には

第一の鳥居とそれに連なる宇治橋とが見える。それを見た一瞬間に、我々は敬虔の念に打たれた。列は整ひ、静肅は保たれ、百五十人の足並は宛も一人の足並の如くに揃つて、ザツク／＼と小砂利を踏む音が氣持よく響く。

斯くして五十鈴川の畔に著いた。一同手を洗ひ、口をそゝいで心身共に清め、再び歩を本社の方へ進んだ。老杉益々深く、我々の心も益々落着き、多少寒氣を帯びた。

遂に大廟の前に著いた。一同整列して、組長の一號令の下に最敬禮した。自分には言ふに言はれぬ感じが心中に湧き起つた。其の後自由参拜を許されて、順次に石段の左側を昇つて行つた。石段は少しの技巧もなく、苦むして、三千年の歴史を物語つて居るかの様であつた。昇りつめて、御垣の下で大廟を拜し、思はず最敬禮をした。大廟は東大寺の如き壯大さ、春日神社の如き壯麗さはなかつた。唯土の上に白木の儘で建造された藁葺の社に過ぎない。だが筆や口には言ひ表はせない神々しさが多分にあつた。年上の人は、時々、神佛は青年には信ぜられない、と言はれる。誠に然りである。我々は神佛の存在に對して、半信半疑であつた。然し此

の度大廟を参拜して、始めて神の存在を痛切に感じた。宇治橋前に來た時、自ら態度が整然として來たのや、廟の前で自然に頭が下る様な感じのするのは、一に神の御徳の然らしむるものであるとのみしか思はれない。我が國が神國である事が一層明かになつたと同時に、日本人として生れたことが此の上もない幸福であることが分つた。

大廟を参拜して、日本人なら誰しも神々しさに自ら頭が下らない者はあるまい。若し外國人であつたらどうであらうか。恐らく、藁葺の小さな小屋とのみしか見ないであらう。何故かと言へば、日本は精神文明の進んだ國であり、外國は物質文明に進んだ國である。故に外國人は物質的にのみしか見ないからである。

世界は今や精神的には亂れきつてゐる。そして平和を望んでゐる。ありとあらゆる手段をもつて、然かも物質的手段をもつて、平和を實現せんとしてゐる。果して平和が實現されるであらうか。決して實現されないと思ふ。神國日本が世界に精神的教育をして、指導せざる限り、世界は戦亂の巷を脱することは出来ない。我々は、大廟参拜の時の氣持を永久に忘れない

で、世界の人々をして、神の御徳に浴せしめ、以て人類平和に盡力しよう。

鳥羽の海

五乙 須藤哲次郎

伊勢志摩の海、如何に變化に富み明暗に富み、空想に富んでゐることだらう。自分は此度の旅行で、不圖も此の一隅に立つて、心行く迄此の海の美を味ふ事が出来た。

南歐の風光、地中海の大觀を見馴れた西洋人でも、日本の海岸美には一驚を喫せずにはゐられないさうだ。その日本沿海の美、その美の最も遺憾なく、發揮されてゐるのは、伊勢志摩の海、鳥羽灣であらう。

丁度十一時頃だつたが、遮る雲の一片さへ持たぬ五月の日は、普く水上を照して波の底迄も浸み切つてゐた。あちこちにある島は皆グリーンで染め抜かれてゐた。全く鳥羽の海は穩である。一刷毛の紺青を平らかに流した所に、所に白銀の條が附いてゐる。それは白い／＼夢の國から浮び出た様な遊覧船の通り去つた跡でもあらうか。海は湖の様に其の諸々に大小様々な島がそのあてやかな様を出してゐる。その横

に白帆が立つてゐる。そしてそれはじつと動かない。又白帆りの遊覧船が右手の町の方から小學生を満載して、視界に入つて來た。黒板に畫かれて行く白いチョークの跡の様な形跡を残しながら、音もなく又左手の島陰を縫ふ様に入つて又音もなく視界に消える。上空にとびが／＼五月の光を一杯に受けるが、健康さうに飛んでゐる。急に傍の汽車が神經質さうに一聲叫んで、それが向ふの舟に筒抜けに通じ、そばの海邊から蟹が一匹出て來ると、汽車はまたるさうに／＼と動き出した。海草が少しのさ／＼なみも無いのに、ひら／＼してゐる。光が斜に揺れてゐる。その光の本に眞珠貝に銀色の玉がある。「眞珠だ」から叫んで高く差し上げた。而しそれは音もなく遠くあちらの方に飛んで行つた。はつと思つて腰を擧げた。

左手に白い燈臺が黒みがかつた山のはだの上に、そのうす褐色にはえてくつきりと女王の様に立つてゐる。闇の夜に凡て一分間位宛間を置いて線香花火の様に、夜の一角をくま取る者こそ、彼等て有る。怒濤の響、松の響、風の吼ゆる響、殆んどその凄じい力に吹飛ばされて了ひはせぬかと疑ふ許りのその白面の青年にも似た

その燈臺を自分は何となく畏敬の念で眺めた。その燈臺の中に若い空想がちな青年でもなければ、又富と名譽にも關心の無い丁度禪に臨む態度に似た態度の世の荒波に漂ひはたて老翁、それが靜かに／＼世の中では、とても見る事の出来ない條揚たる態度で海に憫む船人の爲に、その夜の毎の動を怠らない寂しい生活をしてゐる。どんなに空想に乏しい我々でも之を見てはさまざまな想像を起さずにはゐられまい。

天を吞まうとする様な怒濤、絶海に臨んだ絶大な洞窟の奇觀、巨人の天に向つて叫ぶ様な海。それ等と對立させて見ると鳥羽は全く一幅の繪畫である。波動かず、島は處々に展開し、その上の松の枝振、全く鳥羽の海は繪畫である。それ故自分等を空想の土地に行く餘裕を與へさせる。又深く何事を考へさせる靜かさを持つてゐる。平和の海。平和には何事も空想的にな

る。怒濤の海。それは時計のセコンドを刻む様にせはしい心持にならせる。平和の海に育つた人。怒濤の海に育つた人。そこには大層異なつた性質が有らう。

鳥羽の海の景を何時も見て暮してゐる人。自分は何となくうらやましくなつて來た、人魚の

様にはり切つてゐる四肢を躍らせて、水中に入つて行く海女等。何と鳥羽は詩的では無いか。又自分は此の海で味ひ造る事の出来た桃源の人の如き氣持を、自分は／＼保持して行きたい。

横須賀見學記

四丙 須藤泰助

歡喜の我々を乗せた汽車はなだらかなカーブを幾度か描いて緑の林の中を縫ふ。嗚呼我等の眼前には如何なる姿をした横須賀が待つてゐることだらう。思へばやがて東洋を中心とする世界大戦が來るであらう！東洋の中心とは何處を指すのか？勿論日本國である。その時の海の護りは何か、空の護は何か、我々の護國を託すべき要塞は何處？それはこれより訪問すべき横須賀軍港である。今や我々は大なる空想と憧憬とを抱いて彼を訪れるのだ。おゝ天よ！願はくば我が期待に背かしめ給ふな。

午前八時三十分我々は目的地横須賀に著いた。やがて眼前に展開された一幅の情景。あゝ何と感慨の深い景色ではないか！大小島嶼に圍まれたる入江。靜かに停泊する數多の戦艦、

巡洋艦等々。或は遙か地平線の彼方に黒煙を吐いて活動してゐる軍艦。上空には日本國の空の護り戦闘機が数多活躍してゐるではないか。海水は深碧を湛へて今なほ盛に暗躍してゐる。あゝ威風四海を壓する吾が海の護り!!

三笠見學：我々は戦艦山城を見學してより三笠會館に赴く。常盤木の縁を動かす微風は、太平洋に吹き寄せ、海水に漣を寄せてゐる。頭上には午後の日光がキラ／＼と容赦なく我々を射す。やがて三笠會館を過ぎれば、彼方樹間に我等の三笠艦が隠れてゐるではないか! おお三笠よ、我幾度か汝の名を呼びつゞけしことぞ。憧憬への足なみ、自ら歩行を速めてくれるあの壯麗な空気がぶんと鼻を襲うて來た。我々は今や完全に横須賀の心臓に至つたのだ。顧れば今を去る二十有餘年前、我が海軍は彼の世界比無き露國のバルチック艦隊を我が日本海に迎へて之を撃滅せり。その海戦に於ける我が東郷元帥の乗せし偉大な歴史と光輝とを有する三笠艦を見學せんとするのだ。やがて階段を踏んで甲板へと上る。見下せば艦は恰も海中に浮べるが如くそのまゝコングリットを以て、埋められてゐる。これ三笠艦をじ

て永遠の記念物たらしめるためか。やがて案内人につれられて艦内の各所を見學す。甲板を踏めばコッ／＼と音がする。之も當時の歴史を物語つてゐるやうではないか。最初我々は日本海海戦に於ける東郷元帥の我々の同胞に向つて無線電信を發した室を見學した。嗚呼あの昔日日本人を震駭せしめた。「敵艦見ゆ」との通信文。この記憶深く通信文はこのさゝやかな部屋から出たのかと二層感慨を深うした。

それより室外に出て、二歩進んでかの海戦に於て、敵艦を沈没せしめた大砲の廢墟に立ち止まる。今はその跡方消え失せて唯普通の甲板と異ならず。もしその砲を破壊したまゝ保存して置くならば、一層吾人の感銘を深うするのでなからうか。その周圍にはかの激戦中に祖國の爲に殞れた將士の英名が記されてゐた。

あゝ忠勇なる地下の將士達よ、永遠に幸あれ!! 我々は暫し暗然として眼目を續けた。我々一行は各々それより各所を見學す。皆一つとしてかの激戦を物語らざるはない。やがて再び甲板へと出た。

あゝ見よ、見よ! マストの先端には彼の激戦中東郷元帥が各員に命を下したかの乙旗が

かげられてゐるではないか! 二十有餘年前の昔そのまゝの姿である。かの海戦中の騒音が尙耳に傳はつて來る様ではないか! やがて我々は此の去り難き懷の三笠艦に踵を廻らして停車場へと向ふ。

あゝ懷しの三笠よ、永遠に健かであれ!!

棧橋から

四丙 井上 梅作

當日午前三時頃から仕度をして熊谷驛集合四時四十五分、横須賀へ著いたのが八時三十分。驛前逸見棧橋から小舟に乗つて追濱飛行場に向ひました。

途中戦艦・巡洋艦・航空母艦などの巨體に驚異の眼を見張りつゝ飛行場に到着。航空隊の教官から、現在我が國、防空の必要の力説を伺つた後セーラーに連れられて飛行機を見學、空を飛ぶ戦闘機・飛行艇・艦上機などの雄姿、白い飛沫を擧げて著水する勇ましい姿。離水する光景。何一つ珍しからざるものなきところ、格納庫に報國塔玉號がありました。

又愛國中學生號もありました。或は日本一と誇る大きな飛行艇九〇式第一號、翼の長さ二十

九米とか、プロペラ三箇を有し、うしろの尾の上には乗つて戦闘の出来るやう機關銃二挺も据ゑてあります。其の他横腹にも亦機關銃がありました。

又こゝには(追濱)少年航空兵の學校があります。特に今年には熊中生の我々同級生たる藤本正君が名譽の一人に選拔されて航空兵の中に交つてゐます。

晝食も歸り船の中。次に海軍砲術學校を見學。周圍總て高い山、唯海に面してゐる方だけ開けて天然の要害の地です。入口は普通の道路から横に入つて長さ百五十米もあらうかと思はれる長いトンネルで、中は薄暗い電燈が下を向いて燈つてゐる外は何もなく歩いて行く私達の靴さへ見えない位です。中には(砲術學校)三笠の砲塔、四十糎の大口径砲が泰然と置いてゐるのを見ました。其の他三笠の三十糎砲塔、四十糎砲彈(貨物重量約一噸)が置いてあつて高さが一米二十糎位。私達がさへはつた位では元々として動かず。當時三笠が放つた四十糎の偉力は、其の他三十糎砲で實驗したと言ふ厚さ七、八寸もある鋼鐵板が見事穴のあいてゐる光景。山城などの横腹の鐵板はこれより少し厚いとか聞きました。

た。又十糎位の彈丸が鐵板にさゝつたまゝのもの。彈丸の威力を目のあたり見て少からず驚きました。

この學校には生徒は一七〇〇名居るさうです。外から見では決して分らない所です。特に許された者以外一般人の出入を禁じてゐます。次に戦艦山城を見學。全長百九十二米、幅二十八米六十五糎、排水量二九、三三〇トンと言ふ壯大なる姿に先づ目を驚かされました。

次に三笠艦を見學。「皇國の興廢此の一戦に在り。各員一層奮勵努力せよ。」との信號に接した時の我が海軍々人の意氣。嗚呼何と言ふ力強き決心であつたらう。敵彈雨霰の中、彼の當時の東郷大將が泰然と構へて指揮をとられたと言ふ所も見ました。其の前で見た、偶然にも隣家の井上宗一郎さんが三笠艦の中に見物に來られました。邂逅と言ひませうか。其の時の嬉しさ、筆舌に盡し難くありました。

あと海軍工廠の賑かな所も見せて貰ひました。ドックも見ました。

何しろ一日の旅行なので忙しい思ひをして終り、先生方など晝食をなさる場所がなかつたと言ふから驚くではありませんか。熊谷驛六時四

十四分の準備で無事歸つて参りました。(手紙の一節)

三笠艦見學

三甲 室田 進

僕等三百有餘名は横須賀工廠の見學を終へて愈々三笠艦見學に向つた。目のあたりに見る三笠艦は僕の想像よりも相當大きくて、その雄大な姿をじつと何事かを語るが如く横へてゐる。艦に積んである大砲などは巡洋艦摩耶のよりも太さうである。僕等は靴を綺麗にして階段を昇り、後甲板に整列し、案内人に連れられて乙組から順に艦内に下つて行つた。一番始め見たのは我等の東郷元帥が目録戦争當時御召しになられて居つた。軍服及び寢臺等であつた某將軍が彈丸の破片を受けてそれを戦争が終つてから抜き取つたといふ物語りのある彈丸の破片、東郷元帥の最もお側近く飛んで來た彈丸の破片等を見た後東郷元帥と露將軍ポカトフ將軍と歴史的會見を行つた場所へ入つた。案内人の話に依ると當時我が兵はポカトフ將軍をれば將軍と呼んでゐたといふ。曾ては今僕の居る室に於て斯くの如き歴史的會見が行はれたことを思へば

何とも云ふことの出来ぬ一種の懐かしみが湧き起るのを如何ともすることが出来なかつた。ふと見ると左方にはロジニストウエンスキー將軍を東郷元帥が病床に御見舞申した所の畫が吊してあつた。その説明を全部讀んで了はなかつたのは残念だつた。

それから某中佐の書かれた手紙、其の他亡くなられた軍人の寫眞、或は海圖等、又は黄海の海戦、日本海の大戦の時の砲彈の跡、支那軍の艦首の附屬物等一つとして我が興味を唆らなものはなく歴史的物品の僕等の心を別世界に導くやうな感じの大きいものがあつた。前甲板へ出る。見渡すと前方の海は緑のやうであつて、貨物船らしい船が波を蹴立て、進み、上空には九一式水上戦闘機など数機が凄じい爆音を立て、翔つてゐる。自ら我が日本の軍國的精神が全身に充ち溢れるのを覺えた。

僕等は艦橋へ上る。東郷司令長官は此處で指揮をお取りになつたといふ、すぐ目の前には羅針盤の塔が立つてゐる。今思ひ出して見ると少年俱樂部の附録で東城鉦太郎畫伯の此一戦の圖を見た時には元帥は甲板上にゐたものとのみ考へてゐたので三笠艦は随分小さい軍艦だと思つ

てゐた。が今に至つてその疑問が漸く氷解した。この艦橋に立つて遙か彼方を眺めた時の感じ、それは何と云つてよいか分らぬながら、自分が東郷元帥となつて戦闘の間に見える心地で、何となく悲壯にして森嚴なものが湧き出づるやうに起り、何とも云へぬ感が胸一杯に擴つて行つた。

艦旗は高く初夏の風にひら／＼とひるがへつて、艦尾には軍樂隊の奏する勇壯な軍艦マーチの曲、海國男子我等の胸は勇みに勇んだ。飛行場近くで水上飛行機飛行艇などが著水離水の練習をしてゐたが、その壯觀さ我等も同乗してみたい様な氣がした。飛行場に著くと廣場で海軍士官の方から、飛行機及飛行士服裝に就ての有益な御講話があつて後、格納庫内を見學し、遠くから戦闘機や偵察機の美事に著陸する様などを見て、我航空術の進歩した事につき大いに力強く感じた。又もとの汽艇で砲術學校へ向つた。煉瓦つくりの門をくぐり青葉のトンネルをぬけて、いろ／＼の砲を見た。中でも三笠の砲や四十糎砲の彈丸などには驚歎の目をみはつた。こゝにかゝつてある東郷元帥御筆の「百發百中」の額は誠に意義深いと感じた。中佐の方々が我等に御話して下さつてゐる時でも、生徒が皆頭左をして通りゆく禮儀の正しき、學ぶべき事だと思つた。次は戦艦山城の見學である。はじめてみる軍艦内部は見るもの皆珍らしく我等は大いに知識を廣めた。つゞいて工廠やドックを見學し、いよいよ最後に三笠へといそいだ。艦上には意義深い信號が翻翻としてひるがへ

横須賀見學旅行の記

三甲 野口 丘

横須賀驛を出ると薄曇りの空に心地よい涼しさを立て、海軍機上機が何臺も飛んでゐる。直ちに驛前の逸見棧橋から二隻の汽艇に分乗して、追濱航空隊へと向つた。汽艇の煙突からはポツ／＼と青色の輪をばしてゐる。波は舷をたゞき波の高く低くなるにつれ、我等の體も上下にゆれる。港には大小の軍艦が繋留してあり我が乗る汽艇は驅逐艦夕霧の雄姿を見て、次に金剛に敬意を表した。艦首には燦たる金色に輝く菊花御紋章厳めしく、自づと頭が下つた。軍

艦上には意義深い信號が翻翻としてひるがへ

つてゐる。がるもの皆當時の面影をとどめて思ひ出がつかないのである。おもはず對馬沖の様が頭に浮んで來て感慨無量であつた。皇軍の武威をあまねく外つ國に示した三笠の譽れは永久に朽ちないであらう。四面海を圍まれたる我海軍の任務は重大である。盛んな我陸軍と共に、まず武威を海外に高からしむる様祈つて歸途についた。

追濱飛行場見學

三乙 明石 道雄

我先きにと乗込んだ二隻の舟が互に舷を摺れ合ひやがて離れて背中の中程に舟尾緩く滑り出した。左右には我海軍の誇り、ひいては我等の誇りともなる戦艦・巡洋艦・驅逐艦・航空母艦等、が列び我が皇軍に双向ふ夷を來らば戦はんと思ふすれひいて軍港中に待ち構へてゐる。此等の偉大な陣容を目撃し私達は恐るべき何物もないといふ事を確信させられた。巨體の間を縫ひ乍ら竊て私達は追濱にその土を踏んだ。

停機場を出てより上空を威壓する勇壯な翼の飛び交ふてゐるのを珍しくも奇しくその精銳さに感服し飽く迄眺めてゐたのだ。が此處に來て

更によく眺めてみるとその念の増すのを覺えた。案内人に先導されてよく整頓された或る庭へ歩を入れた。此處で海軍の士官から此の飛行場の歴史及び組織等を話された。が就中心に響いたのは少年航空兵を收容し中等の課程を終へて更に飛行の技術を習ふといふ事であつて私は裏心から羨ましく思つた。

此處を去つて海岸へ出ると格納庫の前に水上機が此處彼處と翼を休めてゐた。又見事な離水・飛翔・高等飛行等の熟練さを見せられては我が邊防が強固に儼然と持せられてゐる事が歴然と解るのであつた。

機體も軽く敏速に敵機と戦ふ戦闘機・敵機を探査する偵察機・敵市上に飛來して市民の膽を寒からしめる爆撃機などの活躍が眼前に浮び上りこの機體に偉大な力でも潜んでゐるかの如く思はれて機に觸れてみたがその手先に響いたものはそれではなかつた。勿論飛行機も優秀なものであらう。我が技術家が世界各國と均衡を保つ爲に頭を悩まし國民の聲援の結果生れ出た物で英米佛のそれに比して何等の遜色もない。併し列強の何としても及ばないのはその點ではない。我が軍人の胸奥に潜む物こそ大和武士の魂

旅行の午前

三丙 坂田 操

「チン／＼」と初夏の曉未だ目覺めぬ三時頃私は疾く起床した。今日は横須賀軍港見學旅行である。輕装して薄黒いばかりに包懷された空を見上げながら心地よく元氣に我が家を外に淺井家に村山君も昨夜留まつたので一緒だつた。それから小川君も同道で出發した。風薫る

櫻青葉のトンネルを希望に満ち憧れながら熊谷驛に到着した。最早数人の者が来てあちちに一塊こちらに一塊となつて互に話し合つたり諸語混じりに驛頭を騒がした。やがて午前四時四十五分一同集合し、五時十五分僅僅に充ちた我等を乗せた列車は出發した。途中山川の形勢景物の美、藝術の優劣、都會の大小、關東平野の如何に廣漠たるかに魅せられつゝ改造したばかりの上野驛に到着し、私は第二回の省線電車で壯麗な帝都の門東京驛に向ひ此處より、東海道電車で夢の如くトンネルを縫ひつゝ品川、横濱、大船をすぎて憧れの横須賀についた嬉しさよ。私等は關東武蔵武士の質實剛健の氣風を全うせんと先づ蒸氣船で追濱の海軍航空隊に向ひ、東京灣を包む三浦半島がすかに霞立ちこめ茫然と大濤映波と噴み合つてゐる。嚴然たるいかめしい軍艦を數へながら數分間にして航空隊につき數分間講演ありて將來日本航空界の時局の大勢を察した。それから青波を滑りつゝ上る銀翼の空の王者のはゞたき、機械製作所の設備それが見れば見る程航空界の明治・大正の先輩の意氣に血に築き上げられたる尊い經驗の發露たる飛行機の物づく立派さに感じ得る處が多かつ

だ。又汽艇にて棧橋に歸り、我が海國男子の等しく仰ぎてゐる雄大なる鯨軍艦山城の見學となり、我等の心血は躍つた。あゝ！蘇がへる天地よ。

山城艦見學

三丁 輝元・徳道

我々二行は砲術學校見學を終へて一途山城艦見學に急いだ。途中二、三の他校と通りあつたが其等の生徒とはよく列んでゐたので我が校の生徒はつかれてゐたのか不規則の列び方は非常に痛感した。山城艦の停泊してゐる處に著くと大・中・女小學生又は普通の人など非常時の反映の爲か見學隊でこみあつてゐた。案内兵が色々と注意を與へて二組に分れて衛兵に敬禮して甲板に上つた。

案内兵は親切に説明してくれるが艦中と工廠との雜音騒々しくて詳かに聞くことは出来なかつたが、軍艦とはこんな形してゐる物であると言ふことを見るのが出来た。前甲板に行くと水兵が盛んに體操をしてゐる。軍艦旗翻動として我が國の意氣を示してゐる。格機は高く聳えその根本に煙突のやうな大きな大砲が堂々と突

出してそれを眺めてゐると目がくらむやうである。船室に急な鐵の階段を靴が乾るかと思つてひや／＼として降りてきた。室内は直徑一尺ばかりの黄色に曇つた硝子窓から入つてくる光で薄暗くてはつきりわからなかつた。室の仕切には高さ二十程の鐵板があつて度々それにつまづく者があつた。室内は整然としてせまい處でも廣いやうな感じがする、炊事場では食事終へて後かたづけである。その隣の室には寢道具と洗面器など天井に掛けてある、突然渡りて耳を掩はなければ鼓膜を破れさうな音がしてきた。それは非戸のやうに深くなつた底の方からくる音であつた。それからこんどは足元も見えないやうな機械のある室を命がけのやうな氣持で通つた。白木造りの小さな神社がある、室にきた案内兵が軍艦には艦名の神社の祭神がお祭りしあるのだと教へてくれた、我々一同は禮をしてそこを去る、まもなく急な階段を上つて甲板に出た。

今まで暗い所にゐて急に明るい所に出て恰も夜が明けたやうな氣持がした。それから甲板を下りて三笠艦見學に急いだ。

横須賀紀行

三丁 野本 茂

鶏のけたたましい鳴聲と共に水無月の長い夜は白々と明けて太陽は眞紅に火の輪を描いてここ／＼と地平線上に笑顔をほつきりと出して「グッドモーニングミスター諸君」とさきも言ひたげに我々の方を眺めた。

其の頃我々は帝國隨一の港かつては世界に誇りし横濱港を後にした京濱電車は緩やかな岡の上を走つてゐる。眼下には廣々とした關東平野が一目に見渡され西南には白く雪の衣を纏つた富士山がぼんやり見える。

やがて爆音勇ましい横須賀軍港へと到着した其の邊は一體に小さな砂丘が幾つも幾つも連つて其の向ふに暗い大きな海が限りなく廣うがつてゐる。や絶景だ。K君が突然かなきり聲で叫んだ。雪崩をうつた様に傾斜した山の側面の黒い岩石が日光に照り輝いて黒つやの青光をはなつてゐる。其の彼方、東京灣に浮ぶ軍艦の五つ六つ浮上つて繪の様に遠望される。

汽艇にて追濱飛行場へ向ふ、四邊は毛氈を敷きたるが如し。青松點々として小島あり、銀の

如き海鳥鳴き叫びながら一幅の名畫の如し。見渡せば海は一面の霞につゝまれてぼうとしてゐる。併し其の霞をすかし見れば大きな怪物が胸をひろげ悠々として呼吸してゐる。汝の英姿こそ永久に我が心中からぬけないであらう。空には飛行機が爆音勇ましく横轉、逆轉、宙返り等の戦技訓練を行つてゐる眞剣ぶりを見よ何んたる壯快ぞ我が心は躍る。されど船は何物も感ぜぬ夢の中の様に靜かに動いてゐる。

上りの汽車中

二丁 石坂謹之助

『まあそこへかけろ。』大久保先生が小此木君に、おつしやつた。小此木君が僕の直ぐ傍へ腰かけた。先生は馬場君の傍に腰かけてゐるやつしやる。『吹上から鴻巣』に來た。甲組の新井君乗る。『そこへ腰かけない。』先生が小此木君の行つた空の座席を、指された。『あゝ此の袋は何んだ。』『辨當です。』新井君が、大久保先生の質問に答へる。『これはバナナで、これがキャラメル、林檎だ。』『はい、さうです。』すつかり當てられちやつた。『北本宿。』小川君來る。『大宮。』岩瀬印東君乗る。窓を見ながら荒山・小川・岩瀬・馬

場・小此木・橋本君達と、話しさゞめいてゐるうちに汽車は『浦和・赤羽・川口鐵橋。』とまた／＼に過ぎて行く。眞に『今は山中、今は濱』の歌だ。『赤羽』著す。そろ／＼大東京市だ。目の見える限りは家・家・家だ！また煙突の林。『尾久』附近に遙かに遠く「ガスタンク」を見たガスタンクの稱あつた市立一中に轉校した秀才「中村達夫君」を想ふ。汽車は『日暮里』を経て『上野』に著いた。

宮城

二甲 少此木 英信

『嗚呼何と言ふ立派な宮城だらう。私は強く感じた。何とも言へぬ嚴かさには私は重い足も元氣附けられ自然と歩調を取らせた。やがて砂埃を立て、二重橋前に集合した。私は感激にむせぶ胸を抑へつゝふるふる聲で「最敬禮」の號令をかけた。私は此の時程光榮を感じた事は無かつた。』

『あゝ我大君、千代に八千代に榮へ給へ。』と心に念じ頭を上げた。

私等は無量の感激に打たれ、口一つ利く者もなき靜寂の中に踵を廻らし、お濠に沿うて櫻田

科學博物館

門に向つた。

二丙紀陸一夫

私は病氣のため、十三日の修學旅行に行けなかつたので、十五日の東京日日新聞埼玉版に出た二年生一行の寫眞を見た時、若し自分も行つたなら、この寫眞の中に加はつたであらうと残念でした。其の後旅行費を戻されたので、科學博物館だけでも觀たいと思つて、二十一日の日曜に行つて見ました。上野に著いたのは午前八時半、科學博物館に著いたのは九時十五分前でした。九時の開館をまつて、はいりますと、先づ理工學部陳列場で、光學器械や航空機、電氣に關する器械があつて、實驗の出来るやうになつて居ます。次に二階に行きますと、動物學部陳列場で群馬縣吾妻郡に於て捕獲したといふ熊を主題とし、同地方の山林狀況を示して、大は鳥類より小は昆蟲類に至るまでの生活狀態を觀せたものや、アカシの雌雄を中心として、本邦東北海岸の生物相を觀せたもの、其の他、はげわし類の生息、トナカイの生息陳列は悉く眞に迫つてしばらく立ち去ることが出来ませんでし

日新新聞社

二丙 權田龍太郎

九八

た。それから高松宮家より御寄贈の大しやこ貝や、マンモス牙の化石の大きいのに驚きまし
た。植物學部陳列では、菌類、藻類、有毒植物

僕等は多大の喜びを胸にいだいて、世界屈指の大新聞社なる日日新聞社見學の爲に壯大なる彼の建物の中に身を進めた。

問も無く階段の處に行き順次に登り始めた。曲り迂つた階段は、くるくると渦卷の様にどんなめぐりながら登るのであつた。傍にエレベーターがあつた、僕等が三階頭迄來ると、下から上つて來たエレベーターが御苦勞様と言はぬ許りにすつと僕等を後にして上つて行つた。「エレベーターに乗せるといふな、あもうくたびれちやつた。」と誰かが力の無い聲で言つた。全く僕もこの通りであつた。歩かぬ様で大そう歩いた僕等の足は丁度棒のやうであつた、此の上階段を幾段も登らせられては到底やりきれなかつたのだ。

我慢に我慢を續けて漸く七階に著いた。其處には廣々とした講堂が有り、正面には一段高い場席が設けられ、中央には椅子がずらりと整列されてあつた。

僕等は此所で晝食を取る事になつた。皆思ひ思ひの椅子に腰をおろした。一齋に辨當の包を開く音が、がさ／＼と起つた。へこ／＼にすいた腹の中に夢中で食物を運んだ、社員らしい人

がやつて来て僕等に時間割を書く紙と新聞の出来る迄と題する小本を配つてくれた。皆珍しさに其の本を見ながら辨當を食べて居た。

すると今度は熊中先輩の馬場さんがお出でになつて色々と僕等に話をして下さつたので、つかれも忘れ、旅行の愉快さを一層深く味ふ事が出来た。次には活動寫眞をやつて見せたりしていただいたのでお陰で旅行の晝食が大さううまかつた。お湯を貰つてのんだり、用意の果物を食べたりに又元の元氣にかへつた。

いよいよ印刷機械等の見物にうつるのだ。整列して先づ屋上の傳書鳩の室を見た、室の中には僅かに數羽の鳩が残つてゐるだけで他は皆僕等の見學を感謝するかのやうに、羽音高く僕等の頭上に大きな圓を描いて居つた。

夢の間も休む事の無、大東京を眼下に見下して又元のめぐり階段を下りた。先づ第一に電燈室を見、次に寫眞の現像室、亞鉛板を製造する所、とはつきりと頭に残つて居ないが、皆その急がしさには、目がまはつてしまひはしないかと思ふ程であつた。殊に輪轉機のするづけてあつた所のやかましき、急がしさは、どう言つて表してよいかわからない。白紙が順々に輪轉機

動物園

二丙吉野諭吉

科學博物館、新聞社見學等の後、愈々動物園へ向つた。

私の頭には獅子、虎、象、水禽等の遊んでゐ

る様が次々に想像されて行つた。間もなく動物園へ著いた。門に入ると、色々な動物の聲が我等を迎へるやうに聞えて来る。

白鳥や鶴や樺太犬等の小屋を通りすぎると、向ふに岩を背景に、獅子や虎等の猛獸連の小屋が見える。駈けて行つてみると、獅子は四肢をふんばつて晝寝の眞最中である。遠い故郷のアフリカの夢を見てゐるのかも知れない。其のとなりの獅子は雄獅子である。檻の中をのつそのつそと歩いてゐる。精悍なる眸、房々した鬣、頑丈さうな四肢、威嚴のある顔、何處を見てもさすがに百獸の王に恥ぢない。虎、凄い顔をしてゐる。千里の數も一走りすると言はれるだけあつて、恐い體軀だ。向ふの小高い坂の下に在るのが野猪や鹿の世界である。木の間越しにさし來る初夏の緑の光線を受けて、彼等が遊んでゐるのは、實に長閑である。野猪は豚の祖先であると教はつたが、誠にその通りだ。つき出た口、きたないからだ、不格好な短い足、全く豚そっくりである。

駱駝の小屋を通り越して、左に折れると、狼や狐や狸がゐる。彼等の前に來るといやに臭くてたまらない。天竺ねずみが向ふに猫の仔のや

うにたくさん居る。皆頭を金網におしつけて、思ひ／＼に批評して騒いでゐる。

少し行くと猿がたくさん居た。大きいのは、小さいのはあはせて二十匹餘り。鐵柵とセメントに圍まれた中に在る、高さ七八米位の岩の上に、猿糞としてたはれてゐる。リンゴや色々な食物をなげてやると、岩かげから二三匹小猿が駆け来てたかと思ふと、もう取りつこをしてゐる。取つた方は上の方へかけあがつた。そして横かじりにがじつてゐる。中には親の脊に負ぶさつて、なげて貰つたドロップをなめて居る可愛らしいのも居る。どの猿を見ても皆可愛らしい。やがて四時に集合し、順次此の懐しい、面白い動物園を去つたのである。

長 瀬

一乙 松本 悦治

ごろ／＼と果てしなく續く無數の奇岩を見た。美しい、急激な、荒川の銀の波を見た。どぶん、どぶん、私の歡びを引寄せる銀の波は、太岩をかみ、小石をさらつて、實に壯觀を呈してゐる。廣い川原に吹き渡る風を身に受けて、岩に腰を下して、おすしを頼つた。

今を盛りと萌え立つ若草、まるで緑のトンネルそのものである堤の若葉、伸びる力、太る力が山間の草木に流れて、皆緑、緑だ、空はその緑に映えてくつきりと爽やかな感じを與へる。

吐く息と共に轉び出る自分の希望の總てが、激流を一直線に進んで行き、それがどこまでも延びて行く様だつた。「萬歳！」と叫んだ。私はいつまでも初夏の荒川に見とれてゐた。

旅行の一節

一乙 上杉 武男

野を越え、山を越えて、電車は矢の如く進む。電車の中では、朗らかな話、愉快な話で満ち満ちてゐた。

「僕のせんべい食べないか。水さどうもあるぜ」
「では、えんりよ無しにもらふよ」このせんべいいうまいや、もう一つおくれよ。あうまかつた、では僕も出さう」とK君は僕のひざの上に、無造作にキヤメルをおいた。「ではもううぜ」と忽ち口の中にほうり込んだ。其の時、急に電車が止まつたので、ひざの上にあつたせんべいが落ちさうになつた。「おッ」とツツと僕は忽ち拾つた。

ち拾つた。

英語の先生が僕等に乗つてゐる車に來られた。片手に英語の新聞をお持ちになつて……
K君が「先生、其の新聞、すら／＼讀めませんか」と聞いた。すると先生は「さうだね、讀めないね」と言はれたので皆が、ばく笑した。

今度はいよいよ武川だ。僕のクラスの組長、松本君が乗るのだと思ふと、急にあひたくなつて、頭を窓の外に出した。「危いぞ」とK君が大きな聲でどなつた。僕は驚いて、いそいで頭をひつこめた。まるでかめが頭をひつこめるやうに……

向ふでは、仙場君が、赤い紙テープをふつてゐた。

やがて長瀬の近くに來た。絶壁の間を荒川が轟々と流れてゐる。これを見たK君は「愉快愉快」と、大きな聲で言つた。電車は我等を乗せて、秩父に刻々とせまつた。

旅行の一節

一乙 布施田三代太郎

集れ／＼と休息所の方から聞えた。岩の上に

て行く。やつとのことと寶登山神社へついた。

車中から

一丁 山崎 高紀

居た僕は急いで降り休息所のわきの草原へ行つた。まだ繪葉書や化石・やうかん・蜂蜜等色々な名物を買つてゐる者が有つた。皆集まり奥村先生から少し話が有り長瀬へ向つていよいよ出發した。

電車は、今波久禮の停車場を出た。もう此處は秩父郡内に入つたらしく、なんだかあたりの様子が變つてゐる。今まで遠くに見えてゐた山も、すぐ目の前に、悠然と美しい姿を現はしてゐた。中でも目立つて高く見える山があつた。傍の渡邊君に聞くと、それはあの有名な石灰岩の取れる、武甲山だと教へてくれた。靜かに山の美をおさめて高く雲表に聳え、淡霞がかすかにこめてゐるあたり、しみ／＼と我を忘れて、私は山の神々しさを感じた。電車はひやりとするやうな、朝の冷たい空氣を吸つて、刻々谷間へ／＼と疾風の如き勢で轟進して行く。遠近の家は皆築屋根で、一般に質素である。さうして今すきや、鉄などを持つて、畠に仕事に行かうとしてゐる頃であつた。すると目のあたりに、山麓と山麓との間に桑畑が見えた。そこに何か河の様なものがあると思ふ、その瞬間眼前に展開された風景は、秩父鐵道沿線中第一の壯觀であらう。一寸すべれば落ちる目のさめる様な斷崖

秩父紀行

一丁 岩淵 義章

日はかん／＼と照り皆汗をふき／＼歩いてゐる。岩の上や砂の上を歩いて遊船のつないで有る所迄來た。そして此處で少し休む事になつた。岩のかげで涼んでゐる者、かにを水の中へ入れてゐる者又石を投げてゐる者も有つた。僕は岩のかげで休んでゐた。すると集れの號令がかゝつた。集ると奥村先生が「野口先生がこれから岩の話をして下さる」とおつしやつた。野口先生は長瀬の岩に就いて色々話をして下さつた。佐藤先生の持つてをられた蛇紋岩を見せて話して下さつた。

話が終ると直に寶登山神社へ向つた。途中驛前で消防手達に會つた。僕は「せいに」をぢさん競走して勝つちやつた」と言ふと「電車だからさ」と苦笑した。松の植ゑて有る坂道をどん／＼登つて行つた。皆暑いかくたびれたのか「もうぢきつけばいゝなあ」とゆつくり／＼歩いて行つた。「水が有ると言ふと皆ばら／＼」かけ

青々と茂つてゐる松林や、まばらに、山つちの花が咲いてゐるのは、初夏が來た事を思はせる。すべり臺で手を痛くした所を撫てながら、皆で松林を出た。見れば、見あげるばかりに、岩が重なりあひ絡したゝ程の木々が、鬱蒼と茂り、清い荒川の水が、白煙をあげて流れてゆく。そよ／＼と吹く風もどかに、うすく霞がたなびいて、初夏の長瀬は本當にほがらかである。先に行つてしまつた人は、もう影も形も見えない。餘り長く石を見てゐたので、はぐれたのだつた。けれども、此の荒川べりに沿うて行けばいゝんだと思つて、白いのや黒い石が起伏してゐる河原を、轉ばないやうに足を踏みしめ踏みしめ進んだ。ざ／＼と歩いてゐる足の下まで波が押し寄せて來た時、「ピクツ」とした。ふら／＼

と體が動いた。狼狽て、傍の草をつかんだ。未だ胸がどきどきしてゐる。後から来る皆の足音に気がついて、やうやく歩きはじめた。カリツカリ、どくつの下に打つてあるかすが、石にあつて、こんな音を立てながらすべる。岩につかまり、草にしがみつき、まるで猿の様にからみもつて歩いた。しきり風が、しんせんな空気をふくんで吹き過ぎた。「チラー」遙か向ふに、黒い帽子が三つ見えた。もう少しだ。カア

登山

白馬登山の記

五甲 松本文二

鳥が啼いて松林の中へかくれた。ゴウゴウ、一ぱいの泡をあげて、まるく波紋を描いてゐる。川向ふの岩は前の岩より斷崖絶壁になつた様だ。峨々とした岩が積みあがられ、青い苔がむしてゐる。臆病な僕は、こんな険しい所を通つたことがないので随分こはかつた。おかげで、汗だくになつて了つた。そして、やつとの事で難關を通りぬけて、休まうとしたが、皆が来るので、又あつちの砂の上をほこりをたて乍ら、川に沿うて急いだ。暫く行つたと思ふ頃、何人位くるのかと思つて、流れる汗をふきもせず振りかへれば、五、六人ゐた。これもひたすらに急いだ爲であらう。随て苦心のあげく、やつと向ふの方の休み場所に、一ぱ

もう一月も前なので、はつきり覚えて居ないが、出發したのは確か熊谷のお祭の一番始めの日であつた。午後六時四十三分の上りで赤羽方面に行く。新宿でバシを買つて、其處から四谷迄、一直線て乗り換へ無してある。王躍甘の登山客の爲の臨時列車なのださうだ。途中松本驛の混雑は素晴しかつた。汽車から下りる人の殆ど九十九％は登山者で、頑丈な身ごしらへて、皆私より強さうな身體である。此處で下りるのは南アルプス登山の人らしい。四谷で金剛杖とカンジキを買つて、其處から、ボロ自動車二股迄行く、それから本當の登山である。

私は今度白馬登山をするにあたつて、姉にも登れた位だから大した骨は折れまいと思つて居た。と言つて馬鹿にしたわけでは無論無い。校長先生の幾度も言はれた緩歩不急と言ふ言葉を相當良く守つて行つたつもりである。勿論團體であるから一寸位くたびれても自分勝手に休む事は出来ない。又誰でも、先に悲鳴を上げるのが恥かしいので、皆速く歩くので豫定より早く猿倉小屋とか言ふ所へ著いた。其處迄に於ける道は、普通の山と少しも違はず、今秩父の山の中を歩いて居るのだと言はれても不思議は無いと思はれる程だ。其處で數十人の人が休んで居たが、ざつと見て學生四分に一般人六分位であつた。私等は、うづかり小屋へでも這入つて金を取られてもつまらないと思つたので、少し上

ゐるよ」と云つたら、傍にゐた柳田先生が「あれは怪猫だよ」と云はれたので、僕等は笑ひくづれた。のどかな初夏の風に鳴りひびく松の囁をきゝ乍ら。

の方で休んだ。先生が私等に持たせられたトマトを出して、皆うまさうに食ひはじめが、私は嫌ひだから少し困つた。あまり長く休むと時間を取るので直ぐ出發。まだ此處いらには雪は少しも無い。登つて行くにつれて、時々頂上らしいものが山の麓から、ちら／＼見えるだけである。今度は、幾分山らしい所になつて坂も急になり、汗も出て來たので、皆、シャツ一枚になる。そのシャツも汗でびしょ／＼になる頃には幾つもの峠を越えて、一寸小廣い所へ出た。其の時急に物凄く寒い風が吹いて來て、皆の春中をひやりとさせた。誰々と言ふ音もする。川である。それも激流が全く文字通り岩を噛んで流れて居る。非常に急な流れなのでそれが岩にあたつて物凄く音を立てゝ居るのである。此處へ來る少し前からこの音はして居た様だ。べつと春中にはりついたシャツを離して岩に掛けて乾かす内、岸の近くに行つてその水に觸つて見たが、とても冷たい。十秒と指を入れて居られない位である。良く見るとその流れは雪の下から來て居る。もうこれからは大雪湊であるから其處で充分休息を取る。激流が岩に突あつて、もう／＼と水煙りが立つて居る。身體へか

かると流石に良い氣持である。新宿で購入したパンを擡げる。折からどうやら雲行があやしくなつて來た。之からは雪の上を歩くのだから雨に降られては一大事である。あたり一面がだんだん薄暗くなつて來る。ちつとして居るわけにも行かないから、カンジキつけて登り出した。もう此處いらへ來ると足の強弱が俄然見えて來て、強い者が皆先になる。我々五年生は殘念ながら皆後の組である。大分歩いた頃上を見たが、まだまだ先がある。大分遠いらしい。恐ろしく肥つた四十歳の伯母さんが強力に尻を押して貰つて登つて居た。あんなに年を取つてしかも女の肥つた身體でよく登山する氣になつたもんだと思つた。

又下へ下りて行く。あまり雪溪が長いのでそろそろ心細くなつて來た。何しろどちらを向いても白、皚々たる雪だ。皆、口数も少なく、黙々として登つて行く。雪溪は山と山との谷の様な所にあつて、兩側は切立つた様な崖と普通の山である。左側には、高山植物が美しく咲き亂れて居る。寒いけれども、氣分は實に良い。富士山の様に「お山は晴天」六根清淨なんて誰も言はないが、氣分は全く同じ様に清淨潔白である。誰も、小屋へ行つたら誰の鐘詰から食はう」などとは思はない。途中、一寸平たい所があつて十四、五人の人が休んで居たが私等が行つたら代つて登り出した。むしろの様なものが、敷いてあつて、それへどかりと腰を下すと、もう全くぐつたりして了つた。所が、それでは、未だ雪溪の半分位らしい。石原が富士山より骨だと言つたが、成程、本人大分疲れてよろ／＼登つて居る。先に其處に著いて居た者と一緒になつて又歩き出す。

遂に雪溪が終つた。ほつとしながら、岩のごつ／＼した所を這ふやうにして登つて一先づ雪と別れる。先づ眼に付いたのは高山植物だ。黄色い小さい花が歩く道にまで咲いて居る。もう

頂上へ来た様な氣で得意になつて下の方を見たら。来るわ、まだくとも、大勢、次から次へと登つて来る。暫く其處で下の方を見て居た。霧は無い様でも、全體に薄く有るものと見えて、下の方から来る人が、もう無いと思つても、一定の距離迄来るとぼんやり姿が解つてそれが次第に濃くなり、後からくともそれが續く。私は、こんなに大勢の人が行つて、山小屋へ泊れるかと思つて心配したし又、何時迄下を見て居ても仕方が無いので、今度は皆離れぬ様揃つて登り始めた。多くの登山者の中には抜いたり抜かれたりする内に見覚えが出来る。もう、考へる事は唯、「頂上へ」「頂上へ」である。随分登つたと思ふ頃、ばつと眼界が開けて、山小屋の屋根が、直ぐ側に見えた。先生が、その小屋へ行かれて、熊谷中學校のとまる所を開かれると、頂上の小屋だと言ふ。直ぐ眼の先に見えて居るが相當の距離である。右手は雪で、左はなだらかな傾斜である。ずつと向ふには旭居とかと聳えて居る。目的が見えて居るので張合もあつて直ぐ、その小屋迄行けた。心配した通り小屋は皆満員である。どうやら、その一つに割り込む事が出来たが、その隣りの小屋が未

だ少しあいて居ると言ふので私と外四人が其處へ行つた。何處の中學生か、先に居た人達がわあ、騒いで居た。だんく薄暗くなつて来て、氣候は非常に寒い。シャツを三枚も着たが未だ寒い。全く冬の様である。夕日の沈むのを見たが非常に美しかった。二見ヶ浦の夫婦岩のそれなどは問題にならない。何しろ大きい山だから壯觀である。何方が東だか南だか見當も、つかなくつたが、日本海がすかに見えてその左に旭岳があり、その方に太陽が、雲を美しい様々な色に輝かしながら沈んで行くのである。全く、筆舌に盡し難いと言つても取て過言ではあるまいと思ふ。今考へて見ると白馬で、御來迎よりも、その方が私に取つては、はるかに美しく思へた。又、非常に感傷的に頭について居る。七時頃になると大分暗くなる。暗くなる時間は、下界と大差は無さうである。小屋へ這入つて眠らうとしたが中々眠れない。もつとも、始めてこんな高山に登つたのだから無理も無い、おまけに小屋は、満員である。所がその時、小屋の人が来て言ふに、外へは、もう這入れないので、少し此處へつめて貰ふと言ふのである。此の上這入れるもんかなどと怒鳴つた人も居

たが結局、入れる事になつた。所がその一團が女學生だつたので、騒いで居た何處かの中學生の内、大きい者の方が、他の小屋へ行く事になつて、その間、實に混雑を呈した。それで、私も、上を向いて寝ると、いくらか餘計に面積を取ると言ふので、皆、横向きにならせられる破目になつて了つた。それがまた、隣の者と方向を反對にするので、よごれきつた足が頂度自分の顔の所に来る、それが、狭いために苦しくて足を動かすので、顔に、あたるのである。それでもどうやら落ついたので、妙な事には家の事などを考へ始めた。今頃家では、俺が何して居ると思つて居るだらう、なんて思つたのである。これで、今夜眠れなければ、明日の歩きに困ると思つたり、下界を離れて、こんな高山で、何處から来たのか解らぬ、見ず知らずの人達と一緒に一夜を明すのも又一興などと思つて居る内、到頭、明方まで深い眠りに落ちた。

朝は薄暗い内から皆起きて居たらしかつたが、私は長く眠つた。眠り足り無いわけではなかつたが、何だか、残り惜しい様な氣分で、起き出した。朝食も大變な朝食で、普段ではとて

も食へたものではなかつたが覺悟が出来て居た

から、食ふ事は出来た。その後が、登山者の必ず拜すべき御來迎である。私等の泊つた小屋から頂上までは、ほんの少しだ。少し登つて行く」と雷鳥が居るから、天然記念物だから注意しろ」と言つた様な意味を書いた立札がある。注意して登つて行つたが、そんなものは見えなかつた。氣候は昨日に増して寒い。唯氣候が寒いだけなら良いが恐ろしく冷たい風が吹いて居るので、一行の内、シャツを薄く着て居た者は、大分寒さうで、氣の毒な様であつた。頂上に著いて見ると、先づ富士が見える、かなり明瞭に青色に浮上つて居る。下の方は、雲で見えないが、流石日本一の名山、實に堂々たるものであつた。御來迎は一寸も綺麗だとは思はなかつたから印象に残つて居ない。けれど勿論、普通熊谷近郷で見るそれは問題にはならない。全く繪の様な美しい山々が、右に左に展開する。高山の味はひは實に此處である。振返つて下を見ると、自分等の泊つた山小屋は直ぐ眼の下で、その向ふに又小屋がある。その間雪もあれば、花もある、寒い事は甚だしいが何しろ壯麗な眺めである。不圖、金剛杵を見ると、白馬岳頂上又「杓子鑢縦走」と焼印が押してある。昨日からず

つと使つて来た杖だし、又焼印などが、眞黒く押されてあるのを見ると、妙に値打の有るものの様に思へて、何となく、得意で誇りがましい様な心持になつて、それを持つてドスンと突立て、見たりした。先生は、三脚を延してその廣壯な景色をカメラに収められた。山では誰でもさうであらう、何とも言へぬ爽やかな氣持が盛に體內に起つて来る。こんなのを浩然の氣とも言ふのか、兎に角、寒いのを超越して存分に高山の氣を満喫したのである。

事夥だしい。その頂上へ、やうやく、登りきつた頃から雨が降り出した。あまり疲れたから、歩くのが嫌になつて了つて大分休んで居た。それから大分歩いて、左手に廣い坂の様な所へ出る。上手な人達は、杖を腰にあてがつて、とても樂げに下り下りするが、我々には出来得べくも無い。神妙に下りて行つた。其處で、二三人登つて来る人に會つたが、そちらからも登るものらしい。坂を下り切つて少し行くと又雪がある。その邊で辨當を開いたのであるが、その辨當たるや、大きいむすびが二つである。確か、上にのりが巻いてあつたと思ふ。梅干が二つ中に這人つて居た。腹が空いて居たから相當美味かつたが、それでも、二つ食べきれない。二つで三十銭なのだから、一つ拾五銭の貴重な、むすびも一つ半きり食へなかつたのである。山小屋では、外のものも皆高い、キヤラメルが十二銭、之などは、まだよい、サイダーは四十銭もする。もつとも、下から運び上げるのだから無理も無い。私はもうそれからがなんに長いとは思はなかつたが實際長い。白馬温泉迄も随分ある。其處で四十銭のサイダーとキヤラメルを買つたが、サイダーは飲みきれなかつた。湯に這入つ

兵營見學

兵營見學感想記

五甲 小島 貞男

吾等五年生は四月二十八、二十九日兩日にわかつて兵營宿泊を行いました。

私達が一步兵營に足を入れて最初に感じた事は「百聞一見に如かず」と云ふ古語であります。私達は毎年先輩から色々兵營見學の感想を聞きました。が今度實際行つてみて私の軍隊兵營に對する概念が見事裏切られたのであります。

私達は此の見學によつて種々な事を見、聞き又感じましたが、私は軍人精神に就て感想を述べてみようと思ひます。

軍人精神とは何か。簡単に云へば軍人に賜つた御勸諭を以て表し得ると思ひます。即ち誠を以て此の御諭を遵奉する精神であります。

一旦緩急ある時はよこんで國家の爲に命を捧げる我が軍人精神こそ最初に宣せられた「軍人は忠節を盡すを本分とすべし」と云ふ御諭の

發露であります。

第二に「軍人は禮儀を正しくすべし」とおぼせられてあります。軍人の敬禮の正しい事は諸君も周知の事と思ひます。數人の兵士が一團になつて足並そろへて歩いてゐるのが到る所で見受られます。これには寧ろ不思議さを感じました。併し時々中の一人が「頭右」「なほれ」「頭左」と云つて居ります。翌日が觀兵式でしたのでその練習だと思つてゐましたが其後もやつてゐた所を見るとやはり上官に對する敬禮だったのです。

七時頃になると夕陽の彼方此方から「エイエイ」と云ふ勇しい銃劍術の氣合が聞えて來ます。聞けば餘り上手でない者が必ず勝たんが爲にかく一心に努力してゐるとの事でありました。戦へば必ず勝つ吾等軍人の裏には涙ぐましい努力があるのであります。かくて「軍人は、武勇を尙ぐべし」と云ふ御勸諭を寸時もわすれないのであります。

(昭和八年八月二十五日記)

た先生も居る。大して良い景色の所ではないが雪はまだある。雪がある位だから、氣候は勿論寒い、だん／＼下へ下りて來るに従つて暑くなつてくる。太陽が香中からあたる所があるし、長い、林の中を通る事もあつて、同じ人達と抜いたり抜かれたりして行く。結局私等の一行は外のより早かつたらしい。二股迄行くのに確か一回か二回きり休まなかつたと思ふ。汗と埃で眞黒くなつて、耳をいぢると埃が黒く手の指に附いた程である。全く、くた／＼になつて二股に着いた。のどがから／＼に乾いて居たので其處で飲んだサイダーの美味かつた事は話した。ならぬ程だ。もうお了ひだ。登山下山總て終つた。後は乗物か。かうなると、人情で急に名残り惜しくなる。四谷から松本迄、電車だつたか汽車だつたか、うつすらとして物覚えもない。何しろ、その中で良く眠つた。松本で時間の有る事三時間餘り、市中を少し見學した。しのめ」とか言ふ處で乗換へて、一路熊谷へ……どんなに疲れても、どんなに苦しくも、親しい友達と又、先生と、一緒に旅行するのは、後になつて考へると實に楽しいものである。

最後に「軍人は質素を旨とすべし」とおぼせられてあります。軍人の質素なる事は云ふまでもありません。體操をやつてゐるシヤツの如きは或は肩が出或は背中が見え時には腕の無いものもあります。

併し此の嚴格そのものゝ生活の中にも太い強い愛の脈が流れてゐます。

夜になると不寝番が三十分毎に廻つて來て同胞をい／＼せわしてくれまゐります。私も二度ばかり手を入れて貰つた事をぼんやりおぼえてゐます。そして次第に遠くなつて行く足音に唯々感謝するばかりでした。殊に病人に對しては手拭をしぼつて頭にのせて行きます。私はかく嚴正なる心の反面にかくの如き愛を見出したとき何とも云へぬ感激にうたれました。

抑々吾等國は國民皆兵であります。軍人精神即國民の精神でなければなりません。軍人に賜つた御勸諭は吾等國民均しく遵奉すべき道であります。私達の學ぶべきものは多々あります。併し私は此の精神こそ最も吾等の學ぶべき事だと思ひます。

兵營見學記

五乙 原口 清一

兵營と云ふ言葉だけでも嚴格そのものゝ表徴であるかの様に、我々の頭に深く先入觀としてもぐり込んでゐるせいもあるが、兵營に一步入ると急に周囲の空氣がまるで違つてゐるのに氣が付く。さう思つて見るせいか、目に觸るゝものに入ると、皆いかめしく、威嚴的に感ぜられる。

日頃こそ、相當に、羽振を利かしてゐた五年生も、此處では全く赤子の如き存在であるのは、驚くと共に苦笑せざるを得なかつた。

敬禮の嚴正なこと申すに及ばず、號令から足並みに至るまで、總べてが總べて、はち切れる様な活潑と、腹の底から惨み出る様な底力の強い聲とで横溢して居て、見るからに溜飲の下るやうな動作である。三人乃至四人が一組になつて各中隊の各班に割り當てられて、い／＼軍隊生活の一端をうかがふ事になつた。

先づ兵令の中に足を踏み入れるや、其處に右往左往する兵士が手に手に銅や、バケツや、アルミの碗などを持つて忙しきうに、立働いてゐ

た。今丁度楽しい夕食の仕度らしい。班に入つても何も爲す事も無く、全く手持無沙汰で、唯唯兵隊さん達の働き振りを異様な面持で見つめるのみであつた。

忙しい中にも、特に我々の爲に、御馳走を、より分けて呉れた厚意に感謝して、働いてゐる兵隊さん達には濟まないとは思ひながら、勧められるまゝに時間にならぬうちに、有名な軍隊の飯に箸をつけた。無恰好な事夥しい——丁度我々が、教練の時使ふ油鹽とでも言ひたい様な

——でこぼこの碗に山と盛つた飯を前にして、思はず喰つた。こんなに食べ切れるか知ら？折角の御馳走を残しては申譯けないと思ふものの、半分だけはどうかか食べられたが、もうこれ以上食べたら胸が苦しくてたまらない。ソイツと蓋をしよつとしたら、當番の人が此れを見て笑つてゐた。自分の入營當時の事も思ひ出したのかも知れぬ。初めの間は一寸近より難い氣がしたが、そんな氣持は忽ち吹き飛して、無二の親友となつて、大聲で話し合つた。兵隊さんの愉快な話の中に同郷の人が意外に多いのには驚いた。きび／＼して、元氣の話を我々も大いに共鳴した。嚴格な中にも此の和やかさ。實に

羨やましい程である。

兵士は外出の時も歸つた時も、誰に向つて、もなく不動の姿勢で「某は、只今何處より歸つて参りました。」など、ありつたの大聲で叫ぶ。初めは唯、怒號としか思はれず、少からず度膽を抜かされたものだ。八時近くだったかと思ふが、點呼が始まり、班長殿が来るのを待つ間、一同整列して、一上等兵の號令で、銃をとつて、立射の構へを續け様に、百回近くもさせられたのは閉口した。此の調子では何をやらせられるか分らないとヒヤ／＼してゐたが、それ以上何もなかつた。

班長殿が來られて、明日の天長節に就いて、非常に細かな點にまで及んで注意があつた。

消燈と共に、ベッドの中にもぐり込む。毛布がチクリ／＼と容赦なく刺す。幸に南京蟲（兵隊は終臺蟲と呼ぶ）の攻撃はなかつたが、その儘では手も足も、まして身體も容易に動かせない窮屈極まるベッドには、不馴なせいもあるが、相當参つて了つて、眠れぬうちに早や十二時になつて、我々の不寝番の時間となつた。

不寝番とは、兎や角言へば可成り、六ヶ敷し

いものかも知れぬが、大體の役目と言へば、兵營内を見廻はつて、寢相が悪くて、風邪をひきさうな者に注意をし、身體の工合悪い者の面倒を見たり、その他室内の種々な事務に關して注意するのである。

あの宏い兵營の中も、一日の疲れにぐつすりとなつた夢路を辿つてゐる、いびきの他は、全く森閑と静まりかへつてゐる、不寝番も無事に終り、再びベッドに入つて今度はぐつすり寝られた。

翌朝は天長節の佳日で、からりと晴れ渡つた大空は、陛下の萬歳を壽ぎ奉るかの如くであつた。

嚴かな軍旗の奉迎の式の後、我々は隊伍堂々

と、觀兵式場代々木に向つた。

かくて我々は全く短い間ではあつたが、百開は一見に如かずで、得る所非常に多かつた。百開今でもまざ／＼と當時の光景が浮んで來る。

觀兵式拜觀の記

五丙 木 島 工

けふ四月二十九日、寶算滿御三十二歳の御誕辰を壽ぎまつる天長節觀兵式を拜觀するの榮を

得たる我々熊中五年生は、午前八時、一點の雲も止まず晴れ上りたる大空の下、風薫る代々木の原に到りて、西端に位置し、肅として御臨場をお待ち申上ぐ。

練兵場には最早、南軍事參議官の指揮の下に、近衛、第一兩師團の精銳一萬四千は、喇叭の音も勇しく、ヒシ／＼とつめかけてゐる。

やがて、言ひ知れぬ靈氣の突如として原頭に漲れるを感じ、參列の諸員をはじめとし、立錫の餘地もなき様を呈してゐる一般拜觀者に至るまで、一時に口を失ひたるが如く、森として聲なく壓するが如き靜寂に、思はず襟を正せば、遙か前方にあたつて、軍樂隊の君が代の吹奏の、湧然として起るを聞く。

今や、大元帥陛下には、龍瀕いとも麗しく、著御あらせられたり。

一齊に神宮の森にこだまする「捧げ銃」の號令に、陽光に照映えて、一望の劍の林が樹立する

九時、天皇陛下には御愛馬「白雲」に乗御、燦として輝く天皇旗を先頭に御英姿颯爽と近衛歩兵一聯隊から、順次に御閱兵あそばさる。

あゝこの御盛事、拜する者唯と有難さ、畏れ多きに涙するのみ。

やがて九時二十分。馬上御豊かに、玉座の御前に御愛馬を進めさせ給へば、突如として湧き起る軍樂のマーチにつれて、玉座の御前近く地上部隊の分列行進開始す。

此の時、南方上空に爆音ひびき來り、下志津飛行學校長淺田中將の指揮する、九一式戦闘機をはじめ、八八式一型、同二型偵察機、甲式四

體育大會

第五回體育大會記事

理事 小島 貞男

體育大會は五年生の後にのこすべき最も重要な行事の一つであり、これをより以上立派にする事は吾等の義務である。

吾が熊中體育大會は第三十一回卒業生の英斷と非常なる努力により昭和四年に生れ、以來或ひはニニホームに或は諸設備に年と共に改革され向上し來り昨年度に於て全くその完成を見るに到つた。本年度五年生は此の大會を一層ゆるぎなき體育大會となす爲に、精神上的の統制即ち

我が校の校訓たる質實剛健の精神と吾等の信條とを發揮し、而して此の道を今後永久に持續すべき事を宣言した。

十一月三日、吾等の信じてゐた如く文字通りの日本晴だ。見よ！ メンマストの上紺碧の空にひるがべる日章旗を！ それをかざつて四方に下る萬國旗を！ グランドにくつきりういてゐるホワイトライン！ 我等の胸はいやが上にもどる。見る／＼大會の準備は出來た。

明治節祝賀式完了と共に全校八百の健兒は場内に集合した。

併し此の時だつた、校長先生から皇室の御不

幸を聞いた。誰しも一様に悲傷の色がたゞよつた。そして吾等均しく此の大會を眞面目に熱心に、而して此の體育の爲の大會でふ名に負かぬ事を一層固く心にちかつた。忽ち國旗は下され擴聲器もなりをひそめ場内一面に此の緊張した氣分に満ちた。

元氣な合同體操が終ると次は五十米だ。一年二年、三年……競技は次第に進む。召集係の力強い聲が聞える。待つてゐたとばかり飛出す選手。判定係が出發決勝を極めて敏活にやる。少し後れると進行係の活躍が見られる。記録、賞狀係が活躍する頃には、已に擴聲係の元氣ある聲がする。かくて全校一致、競技はドン／＼進んで豫定よりはるかに速い。

九時、十時になると接待係整理係が忙しくなる。門前から來賓席まで叮嚀に案内する接待係の親切。整理係の嚴格。又救護係もめざましい午前の競技は勇壯なる騎馬擬戦を以て終ると三十分たつた。いよいよ五年生の模擬戦がけじまる。本年度の模擬戦は舊來の陳腐なものを斷然一新した。強固な堡壘によつた敵兵は彈丸を雨と送つて我に頑強に抵抗する、此程の事におそれる熊中軍にあらばこそ、工兵二ヶ分隊引つれ

た大隊は、勇敢にも突進又突進敵の鐵條網に前進を阻止されたかと思ふも東の間、忽ちおどりに見事破壊成功。保壘に突入するや背後にかくれた打撃部隊の逆襲!! あはやと思ふとたん中隊長の突撃命令。かん聲の中にひらめく銃剣! 觀衆はたゞ手に汗をにぎり聲も出さない。而して最後の兩軍大分列行進は一段の光輝をそへる。

野外演習

秋季一泊演習記事

五乙 濱 良一

十月二十五日朝、うすら寒さを感じる位で、すつきりと洗ひ濡められた秋晴の青空に秩父の山々がくつきりと映えて居た。

七時三十分集合、人員點呼が終る。

八時萩野先生より「行動開始。本日は絶好の演習日和であり又畏くも大元帥陛下には北陸の野に於ける演習を御統裁遊ばされて居る。此の佳き日に諸子は元氣に行動されん事を望む」と

言はれ且爽爽をなくさぬ様等種々の注意を受けていよ／＼全校生徒八百六十七名は行軍の途についた。

荒川大橋よりは堤防上を行進した。

三年以下が先頭の爲歩度が小さく従つて行軍の状態は概ね良好であつた。

途中一回休憩して三本に著いた。

こゝで三年以下と別れ畠山に向つて一時間六

軒位の速さで行進し始めた。

あまり速い爲行軍も稍と亂れ勝ちであつた。

先生は最後尾に居られて皆の志氣を鼓舞して

居られる。

十一時二十分頃、畠山重忠公の墓に到達した。一同着剣敬禮の後十分間休憩した。

重忠公の墓は石が三つ重ねてありその圍ひの門には公の紋章であらう桐の紋がついて居た。

八百年この方寂しく此處に建つて居たのであらう。

智勇兼備鎌倉武士の典型たる公の郷里がこの武藏なるを知りて吾々の中で感奮せぬ者があらうか。

其所を去つて十二時荒川河原に出で渡河演習を開始した。

二十五名づゝが舟の中で向ひ合つて坐り銃を立て、渡つて行く。

秋の強い日射しが藍を流した様な水流に反射

してキラ／＼と輝く。紺青の空、澄みきつた秋の大氣の快さ。一群の水鳥が川上さして飛んで行つた。渡つた者は向岸で晝食を始め、まだなが／＼番の廻つて來ぬ者は此岸で晝飯を喫した。

零時五十分、豫定よりも四十分早く渡河し終つた。

此渡河演習は誠に齊々とは行はれて殆んど理想

的だつたであらう。

此處で萩野先生の畠山重忠公に關する講話があつて後、直ちに行軍にうつり五年生は秩父街道を通つて瀬山の鎮守の森に達し、四年生は武川驛側を通つて長在家に在る武川村役場に達した。

兩軍とも著くとすぐ(午後二時頃)先生の注意を受けて後飯盒炊事にかゝつた。

長途の行軍に疲れた列員は珍らしさに皆元氣を回復して笑ひ騒ぐ聲があちこちに起つた。

是より想定に基づく演習が開始された。

想定 南軍

一、軍ノ左側ヲ掩護スベキ任務ヲ有スル南軍支隊ノ左側衛タル熊中大隊ハ十月二十五日午後五時其先頭ヲ以テ武體十字路ニ達ス

二、大隊長ハ同時刻我ト略同等ノ敵午後二時本庄ヲ通過シ東兒玉方向ニ前進セル情報並大隊ハ本夜大麻生附近ニ位置シ支隊ノ左前哨タルノ命ヲ受ク

三、其他略ス。

北軍

一、敵ノ左側背ヲ脅威スベキ任務ヲ有スル北軍支隊ノ右側衛タル熊中大隊ハ本庄方面ヨリ前

進シ十月二十五日午後五時其先頭ヲ以テ武川村丁字路ニ達ス。

二、大隊長ハ同時刻略我ト同數ノ敵午後四時熊谷ニ進入セルノ情報並大隊ハ本夜武川村附近

ニ位置シ支隊ノ左前哨タルノ命ニ接ス

三、其他略ス

編成

統裁部……里見先生。萩野先生。中村先生。喇

叭小使傳令

南軍……西村先生。五年全員。三小隊ノ一中隊

北軍……丸山先生。四年全員。同 右

北軍にあつては午後三時二十分丸山先生は分

隊長以上を集めて次の命令を下した。

中隊ハ今夜武川驛附近ニ位置シ左前哨トナリ

右ハ荒川堤防ヨリ左長在家北方十字路ニ互ル間

(右ハ鐵道線路之ヲ合マズ)ヲ警戒スベシ

(研究事項)

各小隊分隊長以上を集め現地に誘導し小哨配

備を指導す。中隊歸還四時四十分。直に小隊長

以上に次の事項を命ず。

「小哨配備の略圖調製」

五時頃夕食終り、夕開あたりに立こめる頃小

哨配備も終つた。

南軍にあつても、右は昌福寺前の三叉路より

左は鐵道線路まで(但し線路は之を含まず)に互つて歩哨を配備した。

兩軍の距離凡そ一千米、歩哨線の距離は五百

米位であつた。

やがて日が没し、月が青白い光を下界に投げ

る頃となれば俄然緊張の度を増し、不氣味な戦

場の氣分が漂つて來た。

六時半頃より吾等記事係は兩軍の歩哨線をま

はつて行つた。

北軍……二十米位づゝ離れて歩哨が立つて居

た。皆緊張して居て眞剣味に溢れて居た。

淡き月光に薄黒の影を投げて立つ彼等の姿は

御國の爲に赤誠に燃えて滿洲の野に立つてあら

うその姿と變る所はないのだ。

道の右側に三ヶ所と道の上一ヶ所道の左側

に一ヶ所歩哨が立つて居た。

南軍……南軍の歩哨は北軍に比して緊張味に

おいて缺ける所があつたと思ふ。

道路上とその左右とで三ヶ所下士哨及び複哨

がおいてあつた。

又兩軍とも斥候を出して盛んに偵察を続け兩

軍とも前哨の居る極近くまで斥候に入り込まれ

た様である。

然し南軍中には歩哨線を無視して入り込んだ者も居た。

かくの如く前哨勤務を續けて居る中に月は全くかくれて咫尺を辨ぜざる暗闇となつた。

時に九時三十分頃であつたが北軍は急にその第一小隊を以て夜襲の舉に出た。

四邊は暗澹たる上に黒づくめの服裝の爲や、もすれば前の者を見失ひさうである。

四十名位の者が黙々として續々と續き、只隠さうとしても隠せぬ靴音のみがあたりの静寂を破る。

南軍の歩哨線たる五合林まで來ると突然「誰かッ」と許り歩哨が躍り出したが忽ち捕えられ夜襲軍は逃げる他の歩哨の後を追ひかけて進んだ爲、田の畔の様な狭い所へ入り込みや、手間取つた。

やがて敵陣に近づくと皆の胸に一種の感激が湧く。

既に南軍では斥候の報により敵の夜襲を知つたが只騒ぐばかりで統制が取れずに居る中に急に北軍が攻め込んだ爲、敗戦に終つてしまつた。

此の時夜間にも拘らず發砲した者が一人有つ

たのは惜しいことであつた。

北軍は直ちに引き上げたが奮慨した南軍は直ちに逆襲せんと八幡の森の中で整列して、全軍が逆襲の途についた。

逆襲を豫想せる北軍は歸還するとすゞ全軍が三列に重なつて、最前列が膝射ちを後列は立射の構へをして敵を待った。

暫くすると歩哨が一名走つて來て敵の逆襲を告げた。

南軍は途中より二手に分れて前後より「ロー」と攻め入つた。

時に午後十一時二十分であつた。

此の時より兩軍は前哨勤務をやめて、休憩に入つた。

記事係は北軍の方へ來て休んだ。

役場の前に二つ掘つた燈へ一杯おこした炭火のまはりへ皆集つた。

夜が更けるに従つて寒さはますます激しくなり炭火の光に皆の顔が赤くカーツと反射して居た。

疲れ切つて建の土に寝て居た者もあつた。

然し大部分の者は元氣だつた。

やがて午前二時十分役場の前に集合して、あ

やめも分らぬ闇を縫つて廣瀬南端の河原へ向つて出發した。

途中南軍の陣して居た八幡の森の側を通つたが既に出發した後でひっそりして居た。

二時三十分頃記事係は秩父街道を大森生邊迄來てしまひ、氣がついて河原へ向つて細い道を入つて行つたが、此の時より道を失ひ、あたりは眞暗な爲目標もなく道を懷中電氣で照して、軍の通つた形跡の有無を見たり、或時は河の瀬音を聞いて足音ではないかと思つたりして一時間餘りも河原をさまよひ、結局再び秩父街道に出て廣瀬迄行き其所から河原へ出たが、方向を間違へて進んだ爲なから軍と出會はなかつた。

然し午前四時頃、斥候の衝突の爲に放つたらしい銃砲の音を聞き、その方向に進んで行つて漸く南軍の斥候と會つた。

やがて夜がほの／＼と明け渡り、午前五時頃畑に面した山林の前に長蛇の陣をはつた北軍と、其の三百米程前方に之に對して陣をはつた南軍との間に戦機いよ／＼熟し、午前五時二十分俄然壯烈なる拂曉戦の火蓋は切つて落された銃口から吐き出される火、白煙、兩軍最後の

總攻撃にその銃砲の音は山野にこだまして物凄く、ものゝ二十分程の間黎明の静寂を破つて大決戦が續けられ、兩軍遂に猛烈なる白兵戦に入らんとした時、休戦ラッパが高らかに鳴りわたり、こゝに二日間に亘る演習は終つた。時に午前五時四十五分であつた。

戦後其の場に整列し、統監部萩野先生の御講評があつた。

之を左に略記する。

行軍……歩度が速くない時は概して良かつたが三本より重忠公義迄は、歩度が太であつた爲隊形が亂れた。

前後の距離が開いてしまつたならば漸次之をぢめる様にせよ。落伍者の一人もなかつた事は喜ばしい。

渡船……始めてとしてはよろしい。一回平均五分であり又比較的静肅であつたが、云ひつめた注意は之を確守せよ。

前哨勤務……概して良かつたが各自が自己の職責を忠實に果さねばならぬ。歩哨中には自分の特別守則を知らぬ者があつた。又斥候が歩哨線を無視して入るのは宜しくない。

斥候同志がぶつかつたならば避けて通り又歸

る時には次回に味方の部隊を率ゐて來られる様しつかりと目標を知つておくべし。

夜襲……小哨や前哨では夜襲の力はない。夜襲は敵情偵察や油斷に乗じて敵を壊滅させるにある。

陣地占領……指揮官は斷乎たる決心を以て部下を掌握すべし。

指揮法……夜間のは拙劣であつた。然し四年は比較的巧く行つた。

本演習は全く徹夜、眞に一睡もせず其の間には急行軍、渡河、前哨勤務、夜行軍等初めての行事が多かつたのであるが諸君は終始熱心に奮闘して唯一人の故障者もなく元氣よく終りを告げた事は誠に喜ばしい。此體驗が諸君の將來に何物かをもちたらずであらう事を信ずる。

右の講評があつて後、南軍を先頭にして、全軍歸校の途についた。

未だあちこちの叢には哨煙がたなびいて居て凄絶なる戦を偲ばせる。

朝露に濡れながら河原を脱け、疲れて居るにも拘らず堂々たる行軍で校門をくぐつた。

七時三十分元氣な分列式が終つて、校長先生の訓示があつて後解散した。

校報

學校記事

十一月二十四日 本日ヨリ三日間模範試験ヲ行フ
十二月五日 教練査閲 査閲官松井中佐殿來校 本縣ヨリ齋藤屬來校 査閲ヲ行フ 放課後松井中佐殿ノ講話アリ (講堂ニ於テ)
十二月九日 學期末一齊査閲開始
十二月十五日 大蔵生河原ニ於テ御親閲記念發火演習ヲ行フ
十二月十六日 支那問題講話 講師後藤清太郎氏(午後講堂ニ於テ)
十二月二十四日 第二學期終業式 常識考査ヲ行フ
一月一日 新年拜賀式舉行
一月九日 第三學期始業式
一月二十日 竹田少將閣下來校教練視察
二月十一日 紀元節 午前七時十分高城神社ニ集合正式參拜ヲ行フ 紀元節拜賀式舉行
二月十三日 本日ヨリ五年生大考査開始
二月十八日 四年生以下雪中行軍(大蔵生)
二月二十四日 本日ヨリ四年生大考査開始
三月六日 第三十四回卒業式舉行

三月九日 午後陸軍記念日記念講演ヲ行フ
三月十日 本日ヨリ三年以下大考査開始
三月十八日 終業式
三月二十二日 本日ヨリ三日間入學考査
四月四日 始業式及ビ入學式ヲ行フ
四月十四日 一日遠足(上岡方面)
四月十七日 本日ヨリ身體檢査開始
四月二十八日 五年生ハ軍隊宿泊見學ノ爲メ近衛第二聯隊ニ行ク
四月二十九日 天長節祝賀式舉行
五月三日 小學校長トノ懇談會ヲ行フ
五月八日 五年生關西旅行
五月十三日 二年一年修學旅行(東京)
五月二十七日 海軍記念日 マラソンレース
五月三十一日 臺灣生蕃ノ講話ト舞踊
六月一日 四年三年修學旅行(橫須賀)
六月六日 第五限ヨリ渡邊博士ノ講演アリ演題「武藏武士」
六月十六日 野外教練(荒川村岡方面)
七月七日 本日ヨリ大考査開始
七月十日 下村督學官來校視察セラル

七月十二日 新任廣瀨知事御來校視察セラル
七月二十日 武道大會 終業式(第一學期)
九月一日 始業式(第二學期)
九月四日 元本校教諭西内先生及ビ卒業生五名來校放課後講堂ニ於テ座談會ヲ開ク
九月十八日 第六限講堂ニ於テ滿洲事變記念講演ヲ行フ(荻野先生)
九月二十二日 野外教練(荒川大橋上流方面)
十月二日 高城神社祭典ニ就キ五年生參拜
十月六日 第三十八回開校記念日 記念講演 講師關口泰氏
十月十四日 加瀬功司氏 餘興 筑前琵琶 内海旭春氏
十月十八日 五、三、一學年父兄會ヲ行フ
十月十八日 トラホーム檢診(明石校醫)
十月二十一日 武道大會 劍道教士鈴木祐之丞氏來校 柔道七段橋本正次郎氏來校
十月二十五日 野外教練 四五年ハ本島武川大蔵生方面二日間三年以下ハ御正ヨリ大沼公園方面一日終了
十月三十日 教育勅語奉讀式ヲ行フ
十一月三日 明治節祝賀式舉行 式後體育大會ヲ行フ
十一月十日 國民精神作興ニ關スル詔書奉讀式ヲ行フ
(以上自昭和七年十一月至八年十一月)

昭和八年度上級學校入學者

學校名

卒業年度

氏名

東京高等師範學校	陸軍士官學校	成城高等學校	新潟高等學校	水戸高等學校	浦和高等學校	同前	松本高等學校	第一高等學校	山形高等學校	濱松高等工業學校	同前	橫濱高等工業學校	米澤高等工業學校	同前	同前	山梨高等工業學校	長岡高等工業學校	仙臺高等工業學校	桐生高等工業學校	福島高等商業學校	同前	名古屋高等商業學校	東京高等工藝學校
七	七	四修	六	六	六	七	四修	六	四	七	六	六	六	七	七	五	五	七	五	五	七	七	六
長島芳雄	酒卷益次郎	小島正人	新井文作	松本豐吉	木村眞作	根岸忠雄	福田行康	新城之介	白倉毅	松村辰男	宮本藤孝	木村眞作	松崎茂	元島政晴	小根山秀敏	塚越壽	小根山秀敏	元島政晴	塚越壽	白根久男	根岸松三	鴫田勝次	瀧澤敏夫

東京商大豫科	七	大野禮次郎	同前	中村夫一
北海道大學豫科	六	新井文作	同前	加藤清三
上田蠶絲專門學校	六	奈良傳吉	同前	小林誠一郎
東京蠶絲專門學校	五	齋藤利一	東京師範二部	坪井英之助
東京外國語學校	三	川田武平	早稻田大學專門部	宮崎弘
宇都宮高等農林學校	六	奈良傳吉	岩手醫學專門學校	細沼端
岐阜高等農林學校	六	松本豐吉	同前	加藤甚一郎
東京美術學校	七	吉岡辰夫	東洋大學專門部	野地正男
東京高等商船學校	五	島田茂三	日本齒科醫專	鈴木正男
埼玉師範二部	五	島村邦周	早稻田大學專門部	鈴木正男
同前	七	新井六三郎	同前	川添祐三
同前	七	島村勝次郎	明治藥學專門學校	長野正喜
同前	七	小新井徹雄	日本大學醫學部	鈴木正男
同前	七	清水介良	中央大學專門部	新井源三
同前	七	福田正保	東京醫學專門學校	新井源三
同前	七	寺崎三郎	東京藥學專門學校	齊藤利一
同前	七	宮下清郎	慶應豫科	安部俊男
同前	六	柳沼新十郎	早稻田高等學院	柿原忠
同前	七	磯邊重雄	日本大學工學部	鈴木辰男
同前	七	神沼清三郎	日本醫科大學	吉田弘平
同前	七	江袋文男	同前	村上弘平
同前	七	小新井徹雄	慈惠醫科大學	小林勝三
同前	七		農業大學豫科	栗原四郎
同前	七		弘前高等學校	萩原正治

早稻田大學專門部	七	小久保	職員現任所調 (ABC順)	奧村守正
早稻田專門學校	六	岩井光藏		小澤守一
以上				荻野孝之
明石有鄰		熊谷市熊谷		荻野孝之
秋谷博愛		北足立郡田間宮村		澤野小太郎
福永晉作		熊谷市二葉町松本方		佐藤長次郎
伊佐山重二郎		同、女子校裏		鈴木憲三
今井慎五郎		同、錦町一六四		高城俊三
井桁銀一郎		北埼玉郡中條村今井		田原節夫
小林晉助		熊谷市櫻町通東		土岐照治
圓子經雄		同、箱田五一五		佃久米太郎
九山清藏		同、二葉町一〇六三		田中米太郎
眞下子藏		大里郡榛澤村榛澤新田		若林米太郎
西村眞藏		熊谷市箱田四七六		横田俊夫
南日凱夫		同、箱田五九三		山岸諒三
野口延男		同、鎌倉町三三二		柳田武夫
中村三郎		同、熊谷八一		以上
長山三郎		同、榮町		
岡田嘉一		同、箱田五一五		
大久保喜一		同、熊谷一〇六五		
大和伊平		同、上石原秋山方		
大村武男		同、箱田三三		

部 報

競 技 部 藤 井 浩

「スポーツの目的は勝つことに非ずして全力を揚げて戦ふことである。」
此の語は昨年は勝つことに非ずして全力を揚げて戦ふことである。否、オリズムビツクの言葉では無く凡ゆる人に與へた偉大な教訓である。然し一步踏み込んで考へれば、全力を揚げて戦ふためには自己の有する力を能ふ限り延ばして行かねばなるまい、戦ふ以上勝たねばならぬと思ふのが人情である即ち勝利を目的にしてゐるのである。然もこれ無くして勝つべき原因となる努力が盡せる理由がない、野心があるから努力ができるのである。斯かるが故に正々堂々と戦ふ人には無意味である。その語は強い敵あるを見て辟易し戦はずして終るが如き卑怯なる徒に與へた暗示である。
茲に一人のスポーツマンがあるとする、彼は只管勝利を得んために努力を重ねた、これ以上の努力は彼にはできぬと信ずる迄努力を積んだ。斯くして待望の日がきた、彼は今日こそ日頃の努力の効果を表す時ぞと勇ましく出場した、が然し彼は落選してしまつた。
其の時彼はあれ程迄の努力が最上の苦が報いられないのを怨むであらうか、否々彼は自己の盡した努力が最上であると信ずる限り然も自

分のそれが能力であると信ずる限り彼は寧ろ満足の笑を漏らすであらう。彼の知人がそのとき彼に「あんなにおやりになつてこれではお氣の毒でしたれ。」と言つたとき彼は笑つて答へた「私は決して口惜しくない、私の努力は報いられたのでない、私の過去の努力は充分に私の魂の中に刻まれてゐます。これが眞のスポーツの尊い所である。小なりと雖もスポーツマンはこれを知れ。」
我々は昨年の不振をとりもどすべく北に赤城西に秋父の寒風を物とせず又強い日光の下に猛練習に猛練習を續けた。去年の卒業生諸兄は今年は全く見送ないと見てゐたのをちつと腹の中で噛みしめて本年度第一回目の我等の活躍の殿堂上長瀬運動場に新緑をついて人々は躍る、折しも五月二十一日、快晴。
百 米 四着 藤井 十二秒
四百 米 四着 塚越 五十九秒三
千五百 米 五着 奥川 四分四十三秒
八百 米 繼走四着 熊中(藤井・高橋・浅見・塚越)
走 高跳 決勝 二着 高澤 一米六〇
五着 齊藤 一米五五
繼走の意外の敗因は第一走者と第二走者のバトンタッチに依つたが結局我々は昨年の如き荒川の氷に快哉を叫ぶことができなかった。沈

み切つて熊谷に着いた。そのとき誰の顔にももつとやれば駄目だと
言ふ心が現れてゐた。
其の時から一月位後即ち六月四日(晴)不動岡中學を迎へて對校競技
の火蓋は切られた。
一部戦績(十五歳以下) 二九・五對二四・五で敗

百 米	1. 平野(不) 一二秒五	2. 村岡(熊)	3. 荒井(熊)
四百 米	1. 平野(不) 一分二秒六	2. 村岡(熊)	3. 萩野(不)
千五百 米	1. 松井(不) 五分九秒	2. 村岡(熊)	3. 萩野(不)
走 高跳	1. 鈴田(不) 一・五〇米	2. 齊藤(熊)	3. 金子(不)
走 中跳	1. 鈴田(不) 一・五〇米	2. 齊藤(熊)	3. 關根(不)
砲 丸	1. 齊藤(不) 十米三一	2. 中島(熊)	3. 武井(不)
圓 盤	1. 中島(熊) 三十米八九	2. 齊藤(不)	3. 齊藤(熊)
槍 投	1. 武井(不) 三十九米五〇	2. 坂本(熊)	3. 高橋(不)
繼 走	1. 熊中チーム(荒井・齊藤・村岡) タイム	一分五十三秒	
二部戦績	三十三對二十二 勝		
百 米	1. 藤井(熊) 十二秒二	2. 栗原(不)	
四百 米	1. 武藤(不) 五九秒八	2. 塚越(熊)	
千五百 米	1. 仙場(熊) 四分四二秒四	2. 奥川(熊)	
走 高	1. 高澤(熊) 一・五五米	2. 浅見(熊)	
走 中	1. 浅見(熊) 一・五七米	2. 藤井(熊)	
棒 高	1. 藤井(熊) 二・八〇米	2. 栗原(不)	
砲 丸	1. 武藤(不) 一〇・三四米	2. 塚越(熊)	
圓 盤	1. 御正山(熊) 二五・一〇米	2. 塚越(熊)	
槍 投	1. 松本(不) 三九・四九米	2. 平川(不)	
八百 米 繼走	1. 熊中(高橋・藤井・浅見・塚越) タイム	一分四六・八	

斯くして試合は四時五十分終了した。續いて六月十八日(月)、本庄
中を迎へて奮闘した。
百 米 1. 藤井(熊) 一一・八秒
二百 米 1. 藤井(熊) 二五・九秒
四百 米 1. 萩原(不) 五八・八秒
八百 米 1. 仙場(熊) 二分二〇秒
千五百 米 1. 仙場(熊) 四分四二秒
五 千 米 1. 不明(本) 一八分二〇秒
走 中跳 1. 不明(本) 五米八二
走 高跳 1. 青木(本) 一米七五
三段跳 1. 不明(本) 三・二〇米
棒 高跳 1. 不明(本) 二四・八四米
圓盤投 1. 不明(本) 一〇・二八米
砲丸投 1. 不明(本) 三十五・七六米
槍 投 1. 不明(本) 三十五・七六米
八百 米 繼走 本庄チーム タイム 一分四五秒
此の試合は三十八對二十四點で敗れた。我等の生命はトラックにあつたのに思ふ存分に活躍ができたかつたのか未だ練習の足りないのか遂に此の悲劇を見た。以上で第一學期の記事は終る。
スポーツマンの心さへ懶い夏がきた。新たに設けられたる合宿規定に十五日間の合宿が始まつた。
西村、奥村兩先生はあの炎天の下を毎日毎日通つて來られて我等と共に走つたり跳んだり汗みどろ恐ろしい迄の御指導をされた。加ふるに野口、長谷川、先輩並びに文理大選手大河氏のコーチャーに我等は益々進歩した。十五日目には感觸のない足を引つて歸宅したのである。

準決勝では浦中に惜敗。(戦績参照)
△浦和高校主催第七回近県中等学校蹴球大会
十月十四日。
昨夜迄降り続いた雨は朝からカラリと晴れたがグラウンドは此地方の所謂「ネバ」土なのでコンディションは非常に悪い。
豫定通り午後三時三十分より松中キックオフにて開始する。松中案外元氣で盛に粘つて熊中得点を屢々進して居たが遂に十三分左「コリナキツク」を秋山新井笠間とヘッディングに決めて一點先取。續いて十九分新井左からのセンターリリングを右隅にシュートして2-0とリードする。熊中フォワード非常に連絡悪く得点を重ねる事が出来ず前半を終る。
後半は雨軍更にコンビネーションの取れない凡戦を繰り返して最後の二分前に新井の一點を加へたのみでタイムアップとなる。
此の試合熊中可なり「スランプ」に落込んで居たが實力の差で強引に勝つた感があり、二回戦が思ひやられた。目標の浦和高校の大会にスランプのどん底にある事が惜しまれる。

熊中	田井間	井山田	塚田	田
森新笠廣	浅秋武	腰島	西	田
木岸非崎田	林田	崎村	木	高
鈴根荒松太	小神島	松飯	高	3
0	0	12	3	

十月十五日三時、本中キックオフにて試合開始前半初め頃は一寸熊中壓して居たが十分頃より本中猛烈な元氣で熊中軍を攻めたる。熊中バック良く守つたがフォワードライン依然コンビネーション悪く押され氣味に前半を終る。
後半初め我軍に屢々チャンスあるも惜しい所で得点にならず2-0で惜敗する。
斯くして我々の最も期待して居た所の浦和大会は我部に降りかゝつた「スランプ」を脱し得ず餘りにもあつてなく敗れ去つてしまつたのである。
はだ寒い昨年の十二月の頃より赤城嵐も何かはと練習に勵んだ我等眞夏の焼けつくやうな太陽の下に雪辱、霸權に邁進した部員を憶ふ時今更涙を止める事が出来なかつた。
然し此の不斷の練習は決して部に悪成績を残しては居ない。其の結晶を左に掲げて見よう。
蹴球部本年度戦績。
△對埼玉商業戦(五月下旬本校々庭)
熊谷中學 3-1 埼商 (勝)

熊中	田井間	井山田	塚田	田
坂新武大廣	浅秋武	腰島	西	田
口山川崎越	村水宮	畠木	井	井
原春古岩塚	野清雨	大鈴	酒	2
1	2	8	2	

熊谷中學 1-0 不動岡中學

前半、二時十分開始。キック、オフと同時に熊中軍は忽ち敵軍を壓して敵陣に入りゴールに迫り再三のチャンスを送したが遂に五分大關のシュート決つて一點を先取。後稍々押されて遂に敵のCF杉田に一點を返される。然しひるまず直ぐに敵ゴール前に攻め入り大關のキックを新井ヘッディングに見事決めて前半リードのまゝ終る。
後半、不中は頑張つて再三ゴールをねらへども西田の守備堅く入らず。熊中軍は五分秋山のチャージボールを武田突込んで一點を擧げる。接戦の内にタイムアップとなる。

熊中	田井間	井山田	塚田	田
森新武大廣	浅秋武	腰島	西	田
野根田井村	見坂崎	場須	西	小
上關杉川中	蓮小野	馬來	小	1
1	1	21	5	

△對川越中學戦(六月二十四日於本校々庭)
熊谷中學 3-0 川越中學 (勝)

前半、二時四十五分川中キックオフにて開始、熊中軍よく敵軍を抑へ壓倒的形勢の下に敵ゴールを屢々突き前半三分、十五分、二十分、とゴールインしてリードのまゝ後半に入る。
後半、熊中新井開始後一分にしてゴールインを得、後殆どワンサイド、ゲームで樂な試合を轉開し十分三〇分とゴールインして優勝す。

熊中 田井間 井山田 塚田 田

森新笠廣	浅秋武	腰島	西	田
田口尻名田	野澤根	田澤	野	飯
町堀野泉岸	岸大關	深大	飯	1
0	0	10	1	

△對松山中學戦(於本校々庭)
熊谷中學 5-1 松山中學 (勝)

△對埼玉商業戦(七月十九日於埼商校庭)
熊谷中學 0-0 埼玉商業 (負)

△對本庄中學戦(九月十日於本校々庭)
熊谷中學 1-0 本庄中學 (勝)

△對藤岡中學戦(九月二十三日於桐生高工グラウンド)
熊谷中學 5-0 藤岡中學 (勝)

熊中	武大新笠廣	浅秋坂	腰島	西
茂信田小十	須櫻佐	岸野	清	1
0	1	20	0	0

△對浦和中學戦(九月二十四日於桐生高工グラウンド)		
熊谷中學0	0—1—1	2 浦和中學
△對松山中學戦(十月十四日於浦和高校々庭)		
熊谷中學3	1—2—0	0 松山中學
△對本庄中學戦(十月十五日於浦和高校々庭)		
熊谷中學0	0—0—2	2 本庄中學

新チーム諸君に

秋山俊夫

長い様で短い五年間の蹴球部員生活も此處に終りを告げて、漸く「先輩」の名を戴かねばならぬ時となつた。自分は懐しい此の部を今や去らんとするに當つて新チーム諸君及び一年生より四年生迄全部の部員諸君に數年間自分が蹴球部員として習得した「經驗」と云つたやうなもの此處に述べ將來の諸君に少しでも良い結果を齎す事が出来れば幸と思つてゐる次第だ。

先づ第一に云ひたいのはゲームに必ず勝つと言ふ事だ。凡そ勝敗を争ふものは勝つて勝たねばならぬ。(勿論「フェアプレイ」を外れる事は避けねばならぬが)此れに破れたならば如何に技術的に優れて居つたとはいへ、又長月月の不斷の練習に得た體力も閑志も皆無に等しく見做されてしまふからである。それでは如何したら勝てるか。

強い「チーム」それは團結力のあるチームだ。これが無かつたならば如何に個々のプレイヤーが優れて居たとしても恐らくゲームに勝つと言ふ事は殆ど有り得ない事だと私は斷言する。

然しボールが蹴れなくてはフットボールをする事は出来ぬ。従つて

凡ゆる局面に於てボールを意の儘にプレイし得る能力、身體が凡ゆる状態に於て使ひこなされる事、各キレブンが獲得せられねばならぬ。此の技術をキャプテン及び五年生を中心とした部員が雨の日、風の日、擡まず屈せず不斷の練習に鍛へに鍛へ練つた結果、良き戦術と共に何物と云へども破り得る事の出来ない勝たずんば止まざる強烈な潮氣、眼に見えぬ團結力が生ずるのである。良き技術は戰術的に高級なプレイの基礎となると同様に綺麗な形の良きプレイの基礎ともなる。それは個々のプレイヤー及びチームに確實な基礎として落付いた氣持を與へ、其の氣持は勝利を得る爲の第一歩となる。

偉大なるプレイヤーとなる爲には勿論或る程度の才能は必要であるが、決して天賦の才を必要とするものではない。寧ろ良き練習と、一定の規則的な、體系的なトレーニングに依つて高級なプレイヤーとなる事が出来、其等の集りが強固なチームとなるのである。或る程度の才能とは所謂運動神經で、それはボール及び敵の動きを少しも早く見分け、その印象に依つて直ちに自己の行爲をそれに適應せしめ得る反射機能である。此等は多少とも後天的なものであるから諸君は一つのキック一つのパスにも常に研究的態度を持ち、注意深い計畫的な練習に依つて育まれ得る事が出来ると信ずる。

次にプレイヤーたる者は旺盛なる「フアイティングスピリット」がなければならぬ。如何に諸君が良き技術を持つてゐるとしても此の唯一點に於て缺ければ決して私は良きプレイヤーとは云はない。彼は敵がボールを持つ事を許さない。彼は如何なる敵をも恐れぬ。彼は最後の瞬間迄希望を有つ。實際チームの十一人全部が満ちた「フアイティングスピリット」に燃えて居る事程相手にとって恐ろしいものはない。四五年前の熊中蹴球部は技術よりも寧ろ此の闘志によつて縣下に覇を稱へて居つた。近年私の眼には幾分これが缺けては居ないかと想はれ

る。來年度からは往年の意氣を大いに振り興して戴きたい。更に氷の如き冷靜さ、正確な觀察、それから生れ出る正確な判斷はプレイヤーに取つての必要條件だ。更に肉體的方面を述べればプレイヤーは總て高くある可きだ。然し此れは生れつきと言ふ事もあるから諸君は五尺七八寸を理想とし各自研究して延びてくれ、そして此れと同時に諸君は強靱な筋肉、それもフットボールに必要な筋肉のものが充分引締つてゐる身體、それが最も望ましいと云ふ事を忘れてはならぬ。而も其の上に諸君は完全な健康を保たねばならぬ。此れは諸君の普段の節制によつて充分なし得られるものでメンバーの額ぶれが度々變るやうては決して強いチームは生れないからである。

以上の事は最も大切な事であるが更にこまかい事を述べれば部員の心の一致殊に五年生の心の一致は大切である。それから試合に際しては必勝の信念を持つ事、これがなければ恐らく試合には勝てぬ。敵を恐れず、侮らず行く事は又大事な事柄だ。試合は一學期に出来るだけ行ふ事を推める。勝つても負けてもだ。

兎にかく諸君はキャプテンを中心にこれに絶対服従し「練習に泣いて試合に笑へ」この氣持で練習し各自の特徴を伸ばす事に努力して貰ひたい。

自分はこの光輝ある熊中蹴球部員として學校を代表し選手となつて浦高の大會に出場する事此處に三年、三年生四年生の時は二年増師に破れ、今年こそはと思つて居つた五年生の時に不幸鋒を交へずして去るのが残念だ。これもチームのコンディションを絶好に導かなかつた自分の責任だから致仕方がないと憶つてはゐる。

諸君、來年度からは立ち上つてくれ、一年生から五年生迄、打倒増師を念頭に置きキャプテンを中心にガツチリ肩と肩とを組合つて元氣一杯やつて貰ひたい。そして諸君が宿敵増師を破り得る日こそ榮冠が

再び熊中に廻り来る日だ。

諸君眼を醒めて脱衣場の隅を視給へ、之の一眺、此のステツプによつて或は笑ひ、或は泣き、而も榮冠を見ずして取殘された私達のボロ蹴球靴が首を長くして諸君が増師否、總ての他校を熊中の軍門に下さん事を待つてゐる。

再言する。「練習に泣いて試合に笑へ」。八、十、二九。

校内ア式蹴球大會記

理事 新井佳年

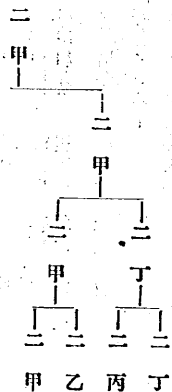
我が蹴球部は十月十八日より約十日間に亘つてア式蹴球の一般普及と共に下級生から部員を選抜するを第一目的として此に校内ア式蹴球大會を開催した。

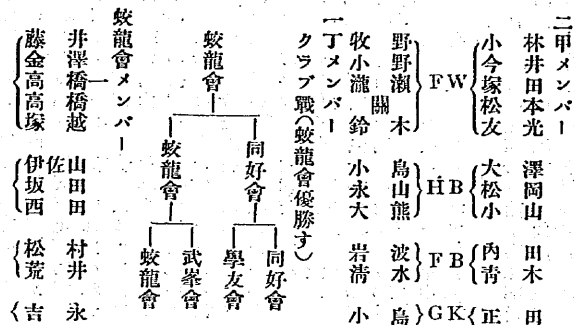
クラス戦に於ては八チーム全部出場して大いに活躍してくれたことは我が蹴球部の最も満足とする所である。

クラブ戦は例年に比して極めて出場チームの勢かつたことは甚だ遺憾であつた。

左に次第の結果を報告しよう。

クラス戦(二甲優勝す)





（評）
クラブ決勝戦

蛟龍、同好會共に決勝戦に残つて恥しくないチームだつた。蛟龍會のチームは確しかに元氣のある青年の覇氣を表はしたチームで、これが決勝の勝因を爲したと云つても過言ではない。又このチームは二、三人の良いプレイヤーを生かして適用したことは最後に至つてホワードの頭張りを見せて終に凱歌の一點を上げた原因である。最初から元氣にまかせ、同好會を壓倒して意のままに敵のホワード・ナインを前進させなかつたので同好會には得點出來なかつたのである。延長戦に至つて俄然意氣増長して終に譽れの一ゴールを上げて優勝した。實に本大會一のシールド・ゲームであつた。

蛟龍會メンバー

井澤橋橋越	山田田	村井	永
藤金高塚	佐伊坂西	松荒	吉

同好會のチームはこの二、三年良いプレイヤーを持つて金城鐵壁を誇つて他の追従を許さず連年の優勝チームだつた。勿論本年も技術に於てはこのチームを第一位に推してやまない。然しチームの意氣に於て蛟龍會に聊かの劣りがあつた。この聊かの相違が終に最後に至つて蛟龍會に運命の一點を許したのであつた。然しながらあれだけの蛟龍會の強襲を一點に食留めた同好會のバックは稱讃に値する。同好會のホアードは自己の技能に頼つてチームのコンビネーションを亂した感が無くはなかつた。故に相當妙を得た攻撃をして蛟龍會のバックを脅かしたが最後の得點をすることが出来なかつた。あの場合大切でもあり蹴球で最も重きを成してゐる、ゴール前でのホアードのコンビネー

最後に今後の校内大會の發達隆盛を祈つてやまない。
斯くして本年度の蹴球部の行事も終局を告げた。此に我が蹴球部の
選手及び部員を諸君に紹介します。

最後に今後の校内大会の發達隆盛を祈つてやまない。
斯くして本年度の蹴球部の行事も終局を告げた。此に我が蹴
選手及び部員を諸君に紹介します。

五年	主將	秋山	俊夫	(CH)	マネヂヤ	赤田隆之助
----	----	----	----	------	------	-------

四年	理事	新井 佳年
理事	武田 照	
大關房之助		
LI	RH	CR

廣田 重進	笠間 良一	西田 健二
腰塚光次郎		
淺井 進		

島田茂二	坂田操	問庭昇
(R)	(Sub)	
森田亮一		野崎秀男

加藤 榮一	青柳 芳造
村山 一郎	富田 光一
西川 貞夫	瀧瀬 政雄
鴻巣 茂	關 茂夫

去るに臨みて告ぐ

蹴球部 赤田隆之助

中島、高野、石橋の三先輩を送り出した吾々は、百花爛漫たる陽春四月、新進をバツクに新陣容を整へ、来るべき桐生近縣大會、縣下大會、神宮豫選及び浦高主催近縣大會に出場制覇せんものと、猛烈な練習を開始した。

線濃やかなる五月に、六月に、そして暑さ烈しき七月八月に、雨の日も一日一時の休む暇なく練習をした。そして一日一日に近づける大会目指して躍起となつて練習をした。

五六七の三ヶ月に渉る試合數實に五回、其の戰績たるや正に四勝一敗の好成績、縣下隨一をモットーとせる吾が校にふさわしい戰績であつた。そして新築地交の追焚を平定した。吾が校の戦績は、

と此の技術を以て覇者たらむ目の來るを待ちわびてゐた。然るに嗚呼!! 天運遂に吾優勝の二字を以てせず、桐生大曾には三回戦で優勝

候補浦中と對し2—0を以て破れ、次いで行はれた神宮豫選には二回戦に不覺にも本中に2—1を以て破れ萬策盡き果てたのである。吾々

の無念やる方なし。然れども時既に遅し、天運に見離なされし吾々は萬斛の涙を呑むて退場しなければならなかつた。校友會諸君並びに佐

藤先生には紙上より深く深くお詫び申し上げる次第です。然しながら今日の敗戦は永劫に忘るゝ事勿れ。「敗残の將兵を語らず」とか。徒に

熊中蹴球部!! 往年の覇者熊中!! の面影や淋し。三十有餘年の傳

校の名譽と霸者の名は一時地に落つべし。然し榮枯盛衰は世の習し再び恢復の日を期して待つべし。後輩諸君よ!! 母校の爲めに奮然とし

野球部記事

野球部記事

マネージャー 福島和夫

對校試合成績表

六月十八日	六月十七日	六月十一日	六月十日	五月廿八日	五月廿一日	五月廿日	五月七日	五月六日	十一月廿三日	十月廿二日	十月八日	月目
川越中學	桐生中學	川越中學	不動岡中學	關東中學	高崎商業	埼玉商業	川越商業	豐岡實業	不動岡中學	埼玉商業	松山中學	相手校
熊谷	熊谷	川越	熊谷	浦高	熊谷	熊谷	熊谷	熊谷	不動岡	深谷	松山	場所
12	0	6	11	0	2	8	14	9	19	7	38	得點
9	1A	19	2	8A	22	3	3	7	2	1	6	
(十二回)												
(七回)												
勝	敗	敗	勝	敗	敗	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝敗

[illegible]

▲對豐實戰(五月六日) 場所 熊谷

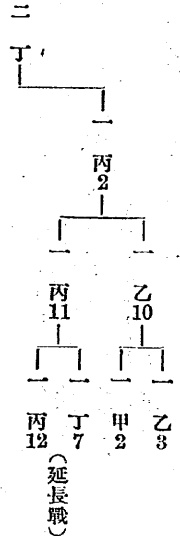
審判(球審)大谷 (壘審)澤田兄 福島

豐	熊	
實	中	
0	1	0
0	2	0
0	3	0
0	4	0
6	5	0
0	6	0
0	7	0
0	8	2
1	9	7
7—9		

熊	中	
3	高	橋
5	新	井
8	松	村
2	金	澤
7	鷲	飼
1	森	
9	矢	島
2	西	岡
	栗	原
打	失	失
數	策	策
三	四	四
六		
	安	
	打	

實	豐
4	4
2	2
1.9	1.9
5	5
3	3
7	7
7	7
9	9
1	1
9	9
8	8
打數三六	安打
失策五	小向渡高田小井小栗橋志田

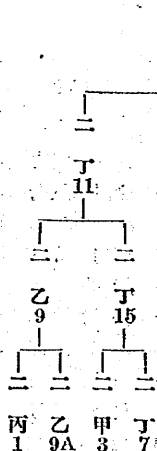
◎校内大會成績(一、二年クラス戦) (二丁優勝)



優勝戦メンバー

丙	西木近後安青田近花	失策一二
一	3.6 4 1.3 2 6.1 8 5.7 7.5 9	安打一 打數二六
丁	2 3 6 1 4 8 (8) 7 5 9	打數四七 安打七
二	岸坂瀬崎野谷木井中田 根石岩宮荻大茂松野角	失策 ○

同鄉會俱樂部戰（同好會優勝）



チのもとにあのやけつくやうな炎天に於いて汗がどろになり来るべき大奮にど備へたのである。

切商宛宛して待ちし今日こそは勝をゆずらじと意氣に燃えて出場したのは忘れもしない十月一日である。この日こそは我々の先輩の仇を報ずるか否かの日であると思へば悲壯なる感に打たれる。浦中コートは榮冠得んものと集ひ来る縣下各中等學校の選手及び應援團でうづめられた。絶好のグラウンドコンディションに恵まれて戦は順次開始された我が校は(一部)最初川南と對戦しこれを15-7で一蹴したが二回戦には浦南と對戦し遂に敗れた。しかしそれは技術に於いては体格が劣つて居た。敵は又の高いのを唯一の武器として我に向つたのである。我が選手は如何に技術のすぐれて居たにしろ丈の高い武器に對するものは何物もなかつたのである。又二部に於いても川南と對戦し23-16のスコアを以つてつひに惨敗した。

- しかし諸君よ、我が龍球部はなまけて此の憂き目を見たのではない。あらゆる努力をしたのである。希はくば我が龍球部に絶大な應援と同情を以つて龍球部の活躍に援助を與へよ。
- 最後に横田先生田中先生奥村先生其の他いろいろと龍球部の爲に盡くされたが輩諸兄に厚く御禮を申し上げる次第であります。左に龍球部員の氏名を記して此の稿を終る。
- 一年 小林、善如寺、柴崎、小島、井上
 - 二年 小川、阿久澤、新井、吉野
 - 三年 宮本、金室、金子、町田、黒田
 - 四年 根岸、鈴木、鶴見、中島
 - 五年 青永、筒井

水泳部報 大塚 稔

我懐しき熊中水泳部を去るに當り、是に此の拙文を贈り、諸君の御参考に供する事としよう。

昭和八年七月月中旬我水泳部は撤文を諸君に飛ばした。集る同志實に四十有餘名、我水泳部創設以來の大多數を獲得したのであつた。そして、八月二十九日、意氣衝天の勢を以て、熊谷を出發、憧れの北條へ向つた。豫定の如く向ふ十日間の出る様な猛練習を行った。其の間の一日の我等の消息を諸君に傳へて、諸君の我水泳部に對する認識を深めようと思ふ。

午前四時半、がらんと宿舍の硝子窓を開ける物音にふと目を醒しで見ると、最早や誰か早起出で、顔洗ひに外へ出た所なのだ。僕も起出た。續いて同じ室に寢て居た者が、皆むくむくと起出す。次第に宿舍の中は眼から覺めた者の話聲で賑はつて来る。蚊帳を畳み、寝具を片附ける者、室を掃く者、皆高等學校の様に自治の生活が始まる。朝食前の二時間是我等にとつて樂しきタイムである。皆濱へ行く。貝類を採集に行くか或は浩然の氣を養ふべく川がけるのだ。宿舍の内を出ると直ぐ道がある。其の道を三十米許り、西進すると、潤然と開けて、廣々とした、藍色に染まつた海、鏡浦全體が見渡される。未だ早いと見えて散歩する者も、影が少い。然し沖には、帝國の艦艦七十有餘隻黒がねの船體を儼然と海中に浮べてゐる。又左鷹島、海軍航空隊の大格納庫の大扉は開かれ九〇式戦闘機が此方に向いて、正に飛び出さんとする有様が手に取る様に見える。誠に軍國日本の象徴とも言ふべく、一抹のブライドの念を起させる。時に海は朝風の油を流した様に、名の如く鏡の様だ。遠く雲表に聳えて見えるは靈峰富士の高峰。暫し眼をつぶつて默禱すれば、早朝の雲氣身に沁みて、心は神の心に

も通ふ様な純眞、無垢になつて了ふ。微風頬を撫て、其の快哉實に譬へ様もない。朝の靈氣を心行く迄呼吸して、我等は宿舍へ歸つてくる。すると朝食は僕等を歓迎してくれる。適度な朝食を採る。適度な運動をして適度に食事をする。理想的生活とは此の事を言ふのであらうか。否理想のでないにしても、身體の健康の上に非常に好い事は言を俟たない。

朝食後九時迄は自由行動だ。勉強し、ドラッパ、將棋等をして遊ぶのも此の時だ。町へは出て行く者は少い。愉快に二時間を過して愈々定刻午前九時になると、水泳をする時間になるのだ。出發用意といふ松本先生の命令、皆一いつになつて戸外へ飛び出る。人員調査をして、左向け左をして、直ぐ濱へ。午前中だといふのに砂は焼け付く様に温つてゐる。止むを得ず濱まで駈足で行く。

又人員調査をする。飽く迄人員調査は嚴重にする。一人でも居なくなつては一大事だからだ。

松本先生の今日の水泳科目に付ての注意が終ると皆一齊に海中へ跳び込む。海は遠淺になつてゐるから溺れる心配は先づ皆無と言つて良

い。皆思ひ／＼の泳ぎを、今日の科目を中心として練習をする。思ひ切つて、急スピードで全身を動かして、滑るクロールの心地良さ。胸のすく様な、良いホームの跳び込み。緩慢な平泳の愉快さ。

皆海の子ならでは味はふべからざる氣持ちではないか。斯くしてゐる中に館山棧橋附近は、尖端的な、流手な男女の水着で、海水に花が咲いた様。砂濱を漫步する人も漸く其の數を増し、眞夏の太陽も中天に昇り、赤銅色に成つた我等の腕、胸、背中、手足、全身をじり／＼と照りつけて、より黒く染めてくれる。其の頃になると、誰れしも、砂濱に上りたくなる。少し寒くもなる。愈々先生の命令「下、敗軍の

兵の如く砂濱へ駈け上つて砂風呂を浴びる。何と其の砂風呂の心地良

い事よ。砂の中に漬つて、青空高く飛んでゐる銀翼を眺めてゐると、自ら、自然の懷に抱かれて、はては自然の中に滅入つて了ふかと思

感ぜられる。自ら、詩的になつて了ふ。定期航路の菊丸も今しがた黒煙を名残りに消えて行つた。僕等の腹

はそろ／＼ぐら／＼言ひ始める。晝食が待遠しくなる。十分許り海に浸つてから、人員調査をして駈足で宿舍へ歸る。清水で全身の沙を洗ひ落して着物を衣て待つ間もなく、晝食の鐘は「があん／＼」すは鎌倉!と食堂目掛けて駈込む。瞬間、食堂内は驟然、喧々囂々、忽ち修羅場と化して了ふ。然し食糧が十分詰込まれると、堂内に和氣霽々たる雰囲気は醸される。

これも我が水泳部の一特色だ。和氣霽々として、先生より下級生に到る迄、まつたく打解けた愛そのものであり相當な敬もあるのだ。何といふ美しい情景だらう。こんな處で生徒と先生との眞の融合が實現され、眞の情愛が結ばれるのではないでせうか。

晝食より午後二時迄自由行動、大抵晝寝をする。餘り暑くて何も手に着かない。愈々二時になると、午前中と同じ様に人員検査、濱へ。我等は午前にも増して午後は猛練習をする。そして、鐘の音を合圖に人員調査をして一日の練習は終る。

宿舍には温かに風呂が沸いてゐる。練習で疲れた身體を一風呂浴びて流して了ふ。直きに夕餉だ。四邊は暮色漸く迫つて一番星もぼつり出て来る。美味しい夕食を済ますと皆散歩に行く。九時迄自由行動、町を漫步するもよし。海岸を散歩するもよい。諸君よ、海岸へ出てよ。館山の棧橋へ。折しも四邊は眞暗、而も月はある。沖には軍艦の燈火で不夜城を呈してゐる。浪は次第に荒くなつて、沙も次第に満ちてくる。棧橋にも浪がつきさうになる。押寄せる雄浪、打返す雌浪、

次第に浪のメロディも高くなつて行く。棧橋の上に立つてみると、故郷の事が思ひ出される。父は、母は、弟は、姉は、友は、今何をしてゐるだらうか。種々な淡い旅愁に驅られてゐたのも、今はいい思ひ出の種となつてゐるのである。

感激を求めんと欲する諸君!! は奮つて来れ。苟も中學生生活を有意義に過さんと欲する者は来れ。僅々夏休中の十日間。遊んで暮したら短い此の十日間も、極めて価値ある。意義深き、思ひ出多き十日間と爲す事が出来るのである。

以上で大體水泳部諸君の一日の生活に付て、お解りの事と思ふ。最後に水泳部のために色々世話になつた、鈴木先生、柳田先生、南日先生に厚く御禮申上げると同時に、水泳部長伊佐山先生の御病氣の早く御快癒になつて、再び水泳部のために御盡力下さるやう陰ながら祈り申上げて擲筆する。

最後に進級一覽表を掲げる。

- 豫習生→五級
根岸、岩波、宮本弟、大島、大澤、高柳(八月二日)、福島良、安田塚、越(八・六)、新井(七・三〇)
豫習生→五級上
新島、瀧澤、栗原、吉田(七・三〇)→八・六、清水(八・二)→八・六、小島(七・三〇)→八・一、福島(八・一)→八・六
豫習生→五級上
小林(七・三〇)→八・五、設樂(七・三〇)→八・六
五級→五級上
鹽谷(八・一)
五級上→五級上
加村(八・一)→八・五

圖書部々報 五中 小島 貞男

- 五級→四級
針谷、小松原、多比羅(八・六)
五級→四級上
小池(八・一)→八・六
四級→四級上
權田弟、田中弟、木島(八・六)
四級→三級
内田、野口、福島昭、高橋(八・六)
三級→三級上
大塚弟、田代(八・六)
三級→二級
宮本兄、鈴木、田中、權田
二級上→一級
大塚(八・六)
五哩遠泳成功者(十六名)
小林、小島、鹽谷、加村(一年)、内田、野口(二年)、小池、福島、大塚、宮本(三年)、高橋、田代、鈴木(四年)、田中、權田、大塚(五年)

古語に「人の智を増すは讀書に若くはなし」と云ふ事があります。讀書は實に人生の糧であります。心の友であります。書を讀んで知識を養ひ情を養ひ書を友とし書物に慰藉を求め得る人は實に幸福であります。されば歐陽修も「天下の樂終日の書案にあり」と云つて居ります。一體世間の快樂は擧げて數へる事が出来ません。而も此等の快樂の

中伴侶を要しないものが幾何有るでせう。従つて人に迷惑をかける事があり常に得るわけには行きません。然るに讀書は四季と場所とをえらばず而もたゞ一人で無限の趣味を味ふ事が出来ます。即ち時には往時の哲人傑士に遭遇し教を乞ふ事も出来共に吟味する事も出来ます。又時には居ながらにして千里の名勝古蹟を尋ねると思ひ古を偲ぶ事も出来ます。且天體變化より地上の種種なる現象に到るまで樂しみながら其の理を知る事が出来ます。併し此等多方面の書物をすべて自己の所有とする事は出来ません。又必要のない事です。

此所に數多の書籍を集めた圖書館が必要となります。吾熊中圖書館もかくて生れたものであります。故に諸君が充分利用せられて初て圖書館の意義があり又使命が果されるわけであります。

さて吾が圖書館は昭和六年度にあの狭くしい記念館の一隅から寄宿舍にうつり現在の様な立派な閱覽室まで備へ以後諸先生や先輩の御努力によります。發展して來たのであります。私達が受つてから滿一ヶ年を顧みたときに諸先生や先輩の今までに拂はれた御努力の實に偉大であつた事に驚くと同時に吾等の力の如何に微弱であつたかを恥しく思ふのであります。

本年度諸々のなした事は大體次の如くであります。

- 一、貸出用紙の改正——種々な理由で縦書を横書にしました。又書名欄を減しました。
- 一、統計——讀者数の統計で終りに示してあります。此は今年初めの試みて、六月頃から十月迄のであります。此は是非來年度も實施してもらひたいと思ひます。
- 一、新聞を減じ雑誌を増しました——新聞は大體の家で取つて居り五種類もの新聞を取つて莫大な費用をかける事は餘り賢いことゝ

は思はれませんが、雑誌は從來餘り少くして諸君の要求を満足し得なかつた感があつたからです。其種類についても今年は多く諸君の投票によりましたから少くとも公平を期したつもりです。次に表を示せば

	計	二年	三年	四年	五年	倫理	文學	科學	地歴	英語	雜部	計
計	11	0	1	3	6	11	55	11	52	9	40	178
二年		0	1	1	1	1	2	0	9	0	11	22
三年			1	1	1	1	4	1	11	0	2	19
四年				1	1	1	9	1	8	3	7	39
五年					8	1	13	1	12	3	11	67

表に就て云へば部では文學部、學年では五年が斷然多く、科學英語は案外でした。最も科學部は書籍數も極少いのですが出来るだけ利用せられん事をのぞみます。最後にいる御指導下さつた大和久先生佐藤先生並に諸先生をはじめじめに事務をとつてくれた四年生諸君に厚く感謝致します。

剣道部報

- 一、四月十日、本年度剣道部理事任命
里見 健 神庭 朝 二 長又 利 喜 三
- 四月十五日、本年度剣道部助手を任命

本校見健									
里見	木村	五十部	長又	塚田	川邊	中村	松村	大木	田中
義雄	一雄	三雄	利三	大	忠	忠	大	野	秀雄
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	高
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	橋
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	正
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治

六月二十五日、大宮町京北商科醫事主健縣下中等學生大會に出場す
本校より選手、里見、木村、小暮、神庭、松村、田中、出場せしが、熊農、
及川中と、勝ち、豫選にて、戦に利あらずして、歸る。
松山中學最後の優勝せりと云ふ。
七月二十日、校内武道大會を開く。
七月二十日、剣道進級者発表す。
初段、小暮、神庭、松村、田中、出場す。
一級、岡田、清水、善次、西澤、之澄、峯尾、隆弘、二雄

三級									
大久保	淺見	大島	河野	池田	武田	原田	新井	小柴	松岡
久保	見	島	野	田	田	田	井	柴	岡
保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照

二級									
大久保	淺見	大島	河野	池田	武田	原田	新井	小柴	松岡
久保	見	島	野	田	田	田	井	柴	岡
保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照

一級									
大久保	淺見	大島	河野	池田	武田	原田	新井	小柴	松岡
久保	見	島	野	田	田	田	井	柴	岡
保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照
久保	利	喜	重	照	照	照	照	照	照

本校見健									
里見	木村	五十部	長又	塚田	川邊	中村	松村	大木	田中
義雄	一雄	三雄	利三	大	忠	忠	大	野	秀雄
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	高
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	橋
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	正
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治

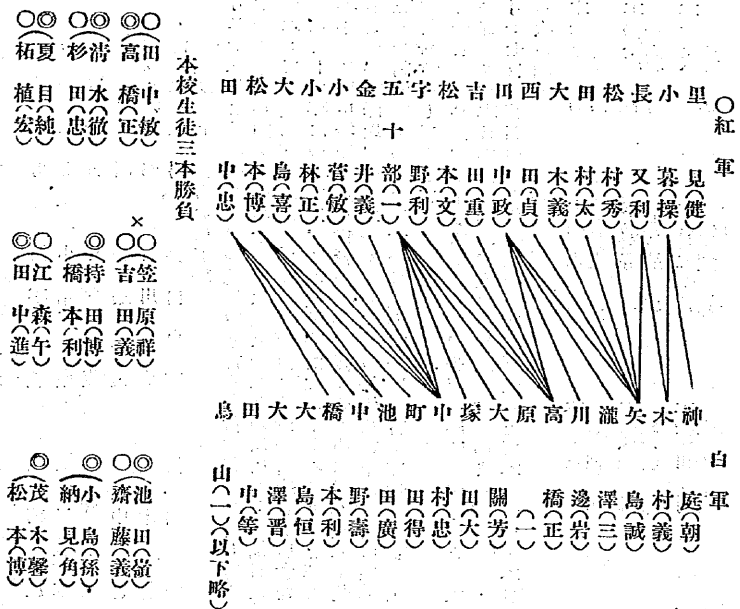
八月二十五日より一週間、剣道暑中稽古を舉行、毎日午前九時よ
り、十一時迄二時間卒業生約十名、生徒六十八名の出席あり、期日は
例年に比して、長しとは云はれざれど、最初より最終迄殆ど缺席者な
くよく練習した事については、其の效果甚だ大なるものありしを認む
特に本年の休戦中埼玉剣道を代表の選手、渡瀬せし中に、本校員下先
生、卒業生、梅澤氏、藤崎氏等もあり、此の暑中稽古中に、右に關し
滿洲見聞の講演等もあり、三十一日無事右暑中稽古も定例により、試
合後、茶話會をして終了す。
九月一日、道具師、松本勘四郎氏より、先年優勝せし記念にと、大
鏡一臺寄贈され本日神前に具ふ、道場の光輝一段と高まる。
九月十七日、藤岡中學と對抗試合を行ふ。九對五で本校快勝す本日
の成績次の如し。

本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
矢島	新井	中村	大木	野村	澤村	大木	野村	澤村	大木
〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
矢島	新井	中村	大木	野村	澤村	大木	野村	澤村	大木
〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
矢島	新井	中村	大木	野村	澤村	大木	野村	澤村	大木
〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
矢島	新井	中村	大木	野村	澤村	大木	野村	澤村	大木
〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇

本校見健									
里見	木村	五十部	長又	塚田	川邊	中村	松村	大木	田中
義雄	一雄	三雄	利三	大	忠	忠	大	野	秀雄
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	高
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	橋
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	正
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治
松村	大木	原	中	大	大	大	大	大	治

十月十五日、浦高主催、關東中等學校剣道大會に、里見、神庭、松
村、長又、田村の五人、選手として出場す、前中と組み惜敗す。
十月十七日、熊谷警察署武道會主催秋季大會に於て、段外者の
高點勝負に、本校中村忠、一等、橋本利治、茂木馨、野口六郎、各同
點にて四等を得。
十月二十一日、本年度武道大會を開く、剣道に於ては浦和鈴木祐之
丞先生を招待して、次の順序により午前十時よりはじめ、午後二時終
了す。

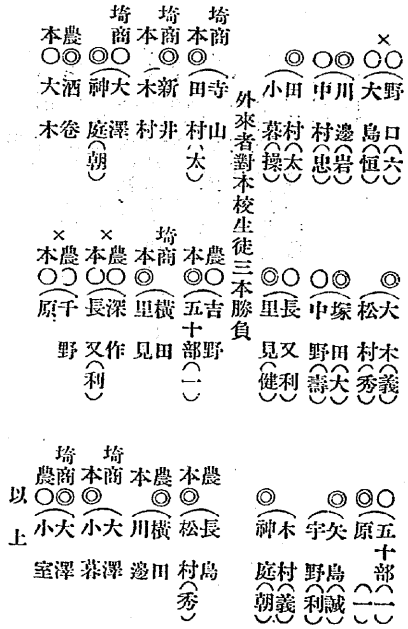
大會順序									
一、開會	二、一年生徒の高點勝負	三、二年以上生徒紅白勝負	四、本校生徒紅白勝負	五、外來者對本校生徒三本勝負	六、帝國劍道型	七、外來者對本校生徒紅白勝負	八、模範試合	九、鈴木先生實地指導	一〇、校長先生の挨拶
一一、閉會	一二、閉會	一三、閉會	一四、閉會	一五、閉會	一六、閉會	一七、閉會	一八、閉會	一九、閉會	二〇、閉會



庭球部本年の成績を顧みて

静かに我が記憶を辿りて本年の我が部を顧みれば陽炎がうら／＼と燃えあがり青葉が芽を出した三月栗原井桁の諸兄を送り出した。我等は五年生になつたのだ。大なる責任を身にひしと感じ今年こそは互に誓ひ合ひ勵まし合つて春風がそよ／＼と吹くコートで猛練習を始めたい四月の候にも太陽が西に没してボールが見えなくなるまで専心に技

マネージャー 清水 善次
飯塚菊五郎



を練つた。

清水森田組、高橋片倉組、菅間萩野組、清水藤井組、長谷川田村組皆好調で清水森田組こそは縣下優勝候補と折紙つけられたのである。吾々は最初腕ためしをするため本庄中學へ遠征を試みたのである。本校チームはまだ試合になれてゐなかつたためか或は敵の應援に取りまかれたためか振はず、わづかに主将組の全勝により辛勝したのである。こゝに於て吾々は種々な點に於て缺點を發見した。先づ技術と共に精神をみがく事、吾々には精神修養が出來てゐない、即ち完全に敵を抑してゐながらあせつてセットを失ひ又ジュウを幾回も重ねながら根負けがして完全に打てる球をネットしてしまふ、一般に熊谷の者は根負けがなかつたといふ感じがする。熊谷クラブと對抗試合を行ひ二對〇で負けたが、大人でもかまはずに相當にねばつていつたつもりである。かくして吾々は最初の遠征を荻窪の關東中等學校大會にした。

一回戦 菅間 1-3 田中 豊師 片倉 3-2 後藤

然しこれも不運なる戦によつて芳ばしい戦績を遺すことは出來なかつた。然るに是に庭球部へ一つの不幸が訪れた、それは森田君の病氣である。森田君の復活は到底不可能との醫師の言を聴き吾々は均しくその不運をうらみ且つ部のために惜しんだ。在學半ばにして病に仆れそれに加へて二學期のめざす縣下大會に出場出來なくなつた彼の心を思ふ時吾々は泣かざるを得ないのだ。吾々は唯々天命としてもあきらめきれなかつた、然し今となつては致し方ないことである。清水森田のコンビはくづれたが新陣容をたてなほし初夏の太陽がカン／＼と照るコートで練習を続け持ち前に挑戦したのである。二對〇にて勝つ。



1. 菅間、田村 x
2. 高橋、萩野 x
3. 清水、原口 x
4. 片倉、原口 x
5. 前田、片倉 x
次に吾等は川工主催の一般縣下大會に出場、一段と進みし實力と膽力をもつて七月六日試合にのぞむ。この日高橋萩野あたりよく縣下優勝候補を堂々と向ふに押し接戦又接戦、デニウスをくり返すこと實に數回にして敗れたのは惜しかつた。高橋は猛球を打ち或は短い球を繰りまぜて打つたのは非常なる進歩である。清水片倉も三回戦で遂に敵に名をなましめたが、千軍萬馬の老勇士を前に押し中學生として大いに氣を吐いた。

こゝ吾等は一學期の試合を終へ秋のシーズンに備へるため七月二十五日合宿練習を開始した。

七月二十五日より一週間軟球界の猛者土屋氏を筆頭に本庄の田中氏熊谷の藤井氏松山の野口氏等の指導を受け、文字通りの猛練習を続けなかつたのである。焼ける様な炎天の下にこける様なコートの上に赤銅の様な赤い顔が汗とほこりのユニホームと同じ色になる程熱い。朝七時半より晝まで、三時より日没までカン／＼に焼ける程熱い。だ、かく丁寧なるコーチを受けつゝ猛練習をした後八月一日文理大主催の全國中等學校選手權大會に出場した。一回戦は全部不戦一勝。

二回戦 清水 3-0 細谷長野中 片倉 3-2 諏訪府立一中

郷土研究

鉢形城址に遊びて

五甲 三友 漢

抑々故郷を愛し郷關忘れ難しといふは、自然の人情である。この情を大にすれば國家を愛する心となり、國家を愛する心は我が金甌無缺の國體を萬世に傳ふる道となる。それ故我等はこの研究に努め、而してその郷土の名を後世に傳ふる道を講ずるのは、我等朝夕忘れてはならぬ事である。そこで私が自分の郷土鉢形城址について興味を感じた事を二三のべて見る。鉢形城址は寄居町正喜橋をわたり、坂を登りて到る御殿の址より、更に折原村立原に到る道を前進せば、今猶ほ左の小丘にそびゆる巨椋あり。猶すゝみて諏訪神社あり。四方案地大手枿形の脇に諏訪池あり、北條氏全盛時代より水乾せし事なく、傳説によれば、北條氏滅亡の時に於てこの池に種々な寶物を投げ込みたりといふ。今此の池を過ぎてありし古を懷想せば、古殿賑なりし藤原小路運雀町も今は麥離菜園、長右衛門堀の瀦水は昔ながらに深けれど、城内侍女が信仰の辨天は小祠となりて、名残を留むるのみ。泉水坂を右折して町餘老杉の木立に圍れた諏訪神社の裏に姫ぐるはあり。此の所

に北條氏邦の奥方大福御前の御殿ありしと傳ふ。鉢形城は其の天然の内壕深澤川に四十八箇の深溝ありし爲、其上は數釜の城と呼びしと。文明五年、長尾伊玄入道景春樂城の頃には既に、鉢形城と改まつて居た。景春事を以て上杉顯定を怨み太田道灌が駿河に赴きし隙を窺ひ、足利成氏に款を通じ文明九年正月を以て五十孫を襲撃し、顯定を白井に走らせたれば右神井、練馬、小澤、小机、小磯の諸城景春を援け長尾氏の勢ひ大いに振ふ。道灌急を聞いて、五十孫を復し鉢形に迫る、成氏古河より赴援し道灌敗れ退き、次いで十年正月成氏顯定の和睦成り、成氏退却し、顯定鉢形を落し、道灌入城して細張りを爲す。是れ上杉氏時代鉢形城の概略なり。正龍寺記、藤田譜略、町田家譜、關八州古戦録等に依れば、天正十八年豊臣秀吉、小田原城を攻むるや、當時鉢形の城主北條氏邦馳せ參じ、小田原城に籠り、黒澤上野介、淺見伊賀守麻生主水等兵力三千を以て鉢形を守る。豊臣氏の將前田利家本田忠勝は大手に、上杉景勝、平岩親吉は諏訪曲輪に、眞田昌幸毛利勝成は寄居口に迫つて、鉢形城を攻む。兵數三萬餘、城堅くして容易に敗る能はず。景勝の將平岩親吉砲を城背の高地車山に引上げ諏訪曲輪を下瞰して先づ之を取り、六月十三日本丸に在りし氏邦の室大福御前光福丸と共に城を逃れ、氏邦岩田山

妻沼男沼地方郷土史斷片

五乙 松村 義門

國防とは單に軍事的に國境を守る意味ではない。經濟國難に對する備へ、思想國難に對する備へ、皆國防である。そして郷土を研究し郷土を愛し、學校を愛する事が即愛國心となりあの恐い思想國難に對する國防となるのだと言ふ意味のお話を先日其の道の權威より承り誠に愉快であつた。こゝに妻沼男沼方面の郷土史の一端を記さう。

一、妻沼男沼の地名の由來について

妻沼町男沼村：男と女：そこに何等かの關係ある事は何人も容易に豫想される。

妻沼町聖天堂の縁起によれば「昔伊斐諾伊斐冊の二柱の御神鎮座の地なれば、妻沼男沼の村名残りたり」とある。妻沼男沼の地は利根川の流域にありたる爲古來利根川の浸水區域として常に洪水の浸害を被つた所で、其の結果男沼村と妻沼町に形狀甚だ相似たる沼が出来、附會して相對地名を付したのであると一般に信ぜられて居る。しかし今は其の沼は明治三十年前後の耕地整理の爲全然形は存せぬが、妻沼町西方及び男沼村東端に「池ノ上」「柳原」「河端」「岡」の地名ある故今の聖天森の裏と男沼村の天神社の東にあつたものである。又これについて次の様な傳説がある。

今は神社法公布によりて男沼村社天神社に合祠せられて居る男體様と稱する神社がある。同じく妻沼町若宮に女體様と村人に崇敬されて居る神社があるが、此の二柱の神様が或朝

(終り)

城に歸り、長得、香英の兩僧の勸誘に依り、六月十四日氏邦降服剃髮して入道宗齊と號し、後加賀金澤に赴く、是れ當時の有様なり。然れども古今消息集に在る頼原康政より加藤清正へ送りたる手紙に據れば、氏邦は小田原に籠城せず鉢形城に籠り、六月十四日北國人數即前田利家の陣に降りし旨記しあり。而して尙氏邦を前代未聞臆病武士と罵りたる言あり。此の手紙は前記正龍寺等より前のものであるから、之を信すれば、氏邦小田原籠城は、後世の構作なりと斷ぜざるを得ない。前記の正喜橋をわたり坂をのぼりて左の小丘は當時御殿の門口なりと傳へらる。仰げば草萌ゆる中雜木疎なる中に巨椋あり。幹五抱に餘り、梢空を拂ひ中は腐りて中空大人三四人を容るべし。今猶ほその中に大蛇穴居すと傳へられ近よる者なし。あゝ嘗てはこの巨椋の上に勇まじき信號旗の輝きたる事もありしか。鉢形城壁鳥難窺地軸築來萬似歌三四渡河臨上野民廬大平棘爲籬、と僧萬里が詠じたる流石の堅城も廢墟田圃と變じて、巨椋一人當時を語るあるのみ。猶ほ前記の泉水坂には當時こゝに架せる橋梁美觀を極めしと云ふ。古碑に曰く「鉢形に過ぎたるものに二ツあり、座頭坊主に中高の橋」と。之によりても此の橋の如何に美なりしかを知らるべし。今この泉水に到れば一面の稻は黄金の海と化し辨天の小祠一人ありし昔を物語り、美しき姫や侍女達の姿を懷古するものゝ如し。こゝにこの稿をしたゝむるに當り大いなる參考の書物をお出し下されし太田猪三殿に深く感謝する次第なり。

鎮座所をはなれ沼を挟んで五にむきあつて居られるのを村人が發見した。誰かのいたづらであらうと始めは別段氣にも止めずもとの座におかへし申上げたが、毎朝同じやうな事が續くので不審に思ひ遂々白山様（男沼村字臺に鎮座す、祭神伊邪冊命）に相談に行つた。所が此の神様がこれは何か曰くあるに違ひないと兩方の意をたゞし、遂々媒介の勞をとられ二柱の神様を夫婦にされた。それ以來自然男沼女沼と稱せられ男沼妻沼の今日に到つたのである。そして又結婚當日二柱の神が白山境内で臺の上にお休みになられ以後「臺」と云ふ地名が生れたのである。

二、聖天堂について

妻沼大我井森にあつて舊幡羅第一の大社で舊長井庄の總鎮守たりし所であつて今日でも關東屈指の名刹と稱せられる所である。熊谷太田縣道に面して堂があり堂門より本堂迄は凡そ三町其の間老杉大槻鬱蒼として晝猶暗きの感あり。本殿及び拜殿は銅瓦葺で莊嚴を極めて居る。本尊は歡喜天で右に辨才天左に大黒天が安置されて居る。慶長十一年の縁起によれば「元伊邪諾伊邪神二柱の御神鎮座の地なるを以て女沼男沼の村名遺りたり。而して聖天堂と稱し始めたは仁安年間齋藤別當實盛、平相國清盛の命を受け關東に下り長井庄に鎮住し當所に信仰を寄せ、治承四年修築を加へ其祖先利仁靈夢によりて越前國武生の國府櫻澤地より探り獲たる歡喜天を、金ヶ崎五幡の本城に勧請せるに因みて、即ち當所をも聖天堂と崇めたるに始まる。其後實盛歿したるも實盛の外甥、宮道謙平國平、奥州征伐の功によりて長井庄を賜はり、實盛の嫡子右馬允實家を長井庄に、次男實幹を福河庄に居らしめたり

しが建久四年三月二十七日、源頼朝下野國那須野に葵向の途次、當所に參詣せる時、別當阿闍梨阿闍梨、即ち請うて關八州を勸化し、同八年堂宇を再建し、聖天山歡喜院長樂寺と號す、同年四月八日國平、實家、實幹宣託によりて、正體の大錫杖竝に十一面觀世音を鑄奉り、七堂伽藍備はりしが、世下りて元弘建武の頃より應仁文永の頃に至り、世は戰國の巷となり、長井氏亡びたるによりて一旦衰頹せり、其後忍城主成田下總守長泰、同氏長深く信仰を寄せ、天文年間其臣手島美作守に命じて、舊觀に復せしめ、夫より江戸時代に至りて慶長九年社領五十石の朱印を附せられたり」とある。そして建久四年の錫杖は今に存し、長さ一尺五寸五分、重さ三貫七百四十匁で銘文がある。又曆應二年の饗口及び天文二十一年慶長九年の古棟をも藏せられて居る。聖天様に關聯して次の様な傳説がある。

三、十二郷地に松を植ゑざる理由

こゝに不思議なのは私達の地方正確に云へば妻沼を中心とする十二郷は昔から松を植ゑてはならぬと言ふ説がある。いつの頃からとはつきりした事は言へぬがこれは今も嚴格に實行されて居る。これについては面白い話がある。聖天様は大變短氣なお方で、物事を待つ事が大嫌ひであつた。それからして「待つ」が嫌ひ「松」が嫌ひとなつて氏子の十二郷の人々は松を植ゑぬ事になつた。と言ふ人もあり又或人は昔聖天様と吞龍様ならぬ角力をおとりになり勝つたお方が自分の山、即ち吞龍様ならぬ金山、聖天様ならぬ辨天山に植ゑる事になつたが、聖天様が負けて到頭松を金山の方にとられ、それ以來十二郷には松は植ゑられぬ事になつたのだと言はれ

深谷町の舊蹟と傳説

五乙 大崎 裕治

た。此の事は全くの事實であつて妻沼街道を通つて同じ大里郡奈良村でありながら、大字葉草は所謂十二郷の一であるが爲、ものゝ二三町とはなれぬ大字仲奈良には堂々と松の木が植はつて居るにかゝはらず、松が一本も見られないのを見て、如何に根強くこの傳説が村人に信ぜられて居るかゞ解る。

四、布橋の由來

大字妻沼上町から森北に通ずる舊縣道を横ぎり悪水に架けてある橋を昔から布橋とよんで居る。建久四年三月源頼朝公が武藏國人間郡で追鷹狩をなして、それから下野國那須町に行かうとして妻沼にさしかゝつたが、古利根川部が歩行出来ぬと言ふので其所に舟橋を架け、其の上に白布をしいて通られたと言ふ。其の時頼朝公は四方の山里をながめながら駒とめて袖打拂ふかげもなし

妻沼わたりの秋の夕暮

と詠じたと言ふ。それ以來こゝを布橋と呼ぶやうになつたのである。

五、兩宜塾跡

今は妻沼町役場所在地となつて居るが兩宜塾と稱する所があつた。こゝは幕末の奇傑、寺門靜軒の創立したもので萬延年間より明治の初年に至る數年間經書詩文を講じた塾である。明治時代の松本萬年、吉田六三郎、吉田次郎、東條芥水、竹井澹如、長谷川敬助、石川彌一郎等の人物は皆此の塾の出身である。

我が郷土深谷町は現今では養蠶地帯を控へて製絲工場が町を狭しと立ち並び大小の煙突の下には遠く新潟、長野あたりよりかき集められた糸繰り娘が、歌聲も面白く糸をひいて居る。この生糸の町深谷もその昔戰國時代には、上杉憲英公が深谷城を築城し武田信玄と戦ひ抜いた古戰場でもあり、又仲仙道の華やかなりし頃は名高い宿場でもあつた。今そこにおこつた深谷城を中心とする豊富な舊蹟と傳説の二三を述べて見よう。

深谷城。これは深谷町の北にあるわが舊蹟の代表的なものである。この城は一名木瓜城とも云はれてゐる。それは城の形が木瓜の花によく似て居たため、誰れ云ふとなしに「木瓜の城」と呼ぶやうになつたことである。

此の城は室町幕府の末、古河公方對上杉氏の争亂時代に築かれたもので最初の城主は上杉憲英と云ひ傳へられてゐる。康正二年に上杉武藏入道性順息男右馬助房顯は深谷城を修築して再び古河公方に備へたが、成氏公は岡部原に打出て合戦し遂に敗軍する。そして天文十四年秋、川越合戦起り、翌十五年四月上杉憲政は敗軍を城に收めた。其の後北條氏康は勢猛にして關東の諸城は北條氏に屬したけれども深谷上杉のみは節をかへず、北條氏の大軍に當つた。永祿四年四月、上杉謙信は深谷の兵を引率して小田原征伐を試み、其の後深谷城主憲盛は北條、武田の聯合軍を倉賀野に打破つたが、武田信

玄は其の後、當城を襲ひ大沼彈正の曲田城を焼打にし、次に北條氏邦の爲めに遂に陥落した。現今でもその城蹟は町の北に残つてゐる。

深谷並木。これは町の東端にあり仲仙道に沿つて左右に立並び、松杉楓等の巨木が畫向暗く鬱然として古の大街道の面影を存してゐる。これは安政年間に植ゑたもので、往時本街道を往來した參勤交代の人馬を始め、其の他の旅人等は是等の並木の蔭に笠をぬぎ重荷をおろし流るゝ汗を拭き或は旅の草臥をこゝでとつたであらう。當時の風情を想ひ起せば無心の街樹も何をか語らうとするかの様である。

次にこの地方に住んでゐた人々の茶のみ話に語り傳へられて來た怪奇な傳説を述べよう。

信玄竹。深谷町本町の北東、大沼の界の國道に當つて小さな土橋がある、その附近に自生してゐる二尺乃至三尺の小竹をさしていふのである。大沼彈正の曲田城を焼打ちした時の事である、この時信玄が城に火を放ち燃え上るのを見て一度軍勢を後退せしめ、已れは前記土橋附近にまで來てふり返り火勢如何と伺ひ、火烟が猛烈に上るのを見て安心して馬首を廻さんとする瞬間持つて居た竹の鞭を馬上から落として仕舞つた。その竹の鞭が根を生じたものといはれて居るのである。

忠度櫻。深谷町の西端清心寺の忠度櫻、これには我が郷土として最も誇るべき美談が織込まれてゐる。

それは平家の一族と共に京都を追はれた薩摩守平忠度はつひに西海の戦に武藏國岡部六彌太忠澄の爲めに殺されてしまつた。忠澄は平家の武將としての忠度公、また文學者歌人と

して、

行き暮れて木の下蔭を宿とせば
花ぞ今宵の主ならまし
さざ浪や志賀の都は荒れにしを
昔ながらの山櫻かな

の歌で有名な忠度公を殺したのを非常に氣の毒に思ひ岡部に歸つてよりすぐ近くの淨土宗清心寺に忠度公の遺髪を埋めて塔を立て、供養した。これを忠度の妻「菊の前」が開きはるばる武藏の國に訪れこの墓に參拜し亡き夫忠度を慕つて死んだ、その際菊の前が持つてゐた櫻の杖を墓側にさし、これが根を生えたものが有名な「忠度櫻」だと傳へられてゐる。これがまた不思議な事に美しい花の中から青い綺麗な葉を出してピンク色の花弁と緑色のこの葉と相映じ得もいはいはれぬ美しい姿を現し、武人にして文人でもあつた忠度、美しき「菊の前」を描き出した様である。

今寺前に立つて當時を思ひ浮れば美しい一つの繪巻物語りが浮んで來るのである。

〔深谷郷土誌及び郷土研究會發行「木瓜」を参照〕

妻沼郷史

五乙 青木 敏雄

現布橋の西に布橋邸といひ民家五六戸あり、元の熊谷太田間の道路にして、こゝに架したるものであつたが、新道の開通に伴ひ現布橋と稱する位置に移されたるものなり。

往昔源頼朝公本縣入間郡に於て鳥追狩をなせし時直ちに下

野國那須の狩を覽んと欲し、武藏より野州に渡る時、當妻沼を通り、古刀彌川の部渡り兼ね、舟橋を架し、其上に布を敷き通行し、馬上四方の山景を眺め乃現に言ふ布橋の名こゝによつて出來たのである。その時詠じた歌に、

こまとめて袖うち拂ふかげもなし
女沼わたりの秋の夕ぐれ

齋藤塚

彌藤吾杉之道氷川神社南西約一町の水田中に一塚あり。呼んで齋藤堂といふ一つの石碑あり、文字不明にして知るを得ざれども、齋藤別當實盛の子、五、六兩人が父の遺物を埋めしものならんと言傳ふ。

平佛（陣屋址）

小學校の北東に大河内金兵衛の陣屋と傳へらる所あり。里人平佛と稱す、武藏守式部大輔助高の墓にして、大銅元年二月十五日紀元一四六六年（今より一二二〇年前）建立と傳ふ。板碑にして表面には釋迦、文殊、普賢の三像と梵字を彫り、裏面には梵字を刻せり。今は上部缺損して其形如何のものなりや想像する能はず。考古學者の判に缺つより外なし。昔時は相對して同様の石碑ありと傳ふれども詳ならず。大河内金兵衛は貞享二年當陣屋を引拂ひ江川太郎左衛門赴任せりといふ。按ずるに助高は武藏の國守となり、時人幡羅大殿と稱せり。かゝる貴族の墳墓にして塚なき理なし。故に好事家の附會説ならんか。殊に板碑の裏面に年月を彫るは他に例なき故後人の妄作なるべしと推知せらる。

武藏の國守は幡羅大殿なるにより、妻沼他八ヶ村を總稱して幡羅とよぶものと推知せらる。又幡羅村の村名もこゝによ

るものと思ふ。故にこの近郷より成る、我が會は幡羅中學會と稱するのである。何とその歴史たるや、古きものではないか。

大我井森

現大我井神社。聖天堂。役場。學校は皆總じて、大我井森の跡にして、古昔大森林なるを知るべし。

大我井神社の境内は明治の維新の變革に遭ひ老樹伐採せられ五町歩になり、聖天堂の境内も同じく變革に遭ひ、維新までは五萬九千坪餘であり、丈餘の老杉樺林立し鬱蒼として、晝猶暗きの感ありしも、今は一萬六千八百八十六坪となる。又役場學校の坪數はどのくらゐか知らぬが、恐らく聖天堂の境内に比すれば、微々たるものであらう。これ等すべての、土地が大我井の森である。即ち大我井森の名残りたるは推察するに難からざる點多し。祖父の言によれば祖父の少年時代、この森に入ると、晝猶暗く、老杉樺林立して、葦丈餘に茂り、狐、狸、猿の類横行し、氣味悪く森外に出る事甚だ難しと。夫木集武藏名所の部光俊卿の歌に

紅葉ちる大我井の杜の夕たすき、又目にかゝる山の端もなし

此歌は武藏野を過ぐるに眞に山は見えずして大我井の杜ばかり僅かに紅葉見えけるに詠めるとの詞書あり、よりて往時の紅葉名所たることを知るべきなり。

因曰 夫木集（編者不詳）

聖天堂の縁起に「長井庄女沼郷大我井森聖天堂」とあれば村民當所を古歌に詠ぜし名所なりといへり。里人は「たがひのもり」といひ光俊卿は「おほがひのもり」といふ此杜を歌ひし

ものや、或は夫木集を寫す時大と誤記せしにや云々。

白髮神社

祭神 白髮武廣國押稚日本根子命 天鈿女命 猿田彥命
由緒 承和八年(一〇八六年前)二月十七日創立
荒井右門太郎貞家釋教上人を祭主に請じて同性鎮護の守護と崇め奉る。古へは本社にして神鎮も一庄に及び、宮地も廣く神饌も莫大なりき。而して四方に鳥居ありしが、天慶の兵亂にて宮領も荒毛し兵火に遭ひて宇社も焼失し一つとなれり。然れども往古より社免御寄附あり、因て禮尊聊怠慢なく天下泰平、國土安穩、五穀豐饒の御祈禱怠らず勸行せしめしものなり。

醍醐天皇延喜五年十二月日本國中三三三座を延喜式内の神社と撰ばせ給ひし時、本社は其一に加入せられたること舊記に詳なり。

應永十二年二月二十三日忍城主成田五郎家時不思議の奇瑞を蒙り、家臣豊島七郎高德、松岡三郎忠經へ神領永樂百貫文寄附せられしこと古記にみゆ。

現在の社殿は後年奉遷せるものにして其年月並建築年月共に不詳。

社殿間口二間、奥行三間、境内八十八坪。

本社由緒古きことは彼此綜合して推察することを得。記して考古學者の參考とす。以上。

長井庄、齋藤別當實盛

五乙 内田 正男

我が長井村は、古の長井庄より起る。
昔の長井庄は又永井庄とも云ひ、長井村及び妻沼、太田、明戸諸村地方、舊幡羅郡三十六箇村の地であつて、而して本村今の大字西野の地は鎌倉時代以前、其長井庄を支配してゐた、齋藤別當實盛の居住した地で、即ち長井庄の首邑であつた。

源氏興りて平家衰へ、赤旗の大軍は富士川の水禽に驚かされて敗走した。その時、一旦の恩義を重んじて、敢て敗殘の平氏に屬し、錦の直垂に白髮を染めて、越前篠原の戦に壯烈なる最後を遂げた人こそ我が長井庄の住人たりし齋藤別當實盛であります。齋藤別當實盛公は藤原利仁將軍十七代の後胤でありました。

齋藤別當實盛は壽永二年七月歿し、その後、安達藤九郎盛長、長井庄を領有してゐたが、實盛の外甥宮道儀仗平國平、奥州征伐の功によつて、源頼朝から此庄を給はり、實盛の嫡子右馬允實家を長井庄に、次男齋藤次郎實幹を福川庄(福川の流域)に居らしめた。

爾來、我が長井村の歴史は據る所なきも、或一説には、長井氏代々此地に居住して、戰國時代になつて亡びたものと云はれてゐる。

大字西野の畠中に塚あり、里人傳へて實盛塚と呼んでゐます。塚上に碑石あり、碑面上に梵字が彫つてあります。

光明遍照。十方世界。念佛衆生。擲取不捨。有志者爲茲父要儀成佛也。正喜元年丁巳十二月晦日孝子敬白」と刻み、裏に「長井馬入道眞。生年七十一也。正喜元年丁巳十一月十二日」と記してあります。

塚の北に森あり稻荷社を祀る。西北に小川流れて居り里人これを堀と云つて居り、森及び塚の邊を堀内と云ひ、齋藤別當實盛の邸址なりと傳へられてゐます。塚は凡らくその邸址に建られた供養塔であつたのでせう。而して妻沼町の聖天社は實盛の舊領長井庄の總鎮守であつたと傳へられてゐます。

市田村郷土誌斷篇

五丙 金井 義雄

逢ふ人に問へどかはらぬ同じ名

いくかになりぬ武藏野の原

是れ皆秩父嶺以東茫漠たる平原の景を詠ぜしもので、即ち古代武藏野の風趣を偲ぶ資料なり。今此の平原の二點我が市田村に就て述べん。

市田村は能谷市の東南約一里に位し、中曾根、小泉、屈戸、手嶋、上中下の三恩田、沼黒、吉所敷、高本、津田新田の舊十一箇字より成りて、東西一里十八町、南北三十町、北は荒川を隔て、熊谷市及び久下村と相對し、西は吉岡村に接し、南より東は和田吉野川を隔て、比企郡大岡村及び吉見村に接す。地勢荒川の南岸に沿ひて土地一般に低く、殊に其東南端部に至るに従ひて甚しく、村内東西高低の差は十九尺にも及べり。荒川は村の北境を流れ、吉岡村より來る通殿川は村の中央を東流して、村の南端を東流して居る和田吉野川と大字津田の南部に於て相會して共に荒川に注ぐ。是等諸川の流域頗る灌漑の便に富み、地味又一般に肥沃にして水田よく開け、米麥雜穀の栽培に適すれども、村の東南端部は往々濕潤

に失する所あり、村内小池二あり、一は石宮池と稱し大字手島字西通りに在り。一は大沼と稱し大字手島駒形に在りて後者は茫々たる澤の如くなりしが明治四十三三年荒川氾濫の際より今はその影を失す。ともに安政年間の洪水によりて生じたものなり。

沿革 當村は中古時代の市田郷、即ち和名抄には以知多と訓する所の地なり。されば郡中に於ても、早く開けし方の地なりと覺しく、已に鎌倉時代に於て、當國私市(キサイチ)黨の一族、久下重家の次男保則、此地方に居住して市田太郎と號せしは、即ち其在名を以て氏とせしものなるべし。又當村古より戰國時代の頃までは、今の荒川の對岸久下村とは陸地接壤の地たりしなり。此の事は市田太郎の居跡と共に、久下村に關係あるを以て記述を省略す。當村其後の沿革として考ふべからざれども、建武より正長年間に關する事に就き、新編武藏風土記稿大里郡小泉村の條に「此地名は古き唱へて、岩松氏所藏の文書に、當國小泉郷を領せし由見へ、又矢野伊賀入道と云ひし人も建武の頃男衾郡小泉郷を領せしと云ひ、又上野國世良田長樂寺元徳の頃の文書にも出づ。又隣郡男衾郡本田村教念寺所藏延文元年の文書には、畠山阿波守國清申請にて本田郷及小泉郷を寄附し、康安二年六月六日の文書にも此地を同寺へ寄附せし由を載せ、共に男衾郡小泉郷と書けり。然れば當村古へは彼郡内に屬して、後郡界の變革ありしなるべし。又貞治三年正續院舍利殿長燈料として當所を寄附せり。及び正長元年管領持氏より、金陸寺領にも當所を寄附ありし由、鎌倉圓覺寺に傳ふる文書にも見えたり。其内正長の方には武藏國大里郡小泉郷と載せたり。是今現在當郡

に属する所に符合すれば、其正しきを得たるに似たれど、恐らくはさにあらず、前にいへる建武以来の文書數通、男衾郡と記しあるのみならず、教念寺の如きは正しく隣郡にある寺なれば、郡名書出さんに違ふべき故なし。持氏の寄附狀の類は土人のたま／＼誤りまをせしを記せるにあらずや云々」とあり。この小泉郷は今當村大字小泉の地なり。又鎌倉圓覺寺所藏建武元年八月十日の文書に「正續院末寺長福藏國恩田厨内田島郷田在家事云々」と載せたり。恩田御厨は即ち今當村恩田の地ならん。是等によりて當時の狀の一斑を察知すべし。又戰國時代の事蹟に關しては、小田原役帳に、狩野大膳亮十二貫文吉見郡高本小八林と載せ、又成田分限帳に、十五貫文小泉將監、譜代侍三千貫文豐島美作守長朝と載せたり。高本は今の大宇高本、小泉は今の大宇小泉、豐島は今の大宇手島にして、豐島氏は又手島氏とも稱へ、美作守長朝其子左馬助居住し、手島殿とて里人尊敬せし由、新篇武藏風土記稿に載せたり。是れによりて當時の狀の一部を窺知するに足るべし、即ち當村中、小泉、恩田、手嶋、高本等は徳川時代以前已に部落を形成し居りしを察知するに足る。而して天正十八年徳川氏入國後は、

○手島村 正保四年阿部豐後守の領となりしが、元禄十一年天領となり、明治七年川越藩松平大和守の領となり、天保十一年又天領となり、嘉永元年再び松平大和守の領地となる。

○上、中、下恩田村 始め天領にして正保四年阿部豐後守の領となり、慶安年間旗下内藤岩之助の采地となり、元禄十一年又天領となり、寶永六年美濃部重右衛門の采地となり、

文化八年川越藩主松平大和守の領地となり、天保十四年再び天領となり、同年大島左京の采地となる。

○小泉村 始め天領なりしが、正保四年阿部豐後守の領となり、元禄十一年又天領となり、嘉永元年大和守の領となる。

○屈戸村 正保の頃までは、荒川の北岸にありしが、荒川洪水の爲めに水溢に堪へず、今の所に引移りしものなりと云ふ。始め天領なりしが、正保四年阿部豐後守の領となり、元文三年旗下秋山伊兵衛采地となり、文化八年松平大和守の領となり、正保十四年又天領となり、嘉永元年再び松平大和守の領となる。

○吉所敷村 吉野某の屋敷跡なりと云ふ、始め天領なりしが正保四年豐後守の領となり、貞享二年又天領となり、元禄六年旗本伊勢三十郎の采地となり。

○中曾根村 始め天領たり、正保四年豐後守の領となり、元文二年旗本曲淵甲斐守の采地となりて子孫相承け、天保十三年采地を割き、建部傳右衛門の采地とし、二氏世襲して明治維新に至れり。

○沼黒村 始め天領たりしが、寛永九年川越藩主酒井讃岐守忠勝の領となり、同四年天領となり、正保四年豐後守の領となり、元禄十一年又天領となり、正徳四年村高を三分して、一は旗下狩野川、一は旗下安部主計、一は天領たり文化八年狩野安部二氏の分を上地して天領となし同年松平大和守の領となり、天保十四年再び天領となり、其一部を割きて旗下内藤小膳の采地とせしが、嘉永元年再び松平大和守の領地となれり。

○高本村 始め天領たり、正保四年阿部豐後守の領となり、

元文三年其一部旗下秋山伊兵衛の采地となり、寶曆十三年他の部分旗本田中出羽守の采地となれり。

○津田新田 村民吉野某の開墾せし所にして、正保の頃は單に新田と稱へしが荒川の北にも新田あるを以て、隣村津田の津田を採りて、元禄の頃より津田新田と改稱せりと云ふ、正保の頃は豐後守の領たりしが、文化年間天領となり、其一部旗本本田主税荒川鐵之助の兩人の采地となり、殘餘は天領たりき。

向江戸幕府時代には各村とも大里郡上吉見領に屬せり、明治維新後、前橋藩大宮縣等に屬したりしが、其後入間縣熊谷縣等を経て埼玉縣の管轄に入り、大里郡の所管たり。十七年聯合村制の際は以上十一ヶ村を聯合して中曾根聯合戸長役場を置き、二十二年新町村制の實施に際し、即ち市田村と命名し舊村名を大字として今に至れり。

▽高城神社 大字高本高城町に鎮座す、祭神は高皇產靈命なり、本社は延喜式内の古社にして高木の御靈命を祭る故に御靈の宮とも云ふ舊社は本村の北方なりしが村民居住の後の方に當るを以て今の地(本村東方)に遷座すと云ふ舊社より安政二年同社神職徳永某なる者古鈴一箇を掘出せり、青黒の銅にして古色を帶ぶ、其文に曰く片面牙邪志國、片面高城神社とあり。いかにも古代のものと思像せらる式内神社たるを證するに足れり。尚本社は現今の熊谷市高城神社の本社なりと云ふ説あり、今村社なり。

▽南市田神社 大字中曾根字北町に鎮座す、村社なり。明治四十三年村内小泉、屈戸、手島、津田新田、吉所敷、沼黒、中曾根各部落の十二神社を合祠して、地誌に鑑み南市

田神社と命名せるものなり。大正四年神饌幣帛料供進神社に指定さる。

▽諏訪神社 大字下恩田に鎮座す。明治四十一年村内上中下恩田の五神社を合祠せるものなり。故に今三部落の鎮守にして、明治四十四年神饌幣帛料供進神社に指定せられたり。

▽圓正寺 新義眞言宗比企郡今泉村金剛院の末、東海山と號す、本尊地藏菩薩。

▽常永寺 圓正寺と同宗同末にして長久山普門院と號し本尊は彌陀也。

▽地藏院 新義眞言宗大和國初瀬小池坊の末、醫王山觀音寺と號す。

▽正福寺 大字沼黒に在り圓正寺と同宗同末にして沼黒山法性院と號す。

▽金胎寺 正福寺と同宗同末にして龍部山自性院と稱す。

▽自性寺 禪宗曹洞派小原村文殊寺の末梅龍山と號す。

▽兩昌寺 新義眞言宗北埼玉郡成田村一乘院の末八幡山不動院と號す。

▽金藏寺 新義眞言宗舟松山地藏院と號す。

▽桂雲寺 禪宗曹洞派小原村文殊寺の末にして大野山と號す。

我が郷土研究

五丙 加藤 辰雄

忍町を出で、東南約三十町至れば道の兩側に鬱蒼たる古木

茂れる丘が田野の間に散在して居る、見るからに由緒深げな村落がある。これが我が埼玉村である。

老人の言によればその名「さきたま」は即ち幸魂にして郷社前玉神社鎮座しますに起因するといふ。此の前玉神社は實に彼の延喜式神名帳に「武藏國埼玉郡前玉神社二座」と記るした社に疑ひなかるべく、又我々は此祭神前玉彦命は正に吾が武藏國の國神であると信ずるのである。故に萬葉集にも示すが如く、此の地方を前玉或ひは埼玉の里といひ、此の名は後擴大せられて郡名となり今や縣名として用ひらるゝに至つたのであると信ずる。

斯くの如く考へ来れば我が埼玉村の名の依つて来る所は實に遠い昔に遡るといふべきである。故に我が郷には古蹟、古墳が非常に多い。次にその主なるものを記せば、

(一)丸墓山又鷹墓山ともいふ

此塚は高さ約十五丈、周圍約四百間にて一面に杉笹を以て掩はれ、その頂に墓碑がある。この塚は聖德太子の侍臣蘇我調子丸の墓であらうと云ひ、又其形狀より察するに往古の國造の墓であらうと云ふ。

又此塚高大にして忍城に近き故に、古來名將此所に陣を取つた事が少くない。永祿二年十月上杉謙信忍城を攻んとして丸墓山の地蔵堂に上り忍城を展望し要害を察して火を城外に縱ち攻めたので成田長泰實質を送り和を乞ふたと云ふ(日本野史百十三卷)又天正十年豊臣秀吉小田原城主北條氏を征伐するにあつて忍城はその屬城だつたので秀吉は石田三成に命じて之を討たせしめた。三成は城を水攻めにするため此の

山を本陣にしたといふ。

(二)其の他双子山 瓦塚、將軍塚など皆瓢形、圓形をなしそれ等より埴輪、石器、劍など發見せられるのから見て上古の高貴の人の墳墓であらうといふ。

(三)小崎沼

四面田畑にて湛水、老木あり傍らに碑石ありこれは寶曆三年忍城主阿部正因の建てられしもの其の碑文左の如し。

(表面) 武藏小崎沼

(側面) 古所名武藏小崎沼即此也。所考證以萬葉和歌集矣。自寛平五年癸丑歲至今爲八百六十九年。蓋可知其古矣。此地紛紜紛中而既爲隱其所。夫豈可不惜邪。於是勒其地名於石以爲不絕不朽云。

(裏面) 見武藏小崎沼鴨作歌

前玉之小崎乃沼爾鴨會翼霧已尾爾零置流霜乎掃等爾有斯

武藏國歌

佐吉多萬能津爾乎流布爾乃可是乎伊多美都奈波多由登毛許登奈多延會爾

右萬葉和歌集之歌二首

(側面) 寶曆三癸酉歲九月望

武忍城主玉褐阿部正因建

以上述べた中で小崎沼は村當局これが保存に當つて居るが他の古墳等は皆民有に屬して居る故次第に塚は取崩され田畑に化し昔の跡をしのぶ事も出来なくなりつゝ行くのは誠に惜愍の情に堪へない。(萬葉歌は記者振假名をつく)

我が郷土

五丙 古郡 英治

我等の郷土新會村は深谷の北一里半、郡の北部に位し、東西二十町、總反別四百九十九町餘、戸數五百四十、人口四千東は明戸村に接し、南は大寄村に、西は八基村に、北は中瀬村に接し、又東北の一方は利根川を隔て、群馬縣新田郡に相對す。地勢平坦にして全村邑に滿つ。土質は沖積層及び砂質壤土にして耕層頗る厚く、麥及び野菜的栽培に適す。利根川は村の北境を東流し、小山川は村の東南を流れて、村内大字高島に於て利根川に入る。古代「埼玉の津」と云ひて、西北より東南に流るゝ大河あり、今の利根及び荒川二大河の合流せしものにて、埼玉郡を横流して東京灣に注げり。而して利根及び荒川の二川は、相合して埼玉の津を成すまでは、東西縱横に亂流して流域常に變轉し、其の定まる所なかりき。就中今日の大里郡の中、仲仙道の北部一帯の地は、亂流最も甚だしく、我が新會村も其の一部なり、今日此の地方に血洗島、内ヶ島、矢島、西島、小島、出來島の如く島の字を用ひる地名多く存するは、即往古の河川亂流の状態を物語るものにして、我が大字高島の地も其の一なるべし。要するに古代に於ける我が郷土は野草雜木、萌茨蘆荻に掩はれたる荒蕪たる河原に過ぎずして、朝には狐鬼空しく奔走し、夕には老狸月下に鼓腹するの滿目寂寥たる無人の境たりしなり。

永祿の頃は前記の高島は利根の北岸に在りて、上野國に屬せしが如し。又此の地もと久賀の郷と唱へたることあるもの

の如く、古碑等に往々其の郷名存するを見る。又今の大字成塚の地の如きは、更に古代よりの所なるが如く、塚の字を用ふる村名は佩國時代の塚より起れる者にして、上古時代人民の居住せし所なりとも察知し得らるべし。大字新成は昔は新開に作れるものゝ如く、鎌倉時代に於て、新開荒次郎は乃ち當所に居住して、其の在名を名乗れるものなりと云ふ。

新開荒次郎の居蹟は大字新成の東端に在り、今は悉く畑地に化して見るべき跡を留めざれど、尙當所を呼びて荒次郎屋敷と云ふ。老人の言に依れば文政、天保の頃までは東西一町餘、南北一町四十五間外濠の跡を存したりと云ふ。新開氏は新海にも作り、武藏七黨の一丹黨の一族にして、其の本領は信濃國佐久郡及び、近江國新開庄なりしが、新次郎忠氏源頼朝に仕へて當所をも兼領し、其後此の地に城を構へて居住すること十二代、新海四郎眞氏永祿年中深谷上杉氏に屬し、北條及び深谷上杉等と俱に亡ぶ。子孫轉々として住居を變へ今は江戸に移れりと云ふ。新開氏の滅亡は實に天正十八年なり。

斯く戰國時代深谷上杉氏此の地方に勢力を振ひ、今の本村一圓の地は即ち其の所領たりしが、徳川氏の江戸入府後は、新成村は大寄郷藤田庄深谷領に屬せり、新成及び上下新成の三村を總て一村として新成村と稱せしなり。されば分村せし後も地頭の變遷等同一也。乃ち始め全部天領なりしが、後地を割いて稻垣若狹守、佐久間六左衛門、室賀源七郎等に分給せられ、其の後元祿十一年稻垣氏の領地は、數原通玄、大久保筑前守、内藤石馬之助、大久保萬吉、大久保十五郎等に分

給せられ、爾來天領の外は佐久間、稻垣、數原、内藤、三大久保七氏の世襲する所たり。

高島村に就いては、郷庄領名新戒村に同じ。始め天領なりしを、元祿十一年大久保筑前守、内藤右馬之助、大久保萬吉、大久保十五郎の四氏に分給せられ、爾來四氏の子孫世襲する所なり。

成塚村も郷庄領名同じ。始め天領なりしが、後稻垣若狹守、遠山半左衛門の知行となり、元祿十二年上地して天領となり享保十七年黒田豊後守の領地となりて、爾來其の子孫世襲せり。

明治十三年新戒成塚の二村聯合して戸長を擧げしが、十七年聯合村制の實施に際し、内ヶ島聯合村に入り、又高島村は中瀬聯合村に入り、明治二十二年町村制の實施に際し、今の三大字乃ち舊三ヶ村を合して新會村を成して今日に至れり。

神社に就いて現在知れる所を記せん。

生品神社、大字高島に鎮座す。上野國新田郡生品明神七社の一なりと云ふ。新田義貞公義兵を擧ぐるに方り生品明神に其の成功を祈られたりと。寶曆年間利根川の洪水に際し神域は總て流失したるが故に假に現今の地に遷座せり。又本村字諏訪の木に鎮座せる攝社諏訪神社の境内に櫛の神木あり。今天然記念物として假指定を受く。周圍三丈三尺餘樹齡三百年以前のものと認められし老樹なり。之に由りて推測すれば當社の創立は其以前なりと云ふ。高島村は舊久賀村にして新田義貞公生品洞前に旗揚げの時幾流れと數ふべからぬ義兵の旌旗天を霞めて翻るを見て歡喜せられ「中空高嶺の如し」と云ふ。

はれしと傳ふ。これ高島村の起源なりとも云ひ得べし。祭神は素戔鳴命にして神體は古代作りの金幣、御鏡なり。本村字諏訪の木の諏訪神社に就いては、義貞公石塚村住殿に居りて高島村小名小角の渡しを越えける時、川原の砂埃り立ちたるを見て敵なるべしと驚かれしがこれは黃昏頃利根川を越えて本村字諏訪の木攝社諏訪神社神木櫛の下に來れる援兵にして越後の宗族大江田經隆の兵五千騎なりしと云ふ。義貞公驚き喜んで曰く「諸士來る。何ぞ速かなる。何を以て吾が義を擧ぐるを知るや」と、經隆鞍に伏して對へて曰く「今日羽黒俊賢來りて國中に徇ふ。是を以て馳せ至る。甲斐信濃の諸源氏明日兵二萬を率ひて當に至るべし」と。俊賢は經隆の弟にしてよく走る人なりと云ふ。義貞歡喜措く能はず。かく行軍の速かなりしは諏訪大神の靈驗なりとし、義貞及び一同の兵みな交々崇拜したりしと傳ふ。尙諏訪神社は明治四十二年三月十二日稻荷神社と共に生品神社に合祀せられたり。

古櫃神社、大字新戒にあり。祭神大荒明神なり。創立年月日不詳、鎌倉右府の時秦河勝の末、新開荒次郎忠氏、此の地に要害を築き祖神大荒明神を勧請し傳來の武器を櫛に入れ社の下に納むと傳ふ。或ひは又新開氏本領信濃國佐久郡の内友莊田口郷に祖神を祭り新開大明神とし松皮菱を以て標とす。古櫃は是を寫したるにて、同じく松皮菱を用ふとて氏子松皮菱を憚る由申傳ふ。祭神大荒明神は或ひは秦始皇也とも云ふ。神社とならざる以前は昔時より御焚上げと稱し鎮守秋祭に於て御膳部を奉納せる家、中新戒に軒を並べて二軒あり。東を福島と云ひ、西を大海渡と云ふ。本分の間柄にて大海渡と稱するも以前は福島たりしと云ふ。

其の傳説次の如し。

大海渡の御焚上げ

昔大海渡家に新開荒次郎忠氏の系譜を藏したるに之を藏し置かば家に不祥事あるべしとて小山川に同系譜を流したり。其以後鎮守秋祭祭典の當日には流したりし所の水を汲み來り。飯其の他を造りて奉納せりと云ふ。

福島家の御焚上げ

昔大海水あり。減水の後福島、大海渡兩家の境たる垣に古き櫃流れ付きてあり。内に御幣あり。何神の御幣なるや知るべからず。依つて之を祀りて古櫃明神とてあがめ、小山川の洪水にて流れ寄りたること故同川の水を汲み來りて御焚上げをなしたりと云ふ。然るに今や兩家とも徴すべき古文書もなく是以上の詳細を傳へず。境内に八幡神社、猿田彦大神社、大杉大神社、天神社、淺間神社等の末社あり。

御獄大神社、大字新戒字上新戒に鎮座す。この地はもと榛澤郡新開村字西口小字大洗と云ひ、この社を藏殿宮と稱せしなり。創立年月日詳かならず。往古常陸國大洗磯前酒列磯前藥師菩薩名神大社の御分靈を合せ祀りたるによりて當社所在地を大洗と稱へりと云ふ。後村上天皇正平二十一年後光嚴天皇貞治五年二月十日、社殿を改造し別當三藥寺を建立したりと云ひ傳ふ。前記の如く往古は藏殿宮と稱へ次に藥師菩薩、後に藏王大權現と云ひ、明治六年、御獄大神社と改む。祭神は大山祇命、大己貴命、小彥名命の三方、往古より當社に祈願し雨乞ひを爲せば如何なる大旱魃の年にても奇しく雨降らぬと云ふこと曾てなしと云ふ。

御獄大神社、大字成塚字宮前に鎮座す。もと藏王大權現、

又は藏王社と稱へり。明治三年以降御獄大神社と改稱すと云ふ。其の沿革詳かならず。本神社は寶藏寺持にして、寛永三年開山尊榮法印寶藏寺の創立に當り吉野の藏王權現を分靈勸講せりと傳ふ。祭神は大山祇命、大己貴命、小彥名命、大物主命の御四方なり。

以上神社に就き其の興味なきものははぶき、興味あるものを極めて簡単に記したり。

次に寺院に就きて少しく記せん。
東雲寺、大字新戒村下村に在り。的龍山と號す。禪宗曹洞派、郡内藤澤村昌福寺の末寺也。本尊は釋迦如來、新開荒次郎の開基なり。荒次郎屋敷とは本寺院の前面一帶の地にして昔時、東雲寺の戦ひと云ふ激戦ありたりと傳ふ。何氏との戦ひかは知らざれど、新次郎垣をくぐらんとせし時、すばりとしりの邊りを切り落されしとか聞こゆ。

大林寺、大字新戒字下村に在り。智芳山明妙院と號す。禪宗曹洞派、東京淺草義隆寺の末寺なり。本尊阿彌陀如來は惠心の作なりと云ふ。開基は新開新次郎の妻なりと傳ふ。故に村内男の葬式は東雲寺に營み、女の葬式は總て當寺に營まる俗に呼びて、男寺、女寺と云ふ。

正傳院、大字高島字本郷に在り。古義真言宗、明戸村總持寺の末、瑠璃山藥師寺と號す。本尊藥師如來を安置す。本寺院はもと今の利根の流るる所にありたり。種々の傳説を有すれども今これを書き記るせば限りなし。故に略す。

安養院、大字高島字川口に在り。村内正傳院の末、引接山と號す。本尊は大日如來。

寶藏寺、大字成塚に在り。藏王山と號す。新義真言宗にし

て京都智積院の末寺なり、本尊十一面観音を安置す。寛永三年、開山尊榮の創立に係る。以上寺院に就いて極く簡単に記したり。

尙種々の傳説あり。其の代表的のもの一を掲げん。

弘仁の頃、僧空海諸國修業の途次、たま／＼大字新戒西口の利根の渡しに到る。當時利根川は大字新戒を縦に貫いて東流し居りしと云ふ。即ちこの當時大字高島の地は上野國に屬せしなり。空海舟を待つ間、長蛇の如き利根の清流を眺めつゝ有り合せの石を取り、巧に毘沙門天の像を刻みたり。未だ刻み終へざるに舟來り、空海左耳無き石像を置き去りにして彼岸に渡れり。後年里人この地にこの石像を祭り、崇めたり。耳を病む者、この神に祈りて未だなほらざるものなしとか。今大字新戒劍持勇之助氏持にして、參詣者常に斷へず。詳しく書き記るせば誠に限りあらざれど、これにて我が郷土史の全般を盡く。

忍の古城

四丙 小田島 養一

關東戰史に花を飾つた忍古城の遺跡を訪ねて當年を追懷して見るのもよからう。

忍城は町の西方にあつて、今は忍町の公園となつてゐる、城址としては僅かに本丸の一部に残壘を存するのみであるが、古へは關東七城の一に數へられて「此の城夜襲も成らず、また俄攻めも叶ふべからざる」と、讃稱された要害堅固の城であつた。

平城で、東を首として、西を尾として、本丸、二の丸、三の丸及び内と外の曲輪、櫓臺十二の城門が備はつてゐる城のまはりには池沼或は深田を以て固となした。外曲輪の門は長野口、下忍口、持田口、北谷口、大宮口、佐間口の七つ、其の外は皆な田畠にて城下町は曲輪の内にあつた。また東南佐間口の邊より東北北谷口へ及んで忍川延互して自から掘溝へとなつてゐて、曲輪のまはりには二里あつた。

城の創築年代は詳でない。忍町は中世、武藏七黨の隨一である兒玉黨の領下であつて、成田氏以前すでに現位置に城壘の形のもの存して居つたであらうといはれてゐる。

いつの頃だつたか、成田下總守親泰入道宗連、兒玉藏大椽重行の據つてゐる忍城を取らんとする志があつて日夜計略をめぐらし、つひにこれを抜いて成田よりこゝに移つて城壘を修補し、此に忍城の基礎が出来上つた。しかし完成したのは成田滅亡後四十六年、こゝに封をうけた阿部豊後守忠秋である。成田は天正十八年に亡びて城池は徳川のものとなり、松平主殿助家忠をこゝに封じて壹萬石を給したが、文祿元年下總上代に遷り、次いで封ぜられたものは松平下野守忠吉十萬石を領した。忠吉が關ヶ原の功によつて清洲五十二萬石に移封された後、城番が置れた。

下野國王生の城主阿部豊後守忠秋代つて食邑五萬石で封ぜられた。後次第に加増され城主たること九世百八十五年、文政正權の代において奥州白河十萬石に封じられた。代つて伊勢桑名藩主松平下總守忠義こゝの城主となつて十萬石を領した。五世四十七年にして明治維新となつた。忍藩は江戸幕府とその國を同じくし、また頗る幕府に近遇せる地勢にあつた

嘗てこゝに封を受けた松平下野守忠吉は徳川家康の第四子であつて、其の後松平伊豆守信綱や阿部豊後守忠秋のやうな人は幕府樞要の人物であつたので、忍藩の名は天下に知られてゐた。

直實公の生涯

四丙 根岸 重雄

人皇十二代景行天皇四十年、日本尊尊御東征歸陣の際、秩父の峯に武具藏め給ひ正神を祭りしにより武具は劍を第一となす故胸刺國と云つた。併し此の名が雅でないので武藏國と改めた。千何百年前に尊が秩父の山に憧れ給ひ東夷征伐の御祈禱なされ給ふた。我等常に秩父連山を望み、之を思ふて何の感慨が生ずるであらう。それより歳月は流れて鎌倉時代前後に互り湧然として起りつゝあつた武士道を完成した。多くの偉傑の士が武藏に生れた。武藏一國を以て天下を相手にすることが出来ると云はれた、その當時を思へば心の躍るを禁じえない。中にも大里郡には、熊谷直實・畠山重忠・齋藤實盛・岡部六彌大等有名人を輩出した。

堤長し日長し鍾は熊谷寺

と芭蕉が詠んだ熊谷寺に蓮生法師の墓碑が寂然として、往時の面影は松吹く風と共に消え去つて了つたが、直實公の人となしは今でも人々の心の中に生きてゐる。直實公は桓武天皇の後胤平直貞の子で直貞十六歳の時熊谷と名乗り、直正（三歳）直實（二歳）を残して逝いた。直實成長するに隨ひ、武勇著しく待賢門の戦ひには悪源太義平に屬し、石橋山の合戦の

折頼朝と共に眞名鶴の浦迄逃れて敵に追詰められて頼朝將に自害しようとしたのを直實公が止め、木のうろに入らしめ、梶原平三景時と計りて危機を脱したと云ふ。吾妻鏡に「日暮しかば梶原此木の本へ來て直實呼出し、事の仔細重ねて懇に尋ね申せば、木の内より大將軍出させ給ひ梶原に御見參有り大いに奉悦、即ちより御供中、内々心を寄るのどもに觸しかば東國に残敵はなかりければ、頗て貳拾萬騎驍平家を亡給。是より直實が壽にて、御命助け給とて、此忠節は海山よりも深厚なりとて様々の御下しもの有り。後規にとめよとて薦に鳩を添て御紋を下しおかる」とある。此にて直實公の信任の厚いことが覗はれる。後義經に従ひて壽永三年甲辰二月七日攝州一ノ谷の合戦に無官大夫敦盛を討ち功を授けうち、首を敦盛の父修理大夫に送つた、此より直實公は世の無常を悟つたと云はれてゐる。源平盛衰記に直實公が大手に向ひ城戸口に押寄せ一戦の後、夜明けを待ちて子小次郎直家と共に濱際に居た時、城内でする伎樂管絃を聞き直實が感じて「軍の庭に管絃し、歌を詠じて勝負を知ると云ふ事はあるなれ。我が朝には未だ其例を聞かず哀げに上臈都人は情深く心もやさしき事哉。斯る亂る世の中に詩歌管絃の興を催す事の面白さよ我等いかなれば邪見の夷と生れ、いつまでも命を生きんとて身に甲冑をはなたず、手に弓矢を携へて斯様の人に向ひ奉り、鬭争の劍を研ぐ事の悲しさ」と嘆いてゐる。此に於て直實公は人世に對して深く見つめる様になり厭世の心が湧いたと云ふ事が云へる。直實公は武夫として崇高な心があり法師としての悟りもあつた。建久三年壬子十一月二十五日早旦、直實公と久下權頭直光と御前に於て争つて勝ち、後還りて醫

勇士猶存一古墳
黃昏過客爲追余

緬懷白旆擁三軍
驚却鐘聲馬上聞

をはらひ、相州走湯山に入り、翌年都に上り法然上人の御弟子となつた。其後程經て元久三年故郷に歸るよしを上人に告げ、上人より自畫迎接の曼陀羅竝に御自作の御影を賜り、蓮生法師は是を笈に入れて武州に下る時、不肖西の行者と云ひて假初にも西を後にせず、馬にも逆乗つたと傳へられてゐる。法師の歌に

淨土にも剛の者とや沙汰すらん

西に向ひ後見せねば

とある。建永二年九月四日午後往生すべき佛勅を蒙つたと川向の村岡に札を立てた。當日に及んで空に音樂聞えて異香が薫つた。傳聞した老若群をなして集る者幾千人となく、蓮生法師は浴して、身體を清め袈裟を着し、上人より賜つたとこの彌陀來迎の畫像をかけ端坐合掌して念佛と共に眠るが如く往生し、紫雲一時あまり草菴に棚引いたと云ふ。直實公が終焉の期を知つたのは彼の修養に依るかも知れないが、又直實が子無きを憂へて彌陀如來に十七日間祈りて瑞夢を見て直正を生み、益々之を信仰して又直實を設けた。直正は十八歳にして逝き、直實は承元二年九月十四日六十八歳にて死すと云ふもあり、承元三年九月十四日八十四歳にして病死すともある。併し病ではないらしい。死期の年月の眞偽は解らないが命の終る期を告げ給ひしは此の彌陀であらうといはれ、是を證據の彌陀と呼んでゐる。直實公は半生を戦ひに獻げ、併も戦國の武士の常の如く最終を悲慘なる幕でなく、いかに一世の大僧の如く安心立命を得て逝いた。此を初とし此を終りとする幸福であらう。

熊谷晚鐘

中御門宰相顯卿

評論

關西に於ける古典美術について

五乙 長谷川 宏

私は文學的なものを非常におそれる。文學が文學的なものが私を本道と堅固なる自然研究から遠ざからしめ漠然たる迷想に時を浪費させるからだ。だが一方自分の氣持を文字に描き現はしてみたい慾望にかられる。本當に慾望といはるべきで、何も確固たる計畫の下になすわけではない。私の中の文學的なものがそれを望んでやまない。おさへることの出来ない生れつきだ。だが文學者が抽象の言葉を弄するに、畫家は色彩と線とその感覺その認識を築いてゆくべき筈なのだ。そこに私の矛盾がある。

だが文學者氣質を最も警戒したセザンヌ、彼がボードレリアンであつたことはあまりにも明らかだ。アルデルは詩人だつた。ポエジイのない繪はだめだと言ひきつた前田寛治。私はかうやつて解決つけるより仕方なかつた。そしてより一層仕事のレアリザシオンへ力をそそぐことを期するより仕方ないのだ。

或晩私は夜風を身にしめつゝ夜店の古本屋の前にたつたのである。期待のない心にちらと金文字がかすめた『美術の都』手にとつてばらりとくつてみた。チゾオリの古代祠堂の寫眞。カムパニヤ。サン・ピ

エトロ寺院。ギルランダイヨ。ボツチエリ。ミケランジェロ。美術の都花の都ローマ、フロレンスだ。私はこゝで關西旅行を思ひ出した。この關西旅行の影響がどれだけ明瞭に私の仕事の上にあらはれたか知らない。きつと誰かがわからないうだらう。それ程私は鈍感なのだ。頭へ感じたもの、その表現に半のやうにコッコッ進む氣力はあつても何せ感覺の鈍いのを慨く。だがこの關西旅行がどれだけ私の心へひびいたであらうか。とかく居眠りかちな私の意志へゴンとアツパカツトくらはしてくれたのだ。私の心に於いてはたしかに一つのエポックであつた。この旅行、具體的に仕事に記念しておくことが得ないならせめて輕蔑すべきであらうとも文章にまとめてみたいと當時の日記をひらいてみた。日記を基にして幾日かムリかてこの一文を書いてみた。その間絶えず頭が變化する。ベンネームを三つも四つも持つてゐて、それによつて文體を書き替ける等といふデヤリナリストの才能を持たない私だから。くりかへして讀んでみると修正にきりが無い。變な文だけれど此れが私のだから仕方ないと妥協した。いけないことだらうけれどもこれが私の全力を傾けるべき仕事でないのだ。文筆へなぞ氣

をとられてはいけない。單にメモといった文なのである。

(一九三三、一〇、二二)

ほの／＼と夜が明けてくる。トンネルをぬけると美しい若葉だ。白く黄く赤く美しく朝日にかざやく山腹。暗く不透明な霧につままれて谷底深く沈んでゐる若葉。點々として色彩するは桃櫻の重たい白だ。さわやかにコバルトの空気が車窓を絶えず音をたて、流れる。冷氣快き信濃の朝。赤い道が二五分の一の勾配で山腹をめぐり道路工事の小屋がしつとりと眠つてゐる。青空には灰色に淡く固いピラミットが巍然と迫つてくる。あゝ、けさも浅間の煙が……

私は前から相當な時間を費してよりよき旅行をしたいと努めた。私には遊べなかつた。遊ぶにはあまりに私の生活が切實であるのだ。線一本引くにさへ眞剣である生活に何で遊情が許されよう。殊に、東方素描の國、木彫の國日本であることを思ふとき。吾等の古典に十分接し得る唯一の、始めての機會なのだ。私の仕事にいくらかでも助けになる吸収が出来たならば。よき洋畫の古典なき日本に於てルーブルは夢の一つとさへ言ふべき生活狀態。私はよき作品に餓えてゐた。複製ぐらゐで、どうして眞の精神に接するを得よう。あんなゴツホの小品にさへ心躍らしたくらゐ餓えてゐた。この餓えてゐた私の心へ關西へといふ語がどんなに喜びで躍り狂はしたことが。私はよきものを豫想してフラ／＼になつてしまつた。クラシック藝術、京都、奈良、そして大和の隅々。寺、五重塔、佛像……もう澤山だ。鈍感な頭に、見せつけてくれてひつぱたいにくれるものが、漠然

と涯から涯が見えないくらゐ竝んでゐた。汽車のひびきに夜も眠らずに。

一六二

重い頭、はつきりせぬ眼、疲れた身體で何が出来たらう。私は慾が深い。拾へるものをみつけたものをみんな出来るだけ把握しようと思つた。陶酔と把握、同情と追求、考へてみた美しきもの。それに陶酔してそれつきりだつたら趣味だ。アカデミストだ。その美しさが如何に構成されてゐるか。何によつて構成されてゐるか、その追求が學生としての根本精神であり瞬時たりとも忘るべからざる態度なのである。學ぶことは理解することである。自分のものにすることである。

社會的な形式が何の役になるだらうか、因習的道德に何の生命が見出されるだらうか。總ては仕事だ、作品だ。社會的の一切が人間の價値を評價するに何の役に立たう。仕事のためにはあらゆるものを犠牲にせねばならぬ。世間から如何なる誤解をうけるとも、ひるんではならぬ。この良心を傷つけてはならぬ。彼のクルベエやバルビゾンの畫家達やインプレッショニストの先覺者達彼等は長い間異端者としての冷たい白眼視の下にあの偉大なる作品を残した。パリ時代に於けるセザンヌの如き無政府主義者として罵倒せられたにもかゝらず二十世紀に入るや世界至る所の有象無象は彼をエポックメーカー、現代繪畫の父と祭り上げたではないか。偉人天才は大衆から一歩先にあつてゐた。飯は喰へても、大衆の域から一歩も出られない。總ては仕事だ。それは人間の生命だ。私はこの點に於いて實に慾張りである。掴みたい。とりた。

發見したい。人の持つてゐるものは劍を以てしても取るのだ。

私自身の興味からかう出来ない場合はあつたにしても、出来るだけこの態度に終始することを努めた。さうでなかつたら進歩する確信を得られないからだ。

だが、頭が少しでもはつきりしないときは何にも出来ない。何もやりたくない。いくら努めても頭が痛くなるばかりとしか思はれなかつた。この時もあまりに高ぶる情熱に私は理性の缺け易い態度でこの機會に面せねばならぬ。理性が缺けて何が出来たらう。だが仕方がない。私はプラタナスの間に青く沈んだ空氣につままれて未だ覺めやらぬ「昨日の都」京都の朝へ一歩踏み出さねばならなかつた。

吾等はとかく現代の文化が古典の上に建たれてゐることを忘れたがる。とかく所謂新らしきものに興味をそゝられ熱中して古典の研究に正しい理解を持つてゐない。創作、創造といふのは感情で、なしとげられるものではない。思索が追求が入る、さうしたらもう古典がどうしても吾人の生活に無影響にたゞ過去のものとしてのみの存在は許されない。アングロはラファエロは神だと信じてゐたし、セザンヌは自然に導びかれて（感覺にたよつて）クラシックにかへれと斷定した。ピカソやドランがいくたびクラシックにもどつたことか。

東洋に於いても西洋に於いても造形美術は宗教によつて束縛され保護され發達をうながされて來た時代があつた。

その發生は無智な（？）原始人の宗教的信仰によつてである。アルクミイラ洞窟の壁面に熱烈なる信仰によつて猛獸を描いて

狩獵をいのつた。

あのサハラ沙漠の太陽烈々と燃ゆる紺碧の空に大スフィンクスを造つて白衣の隊商を嚴かにひざまづかしめた。アポロをゾイナスを信じて理想的體軀を神人一致に造り上げたギリシャの彫刻。主いまして天國を憧憬して上方に向つて止まざる心のすつくとたつゴシックの寺院。それ等の寺院教會の壁面天井面に描かれたキリスト教藝術。レオナルド、ミケランジェロ、グレコ、イタリ及びドイツルネサンスの或ひはベニシアンの大畫達。インド、インドシナ、パルマ方面に於ける支那に於ける又吾が日本に於ける皆然りである。法隆寺を建てる當時の工人たち青葉色濃き大和の山々の五月の陽にかざやく中に巍然と地上に置かれた崩壊を知らぬ殿堂の建築。言ふまでもなく、彼等が草叢をかき廻る野獸の眼の如き、敏感さするどさで造形意識をはたらかせつゝ或ひは創造のよろこびに足踏む處を知らざる工人であつたにしても、この寺院を建てさせたものは聖徳太子であり佛教であるのだ。モチーフをそれから得る以上多少に拘らず佛教思想が吾が國人の心に染み込んでゐたことは否まれないのだ。

だが吾々はこれ等のものに接した場合に神の有難さも佛の慈悲も感ぜられない。何故であらうか。吾等と宗教的觀念が違ふからか。若しさうであつたとしたならば、それ等の作品は現代に於いて骨董の趣味歴史的價値の外には一顧の價もないのではないか。それなのに今まで吾々を魅するものは。それはこれ等の宗教的なものは造形美術のエレメント・コンストラクティヴに何等の必要もないからである。宗教的なもの文學的なもの思想的なもの造形美術の價値に何等の關係もない。藝術それ自身

の存在にその理由を価値を持つのであつて、その結果に目的があるのではない。宗教や思想のボスターではなく物語の挿畫でもなく人體解剖圖や名所圖會、植物圖鑑、肖像寫眞だけであつてはならない。あくまで繪畫としてその存在に價值を持たねばならぬ。造形藝術的なものは全く視覚的なものと平面幾何學的なもの等と全々異なる觀念の下に構成されるのである。私は藝術は宗教に影響されて發達して來たといつた。だが此れは歴史的社會的事實であつて表面的のことに過ぎない。やはり偉大なる作品を造り上げたものは、藝術家の内面の叫びなのだ。人間の本能に對する造形的意識の賦與だ、創作のよろこび。これが現代の吾々のと同じく彼等の唯一つのそして總ての満足であつたのだ。

日本へ佛教の傳來は繼體天皇の六年梁人司馬達等が佛像を持つて大和に來て教へを弘めたが信するものがなかつたといふ。が以前から支那と直接交通をしてゐた、九州邊の豪族の事實もある故、前から少しづつでも佛教思想が入つてゐたことを言ふことが出来るのではないか。

古代藝術の史的論據として北九州地方や河内地方に見られる古墳内の壁の技巧の雅拙な繪畫、又處々に見られる埴輪類。このプリミティブを目覺め啓蒙させてくれたのは、朝鮮半島であり支那であり——いひかへたなら佛教である。玉虫厨子の扉にある繪や聖德太子御影や法隆寺金堂の壁畫により異國の藝術が大なる影響を示してゐた事は疑はれない。遠くギリシヤの影響までうけて。

推古白鳳期の藝術家としては司馬達等の子多須奈、孫鞍作鳥

(止利佛師)や紙墨をもたらしした畫僧曇微の歸化人であつて、天平以後にならなければこれ等に伍する日本人藝術家は出てこないのである。建築にしろ寺院建築によつてどれだけ飛躍したとか、進んだ支那文化がたう／＼として吸収されて來た。技巧が進んできた。佛の靈を表現するために人體が借りられた。泰西のものにみることの少ないミスチックなものがますます深められてきた。風土うるはしく生活にゆたかな蓬萊島の住民が藝術的感覚にめぐまれてゐない筈はない。これ等の影響にめぐまれて伸びに伸びて遂に東方素描の國、木彫の國として世界に誇る藝術史を残して來たのである。だが現代の日本藝術の貧弱さ加減、ピカソ、ドラゴンと肩を並べ得る日本人がはたして居るだらうか。此等の古代佛像に比較して論じ得る作品が何處を捜してみつけられるだらうか。ガンダラ彫刻や、宅摩勝賀の前に所謂現代大家のかけがいに薄らぐことか。

私は京都の博物館へ行つて考へた。私は時々上京して美術館(現在の上野の美術館)へは行つてもどうして博物館へ行かなかつたらうと氣がついた。チャイナリズムそして崩壊然らずんば冷却凝固、これ等にくらべて古典が如何に偉大で崇高で藝術であるか。上野の美術館にむせかへる炭酸ガスの中に永久性を持つたこれこそ眞の藝術と言ひ得る作品が一年間に一つだつてあるだらうか。

室へ一步踏み込むとグワンとやられた。それ程素晴らしいのだ。批判するなんて勿論出來ないたゞ恍惚として引きずられるだけだ、息をつくさへ苦しい。あゝ永い間期待してゐたものにぶつた。あゝ決定的形體。

びつちりと形體の決定、此等古代藝術家の洗練された整理された鋭敏な感覺によつた、力學的な心理學的な數學的なものによるメカニズム(實際の事物も本質的にはこのメカニズムで支持されてゐる。吾人の鈍い感覺に平常みる所の事物の中にこのメカニズムが眼に觸れないだけのことだ。私が把握しようとするにはあまりに大き過ぎる偉大なる形。

どうしてプリミティブが近世のものよりかくまで魅力あるものだらうか、その素直な素朴さが現代人にとつたり合ふのだらうか、だが近世の藝術が衰微してゐるといへないだらうか、藝術の本道があやまられて、いかに甘きものとしてあることがもう長いことだ。末梢神經的な刺激に怠けて勉強しない現代人。もうルネサンスが來てもいい筈だ。博物館へ並べて古典にひけをとらぬくらゐの作品、それは吾々の仕事ではないだらうか。

(フートの隅から)

支那將來佛頭
カンボチャ同
シヤム 同
ガンダラ將來佛頭
同
唐招提寺佛頭(天平期)
地藏院阿彌陀如來
舞樂面(東京博物館)
金剛力士像(運慶)
唐招提寺樂師如來(天平)
舞樂面(教王護國寺)

月輪寺聖觀音
班鳩寺十二神將
水車圖(傳山樂)
十二天圖(傳宅間勝賢)
傳吳道子釋迦三尊
傳王維瀑布圖
傳錢舜舉童兒打噪圖
山越阿彌陀如來(源信)
(以上京都博物館)
百濟觀音(推古期)
法起寺盧空藏菩薩
興福寺乾闥婆王その他

法隆寺多聞天廣目天その他

手向山神社舞樂面

法輪寺觀音

(以上奈良博物館)

法隆寺御物金銅佛

十一面觀音

エラスムス像

ガンダラ彫刻

人物鳥獸戲畫(高山寺藏)

觀音菩薩(足利)

大威德明王、軍荼利明王、千手觀音等四對の手或ひは三對づつの手足、三つの頭、或ひは無数の細い腕が何等の不自然さも

見せないで、びつちりと決定されてゐるのである。モナリザ、

ジョコンダも及ばざる舞樂面の神祕的な微笑の迫力。神將や金

剛力士像に於けるムーザマンの太い感觸。

私はこゝでみて來た仁王を思ひ出す。信濃善光寺の仁王と京都博物館のと東大寺南大門のと法隆寺のと四つ。考へてみるのは善光寺のと東大寺のと——京都と奈良とは同じとみて——法隆寺のと三つ時代色が判然としてゐるのも面白い。

運慶もよくこの古典と比べ得るものを作つた。

ゆるやかに腕から腕へ背後の空間に圓周を描いて纏衣、重た

い體軀をがつしりと立つ。素朴な體、ぎよろりとした眼、顔面

筋肉の悠々たる、太い線、奥深いどこまでもの深刻さの法隆寺

の仁王、和銅時代の塑像である。

一本々々の線にも作者のすばらしい才能がよくうかゞはれて

頭のとつぺんから足のうらまで心棒がちんと通つてゐる、縋衣の曲線から裾の先端まで額の皺から脛の筋肉まで總てリズムだ。ムーヴマンだ。ミケランジェロの如き鋭い線だ、筋肉だ、速い力だ、空間の大きいさだ。そして彼の如く冷くはないすばらしいテクニク、運慶の仁王。砂漠と青空との相接する彼方に巍然とそびゆる正四面體に肉桂の香りを寄せてはかへず地中海の波、彼のエジプト、ギリシャのものにも比し得る此等。

善光寺の仁王は云ふだけ愚かだ、雜然たるものに美を感じることは出来ない。物理的には立つてゐてもたゞそれだけであるなら善男善女を惑はすに過ぎない。

あゝ大和の晩春は實にウングバアルだ。汽車を小驛に出づれば、たちまちに海の如くひらける緑の野、波のうねりを思はせる高低、菜、麥、黒い土、村落。砂山を思はせる低い軟い山、丘。うすくけむつた緑の空氣の中に、なだらかなスカイラインの際へ汽車の線路が消え込んでゆく。右と左へ。その中を黒く汽車が朗かな音をひびかせて走つてゆく。煙は五月の澄みきつた風にすぐ吹き飛ばされてしまふ。白い路がぼく／＼と青葉濃い山麓へつゞいてゆく。畑の向には明るく陽にさすやい村だ。土壁、瓦、古びた柱、くすねかゝつた築地、柿若葉、大和の日は明るい。小川がちよ／＼流れ、水の中、青空に白雲と小石がいくつ。松の間にそびゆる黒い塔。文化は北へそして東に移つた。推古朝盛事の殘影をあづかに止むるモニュメント。四圍青垣の山にかこまれた大和、明るく五月の陽にむせつゝ、法隆寺へいそぐのである。京都でみた推古朝時代の佛像の素朴さに高雅さに、くづれかゝつた木材にもかゝわらずその一片の微笑

に衣の皺に言ふべからざるデリカツシイの微動せる如く、此處の眺めも亦エビツクな趣のみに盡くるものではない。

ローマを想像させるやうな圓柱のエンタシス、上下兩層の遞減の割合の大きいさ、深い軒によき形をした斗拱に、快い反りをなす屋蓋に中門をくゞれば。塔と金堂と講堂とを一直線に置くより塔と金堂を並べてこれに講堂を對させた形式の方がどんなによいことだらう。百濟式を改良した處にも既に吾等の祖先の優秀さがあらはれてゐる。五重塔。屋蓋の傾斜。ぐつと力強く走つてきて先端に近づいてその速度を弱めて決定的な曲線を形造る。初層の軒先と最上層のとを結ぶ線が折線である。直線と直線との衝突、走出をまぬかれようとする幾多の實施。相輪が地中から生えてゐる直角、軒先を結ぶ直線が地面となす八〇度。そして深い軒柱の垂直線、各層の遞減率、皆これらに數學の感情を少しもゆるみない感じをうけるでないか。ブルデルのいつた「數は神祕だ。古代エジプト人は數を以て自己の運命を知つた。」人が數學、或ひはそれに立脚するものに宛てはめてみることの出来ないことは即ちそれは正確でないといへないか。實際セザンヌの整理されたサンピリテイは數なのだ。神祕極りない彼の畫面のコンポジション(畫面のエレメント・コンストラクティヴの一つなる)は數學を以て解剖し得るのである。形體の決定が數學的なものにもよるメカニズムであることがこゝでも云へると思ふ。吾々がレアリテを疑ふ程の幾多の現象が人間の熟練によつてなされることを疑ぐてならない。感覺を整理するといふ意味の熟練。

人は地球の大きいさから重量まで知つた、總ての惑星の軌道を測定した。動かさざる筈の太陽の速度をまで算出した。總てを解

なつてゐる。(拙文 法隆寺……紀行)

魂のすべてを鳴く漱石の雲雀が榮畑からまつすぐに上る。緑の草叢の中、山を背に立つてゐるのは興福寺の五重だ。奈良だ。夕方の空は水蒸氣がこもつて黄く重苦しい。

黒いほろをかけて人力車が走る。鋪裝もしてないメインストリート。自動車のタイヤがみるもいたましい程反撥する。あのマツシヅな草山の重量。するどく力を込めた鹿の後脚をして跳躍。濁れる水、霧につゝまれた柳條。ほこりまみれの石段。眞黒な柱、塔、家並、廢都。だのに口やかましい學生が右往左往するのは心外だ。

昔、創建當時に於いては東大寺金堂(大佛殿)は十一間七面の大伽藍であつたらう。現在の七間七面にくらべて、どれだけ美しいお寺であつたらうか。美しいといふことは色あでやかにみえよきだけのものにいふ言葉ではない。決定的形體を稱していふべきなのである。

十一間七面。十一と七、考へてみるがいゝ。黄金分割された二直線の比。古代の建築家が理論をぬきに體得から造り上げたもの。たつたこれだけ何でもないことだ、だが江戸時代のこの建物は七間七面、正方形だ。正方形と程よき縦横の矩形、どちらがよいものか。これだけのことで當時の壯大なる殿堂を想像すべきであらう。あゝ大空をくぐる崇高なるスカイラインを。理解なき當局者か、良心なく感覺の鈍い建築家の江戸時代。あの大棟の短いさへ變なのだ。

決するものは數學だ。學校で我々のやる所謂數學、そんなものはまだ／＼數とはいひ得ぬ小さな問題だ。紙の上での問題ではない、サンピリテイでの問題だ。

こんなことをいふと藝術とはそんな苦しい理論ではないと頭から叱られるかも知れない。心境に溺れることを最高目的にした近代日本の教育が悪かつたのかしらないが、この五重塔といふ事實を法隆寺にみた時、どうすることが出来るか云ふまでもなく私にはこの塔についても大系をたて、説くだけの頭はまだ／＼ない。十分に説くことは出来ないけれども、ほんの一步範圍のものであるにしても感ずることが出来るのだ。この事を誰が否定出来るだらうか。數學は實に神祕だ。

塔の初層にも金堂にも裳階がつけてある。これが安定感を増してゐるかもしれないが、なかつたらもつとすつきりした百濟觀音の如き美しさが強いかもしれない。

この塔の中には仁王と同年代に作られたと思はれる數多くの塑像がある。よいものである。狩獵と戀愛に山野の春の一日を單純さに満ちて過すを常とした上代日本人の素直なキアラクテイル。佛教の心まで浸み込まない日本人の素朴さだ。たとへ歸化人藝術家の手になつたものにしろ私の奥底から祖先の血を呼びおこしてくれにすることに變りはない。アイヌ的な關東人の血と少しは異なるけれども日本人として同一なのである。京都博物館といひ此處といひ私を最も深い所から呼びささうと努めてくれるやうに思はれる。ブルデルが言つた「人がわしの彫刻によく認めてくれようとするあの特別な獨創的な特徴がわしが方言で彫刻してゐるところに由來してゐる。」だ。

私は五重の塔でつかれてしまつた。夢殿の印象は最早うすく

上野の博物館に多くの模刻がある。關西の歸りにみたことが殊にいけなかつた。あの甘い形はどうしたことだらう。表情が顔面筋肉がたゞいやらしい病的な凹凸としてしかひびかないのだ。たとへ習作にしろ此處へ並べるべきものでない。若い人達を迷はせるかもしれないから。同じ形で同じ技巧で作つたといふかも知れぬ。だが人の仕事で同じといふことが出来るだらうか。殊に自己のない職人たちにあのすばらしい古典に迫る意志が才能があるだらうか。古典の精神をつたへることの不可能な模刻、寫眞の方がどんなによいだらう。

大雅堂をみちめにみせる支那人の繪の大きさ、畫面も大きい。旅の疲れで眼がいたむ。不鮮明な頭腦は陶酔と同情だ。外に出れば博覽會、チャイナリズムで湧きかへるやうだ。

編輯後記

熊谷中學校々友會報が全校生徒諸君の投票と且校長先生御自身の御撰擇により「我等」と改められてより第三號が今漸く生れました。

今回の「我等」は從來の活字を稍大きくして三段に組んだのを始めとして所々に改善を加へ面目一新されたつもりです。

即ち表紙の題字は土岐先生の御筆により、繪は五乙長谷川宏君が非常な熱心と努力とを以て盡き好意的に寄せられたものです。

巻頭の寫眞中、校舎正門のものと生徒の作業のものと南日先生の御撮影により、行軍のは横田先生、模擬戦のは野口先生の御撮影によるもので何れも玄人ハダシの傑作で好意的に寄せられたものです。深く感謝致します。

巻頭言として校長先生の玉稿を得、説苑には荻野先生御寄稿の興味深きものや、小林先生御寄稿の長年の御體験のホトバシりたる「野球雜感」や、大和久先生の英詩等何れも立派な稿を得て本紙に一層の光彩を副へ得た事を喜び諸先生に深謝致します。

又先輩方の有益なる御寄稿をなされて下さいました事に對しても厚く御禮を申し上げます。

次の「關東武士」は渡邊先生の御講演を講演部委員木島工君島田諸信君神田晴雄君が速記したもので此所に三君の御盡力を感謝致します。

なほ本年私達が新しい試みとして郷土史なる稿を募集致しました所非常に立派なものが集まりました事は誠に私達の喜びとする所であり

ます。これのみならず又校友諸君が奮つて立派な原稿を投書して下さいましたのは私達の最も喜びとする所であります。

部報記事に就ては御多忙中にも拘らず御指導下された先生方にも御禮申し上げます。

擲筆するに當り「我等」の益々發展せん事を望み諸先生並に校友諸君の御指導と御鞭撻をお願い致す次第です。

來年の會報部委員に望む。

今度の會報は種々新機軸を出し特色あるものと自負しては居りますが未だ未だ諸君の改造の手をまつ點が多々あります。何も原稿數が多いのが良いといふ意味ではありませんが學年によつて原稿提出に餘り甚しい差異があるやうな事は面白くないと思ひます。

又題材の配列等も細い事ではありますが、明年度の特色に従つて適當に變更して見る等は面白い事だと思ひます。

原稿の募集は今年は早からずおそからず丁度よかつたと考へます。これ等の事は係の先生の指揮をまつべきですが、又先生の御相談にも種々應じられるよう準備されん事を希望します。

會報部委員

三 友 漢

濱 良 一

坂 上 辰 夫

昭和八年十二月二十日印刷
昭和八年十二月廿三日發行
(非賣品)

埼玉縣立熊谷中學校校友會

熊谷市大字熊谷八十一番地

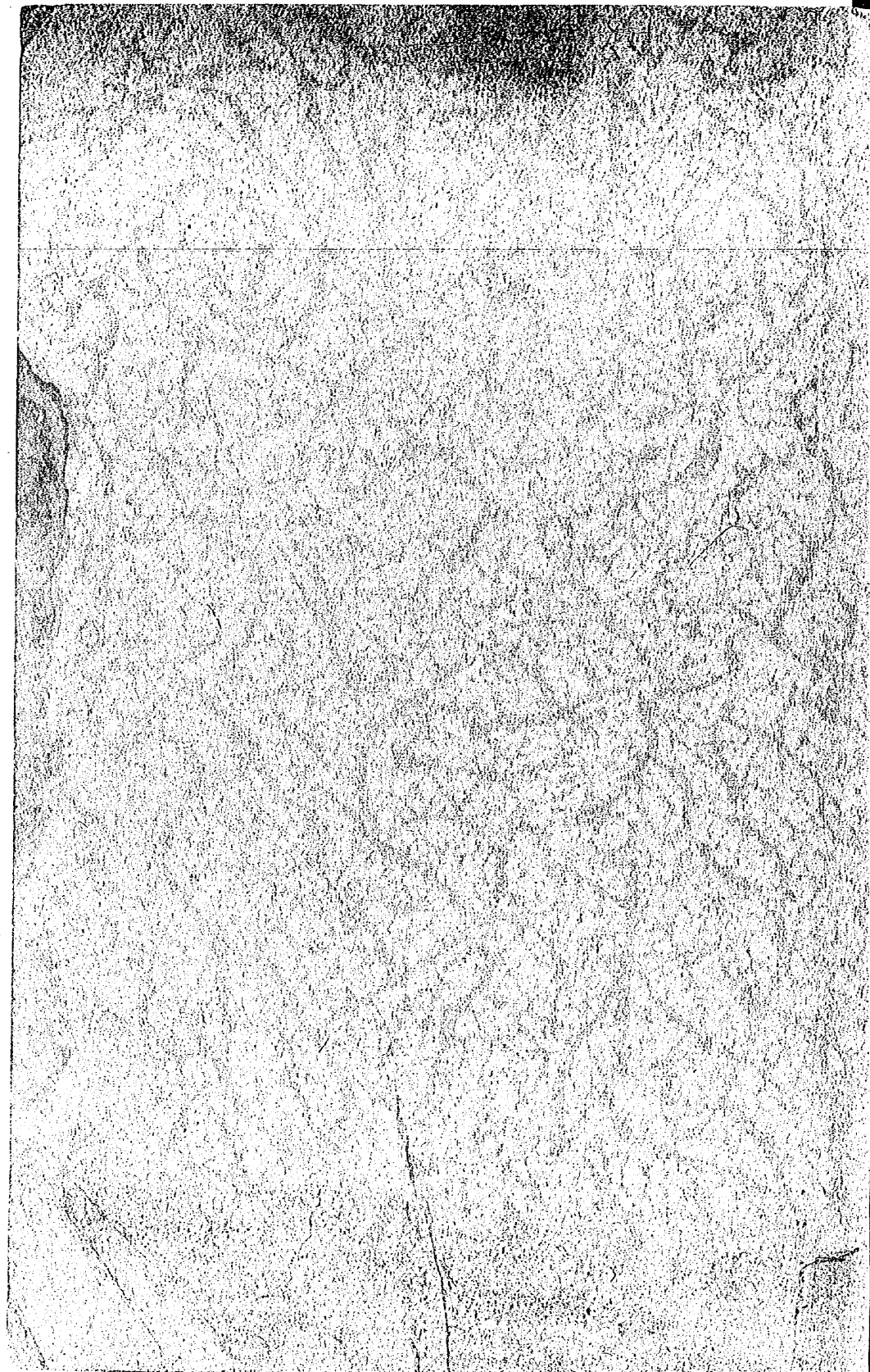
編輯兼發行者 中村平三郎

東京市芝區田村町六丁目一番地

印刷人 神田一郎

東京市芝區田村町六丁目一番地

印刷所 東洋印刷株式會社



56

埼玉県立図書館



3 104 15 12